

第二章 《過去》と《半過去》

——江戸～明治期の日本人は Perfectum の理解を誤ったのか——

序節 蘭語学の《過去》と《半過去》に関する疑問

1. 《過去》と《半過去》の用法はなぜ混乱したか

1.1. 明治期における《過去》と《半過去》の逆転

Imperfectum(以下 Imperf.)と Perfectum(以下 Perf.)は、現代文法では Aspect を表わす用語である。しかし、江戸期から明治 20 年代の洋語文法においてはそうではない。これらは、ある特定の時制を表わす名称であり、前者は単独の過去形、後者は、現代の「現在完了」に相当する形式を意味する。つまり、江戸期の和蘭文典で Imperf. と言えはく ik hadde>、明治期の英・独文典では<I had>と<ich hatte>のことであり、Perf. と言えはく ik heb gehad><I have had><ich habe gehabt>のことを指すと決まっていたのである(過去完了と未来完了は関係ない)。しかも、<ik heb gehad><I have had><ich habe gehabt>は時制的には完全なる「過去」であって、決して「現在完了」ではなかった。従って、本章では、時制としての Imperf. と Perf. を、現代の Aspect のそれと混同しないよう注意しなければならない。

この混同を避けるために、本章では上述のように、<蘭 zijn><英 be><独 sein>と<蘭 hebben><英 have><独 haben>という 2 種類の助動詞、及び「愛する」<蘭 beminnen><英 love><独 lieben>という一般動詞の活用形を、時制名称に添えて併記することにした。具体例の表示に「在る」「有する」「愛する」を用いる理由は、当時の文法書では、動詞の Conjugation を示す場合、これら 3 動詞が例として使用されることが普通だからである。特に Imperfectum が単独の過去形で、Perfectum という形式が過去時制であるというのは、現代人にはなかなか理解しにくいので、「Imperf. (ik hadde)」や「《過去》(I have loved)」のように書けば、その分かりにくさを軽減することができるであろう。

う。

さて、この Imperf.、即ち<ik hadde><I had><ich hatte>や<ik beminde><I loved><ich liebte>を、幕末以降の日本人は、前期蘭語学の《過去ノ現在》を呼び変えて、新たに《半過去》とし、対する Perf.、即ち<ik heb gehad><I have had><ich habe gehabt>や<ik heb bemind><I have loved><ich habe geliebt>の方を《過去》と名付けた。

ところが明治期になると、この対応関係が変わってくる。明治 10 年代の英語では、和蘭語と同じく Imperf. (I loved) が《半過去》、Perf. (I have loved) が《過去》であったが、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17年に、両者の関係を逆転させて Imperf. (I loved) を《過去》、Perf. (I have loved) を《半過去》とする文法書が出現したことから、以後の約 10 年間、英文典界では、《半過去》を<I loved>とする旧文典と、<I have loved>とする新文典とが並存することになる。つまり、ある人が、まず文典 A で英語を習い、<I loved>を《半過去》、<I have loved>を《過去》であると理解したのに、近頃新しい文典が出たという評判を聞き、その文典 B を購入して見てみたところが、A と同時期の文典であるにも拘らず、そこでは<I loved>が《過去》で、<I have loved>が《半過去》になっていた、ということが起こったのである。

独逸語に眼を移すと、事態は一層紛糾してしまう。独逸語では Imperf. (ich liebte) が《半過去》で Perf. (ich habe geliebt) が《過去》とされた時代が、英語より 10 年以上長く続き、両者の関係が逆転し始めたのは明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年以降であった。明治 20 年代後半という時代に独逸語を学んだ者が、続いて英文法を修めようとした場合を仮定してみると、どの独・英文典を選ぶかによって、事情は変わってくる。まず、旧文法の独文典を与えられれば、その人の知識は Imperf. (ich liebte) = 《半過去》、Perf. (ich habe geliebt) = 《過去》になり、新文法のものであれば Imperf. (ich liebte) = 《過去》、Perf. (ich habe geliebt) = 《半過去》になる。

その後、旧文法の独逸語学習者が、従来の英文典を選んだ場合、先に独逸語で<ich liebte>が《半過去》で<ich habe geliebt>が《過去》だと教えられたと同じ対応を、英語でも見ることになるから、学習者の混乱は起こらないであろう。しかし、新文典を用いたなら、独逸語とは逆に、英語では<I loved>が《過去》で、《半過去》なのは<I have loved>の方であると言われることになるのである。何が《過去》で、何が《半過去》なのか、混乱を起こさない方が不思議である。英・独文典のどこかが間違っていると思ひ込む者がいても当然であろう。

このような事情のために、明治期の英・独文典では、《過去》と《半過去》という文法用語が、Perf. (I have loved) (ich habe geliebt) を指すのか、それとも Imperf. (I loved) (ich liebte) を指すのか、用語を見ただけでは判断がつかなくなり、各文典の解説を読んでも初めてそれが判明するという事態が多発することになるのである。

これは、英語と独逸語を学習する者の立場からすると、はなはだ困った問題であった。

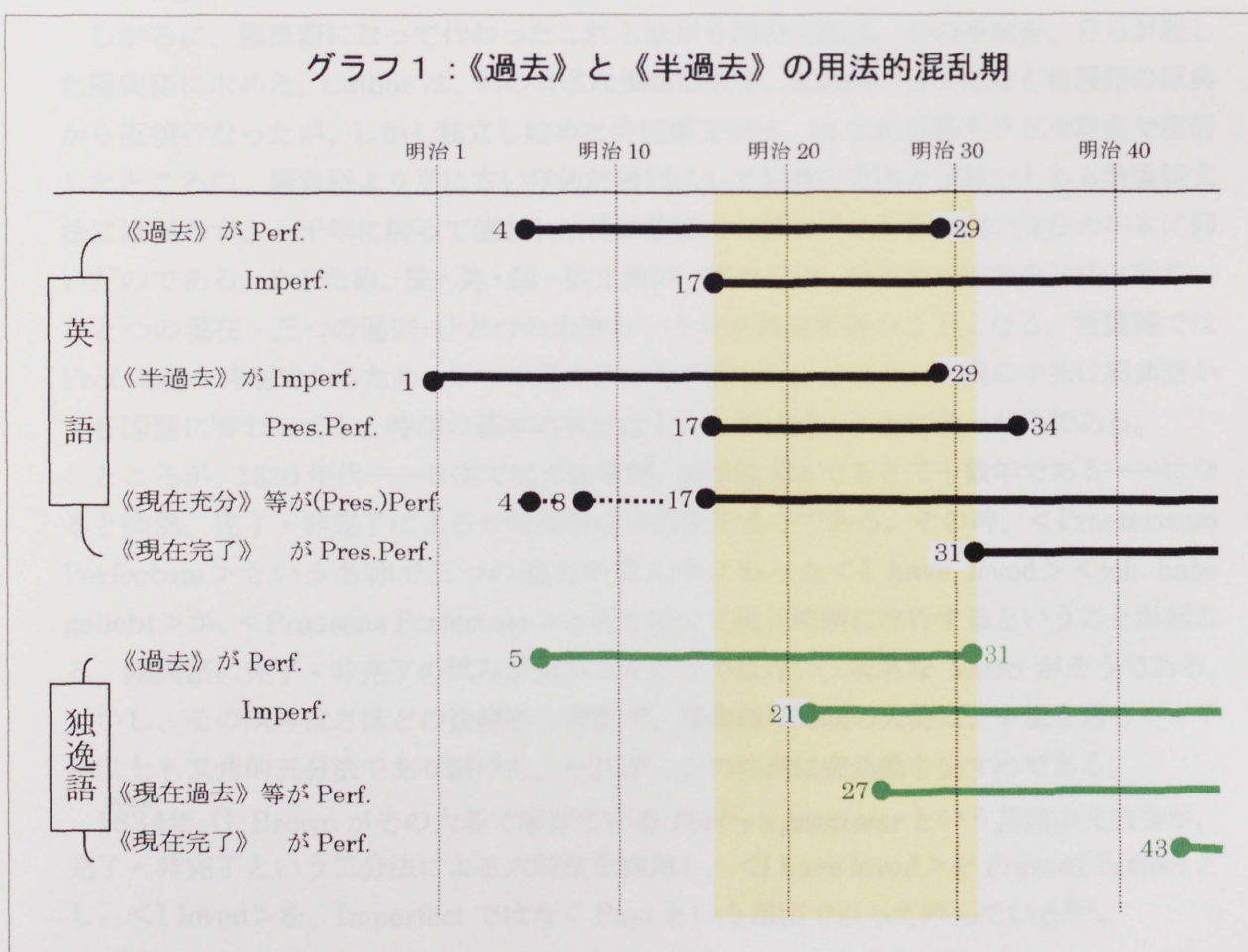
学習者は、同じ英語の文典間で、あるいは英語と独逸語の文典間で、共通のふたつの文法用語が使われているのに、その内容が時と場合によって逆転してしまう、という事態に直面させられたのである。この混乱が生じた時期は、下の**グラフ1**に示したように、⁽¹⁸⁸⁴⁾明治17年以降20年代全般にかけてである。

1.2. 原典における時制構成と名称の変化

なぜ、このような混乱が起こったのか。日本の洋語文典は基本的にヨーロッパの文典の輸入翻訳である。そこで**表15**「蘭・英・独・仏原典における時制」(154頁)に**表18**(202頁)と**表20**(212頁)を加えてヨーロッパ本国の文法の動向を見てみると、我々は、1830年代中頃(日本では天保年間)を境にして時制構成と各時制の名称が変化したことに気付くであろう。<I loved>と<ich liebte>が、Imperf.からPastとdie währende Vergangenheitに、<I have loved>と<ich habe geliebt>が、Perf.からPresent Perfectとdie vollendete Gegenwartに替わったのである。そして、これに伴う最も顕著な変化は、時制構成中におけるPerf.の位置付けである。

Perf.が現在時制であるということは現代文法では何の疑問も持ち得ない自明の事柄である。しかし、1830年代になる以前の洋語文法では、過去時制の中心であり続けたのは、実はPerf.の方であって、単独の過去形はPerf.よりも《現在》に近いと考えられていたの

グラフ1：《過去》と《半過去》の用法的混乱期



である^{註1}。1550年に Cornelius Valerius Ultraiectinus が <relative Tempora> 【関係時】という術語を初めて羅典文法に導入したときも、他事象との係わりが必要な【関係時】に入れられた過去時制は Imperf. であり、Perf. は【孤立時】の過去であった^{註2}。本論文で作成した表を見る限り、Perf. が現在時制になったのは、表 15 (154 頁) および表 18 (202 頁) の Sedger (1798) と Locke (1801) 以降の 200 年余である。

キリスト教と並んで、混沌たるヨーロッパ社会に普遍的統一を与え続けた、中世ヨーロッパの国際語にして学術用語であった羅典語の文典では、直説法の時制は、ひとつの現在・三つの過去・ひとつの未来という五時制で構成される。これを叉角的五分法 (begabelte Fünzfahl) と言うが、これは、羅典文法を通じて近世のヨーロッパ各国語の文法にも受け継がれた^{註3}。表 18 (202 頁) と表 20 (212 頁) を見ると、この叉角的五分法が、Donatus と Priscianus 以来連綿と続き、和蘭語のみならず英語と独逸語においても一般的な時制の構成法であったことが分かる。日本の蘭語学の基礎となった Maatschappij 社版 *Grammatika* の時制もまた、この五分法に従っている。

ところが、Martin Luther (1483–1546) の宗教改革によって、羅典語でなくとも神の声は聞けるという意識が生じ、英・独・仏・伊等の欧州各国が自らの母国語の文法を求め始めたために、「文法」と言えば羅典語のそれを指した時代は終わり、その実用性を剥奪された中世羅典語はやがて衰弱死を迎えることになる^{註4}。

しかるに、羅典語に取って代わったこれら欧州各国の文法は、その手本を、自らが殺した羅典語に求めた。Luther は、あの有名な聖書翻訳を、羅典語からではなく希臘語の原典から直接行なったが、しかし独立し始めた各国語文法は、12 世紀以降アラビヤ経由で復活したところの、羅典語より更に古い学術的言語にして聖書の原典の言語でもある希臘語文法には従わず、一千年に渡って使われ広範に馴染んだ羅典文法を自国語の文法の手本に仰いだのである。そのため、蘭・英・独・仏文典のいずれもが、結果的にはラテン語と同じ、ひとつの現在・三つの過去・ひとつの未来という時制構成を持つことになる。希臘語では Pref. は現在時制であるため、三つの過去にはなり得ない。つまり、文典の中味は羅典語から各国語に替わっても、時制の基本的構成は変わらずに続くことになったのである。

ところが、1830 年代——日本では天保年間、明治維新まであと三十数年である——になると突然、完了・非完了による 6 時制構成が出現するのである。その時、<Praeteritum Perfectum> という名称で三つの過去の真ん中にあつた <I have loved> <ich habe geliebt> が、<Praesens Perfectum> と名を変えて現在時制に移行するということが起こる。羅典語に完了・非完了の試みが無かつたわけではない。有名な Varro がそうである。しかし、その試みはさほどの後続者を持たず、羅典語の時制の大勢は、中世を通じて一千年以上も叉角的五分法であり続けた。それが、この時期に突然動き出すのである。

^(天保 5) 1834 年、G. Brown がその大著で挙げている *Perley's grammar* という英語の文法書が、完了・非完了という二分法による六時制を採用し、<I have loved> を Present Perfect とし、<I loved> を、Imperfect ではなく Past という用語で以って呼んでいる^{註5}。

しかも、そのわずか4年後の1838年^(天保9)、表 20 (212 頁) の独逸語原典においても、この完了・非完了による六時制が現われている。即ち、ヨーロッパ本国の文典で動詞の時制構成に変動の起こるのが 1830 年代 (日本では天保期) なのである。

詳しくは第二節にて述べるが、日本の《半過去》と《過去》の逆転は、まず英語の Swinton 文典の翻訳によって引き起こされた。又角的五分法を採り、<I loved> (Imperf.) : <I have loved> (Perf.) = 《半過去》 : 《過去》となる場合を旧文法、完了・非完了による六時制を採り、<I loved> (Past) : <I have loved> (Present Perfect) = 《過去》 : 《半過去》となる場合を新文法と規定すると、Swinton 原典の時制は後者である。明治 17 年以降 20 年代全般にかけて起こった《半過去》と《過去》の用法的逆転は、即ち、原典の時制構成が完了・非完了による六時制へ変化したのに伴い、Imperfectum と Perfectum という伝統的術語が捨てられて Past と Present Perfect という新術語が登場したことに対応した動きなのである。この動きが、日本の洋語文典では、1830 年代から約半世紀遅れて現れたことになる。

1.3. 19 世紀ヨーロッパに起こった言語学的変動

では、1830 年代とは、ヨーロッパ本国の文法界にとって、一体どのような時代であったのか。1838 年の Karl W. L. Heyse^(天保9) の独文典 (改訂第 5 版) を読むと、この文法書がかなり大量の歴史的記述を伴っているのに驚かされるが、1830 年代のヨーロッパは、実は、古代語の発見と解説進展の時代であり、歴史的比較的语言研究の興隆期であった。特に希臘語とサンスクリット語が注目を集めたが、この時期、<Perf. を「完全なる過去」としたのは羅典文法の誤りである> と言った Karl Heyse^(天保9) の時制論は、希臘語 (ストア派) のそれと深い関わりを持っている^{註6}。Imperfectum と Perfectum という伝統的術語が捨てられて、<I loved> <ich liebte> が英語で言えば <Past>、<I have loved> <ich habe geliebt> が <Present Perfect> という新術語に切り替わったのは、サンスクリット語・羅典語・希臘語を歴史的比較的に研究するという新しい言語学的方法によって、希臘語の研究が飛躍的に進んだことに、その原因があるのではないだろうか。即ち、欧州各国語文法独立の時とは逆に、今度は羅典語に代わって希臘語が、文法を考える際の材料を提供したのである。

R. Kühner という希臘語学者が、1834 年^(天保5)——この前年、F. Bopp の *Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litthauischen, Altslawischen, Gothischen und Deutschen* の一番最初の部分 (das 1ste Heft) が初めて世に出ている——に、最近のここ 10 年の間ほど文法研究が進展した時期はなく、サンスクリット語の発見によってこの新たな時代は始まったと言っている。まず彼の母国語を襲い、<das grosse und kräftig blühende Sprachbaum> [壮大な言語系統図] を創ろうとする新しい言語研究の奔流は、彼の専門とする希臘語にも及んだ。最も古い正真の語形を保存する希臘語の方言を決定するにあたって、サンスクリット語が大きな力を発揮したのであ

る。Kühner は、更に言っている。遠いオリエントの一言語がギリシャ語を時に凌ぐほどの語形の完全性を有し、しかも希臘語の方言間の争いを調停できるような力を持つとは、50年前に一体誰が想像し得たであろうかと^{註7}。

文法史的に見た場合、ヨーロッパで文法が複雑化した時期が二回ある。最初のそれは、先にも少し触れたとおり、12世紀からルネッサンスにかけてで、その原因は希臘語文学の再発見であった。二度目が、サンスクリット語の発見を契機として19世紀初頭に始まったこの歴史的比較言語研究で、最初の時は文法を大いに思弁的たらしめた希臘語であったが、二度目の時は、サンスクリット語を通じて大いに発展したその文法研究が、Perfectum という時制の考察に大きな影響力を発揮したことになる。

19世紀初頭にヨーロッパで起こったこの新しい動きは、まさに大変動と呼ぶにふさわしいものであったらしい。文法書の記述を一変させたこの変動のすさまじさを、Heinrich Bauer (1830) と、先述の、父親の文法書を改定した息子の Karl W. L. Heyse が、その改訂版の序文 (第5版; 1838) で述べている。その経緯は、つまりこうである。

独逸語における学校文法の規範は Adelung と父 Heyse である。表 20 (212 頁) を見ればわかる通り、Adelung までの独文法は伝統的な三過去時制を採り、Perf. はその中に含まれていた。『訂正蘭語九品集』の年に出版された父 Heyse の初版 (序文の日付は1814年8月) も、この時はまだ Adelung の伝統的・規範的文法の影響下に立つものであった^{註8}。

ところが、その一方で、イギリス人外交官 William Jones (1746~1794) が1786年にカルカッタの王立アジア協会で発表した有名な論文「ヒンドゥー語について」(“On the Hindus”) を契機として、歴史比較言語学への道がすでに準備されていたのである。この点、表 18 (202 頁) と表 15 (154 頁) において「完成された現在」としての Perf. の初出が英文典であるのは象徴的である。そして1819年、J. Grimm の *Deutsche Grammatik* 第1巻が出版され、歴史的比較言語研究の動きが本格化する。かくして1800年代初めの40年ほどの間、独逸文法は、哲学文法 (または普遍文法とも呼ばれる) の復興と、この歴史比較言語学の隆盛というふたつの大きな変動に見舞われるのである。

この新たな言語研究の立場に立つ J. Grimm や Karl W. L. Heyse のような学者を、伝統文法を墨守する旧守派に対して、<Reformator> [改革主義者] と言う。それまでの文法研究は学校と学問のためのものであり、語学教育的実践がその前提として存在していた。それを、この新たな動きは、印欧諸語を歴史的に遡って比較研究するものへと変える。この新潮流の中、もともとの文典の著者である父の Heyse が1829年に亡くなると、息子 Karl と Theodor は、Humboldt の <言語は変化・生成するもの> という主張と J. Grimm の <historisch> [歴史的] という方法論に従ってこれを大幅に改編し、結果、1838年に第5版として世に出されたものは、<基本的な構成は変わらないが内容的には旧版と全く違うもの> となった。Karl はこの間の変化の激しさを “gewaltig” と表現し、従来のように <実際の規則の寄せ集め> (eine Sammlung positiver Regeln) でなくなったこの新版はこれまでの友を無くすだろう、とまで言っている。“gewaltig” とは「暴力的な」という意

味である。この新たな言語学は、昨日の旧きものを今日にはあつという間に押し流してしまふような劇的な激しさを持った、まさに「奔流」であったのだろう。

息子によるこの改編は第4版(1827)に始まり^{天保10}注9、その序文にはくさまざまな学者の最新の研究成果を取り入れた>として、Grimmの他に、Grotendorf、Schmitthenner、K. Bernhardt等々の名が挙げられている^{注10}。後二人は哲学文法の学者であり、表20(212頁)の第二期の時制システムが特異なのはこのせいである。特にF. Schmitthennerの影響が大きかったらしいが、そのロジックは実に難解極まりなく、明治期の日本でもよく用いられた独文典の著者A. Engelenをしてく最初から彼の理論で訓練された者でなければお手上げだ>と言わしめているほどである^{注11}。

その難解なロジックから生まれた時制論の特徴は、Imperf.を現在時制と考えて<Vorgegenwart>【前現在】としているところにある。この点を<Hauptirrtum>【第一の誤り】とした同時代人のHeinrich Bauer(1830)は、言語を完成されたものと見る哲学文法は、本来、歴史的比較的观点を採らないはずであるが、歴史比較言語学に携わる者たちがその生涯をかけて研究し明らかにしてきた、遠い地域、遠い時代の諸言語——ギリシャ・ラテン・サンスクリット・ペルシャ・スラブ・古代ノルト語等の知識を、一生かかっても覚えきれないほどであるのに、ほんの数年でものにできたと言い、流行に乗って安易にサンスクリット語からの派生を持ち出すSchmitthennerのやり方を、驚き(Staunen)を通り越して不愉快極まりない(Unwillen)と憤っている^{注12}。

第5版(1838)の序文で、K. Heyseは古典文献学者Beneckeや比較言語学者Bopp、Pott等の他に、とりわけ重要であるとしてJ. GrimmとW. von Humboldtの名を挙げ、後者の有名な『カヴィ語序説』(1836)から<Energeia>(=Thätigkeit)の部分を引用している。V. Thomsenはく新旧文法の相違点は言語の生命・歴史的発展という観念の有無にある>と言っているが^{注13}、KarlがJ. GrimmではなくHumboldtからこの<Energeia>の部分を特に引用したのは、彼の改定作業における思想の核心を、この箇所が極めて明快に言い表しているからであろう。KarlはHegelのもとで哲学を、Boppのもとでサンスクリット語を学んだが、Humboldtのこの大部の著作が出る前にすでに彼と同様の考えを抱いていて(即ちHumboldtから直接影響を受けたわけでは決してなく)、拡大する一方の当時の言語学の方角には必ずしも賛成ではなかったと、Karlの五十余年の短い生涯を紹介したH. Steinthalは述べている^{注14}。しかし、^(天保8)1837年にJ. Grimmの*Deutsche Grammatik*の最終巻である第4巻が世に出ると、Karlは、彼自身が第5版をまとめる直前にこのGrimmの大著が出版されたため、執筆時に実際に参照することがかなわなかったが、今これを読んでみて、一致点がいろいろあって嬉しいと、その序文に記している。

このような“gewaltig”【劇的】な動きの渦の中で、独逸語文典における「時制」の章は様々な説で満ち溢れることになった。1800年代前半は、文法書からみれば、新旧文法が盛んに葛藤を演じた時期である。上述のH. Bauerは、その著書*Vollständige Grammatik der neuhoch deutschen Sprache*第3巻(1830)で当時の諸子百家状態の時制論を網羅的に紹

介・考察しているが、最初、第1巻(1827^{文教10})を書いた時の彼は、新しい言語研究の動きから生じるものを<die Träume und Hirngespinnste der kecken Reformatoren>[気負った改革主義者たちの夢想と空想]と呼び、ここ10年間で独逸語に関する本が大小取り混ぜて夥しく出版されたが、米粒の中に紛れ込んだ籾殻を選り分ける必要があるとして、決してReformatorに好意的ではない¹⁵。

しかし、その3年後、第3巻を出した時には、遠い地域、遠い時代の半ば埋もれ消えかかった諸言語研究に対して、彼は敬意を表している。そこから得られた「かけら」(Brocken)を集めて新たな学問体系を構築し、独逸文法全体の、改革を超えて革命をさえ目指そうとする若い力と、そんなことは考えもつかないMeisterたちとの対立。若い力は、語根や語形に関して証明不十分の誤った前提をさえ用いることを厭わず、冷静な他の研究者を悪罵の対象とし、一方、このような歴史的比較的言語研究とは無縁な立場の、上述のSchmitthennerのような言語研究者が、見当違いな目的で安易にそれに手を出す¹⁶——このような状況下で、動詞の時制論は、不遜な奇説が罷り通るかと思えば、誤りであると証明された古い見方になお固執するという、両極端な立場の論説が混在することになったのだ¹⁷。お陰で、Bauerが考察したこの時期のImperf.=<ich liebte>は、【関係過去】(compraeteritum)とも【関係現在】(Bezieliche Gegenwart)とも【前現在】(Vorgegenwart)とも【過去の現在】(Präsens der Vergangenheit)とも呼ばれ、Perf.=<ich habe geliebt>は【孤立過去】beziehungslose Vergangenheitとして、《現在》の<ich liebe>、《未来》の<ich werde lieben>とともに「主時」三時制中に入れられる一方で、【現在の過去】(Präteritum der Gegenwart)とも【完成された現在】(die vollendete Gegenwart)であるとも言われてしまうのである。

しかもReformatorたちは、各著者が自説の典拠を開示しないため(Bauer自身も、自説を勝手に使われてその人の説とされたことがあるらしい)、その改変の確かな根拠を知ることができない¹⁸。《半過去》と《過去》の問題を考える上で、この点は誠に残念である。同様のことは英文典にも見られ、英文法家のG. Brownは、一体なぜ1830年を過ぎた頃から英文法の6時制の構成が突然変わったのか(表18[202頁])、その理由を計りかねている¹⁹。

19世紀始めの30年間の主要な文法家の時制論を詳細に検討した結果、Bauerは、^(文教5)1822年に発表されたひとつの見解に注目し、時制論混乱の原因は現在・過去・未来の下位区分である<Moment>の取り扱いが混乱し誤っているからではないかという結論を出す(§530)。現在(jetzt)・過去(damals)・未来(einst)という<Moment>を用いて《過去ノ現在》や《過去ノ過去》——これらは江戸の蘭語学の主要な用語である——のような呼び方をするのではなく²⁰、動作の開始(Anfang)・継続(Dauer)・完了(Vollendung)という<Moment>を用いるのが新文法の時制であるとする。

後者の<Moment>を採用しているHeyse第5版は、

Fälschlich hält man diese Zeitform[=Perf.] gemeiniglich für ein Tempus der Vergangenheit. [普通 Perf.は過去時制とされるが、それは誤りである]

と断言し、この誤りが生じたのは、行為の完了と時間的な過去とを混同したからだと指摘している^{註21}。

先述した、彼らと同時代の希臘語学者 R.Kühner における Perf.の定義は、<希臘語の Perf.が他の言語のそれと違っているのは、この時制が現在において完了した行為を表わすのみならず、その完了した行為の影響と結果がなおも続いているということをも同時に表わす点にある>というものであるが、K. Heyse に限らず、Perf.を「完成された現在」と捉える文法家たちのこの時制に関する説明に接した者は、必ずや、希臘語の Perf.を念頭に思い浮かべずにはいられないであろう^{註22}。実際 K. Heyse は、その死後 Steinthal によってまとめられた草稿において、新時制システムの基礎はストア派にあると言っているのである^{註23}。

その他、Bauer が考察の対象とした文法家のひとりである Plüschke (1815) もまた、Perf.を<das Vollendete ist zwar abgethan, wird aber nicht als vergangen betrachtet.>[完成したことは確かに済んでしまったことであるが、しかし過去とは見なされない]と定義し、「完成された現在」は、過去と現在の間の一線を突き破って現在の状態を表わすものだと考えるひとりである。Perf.を「完成された現在」と捉えることを困難にしている原因を、彼は、この時制を<relativ>と見なすか<absolut>と見なすかが取り違えられているからだと考える^{註24}。従来の考え方ならば、Imperf.が「現在」と関係を有する【関係時】であって、Perf.は【孤立時】であったから、羅典語より更に古い希臘語を考察すると、この関係は逆にならねばならないからである。

更に Rosenberg (1828) が、希臘語と羅典語の用例から、<...hieraus erkennen wir, daß das Perfectum nicht die Vollendung der Vergangenheit sondern die vollendete Gegenwart bezeichnet.>[ここから解るのは、Perf. が表わすのは「過去の完成」ではなく、「完成された現在」であるということだ]と言う^{註25}。

そして、1837年の^(天保8)*Deutsche Grammatik*第4巻において、それまで様々な古典文献学者や言語学者たちが様々な考えを主張してきた Perf.という時制に関して、J.Grimm もまた、希臘語の Perf.と同じ機能を持つ羅典語の Perf.を訳す場合、独逸語では das umschriebene Präteritum (書替えの過去)——即ち Perf.が用いられることから、Perf.には<etwas präsensartiges> (現在の要素)があると主張するのである^{註26}。

このような Perf.の定義を不思議に思う現代人はいないであろう。しかし、当時にあつては、Jellinek が言うように^{註27}、Imperf.が【関係現在】で Perf.が【孤立過去】であると考えた人の方が多数派だったのである。当時の Reformator が自説の典拠を開示せず、イギリスの文法家が何も語らずとも、<I have loved><ich habe geliebt>を《過去》とする旧文法の定義をくつがえさせるような新説を生み出したものこそ、遠い地域、遠い時代の

半ば埋もれ消えかかった諸言語のかけら集めに奔走した歴史的比較的语言研究であり、サンスクリット語と希臘語と羅典語の徹底的な比較研究であった。

希臘語において注目されたこの「動作の完了」(Vollendung)という概念は、その後、G. Curtius (1820-1885) の<Zeitart>を経て、19世紀終盤に<Aktionsart>となり^{註28}、Perf.も「完成された現在」として6時制の中にその位置を占めることになるが、Bauer と K. Heyse の活動期は、古代語の発見と解説(偽の古文書を見分けるためにも言語研究は精密さを要求された)に熱狂する一方で、歴史比較言語学がまさに太い本流とならんとするところの、旧説・新説・奇説の混在する混沌の時代であった。

日本の洋語学は、江戸期の和蘭語から明治期の英語・独逸語に移行したとき、Perf.、即ち<ik heb gehad><I have had><ich habe gehabt>という時制を「過去」から「現在」に変えたこの変動の波を、直接かぶったのである。ここに到って、⁽¹⁸⁸⁴⁾明治17年以降20年代全般の日本で《半過去》と《過去》の用法が混乱・逆転した理由は、蘭語学以降行われてきた旧時制の文法(Imperf.[単独の過去形]を《半過去》・Perf.を《過去》とする)の中に、明治期になって、この新時制を採用した新たな文法(Imperf.[単独の過去形]を《過去》・Perf.を「完了された現在」とする)が流入・並存したからではないか、と考えられる。これが原因となって、《過去》と《半過去》がImperf.とPerf.どちらの訳語にもなり得るといふ、あの⁽¹⁸⁸⁴⁾明治17~31年の混乱が引き起こされたのである。

2. 現代人の誤解

ここで、ひとつの問題が生ずる。すなわち、現代文法の視点で以って当時の時制を考えた場合、<ik beminde><I loved><ich liebte>であるImperf.を《半過去》、<ik heb bemind><I have loved><ich habe geliebt>であるPerf.を《過去》とするのは、これが旧文法であるが故に、当時の人の誤りのように見えてしまうのである。江戸期の蘭語学における訳語の対応は、前期蘭語学においては専らImperf. : Perf. = 《過去ノ現在》 : 《過去》、幕末以降においては《半過去》 : 《過去》であって、《過去》 : 《半過去》ではなかったもので、なるほど訳語が逆転して見える。明治20年代頃までの英語と独逸語においてもImperf. : Perf.は《半過去》 : 《過去》の方が普通である。よって、佐藤良雄(1960 : 昭和35)、杉本つとむ(1981 : 昭和56)、斎藤信(1985 : 昭和60)等の各氏が次々と、これに対してある種の訝しさを表明している。

江戸期の蘭文典において、斎藤信は、中野柳圃がImperf.を《過去ノ現在》、Perf.を《過去》としていることに不可解な思いを抱き、杉本つとむは、藤林普山の《全成過去》の例文が、単独の過去形のものではなく現在完了のそれであるのを怪しんでいる^{註29}。しかし、両氏の見解からすると、かの有名な『英文鑑』で^{えいぶんかみ}渋川敬直が用いた^{よしなお}《過了現在》と《過去》という用語もまた、全く理解不可能ということになってしまうであろう。何故なら、用語だけを見せられた場合、現代人なら必ずや現在完了だと思ひ込むに違いないこの《過了現

在》は、これは Imperf. <I loved> に対する訳語であって、Perf. <I have loved> に対するものではないからである。中野、藤林、渋川という、江戸期の著名な語学者 3 人が、揃いも揃って時制を取り違えたというのであろうか。

国文典との関連から洋語文典の動詞過去に関する術語を調査した佐藤良雄は、さらに次のごとくに言う³⁰。

そして、[崙山元吉『獨逸学小径』(明治²⁴)]のこの頁の「半過去」[ich hatte] という見出しのある肩のところに、誰かが鉛筆を以て、「過去」と書き込みをしている。いつも思うことであるが、そのころの英文典では助動詞を用いたもの [I have had] は「現在完了」であって半過去に当り、助動詞なきもの [I had] が過去に当るというのが、普通の考えであるのに、ここの頁では、助動詞なきものに半過去とあるので、教授者の指示か、それとも読者自身で、この書き込みをしたのであろう。([]の注記は筆者)

佐藤は、これ以外の独文典からも、<助動詞なきもの>(Ich Schrieb) を《半過去》、<助動詞を用いたもの>(Ich habe geschrieben) を《過去》とした例を挙げ、<半過去については、…「過去においての不完了」と解釈すれば、仏文典と共通し、若し現在完了のように考えるならば、…「過去」のことがそれにあてられているから、両者を互いに転換して考えてみる必要がある>³¹ と言う。

佐藤はこのような現象を<混乱>として捉え、その原因を文典関係者の理解不十分ないしは誤解に求めているようである。しかし、もしそうなら、日本の蘭語学者は江戸期を通じて、<I loved> に当たる Imperf. と、<I have loved> に当たる Perf. とを、誤解し続けたということになってしまう。そして、日本の洋語学界は、その誤解を正すことができないまま明治 20 年代頃まで無為に過ごしてしまったということになる。そんなことがはたしてあり得るであろうか。

そもそも何故、江戸期の蘭語学者は Imperf. の <ik hadde> <ik beminde> を《過去ノ現在》《過了現在》《半過去》、Perf. の <ik heb gehad> <ik heb bemind> を《過去》と訳したのか。彼らは本当に理解を誤ったのか。当時においても、現代同様<助動詞を用いたものは「現在完了」であって半過去に当り、助動詞なきものが過去に当るというのが、普通の考えであつたのか。

この点が、実は違うのである。当時の Perf. は「完了した現在」ではないのが<普通の考え>であった。江戸期の <ik heb gehad> は、<ik hadde> <ik hadde gehad> とともに、<het verledene> (過去) を構成する三時制の一員であった。当時オランダ本国で出版された文法書における両時制の定義用法そのものの中に、当時の蘭語学者をして Perf. を《過去》、Imperf. を《半過去》と訳さしめる要素が、すでに存在していたのである。

明治 20 年代頃までの英・独文典も事情は同じであった。先述した英・独間の取り違えとされる現象も、日本人関係者の<誤解>ではなく、この二言語間でその Imperf. と Perf.

の定義内容が異なっていたためなのである。明治におけるこの種の誤解の例として大槻文彦の「和蘭字典文典の譯述起源」が考えられるのは、序章にて触れたとおりである。

以下、本章においては、現代文法と逆転しているかに見える Imperf.<ik hadde>=《半過去》、Perf.<ik heb gehad>=《過去》という訳語がどのように成立したのかを、江戸および明治期の文典の定義内容を見ていくことによって追求し、この理解が誤りでは決してなく、むしろ当時の語学的理解の正確さゆえであることを実証していく。

第一節 蘭語学における《過去ノ現在》

1. Perf. (ik heb gehad) に関する訳語

次頁の表 15 は、江戸期の輸入洋書における蘭・英・独語の直説法の時制を示したものであり（主に江戸幕府旧蔵洋書に拠る。この中には和蘭文典のみならず、和蘭語で書かれた仏文典も含まれる）、表 16（161 頁）は、主として杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』をもとに、江戸期の和蘭語研究における時制の訳語をまとめたものである。ここにおいて Perf. (ik heb gehad) と Imperf. (ik hadde) はいかなる日本語に訳されたか。

まず Perf. であるが、これは見事に一貫して《過去》である。しかも『三種諸格』（中野柳圃著、天明・寛政期頃）と文化 8 年⁽¹⁸¹¹⁾『九品詞略』（野呂天然）では《真ノ過去》とさえ言われている。

安政 2 年⁽¹⁸⁵⁵⁾『和蘭文語凡例』（大庭雪斎訳）における《既往時》も、訳語こそ違え、同趣旨である。この書は、例の Maatschappij^{マートシカッペイ}社の蘭文典 *Grammatica* を翻訳したものであるが、*Grammatica* の Perf. (ik heb gehad) は <de volmaakt verlede tijd> 【完全過去時】であるから、文化年間から 40 年以上時代が下って、蘭語学全盛の安政期になってもなお、日本での Perf. の理解は【完成過去】 = 《既往時》になっているのである（ただし、この《既往》の訳語は、大槻玄幹の『蘭学凡』では Plusquamperf. の訳語となっているので注意を要する）。

Grammatica のように、江戸期の蘭文典では、Perf. (ik heb gehad) は主に “de volmaakt (完全に) verleden (終了した) tijd (時)” と呼ばれるが、《過去》は、正確には “verleden” の部分の訳である。実際、同じ Maatschappij 社の *Rudimenta* ^{文化 3} (1846) では、Perf. のことを <Verleden tijd> としか呼んでいない。逆に P. Marin (1790) は <Volmaakte Tyd> 【完成時】のみなのであるが、この “Volmaakt” まで含めて訳せば、『和蘭語法解』『蘭学捷法』の《全成過去》、『助字要訣』の《成過去》、『洋学指針・蘭学部』の《全過去》になる。

このように、蘭語学における Perf. (ik heb gehad) は、<Volmaakt verleden tijd> 【完成過去時】 = 《過去》であり続け、そこには訳語上の大きな変動は見られないのである。

2. Imperf. (ik hadde) に関する訳語

ところが Imperf. のほうを見ると、事情が全く違う。表 16（161 頁）でとりわけ目につくのは、Imperf. に関する訳語のばらつきである。

表 15. 蘭・英・独・仏原典における時制の構成

| 年号 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde ich hatte I had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + Inf. ich werde + Inf. I shall + Inf. | ik zou + Inf. ich würde + Inf. I should + Inf. | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. |
|-----------------|-------------------------|----|----|---|---|---|---|---|--|--|---|
| 1708 | (英語蘭文典) Sewel | | 蘭 | 1. Present | 2. Preter- Imperfect | 3. Preter- Perfect | 4. Preter- Pluperfect | [hebben の場合] 5. Ind. Future Subj. Fut. | 6. Ind. Indefinite Tense Subj. 2nd Fut. | Subj. 2nd Fut. | Subj. 3rd Fut. |
| 1746 | | | 英 | 1. Tegenwoordig (現在) | 2. Onvolkomen verleden (未完成過去) | 3. Volkomen verleden (完成過去) | 4. Meer als volkomen verleden (更なる過去) | 5. Ind. Toekomend Subj. Toek. (未来) | Ind. Indefinite Tense or 2nd Fut. Subj. 2nd Fut. | Subj. 2e Toek. (第 2 未来) | Subj. 3rd Fut. |
| 1766 | | | 独 | 1. praesens | 2. imperfektum (Unvollkommene vergangene Zeit) | 3. perfektum (Vollkommene verg. Zeit) | 4. plusquamperf. (Mehr als vollk. verg. Zeit) | 5. fut. simplex | 7. fut. perfektum mixtum | 7. fut. imperf. mixtum | 8. fut. plusquamperf. mixtum |
| 1754 | Aichinger | | 独 | Simple Present tense (I love) Compound Present tense (I do love) | Simple Preterimperfect (I loved) ※仏の《半過去》 Compound Preterimperfect (I did love) | Compound Preterperfect (I have loved) | Preter- Pluperfect (I had loved) | Future (I shall or will love) | | | |
| 1776 | Peyton (英仏対訳 英文典) | | 英 | Tems Present Simple (J'aime) Tems Present Composé (J'aime) | Preterperfect (I loved) ※仏の《単純過去》 Simple Preterimparfait (J'aimois) Prétérit-imparfait (J'aimois) Prétérit-parfait (J'aimai) | Prétérit- Composé (J'ai aimé) | Prétérit- Plusque parfait (J'avais aimé) | Futur (J'aimerai) | | | |
| 1782 | Adelung | | 独 | 1. gegenwärtige Zeit Praesens | 2. die vergangene Zeit od. Präteritum Imperf. | Perf. | Plusquamperf. | Fut. absolutum | 3. die zukünftige Zeit od. Futurum Fut. imperf. mixtum | Fut. exactum | Fut. plusquamperf. |
| 1790 | Marin (蘭語対訳 仏文典) | | 仏 | 1. Présent Tegenwoordig | 2. I. Prétérit 1e voorleiden Tyd | Parfait Volmaakte Tyd | Plusque Parfait Meer als volmaakte Tyd | Futur Toekomend | | | |
| 1798 (寛政 10) | Sedger | | 英 | 1. Present 2. Present imperfect (~ing 形) | 3. Pres. Perf. | 4. Past 5. Past imperfect | 6. Past perfekt | 7. Future(shall) 2nd Fut.(will) | | 9. Fut. perfekt | |

(表 15-1)

| 年号 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde ich hatte I had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + Inf. ich werde + Inf. I shall + Inf. | ik zou + Inf. ich würde + Inf. I should + Inf. | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. |
|-----------------|------------------------------|---|----|---|---|---|---|---|--|--|---|---|
| 1801 (享和 1) | Locke (蘭語英文典) | 1. Onbepaalde tegenw. (不定現在) 2. (I am-ing) Onvolmaakte tegenw. | 英 | 3. Volmaakte tegenw. (完成現在) | 4. Onbepaalde vooredene tyd (不定過去) 5. (I was -ing) Voorledene onvolmaakt | 6. Voorledene volmaakt (過去完成) | 7. Toek. onbepaald (未來不定) 8. (I shall be -ing) Toek. onvolmaakt | 9. Toek. volmaakt (未來完成) | 9. Toek. volmaakt (未來完成) | | | |
| 1806 (宝永 5) | Weiland (仏語対訳 蘭文典) | 1. Tegenwoordig (現在) Présent | 蘭 | 2. Onvolmaakt verleden (未完成過去) Passé imparfait Imparfait passé | 3. Volmaakt verleden (完成過去) Passé absolu Parfait passé | 4. Meer dan volm. verl. (更なる過去) Passé plusque parfait | 5.a) 1 ^e toekomstend (第 1 未來) 5.b) 2 ^e toekomst (第 2 未來) 5.c) 1 ^e voor- waardelijk toekomst. (接統法第 1 仮 定未來) | 5.b) 2 ^e toekomst (第 2 未來) second futur 6. 2 nd future | 5.d) 2 ^e voor- waardelijk toekomst. (接統法第 2 假定 未來) | 7. Conditional | 8. 2 nd conditional de 2 ^e voor- | waardelijke toekomst (接統法第 2 假定 未來) |
| 1819 (文政 2) | van der Pyl (英語蘭文典) | 1. Present | 蘭 | 2. Imperfect Preter- imperfect Onvolm. verl. | 3. Perfect Volmaakt tijd | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future | 6. 2 nd future | 7. Conditional | de voorwaarde- lijke tijd | 2 ^e toekomst | waardelijke tijd |
| 1822 (文政 5) | Maatschappij (Grammatica) | 1. Tegenwoordig | 蘭 | 2. Onvolm. verl. | 3. Volm. verl. | 4. Meer dan volm. verl. | 5. Toek. | 5. Toek. | 3. Toek. | | | |
| 1826 (文政 9) | Bilderdijk | 1. Tegenw. | 蘭 | a) Onvolm. Voorledene tijd (Preteritum imperfectum) algemeen Voorledene tijd | 2. Voorledens b) Volm. Voorledene tijd afgedaan Voorledene tijd | c) Meer dan volmaakt Voorledene tijd voor-Voorledens tijd | d) het verloren Voorledene tijd (hebben/zijn+p.p.+gehad/gewesen) e) het verloren voor-Voorledene tijd (had/was+ p.p.+gehad/gewesen) | | | | | |
| 1831 (天保 2) | Lulofs | 1. Tegen- woordigs | 蘭 | a) Onvolmaakt voorledens tijd | 2. Voorledens b) Voorledens tijd (perfectum) | c) Meer dan volm. voorledens tijd | a) Toekomstend (futurum) | 3. Toekomigs b) Toekomig vooredens | | | | |
| 1834 (天保 5) | Perley | 1. Present | 英 | 2. Past | 3. Past | 4. Pres. Perf. | 3. Future | 6. Fut. Perf. | | | | |
| 1836 (天保 7) | Wilde | het tegenwoordige 1. Tegenw. | 蘭 | 2. Onvolm. verl. | 3. Volm. verl. | 4. Meer dan volm. verl. | 5. 1 ^e toekomstend 6. 2 ^e toekomstend | 5. 1 ^e toekomstend 6. 2 ^e toekomstend | 6. Fut. Perf. | 6. Fut. Perf. | 6. Fut. Perf. | Betrekkelijk toekomst. |
| 1838 (天保 9) | Heyse (第 5 版) | 1. Praesens imperfectum die währende Gegenwart (繼續現在) | 獨 | 3. Praeteritum imperf. die währende Vergangenheit (繼續過去) | 2. Praes. perfectum die vollendete Gegenwart (完成現在) | 4. Praet. perf. die vollendete Vergangenheit (完成過去) | 5. Futurum simplex Fut. absolutum die währende Zukunft (繼續未來) | 6. Fut. perf. Fut. exactum die vollendete Zukunft (完成未來) | | | | |
| 1840 (天保 11) | Hiley | 1. present | 英 | 2. past | 3. pres.-perf. | 4. past-perf. | 5. future | 6. future-perf. | | | | |
| 1842 (天保 13) | Farnum | 1. Present | 英 | 3. Past | 2. Pres. Perfect | 4. Past Perf. | 5. Future | 6. Future Perf. | | | | |

| 年代 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde ich hatte I had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + Inf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + Inf. ich wúrde + Inf. I should + Inf. | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich wúrde + perf. I should + perf. |
|----------------|-----------------------|----|--|---|------------------------------------|---|---|---|--|--|---|
| 1845 (弘化 2) | Hamelberg (蘭語英文典) | 蘭 | 1. Present Tegenw. | 2. Imperfect Onvolm.verl. | 3. Perfect Volm.verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^e toek. | 6. 2 nd future 2 ^e toek | | | |
| | Butler | 英 | 1. Present Present | 3. Past Imperf. | Perfect | 4. Past Perf. Pluperfect | 5. Future Future | 6. Future Perf. 2 nd Future | | | |
| | Well | 英 | 1. present 1. Tegenwoordig | 2. past Onvolmaakt verleden | 3. past-perf. Imperf. | 4. past-perf. 4. Meer dan volm. verleden | 5. future future | 6. future-perf. future-perf. | | | |
| 1846 (弘化 3) | Weiland | 蘭 | 1. Tegenwoordig 1. tegenwoordig (現在) | 2. Onvolmaakt verleden | 3. Volmaakt verleden | 4. Meer dan volm. verleden | 5. toekomst a) 1 ^e toekomst b) 2 ^e toekomst c) 1 ^e voor- waardelijk toekomst d) 2 ^e voor- waardelijk toekomst | 6. toekomst b) 2 ^e toekomst | | | |
| 1849 (嘉永 2) | Bullion | 英 | 1. Present | 2. 1 ^e betrekke- lijke verl. tijd (第一關係過去) | 3. Verleden tijd (過去) | 4. 2 ^e betrekkelijke verleden tijd (第二關係過去) | 5. toekomst (未來) | 6. Future-perf. Future | | | |
| 1851 (嘉永 4) | Marin (蘭語対訳 文典) | 蘭 | 1. Tegenw. | 2. Onvolmaakt verleden (未完成過去) | 3. Verleden tijd (過去) | 4. 2 ^e betrekkelijke verleden tijd (第二關係過去) | 5. toekomst (未來) | 6. Future-perf. Future | | | |
| | Hagoort | 蘭 | Tegenw. | 2. Imperfait 3. Parfait défini | Parfait composé | 4. Past-perf. 5. Plus-que-parfait 6. 2 nd Plus-que- Parfait | 7. Future Future | 8. Future composé | | | |
| | Spencer | 英 | 1. Present | 2. Onvolmaakt verleden | Volmaakt verleden | Meer dan volm. verleden | 1 ^e toekomst 5. Future | 2 ^e toekomst 6. Perf.-Future | | | |
| 1852 (嘉永 5) | Murray (蘭語英文典) | 英 | enkelvoudige tijden (單一時) | 2. Perfect-Pres. | 3. perfect volm.verl. | 4. pluperfect meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^e toek. | 6. 2 nd future 2 ^e toek. | | | |
| | Backer | 蘭 | 1. Tegenw. | 2. Onvolm.verl. | 3. Volm.verl. | 4. Meer dan volm. verl. | 5. 1 ^e toek. 5. Future | 6. 2 ^e toek. 6. Perf.-Future | | | |
| 1853 (嘉永 6) | Beijer | 蘭 | 1. Tegenw. | 2. 1 ^e betrekkelijke verleden (第一關係過去) | 3. Volstrekt verleden (孤立過去) | 4. 2 ^e betrekkelijke verleden (第二關係過去) | 5. Toek. | 6. Betrekkelijke toekomst (關係未來) | | | |
| | Covell | 英 | 1. present | 2. past 3. past | 4. pres.-perfect 2. pres.perf. | 5. past-perf. 4. past perf. | 6. future-perf. 6. future perf. | | | | |
| | S.S.Green | 英 | 1. present | 2. pres.perf. | 4. pres.-perfect 2. pres.perf. | 5. past-perf. 4. past perf. | 6. future-perf. 6. future perf. | | | | |

(表 15-3)

| 年代 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde ich hatte I had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + Inf. ich werde + Inf. I shall + Inf. | ik zou + Inf. ich würde + Inf. I should + Inf. | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. | |
|----------------|---------------------|----|---|---|--|---|--|--|---|--|---|--|
| 1853 (嘉永 6) | Pinneo Brill | 英 | 1. Present 1. Onvolmaakt tegenwoordig | 3. Volm. tegenw. (完成現在) | 2. 1 st Past 2. Onvolmaakt verleden | 3. 2 nd Past | 4. 3 rd Past 4. Volmaakt verleden | 5. 1 st Future 5. Onvolmaakt toekomend | 6. Verledene tijd van den onvolm. toek. | 6. 2 nd Future | 8. Verledene tijd van den volm. toek. tijd | |
| | | | 1. Present Tegenwoordig | | 2. Imperf. Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st or simple future 1 ^o toek. | 7. 1 st or simple conditional 1 ^o voor- waardelijk | 6. 2 nd or compound future 2 ^o toek. | 7. Volm. toek. | 8. 2 nd or compound conditional 2 ^o voor- waardelijk |
| 1854 (安政 1) | Beeker (蘭語英文典) | 英 | 1. Tegenwoordig | | 2. Imperf. Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future 2 ^o toek. | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | |
| | | | 1. Present Tegenw. | | 2. Onvolm. verl. | 3. Volm. verl. | 4. Meer dan volm. verl. | 5. Toek. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk |
| 1855 (安政 2) | Sandwijk | 蘭 | 1. Tegenw. | | 2. Onvolm. verl. | 3. Volm. verl. | 4. Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | |
| | | | 1. Tegenw. | | 2. Onvolm. verl. | 3. Volm. verl. | 4. Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk |
| 1855 (安政 2) | van der Maas Jr. | 蘭 | 1. Tegenw. | | 2. Imperf. Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk |
| | | | 1. Present | | 2. Imperf. Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk |
| 1855 (安政 2) | Lloyd (蘭語英文典) | 英 | 1. Present | | 2. Imperf. Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk |
| | | | 1. Present | | 2. Imperf. Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Pluperfect Meer dan volm. verl. | 5. 1 st future 1 ^o toek. | 7. 1 st conditional 1 ^o voorwaardelijk | 6. 2 nd future (2 ^o toek.) | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk | 8. 2 nd conditional 2 ^o voorwaardelijk |

(表 15-4)

| 年号 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde ich hatte I had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + Inf. ich werde + Inf. I shall + Inf. | ik zou + Inf. ich würde + perf. I should + perf. | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. | |
|---------------|-------------------|----|----|---|---|--|---|---|--|--|---|--|
| 1856 (安政3) | Gerdes (蘭語英文典) | | 英 | Indefinite 1. Present Tegenw. | 2. Past Onvolm. verl. | 3. Perfect Volm. verl. | 4. Prior-past Meer dan volm. verl. | 5. Future Toek. | 6. Prior-future 2° toek. | | | |
| | | | | Definite (各時制の-ing 形のこと) | | | | | | | | |
| 1857 (安政4) | Mulder | | 蘭 | Tegenw. | Verledene tijd (betrekkelijke 關係時) | Verledene tijd | Toek. | | | | | |
| | | | | het tegenwoordige | Betrekkelijke tegenwoordig (關係現在) (Onvolm. verl.) (未完成過去) | Betrekkelijke verleden (關係過去) Meer dan volm. verl. | | | | | | |
| | | | | Tegenw. | 1° betrekkelijke verleden (第一關係過去) | het verledene Volstrekt verleden (孤立過去) | 2° betrekkelijke verleden (第二關係過去) | het toekomstige Betrekkelijke toekomstend (關係未來) | | | | |
| 1861 (文久1) | Baily | | 英 | Present | Imperfect | Perfect | Pluperfect | 1st future | 2nd future | | | |
| | | | | (simple tense) | | | | | | | | |
| 1862 (文久2) | Murray | | 英 | 1. Present (脚注の説) 1. Present | 2. Imperf. | 3. Perf. | 4. Pluperf. | 5. 1st future | 6. 2nd future | | | |
| | | | | 1. présent | 2. 1st preterite | 3. 2nd preterite | 4. 3rd preterite | 5. Fut. imperf. | 6. Fut. perf. | | | |
| 1864 (元治1) | Becker | | 独 | 1. Gegenwart (現在) | b) Mitvergangen- heit (共時過去) | 2. Vergangenheit a) Vergangenheit (過去) | c) Vorvergangen- heit (前過去) | a) Zukunft (未來) | b) Vorzukunft (前未來) | 3. Zukunft | | |
| | | | | | | | | | | | | |

(表 15-5)

| 年号 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + Inf. ich werde + Inf. I shall + Inf. | ik zou + Inf. ich würde + Inf. I should + Inf. | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. |
|----------------|-----------------------------------|----|----|--|---|---|--|---|---|--|--|---|
| 1867 (慶応3) | 英吉利文典 The Elementary Catechism | 英 | 英語 | Present tense present tense imperfect (〜ing形のこと) 1. Present | present tense perfect | Past tense past tense imperfect 2. Imperfect | Past tense perfect | Future tense future tense imperfect 5. 1st future | future tense perfect | 6. 2nd future | 6. die vollendete Zukunft | 6. die vollendete Zukunft |
| 1869 (明治2) | Pinneo | 英 | 英語 | 1. Present 1. die unvollendete Gegenwart | 2. die unvollendete Vergangenheit | 2. 1st Past 2. die unvollendete Vergangenheit | 3. Perfect 3. 2nd Past | 4. Pluperfect 4. 3rd Past | 5. Future 3. die unvollendete Zukunft | 5. Future | 6. Fut. Perf. | |
| 1870 (明治3) | Gurke | 独 | 独 | 1. Present 1. Praesens imperfectum die währende Gegenwart | 4. die vollendete Gegenwart | 2. Past 3. Praeteritum imperfectum die währende Vergangenheit | 4. Praeteritum perfectum die vollendete Vergangenheit (完成過去) | 5. Past Perf. 5. die vollendete Vergangenheit | 3. Future | 5. Futurum simplex absolutum die währende Zukunft (継続未来) | 6. Futurum perfectum Fut. exactum die vollendete Zukunft (完成未来) | 6. die vollendete Zukunft |
| 1876 (明治9) | Swinton | 英 | 英語 | 1. Present 1. Praesens imperfectum die währende Gegenwart | 4. Pres. Perf. 2. Praesens perfectum die vollendete Gegenwart (完成現在) | 2. Past 3. Praeteritum imperfectum die währende Vergangenheit (継続過去) | Vergangenheit die völlig vergangene Zeit (vollendet) | 5. Past Perf. 5. die vollendete Vergangenheit | Zukunft das 1ste Futur (unvollendet) | die unvoll. 1ste Bedingungsform Conditionale imperf. | die zukünftig verflossene Zeit das 2te Futur (vollendet) | die unvoll. 2te Bedingungsform Conditionale perf. |
| 1878 (明治11) | Heyse | 独 | 独 | Gegenwart (unvollendet) 1. Präsens | 2. Perfekt | 5. Präteritum 4. Mitvergangenheit (Imperf.) | 6. Plusquamperf. 6. Plusquamperf. | 7. das Imperfekt des Futures 1ster Konditional | 8. das Plusquamperfekt des Futures 2ter Konditional | 8. das Plusquamperfekt des Futures 2ter Konditional | | |
| 1880 (明治13) | Mätzner | 英 | 英語 | 1. Gegenwart (Präsens) die unvollendete Gegenwart | (die vollendete Gegenwart) | | | | | | | |
| 1882 (明治15) | Schäfer | 独 | 独 | | | | | | | | | |

(表 15-6)

| 年号 | 著者 | 時制 | 言語 | ik heb ich habe I have | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde ich hatte I had | ik heb gehad ich habe gehabt I have had | ik hadde gehad ich hatte gehabt I had had | ik zal + perf. ich werde + perf. I shall + perf. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. |
|-----------------------|--------------------|----|---|---|---|---|---|---|---|--|
| 1883 (明治 16) | Lehmann | 独 | 1. Gegenwart (die unvollendete Gegenwart) 1. die dauernde Gegenwart | (die vollendete Gegenwart) 2. die vollendete Gegenwart | 2. Mitvergangenheit (die unvollendete Vergangenheit) 3. die dauernde Vergangenheit die 2te Vergangenheit | 3. Vergangeneheit | 4. Vorvergangenheit (die vollendete Vergangenheit) 4. die vollendete Vergangenheit die 3te Vergangenheit | 5. Zukunfft (die unvollendete Zukunfft) 5. die dauernde Zukunfft das 1ste Fut. | 6. Vorzukunfft (die vollendete Zukunfft) 6. die vollendete Zukunfft das 2te Fut. | ik zou + perf. ich würde + perf. I should + perf. |
| 1884~86 (明治 17~19) | Engelien | 独 | 1. Präsens Gegenwart | 2. die vollendete Gegenwart | 2. Präteritum die 2te Vergangenheit | die 1ste Vergangenheit | 4. Plusquamperf. Vorvergangenheit die 3te Vergangenheit | 3. Futurum I Zukunfft | 6. Futurum II Vorzukunfft | |
| 1885 (明治 18) | Wilmanns | 独 | 1. Präsens Gegenwart | | 2. Imperfekt die 1ste Vergangenheit | 4. Perfectum Vergangeneheit die 2te Vergangenheit | 5. Plusquamperf. Vorvergangenheit die 3te Vergangenheit | 3. Futurum I Zukunfft | 6. Futurum II Vorzukunfft | |
| 1902 (明治 35) | Lyon / Polack | 独 | 1. Präsens Tegenwoordig | | 2. Imperfekt die 1ste Vergangenheit | 3. Perfectum Vergangeneheit die 2te Vergangenheit | 4. Plusquamperf. Vorvergangenheit die 3te Vergangenheit | 3. Futurum I Zukunfft | 6. Futurum II Vorzukunfft | |
| 1907 (明治 40) | Valette (獨語蘭文典) | 独 | 1. Präsens Tegenwoordig | | 2. Imperfekt die 1ste Vergangenheit | 3. Perfectum Vergangeneheit die 2te Vergangenheit | 4. Plusquamperf. Vorvergangenheit die 3te Vergangenheit | 3. Futurum I Zukunfft | 6. Futurum II Vorzukunfft | |
| 1913 (大正 2) | Valette (英語蘭文典) | 独 | 1. Presens Onvoltooid tegenw. | 3. Pres. Perf. Voltooid tegenw. | 2. Past Onvoltooid verleden | Verleden (過去) | 4. Pluperf. Voltooid verl. | 5. Future Onvoltooid toek. | 6. Fut. exactum Betrekkelijke toekomst | 8. Konditionalis Perfekt Voorwaardelijke wijs. Verleden tijd |

(表 15-7)

表 16. 江戸期の蘭語学における時制の訳語

| 年代 | 書名 | 時制 | Præsens (tegenwoordig) ik heb (I have) | Imperfectum (onvolmaakt verleden) ik hadde (I had) | Perfectum (volmaakt verleden) ik heb gehad (I have had) | Plusquamperf. (meer dan volmaakt verl.) ik hadde gehad (I had had) | Futurum (toekomst) ik zal hebben (I shall have) | Futurum II (2 ^e toekomst) ik zal gehad hebben (I shall have had) |
|----------------------------|------------------------------|--------------------------|---|--|---|--|---|--|
| 1777 (安永6) 以降 天明・寛政・享和期 | 蘭学生前父 柳圃中野先生文法 柳圃先生助詞考 | 現世 / 現世 現在 / 現世 | 現世 / 過去 (未過) = 未成過去? [他者の書込?] 過去 | 過去 | 過去 / 過去 過去 / 過去 | 過去 / 過去 過去 / 過去 | 未来 (現世 / 未来) | 未来 (現世 / 未来) 仮令 (Imperf. = 過去形による仮定) |
| | 三種諸格 | 現世 | 真 / 過去 過去 / 現在 過去 / 現在 現在 / 過去 過去 / 現在 | { 〔仏文法の Imparfait と Parfait défini? (蘭では同形) 〕 (以前) / 漢字云フ (漢字で同形) } | 過去 過去 過去 過去 過去 | 過去 / 過去 過去 / 現在 / 過去 過去 / 過去 | 未来 未来 未来 未来 未来 | 9. 未来 / 過去 (原語: 第二未来) ik zal geleerd hebben 6. 直説法不現時 (接統法第二未来) ik zou leeren 7. 死語法過去 / 未来 toen ik leeren zoude 不現時 / 過去 (接統法第三未来) 8. 死語法過去 / 現在 (接統法第二不完全過去 = 過去形) 仮令 als ik leerde / als al leerde ik ※※ |
| 1805 (文化2) | 九品詞名目 四法諸時対譯 | 現在 (現世) | 2. 過去 / 現在 過去現在 | 3. 過去 増 現在 / 過去 | 3. 過去 過去 / 過去 | 4. 過去 / 過去 過去 / 現在 / 過去 | 5. 未来 未来 未来 未来 未来 | 9. 未来 / 過去 (原語: 第二未来) ik zal geleerd hebben 6. 直説法不現時 (接統法第二未来) ik zou leeren 7. 死語法過去 / 未来 toen ik leeren zoude 不現時 / 過去 (接統法第三未来) 8. 死語法過去 / 現在 (接統法第二不完全過去 = 過去形) 仮令 als ik leerde / als al leerde ik ※※ |
| 1811 (文化8) | 和蘭文学問答 | 現在 | 2. 過去 / 不定 | 3. 過去 | 3. 過去 | 4. 過去 / 過去 | 5. 未来 | 5. 未来 |
| 1812 (文化9) | 九品詞略 | 現在 Tegenwoordige tijd | 過去之現在 Onvolmaakte voorleden tijd | 過去 真 / 過去 volmaakte | 過去 過去 / 過去 volmaakte | 過去 / 過去 過去 / 過去 meer dan volmaakte | 未来 未来 未来 未来 未来 | 未来 未来 未来 未来 未来 |
| 1814 (文化11) | 助字要訣 訂正蘭語九品集 | 現在 現在 | 未成過去 2. 過去之現在 | 3. 過去 | 成過去 過去 過去 | 過去 / 過去 過去之過去 | 未来 未来 未来 | 9. 未来之過去 (zal+Perf.) 6. 直説法未来之不定 (zou+Inf.) 7. 分註法過去 / 不定 (zou+Perf.) 8. 文註法過去之未来 (過去形による仮令) ※原語は『四法諸時対訳』に同じ |
| 1815 (文化12) | 和蘭語法解 (英?) | 現在 | 2. 未成過去 | 3. 過去 | 3. 過去 | 4. 過去之過去 | 未来 未来 | 5. 未来 6. 不定 ik zou hebben |
| 1816 (文化13) | 魯語文法規範 | 現在 | | | | | 未来 | |
| 1815 ~ 1822 (文化12~文政5)の間? | 和仏蘭対譯語林 | 現在 | 第一の過去 (Imparfait のこと) 第二の過去 (Parfait défini のこと) | 過去 不定過去 不定 / 過去 | 過去 過去 / 過去 | 過去 / 過去 過去の過去 | 未来 | |
| 文政年間? | 和蘭属文錦囊抄 | 1. 現・在今 | 2. 昔・未往 | 過去 | 過去 過去 / 過去 | 過去の過去 | 未来 | |
| 1824 (文政7) | 蘭学凡 | 1. 現・在今 | 2. 昔・未往 | 過去 | 3 已・在往 4. 既・既往 | 過去の過去 | 5. 未・将来 | 6. 応 料度 (おしほかり) |

| 年代 | 書名 | 時制 | Praesens (tegenwoordig) ik heb (I have) | Imperfectum (onvolmaakt verleden) ik hadde (I had) | Perfectum (volmaakt verleden) ik heb gehad (I have had) | Plusquamperf. (meer dan volmaakt verl.) ik hadde gehad (I had had) | Futurum (toekomst) ik zal hebben (I shall have) | Futurum II (2 ^e toekomst) ik zal gehad hebben (I shall have had) |
|------------------------|-------------------------------|----|--|---|--|--|--|--|
| 1828~29? (文政 11~12) | 繙巻得師草稿 (国会 図書館本) | | 現在 | 過去 | 現在 | 過去 | 未来 | |
| 文政~天保? | 小関三英の断片三葉 | | 1. 現在 | 2. 過了現在 (未成過去) | 3. 過去 | 4. 過了過去 | 5. 未来 (原語: 第一未来) | 6. 過了未来 (原語: 第二未来) |
| 1840(天保 11) | 英文鑑 | | 1. 現在 | 2. 過了現在 (過去中ノ現在) | 3. 過去 | 4. 過了過去 (過去中ノ過去) | 5. 未来 | 6. 過了未来 (未来中ノ過去) |
| 1841 (天保 12) | 蘭学捷法 | | 現在 | 未過 (未成過去) | 全過 (全成過去) | 過過 (過去之過去) | | |
| 安政年間? | 四格十品弁解 | | 1. 現在 | 2. 過去現在 | 3. 過去 | 4. 過去之過去 | 5. 未来 | 6. 全成未来 |
| 1855(安政 2) | 和蘭文語凡例 | | 1. 万今時 | 2. 帶既往時 (不滿既往時) | 3. 既往時 | 4. 過既往時 | 5. 将来時 | 附) 帶将来時 (第二将来時) |
| 1856(安政 3) | 挿譯俄蘭磨智科 蘭学獨案内 | | 現在 | (帶既往) (未成過去) | | | | |
| 1857(安政 4) | 和蘭文典便蒙 和蘭文典字類 | | 1. 現在 | 2. 未了過去 | 3. 過去 | 4. 過了過去 | 5. 未来 | |
| 1868(明治 1) | 洋学指針・蘭学部 | | 1. 現在 | 2. 過去ノ現在 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 未来 | 6. 第二未来 |
| 1870(明治 3) | 明要附録 (仏) 格賢勃斯英文典直譯 | | 現在 | 2. 半過去 關係過去 | 3. 全過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未来 | 6. 第二未来 關係未来 |
| 1880 (明治 13) | セーフェル氏文典直 譯 (独) [多賀貫一郎] | | 1. 現在 | 3. 半過去 | 2. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未来 | 6. 第二未来 |
| | | | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 未来 (第一未来) | 6. 充分未来 (第二未来) (過去未来) |

(表 16-2)

※『四法諸時対譯』における未来時制の和蘭語

5. toekomstige tijd

6. tweede toekomstige tijd, of onbepaalde tijd der aanvoegende wijze

7. derde toekomstige tijd, of onbepaalde tijd der aanvoegende wijze

8. tweede onvolmaakte voorleden tijd, of onbepaalde tijd der aanvoegende wijze

9. tweede toekomstige tijd

※※《不現時》は仮定推量未来のことである。過去形を用いた現在の非現実仮定である《過去ノ現在》<仮令>とともに、過去完了を用いた過去の非現実仮定も、《過去ノ過去》<仮令> (例文: indien ik geleerd had または hadde) として扱われている。《死語法》《文註法》は現代の「接続法」「仮定法」である。これについては第三章参照。

- a) 1.現世ノ過去(現過) 2.過去ノ現世(過現) 3.現在ノ過去 4.過去ノ現在
 5.過去中ノ現在 6.過去現在 7.過去現在 8.過了現在
 9.半過去
- b) 10.嘗・未往 11.未成過去(未過) 12.帶既往時 13.不滿既往時
- c) 14.關係過去
- d) 15.過去ノ(之)不定 16.不定ノ過去 17.不定過去
- e) 18.過去

Perf. (ik heb gehad) がほとんど《過去》で一致しているのに、Imperf. (ik hadde) というひとつの時制にこれだけの理解のばらつきが出るのは一体何故だろうか。しかも、5.《現在過去》と 7.《過了現在》などは、現代の感覚からすると Perf.だと勘違いしかねない訳名である。実際《現在過去》は、独逸語の分野では、⁽¹⁸⁹⁴⁾明治27年『獨逸文法教科書(全)』(大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著)以降 Perf.の最も重要な訳語となっている(表 19[208 頁]および 表 22[217 頁]参照)。しかし、今ここに挙げたこれら蘭文典の訳語は、Perf. (ik heb gehad) ではなく、Imperf. (ik hadde) に対するものなのである。

Imperf. (ik hadde) に関する訳語の歴史は a)グループの訳語——主に《過去ノ現在》から始まる。中野柳圃とその後継者・馬場佐十郎関連の文典は、皆ほとんどこの訳語を用いている。ところが、当時の原典における Imperf.を表す和蘭語は<Onvolkomene verleden tyd>または<Onvolmaakt verleden tijd>【未完成過去】等であって、用語そのものに「現在」の意味は含まれていないのである。これは、確かに、杉本・斎藤両氏ならずといえども訝しく思わないではいられない点であろう。

この《過去ノ現在》は、表 16 (161 頁)に限って言えば、井伊直弼による大獄前夜の物情騒然たる安政年間に訳出された Maatschappij の『挿譯我蘭磨智科』(小原竹堂 蔵版、⁽¹⁸⁵⁷⁾安政丙辰仲秋新鐫)の頃から《半過去》に取って代われ³²、明治の英・独・仏語学に引き継がれる訳語のほぼ出揃うのが、⁽¹⁸⁵⁷⁾翌安政4年『和蘭文典字類 前編』(飯泉土讓、志筑高橋氏蔵梓)である。しかし、Imperf.は遂に《過去》にはならないのである。

3. 和蘭語原典における Perf. (ik heb gehad) と Imperf. (ik hadde) の定義

当時の和蘭語原典における時制の名称が訳語に正確に対応しないとすれば、では、この2時制の定義はいかなるものであったのか。

まず、代表的なふたつの蘭文典は、次のように説明している(和訳と下線は筆者による)。

○^{マートシカッペイ}Maatschappij 『和蘭文典 前編』作州^{ネツク}箕作氏蔵版 ⁽¹⁸⁴²⁾天保13年壬寅九月(原本:
Grammatica, of Nederduitsche Spraakkunst, ^{文致5}1822)

§ 145. De onvolmaakt verledene tijd...stelt eene zaak voor, die voorbij is op den tijd, waarin men spreekt, maar nog duurde op den tijd, waarvan men spreekt, of duidt eene handeling aan, welke nog niet geheel voorbij is, wanneer eene andere begint....

【未完成過去】(Imperf.=ik hadde) は、我々が話をしている時点では既に過ぎ去っているが、我々によって語られるその時点ではまだ継続している事柄か、さもなければ、別の行為が始まる時まで完全に過ぎ去っていない行為を表わす。

§ 146. De volmaakt verledene tijd stelt eene zaak voor, als geheel geëindigd op den tijd, waarin men spreekt, zonder eenig opzigt op eenigen anderen tijd, op eenige andere handeling.

【完成過去】(Perf.=ik heb gehad) は、我々が話している時には完全に終了した事柄を表わす。他のいかなる時・行為にも関係しない。

○P. Weiland, *Nederduitsche Spraakkunst*, 1846.^(弘化3) 註 33

§ 304. De onvolmaakt verledene tijd...stelt eene zaak voor, die voorbij is, op den tijd, waarin men spreekt, maar nog duurde, op den tijd, waarvan men spreekt: of, die eene handeling aanduidt, welke nog niet geheel voorbij is, waaneer eene andere begint....

【未完成過去】(Imperf.=ik hadde) は、人が話をしている時点においては既に過ぎ去っているが、しかし、人によって語られるその時点においてはまだ継続している事柄を表わす。さもなければ、もうひとつ別の行為が始まる時、まだ完全に過ぎ去っていない行為を表わす。

§ 309. De volmaakt verledene tijd...stelt eene zaak voor als geheel geëindigd(sic.), op den tijd, waarin men spreekt, zonder opzigt op eenigen anderen tijd, of eenige andere handeling....

【完成過去】(Perf.=ik heb gehad) は、ある事柄を、人が話をしている時点において完全に終了したものとして表わす。そして、他のいかなる時・行為にも関係しない。

両者とも、日本の蘭学者に愛用された文法書であり、特に前者は、蘭文典と言えは『マートシカッペイ』と決まっていたほど、幕末の和蘭語学習における文法書の決定版である。この二者の説明はほとんど同趣であるが、それに拠ると、<De volmaakt verledene tijd>、即ち Perf. (ik heb gehad) の定義は明解である。<我々が話している時には完全に終了した事柄>——これ故にこそ Perf.は、江戸期の蘭文典において《過去》と訳され、《真ノ過去》と説明されたのである。

Van der Pyl, *A practical grammar of the Dutch language* (1819)^{文政2}もまた、Perf.を次のよ

うに言っている。

The perfect tense expresses an action, not only past at the time, in which we speak, but also at that, of which we speak.... (133 頁)

「ビルデルデイキ」^{文政 9} Bilderdijk, *Nederduitsche spraakleer* (1826) に至っては、Perf. (ik heb gehad) のことを、
<de volmaakt voorleden tijd> 【完成過去時】よりは<een afgedaan voorleden tijd> 【終了過去時】と呼んだ方がより適当ではないか、と述べているほどである^{注 34}。

これら諸文法家の定義で注目すべきは、<Perf.は他のいかなる時・行為にも関係しない>という点である。つまり、和蘭語の Perf. (ik heb gehad) は、現代英文法のそれとは違って、「現在」との関係性を有していないのである。これが名称として現れたのが表 15 (154 頁) の<de volstrekt verleden tijd> 【孤立過去】である (Beijer, 1853^(嘉永 6)および1854^(安政 1); van der Maas Jr., 1855^(安政 2); Kuijper, 1856^(安政 3))。

一方、Imperf. (ik hadde) の意味は、これだけではもうひとつはっきりしないかも知れない。<我々が話をしている時点ではすでに過ぎ去っているが、我々によって語られるその時点ではまだ継続している><別の行為が始まる時まで完全に過ぎ去っていない>とは、どういうことであるか。<まだ継続><まだ完全に過ぎ去っていない>とは、即ち imperfect (未完成) だということである。このことは、この文言からも十分に理解され得る。

しかし《過去之現在》の意はどこにあるのか。それは、van der Pyl(1819)^{文政 2}の次の説明に、より明確に示されている (和訳と下線は筆者による)。

The preter imperfect tense expresses an action, past at the time in which I speak, but still present at the time of which I speak.

Mijn broeder leerde zijne les, toen gij binnen kwaamt.

My brother was learning his lesson, when you came in.

In this sentence the act of learning, though past with respect to my narration, was present at the moment your arrival took place. (133 頁)

同じMaatschappijでも、^(マートシカッペイ) *Rudimenta* (1846)^(弘化 3)は *Grammatica* よりもう一步踏み込んでい
る。該書で<De eerste betrekkelijke verledene tijd> 【第一関係過去】と呼びかえられた
Imperf.は、

De eerste betrekkelijke verledene tijd stelt het bestaan of de wijziging voor als tegenwoordig of nog niet geëindigd zijnde in eenen tijd, die voorbij is....

(XXXV LES, 77 頁)

【第一関係過去】(Imperf.= ik hadde) は、[ある事柄の]存在または変化を、過ぎ去ったある時に
おける現在か、あるいは、その時にまだ終了していないものとして表わす。

のように、<tegenwoordig> [現在の] という言葉を用いて説明され、Imperf. (ik hadde) という時制が「過去における現在」を述べるものであることが明言されている。このような原典の定義こそが、恐らく、江戸期の蘭語学者に《過去ノ現在》という和訳をさせた理由であると考えられるのである。

4. 《過去ノ現在》

Imperf. (ik hadde) は、いわゆる「物語の時制」または「歴史時制」と称されるものである。即ち、ある過去の出来事があり、それは、今から見れば確かに過去なのであるが、しかし、それが起こった当時は、これこそがまさにその時における「^{Imperfect}進行中の現在」である。次々と因果的に生起する歴史上の事件は、いわばこの「進行中の現在」の連なりとなって、ストーリーのすべてが展開していく。これが、過去の出来事を「過ぎ去った時における現在」として表わす Imperfectum——「現在」との関係性を有する《過去ノ現在》である。この歴史は生きている。過去の諸事象は、歴史年表のような、互いに無関係で孤立的な項目——その場合は Perf. 【孤立過去】【不定過去】になる——ではなく、因果関係を持った一連の動きとして、語り手の眼前で切れ目なく進行していく、現場での目撃証人の過去なのである。

人を過去の一連の出来事の中に引き込み、眼前に生き生きと再現させる力を持つこの Imperf. (ik hadde) という語りの時制は、過去のリアルな再現という機能をテレビと映画に奪われてしまった現代では感覚的に解りにくいかも知れないが、これがむしろ、当時の和蘭語の Imperf.の主たる機能だったのである³⁵。中野柳圃が『三種諸格』においてこの時制に加えた<以前ノ事ヲ言フノミ事跡ヲ語ル>という解釈は、歴史を語るという点については的確なものであったと言える³⁶。天保11年(1840)『英文鑑』の《過了現在》も、当時の Imperf.がこういう意味用法を持つのであれば、Perf. (ik heb gehad) ではなく Imperf. (ik hadde) に対する訳語として、全く正しい理解の上に成り立っているのである。

蘭語学における Imperf. (ik hadde) の訳語のうち、d)グループの《不定過去》を除く、《半過去》・《帯既往時》・《未成過去》等の訳語は皆、この Imperf.の ①現在性、②未完成(=事象の連続進行) というふたつの性質のどちらか一方の側面を捉えたものである。それが故に、このような訳語のばらつきが生じたのである。問題の《半過去》——半分しか過ぎ去っていないというのは、この「現在性」という側面を過去の側から照射したが故の命名である。全く、現代の我々とは逆に、江戸期の蘭語学者達は、Perf. (ik heb gehad) ではなく Imperf. (ik hadde) の理解にこそ、むしろ苦しんだのであった。

このように、これら蘭語学の用語はいずれも、原典の説明を実に正確に理解・把握した

結果生み出されたものである。杉本つとむは、

どうも<完了>（文法上での）ということは、なかなか理解し得なかったようで、この点は特に他の点の理解がすばらしいだけに、柳圃の弱点として目立つようである

と言うが³⁷、果たしてそうであろうか。当時の Perf. (ik heb gehad) は現代のそれとは意味用法が違っているのである。柳圃は《過去ノ現在》“ik leerde” [英 I learned ; 独 ich lernte] に、<我学ぶ><我学びき>という二様の訳をつけている。過去における現在を表わす Imperf. (ik hadde) という歴史時制の、「現在性」に重きを置けば、前者の<学ぶ>、過ぎ去った時という「過去性」に従えば<学びき>になる。そして、《過去》の“ik heb geleerd” [英 I have learned ; 独 ich habe gelernt] は、発話時に事が完全に終了しているところの、現在とは無関係な、他の過去の事象とも関連を持たない【孤立過去】であるから、完了の助動詞「つ」を用いた<学びつ>になるということなのである³⁸。

いかなるわけか、おそらく彼我のもっとも大きな異同点である故であろうが、この時制 [Imperf.] についてかなり柳圃は情熱をもって記述している³⁹が、その「わけ」は明白である。繰り返し力を込めて説明するのは、普通、それが重要であるか、あるいは理解が難しいかのどちらかであろう。和蘭語の Imperf. (ik hadde) が、現代英語の単独の過去形とは用法の異なる《過去ノ現在》であったため、現代の我々の眼から見ると不必要なほどの説明の労を、柳圃はこの観念理解のために厭わなかったのである。

Om dat hij zo lang in francrijk geweest was, zo sprak hij het fransch zeer wel.

彼ひとかく久敷払郎斯国にありしかは払郎斯語をいふこと甚よし……geweest was
ハ過去ノ過去^(マア) ナ 此語ハ過去中ニテ更ニ過去ヨリ現世ニカケテ云ヘリ其現世ハ今ヨリ
云ヘバ過去ナリ

（「彼は長い間フランスにいたので、フランス語が非常に上手であった」という文において、<geweest was> [英 had been ; 独 gewesen sein] は過去完了《過去ノ過去》である。これは、過去の世界の中で、過去から《現世》にかけての事を言い表わしており、ここで言う《現世》とは、今から見れば過去だけれども、その過去時の中ではその時の「現在」に当たるものである）

これが、まさに《過去ノ現在》である。この《現世》は現在形のことではなく、“sprak” [英 spoke ; 独 sprach] という Imperf. で表わされた、<今ヨリ云ヘバ過去>の時の中における「現在」なのである⁴⁰。

以上のように、江戸期の蘭語学においては、Perf. (ik heb gehad) が《過去》であり、Imperf. (ik hadde) が《過去ノ現在》=《半過去》であった。当時のこの2時制の定義は、現代文法のそれとは異なっていた。それゆえ、現代の目で以って見ると、江戸期の理解が誤っているかのように見える。しかし、誤っていたのではなかった。蘭語学者の Perf. (ik heb

gehad) = 《過去》、Imperf. (ik hadde) = 《半過去》という理解は、まことに正しかったのである。

5. 《過去ノ不定》《不定過去》

では、最後に残った d) グループの用語は、どのような意味であろうか。この用語を使っている馬場佐十郎貞由は、『和蘭文学問答』で“onvolmaake voorleden tijd”を《過去ノ不定》と呼び、<事ハ既ニ始メラレトモ成就シ終ラサルノ時世ニ云>と説明している^{註41}。

これは典型的な【未完成過去】としての Imperf. であるが、しかしこの名称は、前後に類例を見ない。《不定》が使われるのは、蘭語学においては、Inf. を表わす《不定法》か、あるいは“zoude” (=英 should ; 独 würde) を用いた Conditionalis を意味する《不定時》のどちらかであって、時制で使われたことはないのである。

では、時制における《不定》とは何か。単独の過去形である Imperf. には、過去を生き生きと叙述する【未完成過去】のほかにも、実はもうひとつ、歴史叙述の Aorist 《不定過去》としての用法がある。希臘語のように Aorist のための特別な形式を持たない羅典語では、Perf. がこの役目を担う(故に「歴史的 Perfect」と言う)が、独逸語では真の歴史時制は Imperf. であり [APPENDIX No.3(1) (437 頁)]、同様に、和蘭語における歴史時制もまた、Imperf. である [APPENDIX No.11 (441 頁)]。馬場の《過去ノ不定》は、この Aorist としての側面を Imperf. の訳語名称として採用したのではないかと考えられる。

しかし、この《過去ノ不定》に関しては、もうひとつ考えなければならないことがある。それは、和蘭語文法に仏蘭西語文法が入り込んだ可能性——即ち、P. Marin の仏文典の存在である。希臘語の歴史時制に Imperf. と Aorist があるように、仏蘭西語にもまた、《半過去》以外に、歴史を語るための過去時制がある。現代文法で Passé Simple (単純過去) と言われるものがそれである。明治の仏文典では《定過去》と訳されたが(中村秀穂『ソメル氏佛文典直譯』明治⁸20、表 17-3 [197 頁] 参照)、かつてはこの Passé Simple (単純過去) が、Aorist に対応するものとして、逆に《不定過去》と考えられていたのである^{註42}。

表 16 (161 頁) の『和仏蘭対譯語林』は、^(文化8)1805年に幕命により始められた仏語学習の成果であるが、この原本は P. Marin の仏蘭対訳の文法書である。古くは古賀十二郎が、中野柳圃こと志筑忠雄の柳圃文法には、ピイテル・マアリンの文法書が参考に用ひてある> と言ひ、杉本つとむも『蘭語学』I の『和蘭文学問答』の箇所で、P. Marin の時制を考察しているように、この<マーリン言語書>が前期の蘭語学者たちによって良く利用されたことは周知の事実である。

中野柳圃とその弟子である馬場佐十郎の和蘭文法に仏文典の影を感じる例として、柳圃の『三種諸格』中における次のような記述が挙げられる。

a. <タトヘハ事跡ヲ語ルニ waaren ト云フ古ヲ今ニ引ツケテ論スルニハ geweeet zijn^(ママ)

- ト云フ>[筆者注: *geweet* は正しくは *geweest*]
- b. <次ノ *geweest is./gemaakt is* 其人ノ昔ヲ今ニ引ツケテ云フ故過去ナリ> [筆者注: *gemaakt is* は正しくは *gemaakt heeft*].
- c. <*heeft hij* ハ又今ニ引ツケルナリ故ニ過去ナリ>
- d. <*voorgaat*, ハ以前ノ事ヲ云フノミニテ今ニ引ツケテ云フ故過去ノ現在ナリ *zoude verklaren* モ同ジ>^{註43}

a, b, c. の《過去》は Perf.、d. の《過去ノ現在》は Imperf. のことであるが、両者とも <今ニ引ツケテ云フ>と言われている。a. の前半と d. は和蘭語の Imperf. である。d. は和蘭語本来の用法で、この単独の過去形はその名のとおり <以前ノ事ヲ…今ニ引ツケテ云フ>《過去ノ現在》である。しかし、a. の前半と後半の解釈は逆であろう。当時の和蘭語から見て a. の場合、<今ニ引ツケテ論スル>のは “*waaren*” であって “*geweet zijn*”^(ママ) ではないのである。では、<事跡ヲ語ル>と言われるこの “*waaren*” は、一体何か。

一方、a. ~ c. の <今ニ引ツケテ云フ故過去> というのは一種矛盾した表現であり、この《過去》の形はいずれも Perf. である。しかし、当時の和蘭語の Perf. は「今」との関連を有していないのが普通であって、<今ニ引ツケテ云フ>時制ではない。「今」と関係しないにもかかわらず <今ニ引ツケテ云フ>とは、どういうことなのか。ここで、この Imperf. と Perf. は、仏蘭西語の *Passé Simple* と *Parfait Composé* の要素がここに入り込んだものではなかろうか、との推論が浮かんでくる。

国会図書館所蔵の二冊の P. Marin^著 (1790)² (1851)⁴ は仏蘭対訳の仏蘭西語文典であるが、その動詞活用表は以下のようなものである (比較のため両者を併記して示す)。

| [1790年] | [1851年] | [1790年] | [1851年] |
|--|---------|---|---------|
| <i>Le 1. Prétérit / Imparfait</i> | | <i>De eerste voorlede Tyd. / Onvolmaakt verleden tijd</i> | |
| <i>J' étois.</i> | | <i>Ik was.</i> | |
| <i>Tu étois...</i> | | <i>Gy waarst...</i> | |
| <i>Le 2. Prétérit / Parfait défini</i> | | <i>De tweede voorlede Tyd. / Bepaald verleden tijd</i> | |
| <i>Je fus.</i> | | <i>Ik was.</i> | |
| <i>Tu fus...</i> | | <i>Gy waarst...</i> | |
| <i>Le Parfait / Parfait Composé</i> | | <i>De Volmaakte Tyd. / Volmaakt verleden tijd</i> | |
| <i>J'ai été.</i> | | <i>Ik heb geweest.</i> | |
| <i>Tu as été...</i> | | <i>Gy hebt geweest...</i> | |

この3時制の現代の名称は、上から順に「半過去」・「単純過去」・「複合過去」であるが、『和仏蘭対訳語林』では、《第一の過去》《第二の過去》《現世の過去》と訳されている^{註44}。これまでは Imperf. を《過去ノ現在》と呼んできたが、語順が逆転したこの《現世ノ過去》

は Parfait に対するものであるから、単なる言葉の入れ替えとか間違いとか言うのとは明らかに違う。本章注 20 に引用した『蘭学生前父』の三世図を見ても、《過去ノ現世》は“waaren”、《現世ノ過去》は“hebben”を用いた Perf.という対応になり、柳圃の Perf.は、当時の蘭文典の【完全過去】という定義と食い違ってしまうことになるのである^{註 45}。ここで言う<昔ヲ今ニ引ツケテ云フ…過去>とは、この《現世ノ過去》である仏蘭西語の<Le Parfait><Parfait Composé>ではないか。和蘭語文法のはずが実は仏蘭西語の Perf.を説いているため、d.の Imperf.のみならず Perf.までもが、昔を<今ニ引ツケテ云フ>ことになってしまったのではなかろうか。

一方、a.の“waaren”はどう考えればよいか。単に<事跡ヲ語ル>というのは、仏蘭西語の《第二の過去》——現代の「単純過去」ではないか。なぜなら、仏蘭対訳の文典では、仏蘭西語の《第一の過去》(Imparfait)と《第二の過去》(Parfait défini=Aorist)が、後者を持たない和蘭語ではともに Imperf.になるからである。そうすると、この Imperf.の形を採った《第二の過去》が、<事跡ヲ語ル>《過去ノ不定》ということになる。

このように考えると、『柳圃中野先生文法』の《過去》も理解できる。本書では、<onvolmaakte tijd> (= Imperf.) を単に《過去》としている^{註 46}。<Onvolmaakt Verledene tijd>に関する訳語中唯一の《過去》の出典であるが、これも、仏蘭西語の《第二の過去》が和蘭語の《過去ノ現在》(Imperf.)の形を取っていると考えれば、よく解かるのである。

^(寛政2)
1790年版の Syntax において、Marin は、<仏蘭西語のこのふたつの過去は羅典語においても和蘭語においても正確に表現することができない>として、《第一の過去》(=半過去)の例文には Imperf.による蘭文訳を附しているが、《第二の過去》(=単純過去)には附していない。

一方、<Le Parfait>については、次のように説明する。

Maar men moet zich wachten dit tempus te gebruiken als men van iets spreekt, dat op den zelfden dag voorgevallen is ; als dan moet men de spreek wyze met een tempus perfektum uitdrukken. (1790、21 頁)

しかしながら、その同じ日に起こった事柄について話す時には、我々は《第二の過去》を用いるのを控えねばならない。その場合には、Perfect で以て表現されねばならない。

これに続く<Le Parfait>用の例文の蘭訳は、以下のように Perf.と Imperf.の両方を附している(和蘭語の of は英語の or、独逸語の oder)。

J'ai appris ce matin une nouvelle qui m'a beaucoup étonné.

Ik heb van de morgen een tyding gehoord, of ik hoorde van de morgen een tyding, die my zeer verwondert heeft, of zeer verwonderde.

《第二の過去》とは逆に、<Le Parfait>に対しては、和蘭語は Perf.と Imperf.の双方が対応可能である。この和蘭語の訳文を仏語の解説とともに見るとき、和蘭語の Perf.と Imperf.の両方が<今ニ引ツケテ云フ>ものに見えるであろう。

更に、*Port Royal Grammar* (1660) —その衝撃は<The impact of the Port Royal works on grammar, logic and rhetoric was soon felt throughout Europe.>であった——は^{註47}、その英訳版を見ると、仏蘭西語には過去がふたつ在るとして、そこに挙げられているのは、<Parfait>と<2.Prétérít>である。Imparfait は<the past in relation to the present>と定義され、この後、別個に説明されている。

...there are two sorts of preterits or past tenses ; one which marks the thing to be precisely done, and is therefore called definite, as I have written, I have done, I have dined ; and the other which signifies it done indeterminately, and is for that reason called indefinite or aoristus ; as I wrote, I went, I dined, &c. (103 頁)

これによると、<Parfait> (J'ay écrit) が《定過去》で<2.Prétérít> (J' écrivis) は《不定過去》ということになる。しかもこの<Parfait> (J'ay écrit) と<2.Prétérít> (J' écrivis) の使い分けは厳格で、次のように決して混同されることがない。

...which is properly said only of a time, that has at least the distance of a day from that, in which we speak. This is particularly true in French ; for they say, *J' écrivis hier*, I wrote yesterday, but not *J' écrivis ce matin*, not *J' écrivis cette nuit*, but *J'ay écrit ce matin*, *J'ay écrit cette nuit*, &c. (103 頁)

従って、<今ニ引ツケテ云フ>のは、《現世の過去》たる<Parfait>の方であって、発話時から最低一日は時間を置かなければ使えない《第二の過去》ではないと考えざるを得ない。一方、仏蘭西語の<Imparfait>と“indefinite or aoristus”たる<Le 2.Prétérít>は、和蘭語では単独の過去形である Imperf.になるので、和蘭語の立場から見ると Imperf.が《過去ノ不定》にもなり得るのである。

当時の和蘭語で書かれた外国語文典中には、その対訳の際に和蘭語にはない語形を示さざるを得ない場合がある。他にも、Lloyd(1855)の蘭語英文典に<I am writing : Ik ben schrijvende.> (212 頁) というのが見られるが、この和蘭語の進行形は英語に合わせただけのもので、実際には存在しない。しかし、何も知らずにこれを見た場合、和蘭語には進行形があると思い込んでしまう危険性は大きいであろう。このように和蘭語によって著された、あるいは訳された外国語文典を用いると、和蘭語にはない要素が和蘭文法として入り込む可能性がある。

《過去ノ不定》は、まず第一に和蘭語の歴史叙述の Imperf.であるが、このように仏蘭西

語の《第二の過去》——現代の *Passé Simple* のニュアンスも漂わせている。柳圃と P. Marin の関わりを鑑みるとその可能性が考えられるように思われる。上述の〈彼ひとかく久敷払郎斯国にありしかは払郎斯語をいふこと甚よし〉（かの人、かく久しくフランス国に在りしかば、フランス語を言うこと、はなはだ良し）という柳圃の例文も、恐らく仏蘭西語関係の本から採られたものではなからうか。

6. 《過去ノ現在》から《半過去》へ

後期蘭語学になると、Perf. (*ik heb gehad*) の《過去》はそのままに、Imperf. (*ik hadde*) 《過去ノ現在》は《半過去》に変わる。表 16 (161 頁) にそれが初めて現れるのは、ペリ
 ー来航を迎えて日本が蘭学から英学へと大きく舵を切ることになった^(通水6)1853年であるが、
 Imperf. の定義が変わったわけではなく、すでに 3. で考察した^{マートシカッペイ}Maatschappij 社版
Grammatica に基づき、Imperf. は新たな術語の時代に入ったのである^{註 48}。

この *Grammatica* は、日本の蘭語学が最盛期を迎えたこの安政年間におけるほとんど唯一の和蘭語文典で、旧時制を採る文法書であった。ために、Imperf. (*ik hadde*) は《半過去》、Perf. (*ik heb gehad*) は《過去》のまま江戸時代は終焉を迎え、明治期の英語へと推移する。そして、和蘭語の知識を持って英語に臨んだ者は、蘭・英間のこの 2 時制の食い違いに直面することになるのである。

haren grond heeft in het onzekere der to-
 leve, ga, merke; hij doe, wat hij wil, het dal hem
 chten wij dit te verwerven; dat hij leve, ach dat ik hem
 spreek, opdat ik gehoord worde, ik twijfel, of het is
 §. 143. De tijden, los melkor-leschouwing nijdthans over,
 gaan, zijn vijf in getal, de tegenwoordige namelijk, de on-
 volmaakt verledene, de volmaakt verledene, de meer dan volma-
 aks verledene en de toekomstige tijd. Deze hebben, althans
 in de aantoonende en aanroegende wijze, de onderschei-
 ding van drie personen, den sprekenden, den toegesproken en dien,
 van wien gesproken wordt, en van het enkelvoudige
 en meervoudige getal gemeen
 §. 144. De tegenwoordige tijd duidt aan, dat de zaak, wa-
 arvan men spreekt, plaats heeft op hetzelfde oogenblik,
 waarna men spreekt, als ik merke, ik schrijf, ik word bemind,
 gij slaapt, hij leken, enz.
 §. 145. De onvolmaakt verledene tijd, die, even als de
 voorgaande, door verandering van het merkwoord help
 gevormd wordt, stelt eene zaak voor, die voordij is op
 den tijd, waarin men spreekt, maar nog duurde op den
 tijd, waarvan men spreekt, of duidt eene handeling
 aan, welke nog niet geheel voordij is, wanneer eene an-
 dere begint, als ik merkte, ik schreef, ik werd bemind, toen ik
 van den man sprak, zag ik hem voor mij staan.
 §. 146. De volmaakt verledene tijd stelt eene zaak voor,
 als geheel geëindigd op den tijd, waarin men spreekt,
 zonder enig oprijgs op enigen anderen tijd, of eeni-
 ge andere handeling. Deze twee worden gevormd, bij
 de bedrijvende merkwoorden, door vereeniging van het
 hulpwoord hebben, in den tegenwoordigen tijd, met het



資料 34. *Grammatica* (1822) における時制の説明箇所

§ 143. de tijden (時)

§ 144. de tegenwoordige tijd (現在時)

§ 145. de on volmaakt verledene tijd (未完成過去時=Imperf. : ik hadde)

§ 146. de volmaakt verledene tijd (完成過去時=Perf. : ik heb gehad)

verledene of lijdende deelwoord, als ik heb bemind, gemaakt, gegeven, bij de lijdende werkwoorden door samenvoeging van het hulpwoord zijn, in den aangemerenen tijd, met het zelfde deelwoord, als ik bin bemind, en bij de onzijdige werkwoorden, deels door vereeniging van het hulpwoord hebben, deels door die van zijn met het meer genaemde deelwoord, als ik heb gearbeid, geluisterd, gepruald, gelegen, geslapen, en ik ben gebleven, ontwaakt, gekonken, gekomen, gedaald, enz. (*)

(*) Men zegt gemeenlijk, dat die onzijdige werkwoorden, welke meer een bedrijf, dan lijken beteekenen, met hebben, die daarentegen, welker beteekenis meer tot de lijdende nadert, met zijn vervoegd worden. Doch deze regel is aan zoo vele uitzonderingen onbederkerig, dat dezelve den naam van regel geenszins noeren kan.

§. 147. De meer dan volmaakt verledene tijd geeft te kennen, dat een zaak reeds geheel voortdij was, toen een andere begon. Dezelve wordt op gelijke wijze gevormd, als de voorgaande tijd, door vereeniging namelijk van het hulpwoord hebben of zijn, in den onvolmaakt verledenen tijd, met het verledene deelwoord, als ik had gehoord, gemaakt, ik was bemind, gebleven, enz.

§. 148. De toekomstige tijd beteekent, dat iets zal geschieden, en wordt gevormd door samenvoeging van het hulpwoord zullen met de onbepaalde wijze van een werkwoord, als ik zal maken, beminnen. Dan er is nog een tweede toekomstige tijd, welke door vereeniging van het hulpwoord zullen met den verledenen tijd der

資料 35. Grammatica (1822) ^{文政5}における時制の説明箇所 (続き)

§ 146. 続 de volmaakt verledene tijd (完成過去時 = Perf. : ik heb gehad)

§ 147. de meer dan volmaakt verledene tijd (超完成過去時)

§ 148. de toekomstige tijd (未来時)

du gevormd, waarvan, volgens eene zeer gebruikelijke lezing ter vernijfeling, ik roudt gesproken is. Dersyde veruit, seling doet rieh voor en roudij, en soldij, soldenier, en sold, taar, en gilden, vergulden, en goud, en houden, en holden, van welk laatste de onvolmaakt verledene tijd hield zijnen oorsprong heeft, en enkelvoudig, meervoudig voor enkelvoudig, meervoudig, van het oude solden, thans volwien, en roudt, by verkorting nuw, voor roudt, van het oude rouden, thans rullen, en rulle anderen.

§. 151. De vervoeging van het werkwoord hebben ge- schiedt op de volgende wijze :

| | | |
|----------------------------|-------------------|------------------|
| Onbepaalde wijze. | | |
| Tegenw. tijd. | Verledene tijd. | Toekomende tijd. |
| Ik heb. | Gehad hebben. | Rullen hebben. |
| Gij hebt. | deelwoorden. | |
| Hij, of zij heeft. | Gehad hebbende. | Rullende hebben. |
| Aantoonende wijze. | | |
| Tegenwoordige tijd. | | |
| Enkelvoud. Meervoud. | | |
| Ik heb. | zij hebben. | |
| Gij hebt. | zij hebt. | |
| Hij, of zij heeft. | zij hebben. | |
| Onvolmaakt verledene tijd. | | |
| Ik had. | zij hadden. | |
| Gij hadt. | zij hadt. | |
| Hij, of zij hadt. | zij hadden. | |
| Volmaakt verledene tijd. | | |
| Ik heb gehad. | zij hebben gehad. | |
| Gij hebt gehad. | zij hebt gehad. | |

| | |
|-----------------------------------|--------------------------|
| Hij, of zij heeft gehad. | zij hebben gehad. |
| Meer dan volmaakt verledene tijd. | |
| Ik had gehad. | zij hadden gehad. |
| Gij hadt gehad. | zij hadt gehad. |
| Hij, of zij hadt gehad. | zij hadden gehad. |
| Toekomende tijd. | |
| Ik zal hebben. | zij zullen hebben. |
| Gij zult hebben. | zij zult hebben. |
| Hij, of zij zal hebben. | zij zullen hebben. |
| Tweede toekomende tijd. | |
| Ik zal gehad hebben. | zij zullen gehad hebben. |
| Gij zult gehad hebben. | zij zult gehad hebben. |
| Hij, of zij zal gehad hebben. | zij zullen gehad hebben. |

| | |
|------------------------------|-----------------------|
| Gebiedende wijze. | |
| Ik heb. | Ik heb. |
| Aanvoegende wijze. | |
| Tegenwoordige tijd. | |
| Dat ik hebbe. | Dat zij hebben. |
| Dat gij hebt. | Dat zij hebt. |
| Dat hij, of zij hebbe. | Dat zij hebben. |
| Onvolmaakt verledene tijd. | |
| Dat ik hadde. | Dat zij hadden. |
| Dat gij hadt. | Dat zij hadt. |
| Dat hij, of zij hadde. | Dat zij hadden. |
| Volmaakt verledene tijd. | |
| Dat ik gehad hebbe. | Dat zij gehad hebben. |
| Dat gij gehad hebt. | Dat zij gehad hebben. |
| Dat hij, of zij gehad hebbe. | Dat zij gehad hebben. |

三十一

| | |
|-------------------------------------|-------------------------------|
| Meer dan volmaakt verledene tijd. | |
| Dat ik gehad hadde. | Dat zij gehad hadden. |
| Dat gij gehad hadt. | Dat zij gehad hadden. |
| Dat hij, of zij gehad hadde. | Dat zij gehad hadden. |
| Toekomende tijd. | |
| Dat ik roudt hebben. | Dat zij rouden hebben. |
| Dat gij roudet hebben. | Dat zij roudet hebben. |
| Dat hij, of zij roudt hebben. | Dat zij rouden hebben. |
| Tweede toekomende tijd. | |
| Dat ik roudt gehad hebben. | Dat zij rouden gehad heb, en. |
| Dat gij roudet gehad heb, en. | Dat zij roudet gehad heb, en. |
| Dat hij, of zij roudt gehad hebben. | Dat zij rouden gehad heb, en. |

§. 152. Het werkwoord rijn wordt dus vervoegd.

| | | |
|-----------------------|-----------------|---------------------------|
| Onbepaalde wijze. | | |
| Tegenw. tijd. | Verledene tijd. | Toek. tijd. |
| Gijn, of rieren. | Giesse rijn. | Rullen rijn, of rieren. |
| Deelwoorden. | | |
| Rijnde, of rieren, d. | Giesse rijnde. | Rullende rijn, of rieren. |
| Aantoonende wijze. | | |
| Tegenwoordige tijd. | | |
| Enkelvoud. Meervoud. | | |
| Ik rijn. | zij rijn. | |
| Gij rijn. | zij rijn. | |
| Hij, of zij is (*). | zij rijn. | |

三十二

資料 36. Grammatica (1822) の動詞活用表 § 151. hebben の例

De vervoeging van het werkwoord hebben geschiedt op de volgende wijze : — に続いて活用表が始まっている。

- (三十一 表)
- Onbepaalde wijze (不定法) : 現在・過去・未来
- Deelwoorden (分詞) : 現在・過去・未来
- Aantoonende wijze (直説法)
- Tegenwoordige tijd (現在 : **ik heb**)
- Onvolmaakt verledene tijd (未完成過去 : **ik hadde**)
- Volmaakt verledene tijd (完成過去 : **ik heb gehad**)
- (三十一 裏)
- Meer dan volmaakt verledene tijd (超完成過去 : **ik zal hebben**)
- Toekomende tijd (未来 : **ik zal hebben**)
- Tweede toekomende tijd (第二未来 : **ik zal gehad hebben**)
- Gebiedende wijze (命令法)
- Aanvoegende tijd (接続法)
- Dat ik hebbe** ..以下直説法に同じ時制
- Dat ik hadde**
- Dat ik gehad hebbe**
- (三十二 表)
- Dat ik gehad hadde**
- Dat ik zoude hebben**
- Dat ik zoude gehad hebben**

XXXV. L E S.

75

Over de Tijden.

Onze voorstelling van het bestaan of van de wijziging van dit bestaan bepaalt zich niet alleen tot het tegenwoordige, maar ook tot het verledene of toekomstige. Vandaar, dat men bij de Werkwoorden ook drie tijden heeft aan-

76

genomen, namelijk den tegenwoordigen, den verledenen en den toekomstigen tijd.

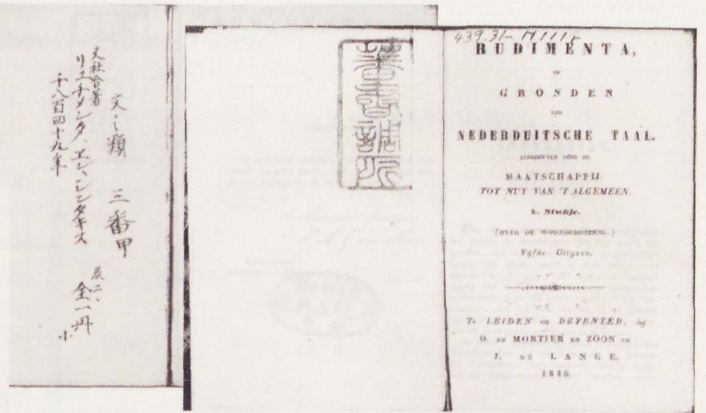
Behalve de drie genoemde tijden, heeft men nog drie andere, die men zich niet zonder betrekking op eenen der eerstgenoemde tijden kan voorstellen, en die dus op zich zelve niet toereikend zijn, om met het onderwerp een volledig Voorstel te vormen.

De onvolledigheid dezer tijden blijkt uit deze volgende Voorstellen: *ik leerde*, — *ik had geleerd*, — en *ik zal geleerd hebben*. De voorstellingen bevredigen ons niet, zoo lang wij dezelve niet in betrekking tot iets anders beschouwen; b. v.: *ik leerde* dezen morgen *mijne les*, — *ik had geleerd*, toen ik geroepen werd, — en *ik zal geleerd hebben*, als de Meester zal komen, enz.

Van deze *betrekkelijke* tijden behooren er twee tot den verledenen en een tot den toekomstigen tijd.

Tot meerdere naauwkeurigheid in de uitdrukking, heeft men, in de vervoeging der Werkwoorden, deze opeenvolging der tijden aangenomen:

1. De tegenwoordige tijd.
2. De eerste *betrekkelijke* verledene tijd.
3. De verledene tijd.
4. De tweede *betrekkelijke* verledene tijd.
5. De toekomstige tijd.
6. De *betrekkelijke* toekomstige tijd.



NEDERDUITSCHER TAAL.

77

Den tegenwoordigen tijd gebruikt men, om het bestaan of deszelfs wijziging voor te stellen in hetzelfde oogenblik, waarin men spreekt; als: *ik leer mijne les*, dat is te zeggen: ik leer nu, op het oogenblik, waarin ik spreek, mijne les.

De eerste *betrekkelijke* verledene tijd stelt het bestaan of de wijziging voor als tegenwoordig of nog niet geëindigd zijnde in eenen tijd, die voorbij is; als: *ik leerde deze week zeer naarstig*, — *wij speelden dezen zomer dikwijls te samen*.

De tweede *betrekkelijke* verledene tijd drukt het bestaan of de wijziging uit als geheel geëindigd in eenen verledenen tijd, die met dezen verbonden wordt; als: *ik had mijne les reeds geleerd*, toen zij in huis kwamen.

De toekomstige tijd stelt het bestaan of de wijziging voor in eenen tijd, die nog niet is; als: *ik zal morgen eene wandeling doen*.

De *betrekkelijke* toekomstige tijd duidt het bestaan of de wijziging aan als reeds gebeurd in eenen tijd, die nog komen moet; als: *ik zal hem spreken*, nadat ik u zal gesproken hebben.

XXXVI. L E S.

Van de Personen.

Door de personen bij de Werkwoorden verstaat men de onderwerpen, waarvan het bestaan

資料 37. *Rudimenta* (1846) における 時制 tijd の説明箇所。

Grammatica と同じ 6 時制ながら、名称の違いが一際目立つ。77 頁の各時制の説明では、*<hebben / zijn+p.p.>* である Verleden tijd 《過去》が、自明過ぎるためか、最早省かれてしまっている。

1. 現在 Ik heb (直説法) ; Dat ik hebbe (接続法)
2. 第一関係過去 Ik had ; Dat ik hadde
3. 過去 Ik heb gehad ; Dat ik hebbe gehad
4. 第二関係過去 Ik had gehad ; Dat ik hadde gehad
5. 未来 Ik zal hebben ; Dat ik zoude hebben
6. 関係未来 Ik zal gehad hebben ; Dat ik zoude gehad hebben

資料 38. Rudimenta (1846) ^{弘化 3}における hebben (=haben; have)

78

GRONDEN DER

door de Werkwoorden aangeduid of gewijzigd wordt. Deze onderwerpen worden of door Zelfstandige Naamwoorden of door Voornaamwoorden uitgedrukt, en het is mede naar deze personen en derzelve getal, dat de Werkwoorden in de vervoeging eenige verandering ondergaan.

De Persoonlijke Voornaamwoorden, welke men bij de Werkwoorden bezigt, heeft men hiervoor reeds leeren kennen.

Om de Werkwoorden te vervoegen, bedient men zich van Hulpwoorden; deze zijn vier, te weten: *zullen*, *hebben*, *zijn* en *worden*.

Het Hulpwoord *zullen*, gevoegd bij de *Onbepaalde wijze*, dient, om de *toekomende tijden* uit te drukken. — *Hebben* en *zijn*, gevoegd bij het *Verleden Deelwoord*, dienen, om den *verledenen* en den *tweeden betrekkelijken verledenen tijd*, in alle Werkwoorden, te vormen; — en het Hulpwoord *worden* dient, om de *Lijdende Werkwoorden*, waarvan wij nader spreken zullen, in al derzelve tijden te vervoegen.

NEDERDUITSCH E TAAL.

79

XXXVII. L E S.

Vervoeging van het Hulpwoord zullen.

| Enk. | Meerv. | Enk. | Meerv. |
|-----------------------|-------------|-------------------------|-------------|
| Ik zal | wij zullen | Ik zoude | wij zouden |
| gij zult | gij zult | gij zoudet | gij zoudet |
| hij, zij, men zal. | zij zullen. | hij, zij, men zoude. | zij zouden. |

Vervoeging van het Hulpwoord hebben.

| Onbepaalde wijs. | | Deelwoorden. | |
|----------------------------|--|--------------------------|--|
| Teg. tijd, hebben. | | Bedrijvend, hebbende. | |
| Verl. tijd, gehad hebben. | | Lijdend, gehad. | |
| Toek. tijd, zullen hebben. | | | |
| Aantoonende wijze. | | Bijvoegende wijze. | |
| Tegenwoordige tijd. | | | |
| Enk. | | Enk. | |
| Ik heb | | Dat ik hebbe | |
| gij hebt | | dat gij hebbet | |
| hij, zij, men heeft. | | dat hij, zij, men hebbe. | |
| Meerv. | | Meerv. | |
| Wij hebben | | Dat wij hebben | |
| gij hebt | | dat gij hebbet | |
| zij hebben. | | dat zij hebben. | |

80

GRONDEN DER

Eerste betrekkelijke verledene tijd.

| Enk. | | Enk. | |
|--------------------|--|--------------------------|--|
| Ik had | | Dat ik hadde | |
| gij hadt | | dat gij haddet | |
| hij, zij, men had. | | dat hij, zij, men hadde. | |
| Meerv. | | Meerv. | |
| Wij hadden | | Dat wij hadden | |
| gij hadt | | dat gij haddet | |
| zij hadden. | | dat zij hadden. | |

Verledene tijd.

| Enk. | | Enk. | |
|---------------------|----------|-------------------------|-----------|
| Ik heb | } gehad. | Dat ik hebbe | } hebben. |
| gij hebt | | dat gij hebbet | |
| hij, zij, men heeft | | dat hij, zij, men hebbe | |
| Meerv. | | Meerv. | |
| Wij hebben | | Dat wij hebben | |
| gij hebt | | dat gij hebbet | |
| zij hebben | | dat zij hebben | |

NEDERDUITSCH E TAAL.

81

Tweede betrekkelijke verledene tijd.

| Enk. | | Enk. | |
|-------------------|----------|-------------------------|----------|
| Ik had | } gehad. | Dat ik hadde | } gehad. |
| gij hadt | | dat gij haddet | |
| hij, zij, men had | | dat hij, zij, men hadde | |
| Meerv. | | Meerv. | |
| Wij hadden | | Dat wij hadden | |
| gij hadt | | dat gij haddet | |
| zij hadden | | dat zij hadden | |

Toekomende tijd.

| Enk. | | Enk. | |
|-------------------|-----------|-------------------------|-----------|
| Ik zal | } hebben. | Dat ik zoude | } hebben. |
| gij zult | | dat gij zoudet | |
| hij, zij, men zal | | dat hij, zij, men zoude | |
| Meerv. | | Meerv. | |
| Wij zullen | | Dat wij zouden | |
| gij zult | | dat gij zoudet | |
| zij zullen | | dat zij zouden | |

Betrekkelijke toekomstige tijd.

| | | |
|--------------------------|---|--------------------------------|
| Enk. | | Enk. |
| Ik <i>zal</i> | } | Dat ik <i>zoude</i> |
| gij <i>zult</i> | | dat gij <i>zoudet</i> |
| hij, zij, men <i>zal</i> | | dat hij, zij, men <i>zoude</i> |
| Meerv. | | Meerv. |
| Wij <i>zullen</i> | } | Dat wij <i>zouden</i> |
| gij <i>zult</i> | | dat gij <i>zoudet</i> |
| zij <i>zullen</i> | | dat zij <i>zouden</i> |

Gebiedende wijze.

Enk. *heb*
Meerv. *hebt.*

Vervoeging van het Hulpwoord zijn.

Onbepaalde wijs. Deelwoorden.

| | |
|----------------------------------|----------------------------|
| Teg. tijd, <i>zijn.</i> | Bedrijvend, <i>zijnde.</i> |
| Verl. tijd, <i>geweest zijn.</i> | Lijdend, <i>geweest.</i> |
| Toek. tijd, <i>zullen zijn.</i> | |

Aantoonende wijze. Bijvoegende wijze.

Tegenwoordige tijd.

| | | |
|--------------------------|---|-------------------------------|
| Enk. | | Enk. |
| Ik <i>ben</i> | } | Dat ik <i>zij</i> |
| gij <i>zijt</i> | | dat gij <i>zijt</i> |
| hij, zij, men <i>is.</i> | | dat hij, zij, men <i>zij.</i> |

Meerv. Meerv.

| | |
|------------------|---------------------|
| Wij <i>zijn</i> | Dat wij <i>zijn</i> |
| gij <i>zijt</i> | dat gij <i>zijt</i> |
| zij <i>zijn.</i> | dat zij <i>zijn</i> |

Eerste betrekkelijke verledene tijd.

Enk. Enk.

| | |
|---------------------------|--------------------------------|
| Ik <i>was</i> | Dat ik <i>ware</i> |
| gij <i>waart</i> | dat gij <i>waret</i> |
| hij, zij, men <i>was.</i> | dat hij, zij, men <i>ware.</i> |

Meerv. Meerv.

| | |
|-------------------|-----------------------|
| Wij <i>waren</i> | Dat wij <i>waren</i> |
| gij <i>waart</i> | dat gij <i>waret</i> |
| zij <i>waren.</i> | dat zij <i>waren.</i> |

Verledene tijd.

Enk. Enk.

| | | | |
|-------------------------|---|------------------------------|---|
| Ik <i>ben</i> | } | Dat ik <i>zij</i> | } |
| gij <i>zijt</i> | | dat gij <i>zijt</i> | |
| hij, zij, men <i>is</i> | | dat hij, zij, men <i>zij</i> | |
| Meerv. | | Meerv. | |
| Wij <i>zijn</i> | } | Dat wij <i>zijn</i> | } |
| gij <i>zijt</i> | | dat gij <i>zijt</i> | |
| zij <i>zijn</i> | | dat zij <i>zijn</i> | |

6

資料 39. *Rudimenta* に (1846) おける hebben(=haben; have)の活用表 (続き)同じMaatschappij<文社先生>社版でありながら、*Grammatica* (1822) と大きく異なつた時制名称を用いた活用表は、1800年代初頭以降の変動の様子をよく示している。Onbepaalde wijs《不定法》と Deelwoorden《分詞》に始まり、続いて、Aantoonende wijze《直説法》と Bijvoegende wijze《接続法》が並置され、Gebiedende wijze《命令法》で終わっている。*Grammatica* との時制の比較については本章注 2 参照。

(p.79) Onbepaalde wijs. 《不定法》

現在・過去・未来

Deelwoorden 《分詞》

能動・受動

Aantoonende wijze 《直説法》

Bijvoegende wijze 《接続法》

Tegenwoordige tijd 《現在》

(p.80) Eerste betrekkelijke verledene tijd(= Imperf.) 【第一関係過去】

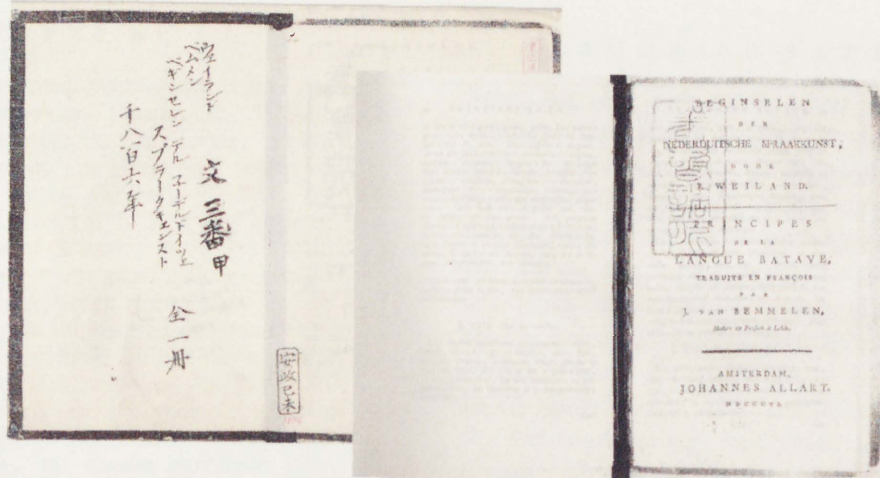
Verledene tijd(= Perf.) 《過去》

(p.81) Tweede betrekkelijke verledene tijd 【第二関係過去】

Toekomstige tijd 《未来》

Betrekkelijke toekomstige tijd 【関係未来】

(p.82) Gebiedende wijze 《命令法》: Enkelvoud 《単数》と Meervoud 《複数》



62 PRINCIPES DE LA

lement la seconde personne: *lees, leest gij, lis, lisez, &c.* 4. Le subjonctif est le mode qui exprime quelque chose d'incertain, un souhait, une condition ou incitation: *hij leve, hij ga waar hij wil*, qu'il vive, qu'il aille où il voudra. Aussi avec des conjonctions: *dat hij zich haaste*, qu'il se dépêche &c.

Les verbes ont cinq temps, *den tegenwoordigen*, le présent, *onvolmaakt verledenen*, le passé imparfait, *volmaakt verledenen*, le passé parfait, *meer dan volmaakt verledenen*, passé plus que parfait, et *den toekomenden tijd*, le futur; dont les deux premiers sont formés par la conjugaison du verbe même, les trois derniers par *hebben, zijn et zullen*, avoir, être et devoir.

1. Le présent indique une opération existante: *ik denk, gij spreekt*, je pense, tu parles &c. La seconde et la troisième personne a un *t*: *gij et hij leest, bidt*, tu lis, il lit, tu pries, il prie. *Hij is, kan, zal, mag et wil*, il est, peut, sera, devra, peut et veut en sont exceptés.

2. Le passé imparfait indique une action qui n'est pas achevée, *ik sprak, hij las*, je parlois tu lisois &c. La seconde personne a toujours un *t*, *gij greept, schriktet, naamt, laast*, tu saisissois, effrayois, prenois, lisois &c.

3. Le passé parfait représente une chose comme entièrement achevée: *ik heb gezegd, j'ai dit, hij is gestorven*, il est mort.

4. Le plus que parfait passé désigne qu'une chose est déjà entièrement pas-

GRAMMAIRE BATAVE. 63

geente tijden, en alleen den tweeden persoon: *lees, leest gij* enz. 4. De *aanvoegende* wijs is die, waardoor iets onzeker gezegd, een wensch, eene voorwaarde, of aandrijving uitgedrukt wordt: *hij leve! hij ga waar hij wil* enz. Ook met voegwoorden: *dat hij zich haaste* enz.

De werkwoorden hebben vijf zijden, *den tegenwoordigen, onvolmaakt verledenen, volmaakt verledenen, meer dan volmaakt verledenen*, en *den toekomenden tijd*; waarvan de twee eerste door verbuiging van het werkwoord zelf, de drie laatste door *hebben, zijn en zullen* gevormd worden.

1. De tegenwoordige tijd duidt eene plaatshebbende werking aan: *ik denk, gij spreekt* enz. De tweede en derde persoon heeft eene *t*; *gij en hij leest, bidt* enz. *Hij is, kan, zal, mag* en *wil* zijn hiervan uitgezonderd.

2. De *onvolmaakt verledene* tijd duidt eene niet geëindigde handeling aan: *ik sprak, hij las* enz. De tweede persoon heeft altijd eene *t*: *gij greept, schriktet, naamt, laast* enz.

3. De *volmaakt verledene* tijd steit eene zaak als geheel geëindigd voor: *ik heb gezegd, hij is gestorven* enz.

4. De *meer dan volmaakt verledene* tijd beteekent,

資料 40. ^(文化3) 1806年版の Weiland 文典

高野長英が〈近頃舶来〉といった Weiland の蘭文典で、仏蘭対訳である。tijd の説明は第 2 段落から。時制は伝統文法そのもので、《未来完了》を持たない 5 時制である。1. de tegenwoordige tijd, le présent, 2. de onvolmaakt verledene tijd, le passé imparfait, 3. de volmaakt verledene tijd, le passé parfait, 4. de meer dan volmaakt verledene tijd, le plus que parfait, 5. de toekomende tijd, le futur

passée, lorsqu'une autre commence: *ik had gezegd, hij was gestorven*, j'avois dit, il étoit mort. 5. Le futur est de deux sortes, le premier dit simplement qu'une chose est à venir: *ik zal zeggen, zij zullen sterven*, je dirai, ils mourront &c. Le second indique que quelque chose est maintenant à venir, mais sera passé dans le temps, dont on parle: *ik zal gezegd hebben, zij zullen gestorven zijn*, j'aurai dit, ils seront morts. Dans le subjonctif il se trouve deux futurs; le premier désigne qu'une chose conditionnelle est à venir, *ik zoude zeggen*, je dirois, *zij zouden sterven*, ils mourroient, l'autre qu'une chose conditionnelle a été à venir, *ik zoude gezegd hebben, zij zouden gestorven zijn*, j'aurais dit, ils seroient morts.

Voici quelques exemples de conjugaison.

Le verbe auxiliaire *hebben*, avoir.

| L'INDICATIF. | PARTICIPES. |
|--|---|
| Présent, <i>hebben</i> , avoir. | Prés., <i>hebbende</i> , ayant. |
| Passé, <i>gehad hebben</i> , avoir eu. | Passé, <i>gehad hebbende</i> , ayant eu. |
| Futur, <i>te zullen hebben</i> , devoir avoir. | Futur, <i>zullende hebben</i> , devant avoir. |

IN-

kent, dat eene zaak reeds geheel voorbij is, wanneer eene andere begint: *ik had gezegd, hij was gestorven*, enz. 5. De *toekomende* tijd is tweederlei. De eerste zegt, eenvoudig, dat iets toekomend is: *ik zal zeggen, zij zullen sterven* enz. De tweede duidt aan, dat iets thans toekomend is, maar verleden zijn zal op den tijd, waarvan men spreekt: *ik zal gezegd hebben, zij zullen gestorven zijn* enz. In de *aanvoegende wijs* beteekent de eerste, dat iets voorwaardelijk toekomend is: *ik zoude zeggen, zij zouden sterven* enz., de andere, dat iets voorwaardelijk toekomend geweest is: *ik zoude gezegd hebben, zij zouden gestorven zijn* enz.

Zie hier eenige voorbeelden van vervoeging:

Het hulpwoord *hebben*.

ONBEPAAALDE WIJS. DEELWOORDEN.

| | |
|---|--|
| Tegenw. tijd; <i>hebben</i> . | Teganw. tijd: <i>hebbende</i> . |
| Verled. tijd: <i>gehad hebben</i> . | Verl. tijd: <i>gehad hebbende</i> . |
| Toekom. tijd: <i>te zullen hebben</i> . | Toekom. tijd: <i>zullende hebben</i> . |

E

AAN-

資料 41. ^(文化3) 1806年版の Weiland 文典 (続)

公式には 5 時制であるが、ところが、第 5 番目の《未来》時制は 4 種あると言っている。

《直説法》と《接続法》de *aanvoegende wijs* で 2 種ずつである。<De eerste> (第一は)、<De tweede> (第二は) というのがその目印。

《直説法》《未来》第一: *ik zal zeggen* (ich soll sage./ I shall say)

第二: *ik zal gezegd hebben* (ich soll gesagt haben./ I shall have said)

《接続法》《未来》voorwaardelijk (仮定)

第一: *ik zoude zeggen* (ich sollte sagen./ I should say)

第二: *ik zoude gezegd hebben* (ich sollte gesagt haben / I should have said)

(文化3)
資料 42. 1806年版の Weiland 文典 : zijn の活用表

72 PRINCIPES DE LA

| | |
|--|---|
| INDICATIF. | SUBJONCTIF. |
| Wij <i>zullen</i> , nous devons, | Wij <i>zouden</i> , nous devions, |
| Gij <i>zult</i> , vous devez, | Gij <i>zoudet</i> , vous deviez, |
| Zij <i>zullen</i> , ils doivent. | Zij <i>zouden</i> , ils devoient. |
| L'auxiliaire <i>zijn</i> , être. | |
| INDICATIF, | PARTICIPES. |
| Présent, <i>zijn</i> , of <i>wezen</i> , | Présent, <i>zijnde</i> of <i>wezen-</i> |
| | être, <i>de</i> , étant, |
| Pasfé, <i>geweest zijn</i> , avoir | Pasfé, <i>geweest zijnde</i> , |
| | été, ayant été, |
| Futur, <i>te zullen zijn</i> , of | Futur, <i>zullende zijn</i> of |
| <i>wezen</i> , devoir être. | <i>wezen</i> , devant être. |
| INDICATIF. | SUBJONCT F. |
| PRÉSENT. | |
| Ik <i>ben</i> , je suis, | Dat ik <i>zij</i> , que je fois, |
| Gij <i>zijt</i> , tu es, | Dat gij <i>zijt</i> , que tu fois, |
| Hij <i>is</i> , il est. | Dat hij <i>zij</i> , qu'il soit. |
| Wij <i>zijn</i> , nous sommes, | Dat wij <i>zijn</i> , que nous |
| | foyons, |
| Gij <i>zijt</i> , vous êtes, | Dat gij <i>zijt</i> , que vous |
| | foyez, |
| Zij <i>zijn</i> , ils sont. | Dat zij <i>zijn</i> , qu'ils soient. |
| PASSÉ IMPARFAIT. | |
| Ik <i>was</i> , j'étois ou fus, &c. | Dat ik <i>ware</i> , que je fusse, |
| Gij <i>waart</i> , tu étois, | Dat gij <i>waret</i> , que tu |
| | fusses, |
| Hij <i>was</i> , il étoit. | Dat hij <i>ware</i> , qu'il fut. |
| Wij | |

GRAMMAIRE BATAVE. 73

| | |
|---|---------------------------------------|
| AANTOON. WIJS. | AANVOEG. WIJS |
| Wij <i>zullen</i> , | Wij <i>zouden</i> , |
| Gij <i>zult</i> , | Gij <i>zoudet</i> , |
| Zij <i>zullen</i> . | Zij <i>zouden</i> . |
| Het hulpwoord <i>zijn</i> . | |
| ONBEPAAALDE WIJS. | DEELWOORDEN. |
| Tegenw: <i>zijn</i> , of <i>wezen</i> , | Tegenw: <i>zijnde</i> , of <i>we-</i> |
| | <i>zende</i> , |
| Verled: <i>geweest zijn</i> . | Verled: <i>geweest zijnde</i> . |
| Toekom: <i>te zullen zijn</i> , | Toekom: <i>zullende zijn</i> , |
| of <i>wezen</i> . | of <i>wezen</i> . |
| AANTOON. WIJS. | AANVOEG. WIJS. |
| TEGENW. TIJD. | |
| Ik <i>ben</i> , | Dat ik <i>zij</i> , |
| Gij <i>zijt</i> , | Dat gij <i>zijt</i> , |
| Hij <i>is</i> . | Dat hij <i>zij</i> . |
| Wij <i>zijn</i> , | Dat wij <i>zijn</i> , |
| Gij <i>zijt</i> , | Dat gij <i>zijt</i> , |
| Zij <i>zijn</i> . | Dat zij <i>zijn</i> . |
| ONVOLM. VERL. TIJD. | |
| Ik <i>was</i> , | Dat ik <i>ware</i> , |
| Gij <i>waart</i> , | Dat gij <i>waret</i> , |
| Hij <i>was</i> . | Dat hij <i>ware</i> . |
| E 5. Wij | |

74 PRINCIPES DE LA

| | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|
| INDICATIF. | SUBJONCTIF. |
| Wij <i>waren</i> , nous étions, | Dat wij <i>waren</i> , que nous |
| | fusions, |
| Gij <i>waart</i> , vous étiez, | Dat gij <i>waret</i> , que vous |
| | fusiez, |
| Zij <i>waren</i> , ils étoient. | Dat zij <i>waren</i> , qu'ils fus- |
| | sent. |
| PASSÉ ABSOLU. | |
| Ik <i>ben geweest</i> , j'ai été, | Dat ik <i>zij geweest</i> , que |
| | j'aye été, |
| Gij <i>zijt geweest</i> , tu as | Dat gij <i>zijt geweest</i> , que |
| été, | tu ayes été, |
| Hij <i>is geweest</i> , il a été, | Dat hij <i>zij geweest</i> , qu'il |
| | ait été. |
| Wij <i>zijn geweest</i> , nous | Dat wij <i>zijn geweest</i> , que |
| avons été, | nous ayons été, |
| Gij <i>zijt geweest</i> , vous | Dat gij <i>zijt geweest</i> , que |
| avez été, | vous ayez été, |
| Zij <i>zijn geweest</i> , ils ont | Dat zij <i>zijn geweest</i> , qu'ils |
| été. | aient été. |
| PASSÉ PLUSQUE PARFAIT. | |
| Ik <i>was geweest</i> , j'avois | Dat ik <i>ware geweest</i> , que |
| été, ou j'eus été &c. | j'eusse été, |
| Gij <i>waart geweest</i> , tu | Dat gij <i>waret geweest</i> , que |
| avois été, | tu eusses été, |
| Hij <i>was geweest</i> , il avoit | Dat hij <i>ware geweest</i> , qu'il |
| été. | eut été. |
| Wij <i>waren geweest</i> , nous | Dat wij <i>waren geweest</i> , |
| avons été, | que nous eussions été, |
| Gij <i>waart geweest</i> , vous | Dat gij <i>waret geweest</i> , que |
| aviez été, | vous eussiez été, |
| Zij <i>waren geweest</i> , ils | Dat zij <i>waren geweest</i> , |
| avoient été. | qu'ils eussent été. |
| PREMIER FUTUR. | |
| Ik <i>zal zijn</i> , je serai, | Dat ik <i>zoude zijn</i> , que je |
| | ferois, |
| | Gij |

GRAMMAIRE BATAVE. 75

| | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| AANTOON. WIJS. | AANVOEG. WIJS. |
| Wij <i>waren</i> , | Dat wij <i>waren</i> , |
| Gij <i>waart</i> , | Dat gij <i>waret</i> , |
| Zij <i>waren</i> . | Dat zij <i>waren</i> . |
| VOLM. VERLED. TIJD. | |
| Ik <i>ben geweest</i> , | Dat ik <i>zij geweest</i> , |
| Gij <i>zijt geweest</i> , | Dat gij <i>zijt geweest</i> , |
| Hij <i>is geweest</i> . | Dat hij <i>zij geweest</i> . |
| Wij <i>zijn geweest</i> , | Dat wij <i>zijn geweest</i> , |
| Gij <i>zijt geweest</i> , | Dat gij <i>zijt geweest</i> , |
| Zij <i>zijn geweest</i> . | Dat zij <i>zijn geweest</i> . |
| MEER DAN VOLM VERLED. TIJD. | |
| Ik <i>was geweest</i> , | Dat ik <i>ware geweest</i> , |
| Gij <i>waart geweest</i> , | Dat gij <i>waret geweest</i> , |
| Hij <i>was geweest</i> . | Dat hij <i>ware geweest</i> . |
| Wij <i>waren geweest</i> , | Dat wij <i>waren geweest</i> , |
| Gij <i>waart geweest</i> , | Dat gij <i>waret geweest</i> , |
| Zij <i>waren geweest</i> . | Dat zij <i>waren geweest</i> . |
| EERSTE TOEKOM. TIJD. | |
| Ik <i>zal zijn</i> , | Dat ik <i>zoude zijn</i> , |
| | Gij |
| | Wij |

76 PRINCIPES DE LA

| | |
|----------------------------------|---|
| INDICATIF. | SUBJONCTIF. |
| Gij <i>zult zijn</i> , tu feras, | Dat gij <i>zoudet zijn</i> , que tu ferois, |
| Hij <i>zal zijn</i> , il fera, | Dat hij <i>zoude zijn</i> , qu'il feroit. |

| | |
|---------------------------------------|--|
| Wij <i>zullen zijn</i> , nous ferons, | Dat wij <i>zouden zijn</i> , que nous ferions, |
| Gij <i>zult zijn</i> , vous ferez, | Dat gij <i>zoudet zijn</i> , que vous feriez, |
| Zij <i>zullen zijn</i> , ils feront. | Dat zij <i>zouden zijn</i> , qu'ils feroient.* |

* NB. Voyez pour ce temps-ci et le suivant la note pag. 69.

SECOND FUTUR.

| | |
|---|--|
| Ik <i>zal geweest zijn</i> , j'aurai été, | Dat ik <i>zoude geweest zijn</i> , que j'aurais été, |
| Gij <i>zult geweest zijn</i> , tu auras été, | Dat gij <i>zoudet geweest zijn</i> , que tu aurois été, |
| Hij <i>zal geweest zijn</i> , il aura été &c. | Dat hij <i>zoude geweest zijn</i> , qu'il auroit été &c. |

IMPÉRATIF.

| | |
|-------------------------------|--|
| Sing. <i>wees gij</i> , fois, | Plur. <i>zijt</i> , of <i>weest gij</i> , foyez. |
|-------------------------------|--|

L'auxiliaire *worden*, devenir.

INFINITIF.

PARTICIPES.

| | |
|--|---|
| Préf. <i>worden</i> , devenir. | Préf. <i>wordende</i> , devenant. |
| Pasfê, <i>geworden zijn</i> , être devenu, | Pasfê, <i>geworden zijnde</i> , étant devenu, |
| Fatur, <i>te zullen worden</i> , devoir devenir. | Fatur, <i>zullende worden</i> , devant devenir. |

IN-

GRAMMAIRE BATAVE. 77

| | |
|----------------|----------------|
| AANTOON. WIJS. | AANVOEG. WIJS. |
|----------------|----------------|

| | |
|------------------------|------------------------------|
| Gij <i>zult zijn</i> , | Dat gij <i>zoudet zijn</i> , |
| Hij <i>zal zijn</i> . | Dat hij <i>zoude zijn</i> . |

| | |
|--------------------------|------------------------------|
| Wij <i>zullen zijn</i> , | Dat wij <i>zouden zijn</i> , |
| Gij <i>zult zijn</i> , | Dat gij <i>zoudet zijn</i> , |
| Zij <i>zullen zijn</i> . | Dat zij <i>zouden zijn</i> . |

TWEEDE TOEKOM. TIJD.

| | |
|--------------------------------|--------------------------------------|
| Ik <i>zal geweest zijn</i> , | Dat ik <i>zoude geweest zijn</i> , |
| Gij <i>zult geweest zijn</i> , | Dat gij <i>zoudet geweest zijn</i> , |
| Hij <i>zal geweest zijn</i> . | Dat hij <i>zoude geweest zijn</i> . |

GEBIEDENDE WIJS.

| | |
|---------------------------|--|
| Enkelv. <i>wees gij</i> . | Meerv. <i>zijt</i> , of <i>weest gij</i> . |
|---------------------------|--|

Het hulpwoord *worden*.

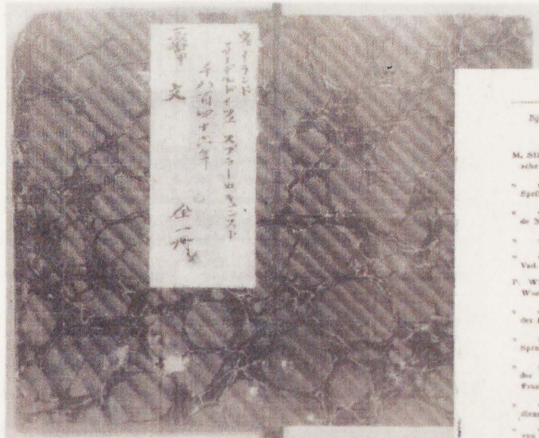
| | |
|-------------------|--------------|
| ONBEPAAALDE WIJS. | DEELWOORDEN. |
|-------------------|--------------|

| | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| Tegenw. tijd: <i>worden</i> . | Tegenw. <i>wordende</i> . |
| Verled: <i>geworden zijn</i> . | Verled: <i>geworden zijnde</i> . |
| Toekom: <i>te zullen worden</i> . | Toekom: <i>zullende worden</i> . |

AAN-

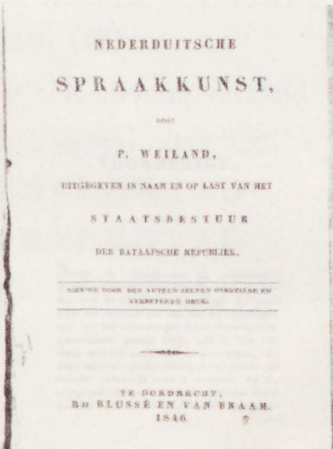
資料 43. ^(文化3) 1806年版の Weiland 文典 : zijn の活用表(続)

活用表では、Eerste toekomstige tijd 《第一未来》と Tweede toekomstige tijd 《第二未来》とに分かれ、実質的に6時制になっている。



Bij de Uitgeverij daartoe is mede gedrukt te bekomen:

| | |
|--|-------|
| M. SIEGENHEEK, Woordenboek voor de Nederduitsche Spelling, gr. 8vo. | 7,50 |
| " " " Verhandeling over de Nederduitsche Spelling, gr. 8vo. | 7,50 |
| " " " Kort Begrip der Verkenning over de Nederduitsche Spelling, kl. 8vo. | 7,50 |
| " " " over de taalverdeling, 8vo. | 5,00 |
| " " " Beknopt overzicht van de Nederduitsche Spelling, 8vo. | 2,50 |
| P. WEILAND, Beknopt Nederduitsch Taalkundig Woordenboek, 3 deelen, gr. 8vo., compleet | 19,00 |
| " " " Handwoordenboek voor de Spelling der Hollandsche Taal, gr. 8vo. | 7,00 |
| " " " Begintion der Nederduitsche Spelling, kl. 8vo. | 7,50 |
| " " " en VAN RIMMELIEN, Begintion der Nederduitsche Spelling, Nederduitsch en Fransch. | 7,50 |
| " " " Nederduitsche Spreektaal, ten dienste der Scholen, kl. 8vo. | 7,50 |
| " " " Nieuwwoordenboek, of verklaring van alle bekende vreemde woorden, die in de spraaking en verstaan, als in den vroegeren, mede verwoordten en verlaten nagaan van 1616. | 7,50 |
| " " " en LANDRIJ, Woordenboek der Nederduitsche Spelling, gr. 8vo. | 7,50 |



aandrijving, insgelijks door dat, als: dat hij zich haaste.

§. 299. Nog wordt de aanvoegende wijs met eenige andere voortvoegsels gehezigd, als: of, alsof, ten zij, schoon enz.; hij voorbeeld: ik twijfel, of hij mijn vriend wel zij — of hij het ware, of een ander, is niet gebleken — het scheen, alsof hij op nieuw jong geworden ware — ik zal niet rusten, ten zij men mij voldoening geve — hij zoude niet genoeg hebben, schoon hij een miljoen bezate enz.

§. 300. Hierbij moet, eindelijk, nog aangemerkt worden, dat, in de boven bijgebragte gezegden, de aanvoegende wijs niet van de voortvoegsels afhangt, maar in den aard der uitdrukking zelve gelegen is, dewijl in al de genoemde voorstellen iets twijfelachtigs, iets onzekerers plaats heeft, geen derzelve iets stelligs, of volstreks zegt; hetwelk de eigenschap der aanvoegende wijs is.

4. Over de tijden der werkwoorden.

§. 301. De tijden der werkwoorden zijn vijf in getal, namelijk, de tegenwoordige, onvolmaakt verledene, volmaakt- en meer dan volmaakt verledene, en de toekomstige tijd, waarvan de twee eerste door verhuiging van het werkwoord zelf, de drie laatste door middel van de hulpwoorden hebben, zijn en zullen gevormd worden.

§. 302.

§. 302. 1. De tegenwoordige tijd der aantoonende wijs duidt aan, dat de zaak, waarvan men spreekt, in hetzelfde oogenblik, waarin men spreekt, plaats heeft, als: ik word bemind, zij leven, gij slaapt enz.

§. 303. Alle werkwoorden hebben, in den tweeden en derden persoon van den tegenwoordigen tijd, in het enkelvoudige getal, eene t, als: gij en hij zegt, leest enz. (*) Zoo ook die werkwoorden, welke eene d in hun zakelijk deel hebben, als: gij en hij brandt, zendt, bidt, wordt enz. Hiervan echter zijn, in opzigt tot den derden persoon, hij is, kan, zal, mag en wil uitgezonderd. (†)

§. 304. 2. De onvolmaakt verledene tijd, welke uit het woord zelf gevormd wordt, stelt eene zaak voor, die voorbij is, op den tijd, waarin men spreekt; of, die eene handeling aanduidt, welke nog niet geheel voorbij is, wanneer eene andere begint: ik werd bemind — zij leefden — gij sliapt. Toen ik hem prees, lachte hij enz.

§. 305.

(*) Voor het jaar 1300 vervoegden onze Voorouders de werkwoorden aldus: ik stelle, du stelles, hi stellet, wi stellen, gi stellet, si stellen, enz. Zie Iden ling. Belgic. pag. 64. Deze vervoeging, waarbij elke persoon, door verhuiging van het woord zelf, op het duidelijkste onderscheiden wordt, is, door verloop van tijd, ongelukkig in onbruik geraakt.

(†) Zie L. TEN HATE, D. I., bl. 570 en verv.

K 3

資料 44. 1846年の Weiland 文典における時制の説明箇所

仏蘭西語がなくなり、その分説明が詳しくなっている。Maatschappij社の Rudimenta と同年の出版であるのに、時制の名称は全く伝統的なものをそのまま踏襲している。両者の相違は余りに対照的で、その内実を知らないと、Eerste betrekkelijke verledene tijd【第一関係過去】と Onvolmaakt verledene tijd【未完成過去】が同じだと気づくのは難しい。《第二未来》も独立しないままである(活用表では独立しているが)。Maatschappij社(共益商社)の方が進取の気風に富んでいたと言えようか。

§ 302~303 De tegenwoordige tijd 《現在》

§ 304 De onvolmaakt verleden tijd【未完成過去】(現代の「過去」)

§. 305. Deze tijd wordt bij de ongelijkvloeiende werkwoorden gevormd, door den wortelklinker op onderscheidene wijzen te veranderen, als: *lezen, las, schieten, schoot, vinden, vond, strijken, streek* enz.; en bij de gelijkvloeiende, door achter het zakelijke deel der werkwoorden, op *b, d, g, i, l, m, n, r, v, w* en *z* eindigende, *de* te voegen, als: *krabben, krabde, — redden, redde, — zagen, zaagde, — zaaijen, zaaide, — spelen, speelde, — kammen, kamde, — rennen, rende, — leeren, leerde, — leven, leefde, — vrouwen, vouwde, — razen, raasde*; of door achtervoeging van *te*, wanneer het zakelijke deel op *f, k, p, s, t* en *ch* uitgaat, als: *blaffen, blafte, — schrikken, schrikte, — stoppen, stopte, — krassen, kraste, — zetten, zette, — lagchen, lachte.* (*)

§. 306. Even als de tweede persoon van den tegenwoordigen, zoo heeft ook dezelfde persoon, in den onvolmaakt verledenen tijd, altoos eene *t* achterop, als: *ik bond, gij bondt, ik greep, gij greept, ik streek, gij streekt, ik krabde, gij krabdet, ik zaagde, gij zaagdet, ik schrikte, gij schrikte, ik kuste, gij kustet* enz.; terwijl het gebruik wil, ten aanzien van de ongelijkvloeiende werkwoorden, welke in den onvolmaakt verledenen tijd de korte *a* aannemen, dat deze klinker, in den tweeden persoon, verdubbeld worde, als: *ik las, gij*

(*) Zie L. TES KATE, D. I., bl. 548 en verv.

§ 309 De volmaakt verleden tijd 【完全過去】(現代の「現在完了」)

資料 45. ⁽³⁾ 1846年の Weiland 文典における 時制の説明(続)

§ 305 規則動詞の De onvolm.verl.tijd

【不完全過去】(「過去」)の作り方

§ 306 【不完全過去】単数 2 人称

§ 307 【不完全過去】単数 3 人称

§ 308 規則動詞の【不完全過去】単数 3 人称

gij laat, ik nam, gij naamt, ik at, gij aat, ik lag, gij laagt enz. Deze *t* valt echter weg, wanneer het werkwoord in het zakelijke deel eene *t* heeft, en de eerste persoon des onvolmaakt verledenen tijds op eene *t* stuit, als: *sluiten, ik sloot, — gij sloot; — bersten, ik borst — gij borst.*

§. 307. Ten aanzien van den eersten en derden persoon, in het enkelvoud van den onvolmaakt verledenen tijd, welke altoos aan elkander gelijk zijn, kan men aanmerken, dat dezelve, als zoodanig, nooit eene *t* achterop hebben, ten zij tot het zakelijke deel des werkwoords eene *t* behoude, welke door alle tijden en wijzen moet behouden worden. Zoo zegt men, b. v.: *ik had, hij had — ik deed, hij deed — ik las, hij las — ik gaf, hij gaf — ik leefde, hij leefde* enz.; daarentegen: *ik at, hij at — ik zat, hij zat — ik spoot, hij spoot* enz. Verkeerdelijk schrijft men derhalve *hij hadt, badt, deedt, stondt, vondt* enz.

§. 308. Van dezen regel zijn die onregelmatige werkwoorden uitgezonderd, welke, schoon in het zakelijke deel geene *t* hebbende, echter in den eersten en derden persoon van den onvolmaakt verledenen tijd, met eene *t* gebezigd worden, als: *plegen, ik plagt, hij plagt — brengen, ik bragt, hij bragt — denken, ik dacht, hij dacht — mogen, ik mogt, hij mogt — koopen, ik kocht, hij kocht — zoeken, ik zocht, hij zocht*; en, in den derden persoon, *dunken, mij dacht.*

§. 309. 3. De volmaakt verledene tijd, welke

door het verledene deelwoord en de hulpwoorden *hebben* en *zijn* omschreven wordt, stelt eene zaak voor als geheel gecindigd, op den tijd, waarin men spreekt, zonder opzigt op eenigen anderen tijd, of eenige andere handeling: *ik heb bemind, gij hebt geslapen, zij zijn gestorven* enz.

§. 310. 4. De *meer dan volmaakt verledene* tijd, welke op dezelfde wijs, als de *volmaakt verledene* omschreven wordt, beteekent, dat eene zaak gecindigd was niet alleen op den tijd, waarin men spreekt, maar ook op den tijd, waarvan men spreekt; of die eene handeling aanduidt, welke reeds geheel voorbij is, wanneer eene andere begint: *ik had bemind, gij hadt geslapen — zij waren gestorven. Toen ik hem geprezen had, begon hij te lagchen. Ik had mijnen brief geschreven toen zij in huis kwamen* enz.

§. 311. 5. De *toekomende* tijd, eindelijk, welke door zamenzetting van het hulpwoord *zullen* met de onbepaalde wijs der werkwoorden gevormd wordt, en te kennen geeft, dat iets zal geschieden, is tweederlei, zoo in de aantoonende, als aanvoegende wijs. De eerste toekomende tijd der aantoonende wijs zegt eenvoudiglijk, dat eene zaak toekomend is, op den tijd, waarin men spreekt: *ik zal prijzen, gij zult geprezen worden, zij zullen sterven* enz. De tweede toekomende tijd der aantoonende wijs drukt uit, dat iets toekomend is, op den tijd, waarin men spreekt, maar verleden zijn zal, op den tijd, waarvan men spreekt: *ik zal geprezen heb-*

§ 311 De toekomende tijd 《未来》

直説法未来 2 種

§ 311 De toekomende tijd 《未来》

仮定法未来 2 種。“voorwaardelijk”

“onderstelling” とは即ち Conditionalis のことである。

資料 46. ^(弘化3) 1846年の Weiland 文典における時制の説明 (続)

§ 309 De onvolm.verl.tijd 【完全過去】 (続)

§ 310 De meer dan volmaakt verl.tijd 【超完全過去】 (現代の「過去完了」)

hebben, gij zult geprezen zijn, wij zullen gestorven zijn, enz.

§. 312. Deze tweederlei toekomende tijd, zeiden wij, heeft ook in de aanvoegende wijs plaats; en de eerste beteekent daar, dat iets voorwaardelijk, of de eene onderstelling, toekomend is: *ik zoude prijzen, gij zoudt geprezen worden, wij zouden sterven* enz. De tweede toekomende tijd der aanvoegende wijs geeft te kennen, dat iets voorwaardelijk, of op eene onderstelling, toekomend geweest is; *ik zoude geprezen hebben, gij zoudt geprezen zijn, wij zouden gestorven zijn* enz.

5. Voorbeelden van vervoeging.

§. 313. Het hulpwoord *hebben*.

ONBEPAALED WIIJS.

Tegenwoordige tijd: *hebben*.

Verledene tijd: *gehad hebben*.

Toekomende tijd: *te zullen hebben*.

DEELWOORDEN.

Tegenwoordige tijd: *hebbende*.

Verledene tijd: *gehad hebbende*.

Toekomende tijd: *zullende hebben*.

AANTOONENDE WIIJS.

AANVOEGENDE WIIJS.

Tegenwoordige tijd.

Enkelvoudig.

Enkelvoudig.

Ik heb,

Dat ik hebbe,

K 5

Gij

- e. Hoedanig stelt de *onbepaalde wijs* eene werking voor? Geef voorbeelden.
 d. Hoe stelt de *aantoonende wijs* eene werking voor? Geef voorbeelden.
 e. Hoe stelt de *gebiedende wijs* eene werking voor? Breng ook hiervan voorbeelden bij.
 f. Hoe drukt de *bijvoegende wijs* eene werking uit? Geef hiervan voorbeelden. (*)

TWEE EN TWINTIGSTE LES.

a. Men onderscheidt bij de werkwoorden zes tijden, namelijk: drie *hoofdtijden* en drie *betrekkelijke tijden*; zij zijn: de *tegenwoordige* en *betrekkelijk tegenwoordige*, de *verledene* en *betrekkelijk verledene*, de *toekomende* en *betrekkelijk toekomende* tijd.

b. De *tegenwoordige tijd* stelt eene werking voor als geschiedende in denzelfden oogenblik, waarin men spreekt.

B.v. ik leer; gij speelt; hij zingt, enz.

c. De *betrekkelijk tegenwoordige tijd* stelt eene werking voor als tegenwoordig in eenen tijd, die reeds voorbij is. (†)

B.v. ik leerde, gij leedet ook, maar zij speelden, toen de meester binnen kwam.

d. De *verledene tijd* stelt eene werking voor als volkomen geëindigd op den tijd, waarin men spreekt.

B.v. ik heb geleerd; gij hebt bemind; Jan heeft gespeeld, enz.

(*) Na de lessen, waarbij het niet wel mogelijk was oefeningen op te geven, zal de onderwijzer wel doen enige der vorige oefeningen door de leerlingen te laten herhalen.

(†) Men heeft dezen tijd ook *onvolmaakt verledenen tijd* genoemd, hetwelk genoegzaam hetzelfde beteekent.

e. De *betrekkelijk verledene tijd* stelt eene werking voor als reeds geheel geëindigd, toen men iets anders begon.

B.v. ik had geleerd, toen hij kwam; wij hadden *gegeten*, vóór wij uitgingen.

f. De *toekomende tijd* stelt eene werking voor, die nog gebeuren moet, en alzoo nog toekomend is.

B.v. ik zal leeren; gij zult spelen; hij zal zingen, enz.

g. De *betrekkelijk toekomende tijd* stelt eene werking voor, als reeds geschied in eenen tijd, die nog komen moet.

B.v. ik zal geleerd hebben, als gij terug gekomen zult zijn; gij zult gekocht hebben, enz.

h. Deze zes tijden zijn allen gebruikelijk in de *aantoonende* en *bijvoegende* wijs; in de *onbepaalde* wijs gebruikt men alleen de drie hoofdtijden, terwijl de *gebiedende* wijs geene tijden heeft.

Vragen.

- a. Hoe vele en welke tijden onderscheidt men bij de werkwoorden?
 b. Hoe stelt de *tegenwoordige tijd* eene werking voor? Geef voorbeelden.
 c. Hoe verklaart gij den *betrekkelijk tegenwoordigen tijd*? Duid zulks aan met voorbeelden.
 d. Wat stelt de *verledene tijd* voor? Geef voorbeelden.
 e. Verklaar nu den *betrekkelijk verledenen tijd*? Bewijs zulks met voorbeelden.
 f. Wat duidt de *toekomende tijd* aan? Geef er voorbeelden van.
 g. En hoe stelt de *betrekkelijk toekomende tijd* eene werking voor? Geef ook hiervan voorbeelden.
 h. Gebruikt men deze zes tijden in alle vier de wijzen? hoe dan?

DRIE EN TWINTIGSTE LES.

- a. Door de *personen* bij de werkwoorden, verstaan

(安政4)

資料 47. 1857年の Wees の蘭文典

6時制を3つの<主時>と3つの<関係時>に分け、単独の過去形を、従来の Onvolmaakt verledene tijd (= Imperf.) 【未完成過去】に替えて De betrekkelijk Tegenwoordige tijd 【関係現在】としている。10年前の *Rudimenta* は、同じ<関係時>でも過去時制として Eerste betrekkelijke verledene tijd 【第一関係過去】と呼んでいるから、1800年代中盤の和蘭語では、「過ぎ去った時における現在」を表わす Imperf.が、「現在」と「過去」の間を動揺していたことになる。

その1年前の Mulder もまた Imperf. = 【関係現在】を採る文法家である。彼は【関係現在】の用法として、「過去における現在」(毎日彼はたくさん歩いた)の他に、「現在における過去」(昨日彼がやってくる、私と話した)と、「可能な未来」(もし彼が話すのなら、私は黙っていよう)を挙げている (§ 234 : APPENDIX No.28)。

3つの<主時>と3つの<関係時>は、この少し後の独逸語文典に見出すことができる。これは明治期の独文典にも《主時》と《副時》として現れている。(本章注 12 参照)

48 頁脚注の部分 (拡大)

(†) Men heeft dezen tijd ook *onvolmaakt verledenen tijd* genoemd, hetwelk genoegzaam hetzelfde beteekent.

【関係現在】が従来の【未完成過去】で、両者が同じものであることへの注である。

B.v. *doen, deed, gedaan; denken, dacht, gedacht.*

e. Tot de onregelmatige werkwoorden behooren: 1°. de hulpwoorden: *hebben, zijn, zullen* en *worden*; 2°. die, welke niet op *en*, maar op eene enkele *n* uitgaan, als: *doen, gaan, enz.*; 3°. die, welke in hun verleden deelwoord eene *t* in plaats van *en* hebben, als: *denken, koopen, enz.*; 4°. die, welke geene gebiedende wijs hebben, als: *kunnen, willen, mogen* en *moeten*, waarvan de drie eerste ook nog de *t* in den derden persoon enkelvoud van den tegenwoordigen tijd der aantoonende wijs missen, en ten 5°. nog eenige andere, als: *komen, plegen, weten, zeggen, enz.*

f. Om dus te weten of een werkwoord *gelijkvloeiend, ongelijkvloeiend* of *onregelmatig* is, om hetzelfde daarnaar te vervoegen, heeft men het slechts in den *betrekkelijk tegenwoordigen tijd* en in het *verleden deelwoord* te nemen.

B.v. *leeren, leerde, geleerd; vliegen: vloog, gevlogen; koopen: kocht, gekocht.* Het eerste is dus *gelijkvloeiend*, het tweede *ongelijkvloeiend* en het derde *onregelmatig*.

g. Bij de vervoeging behoort men nog op te merken, dat alle bedrijvende, wederkeerende en bijna alle onzijdige werkwoorden met het hulpwoord *hebben*, en alle lijdende en sommige onzijdige werkwoorden met *zijn* in de verledene tijden vervoegd worden.

B.v. *ik heb gegeten, gij hebt u gehaast, hij heeft geslapen; — wij zijn bedrogen, gij zijt gekomen, zij zijn uitgegaan, enz.*

h. Zie hier nu ook voorbeelden van de vervoeging der *werkwoorden*:

a) Vervoeging van het *bedrijvend, gelijkvloeiend* werkwoord **ANTWOORDEN.** (*)

(*) Dit werkwoord wordt ook als *onzijdig* beschouwd.

能動規則
動詞

DEELWOORDEN.

Tegenwoordig deelwoord: *antwoordende.*
Verleden deelwoord: *geantwoord.*

ONBEPAALED WIJS.

Tegenwoordige tijd: *antwoorden.*
Verledene tijd: *geantwoord hebben.*
Toekomende tijd: *te zullen antwoorden.*

AANTOONENDE WIJS.

BIJVOEGENDE WIJS.

Tegenwoordige tijd.

| | |
|---|--|
| Ik <i>antwoord,</i> gij <i>antwoordt,</i> hij <i>antwoordt.</i> | Dat ik <i>antwoorde,</i> dat gij <i>antwoordet,</i> dat hij <i>antwoorde.</i> |
| Wij <i>antwoorden,</i> gij <i>antwoordt,</i> zij <i>antwoorden.</i> | Dat wij <i>antwoorden,</i> dat gij <i>antwoordet,</i> dat zij <i>antwoorden.</i> |

Betrekkelijk tegenwoordige tijd.

| | |
|--|--|
| Ik <i>antwoorde,</i> gij <i>antwoordet,</i> hij <i>antwoorde.</i> | Dat ik <i>antwoorde,</i> dat gij <i>antwoordet,</i> dat hij <i>antwoorde.</i> |
| Wij <i>antwoorden,</i> gij <i>antwoordet,</i> zij <i>antwoorden.</i> | Dat wij <i>antwoorden,</i> dat gij <i>antwoordet,</i> dat zij <i>antwoorden.</i> |

Verledene tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>heb geantwoord,</i> gij <i>hebt geantwoord,</i> hij <i>heeft geantwoord.</i> | Dat ik <i>hebbe geantwoord,</i> dat gij <i>hebbet geantwoord,</i> dat hij <i>hebbe geantwoord.</i> |
| Wij <i>hebben geantwoord,</i> gij <i>hebt geantwoord,</i> zij <i>hebben geantwoord.</i> | Dat wij <i>hebben geantwoord,</i> dat gij <i>hebbet geantwoord,</i> dat zij <i>hebben geantwoord.</i> |

Betrekkelijk verledene tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>had geantwoord,</i> gij <i>hadt geantwoord,</i> hij <i>had geantwoord.</i> | Dat ik <i>hadde geantwoord,</i> dat gij <i>haddet geantwoord,</i> dat hij <i>hadde geantwoord.</i> |
| Wij <i>hadden geantwoord,</i> gij <i>hadt geantwoord,</i> zij <i>hadden geantwoord.</i> | Dat wij <i>hadden geantwoord,</i> dat gij <i>haddet geantwoord,</i> dat zij <i>hadden geantwoord.</i> |

Toekomende tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>zal antwoorden,</i> gij <i>zult antwoorden,</i> hij <i>zal antwoorden.</i> | Dat ik <i>zoude antwoorden,</i> dat gij <i>zoudet antwoorden,</i> dat hij <i>zoude antwoorden.</i> |
| Wij <i>zullen antwoorden,</i> gij <i>zult antwoorden,</i> zij <i>zullen antwoorden.</i> | Dat wij <i>zouden antwoorden,</i> dat gij <i>zoudet antwoorden,</i> dat zij <i>zouden antwoorden.</i> |

Betrekkelijk toekomende tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>zal</i> <i>geantwoord</i> gij <i>zult</i> <i>hebben</i> hij <i>zal</i> <i>hebben</i> | Dat ik <i>zoude</i> <i>geantwoord</i> dat gij <i>zoudet</i> <i>hebben</i> dat hij <i>zoude</i> <i>hebben</i> |
| Wij <i>zullen</i> <i>geantwoord</i> gij <i>zult</i> <i>hebben</i> zij <i>zullen</i> <i>hebben</i> | Dat wij <i>zouden</i> <i>geantwoord</i> dat gij <i>zoudet</i> <i>hebben</i> dat zij <i>zouden</i> <i>hebben</i> |

GEBIEDENDE WIJS.

Enkelvoud: *antwoord.* | Meervoud: *antwoordt.*

b) Vervoeging van het *lijdend* werkwoord **GESTRAFT** WORDEN.

DEELWOORDEN.

Tegenwoordig deelwoord: *gestraft wordende.*
Verleden deelwoord: *gestraft geworden.*

ONBEPAALED WIJS.

Tegenwoordige tijd: *gestraft worden.*
Verledene tijd: *gestraft geworden zijn.*
Toekomende tijd: *te zullen gestraft worden.*

受動動詞

AANTOONENDE WIJS.

BIJVOEGENDE WIJS.

Tegenwoordige tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>word gestraft,</i> gij <i>wordt enz.</i> | Dat ik <i>worde gestraft,</i> dat gij <i>wordet enz.</i> |
|---|---|

Betrekkelijk tegenwoordige tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>werd gestraft,</i> gij <i>werdt enz.</i> | Dat ik <i>wierde gestraft,</i> dat gij <i>wierdet enz.</i> |
|---|---|

Verledene tijd.

| | |
|--|---|
| Ik <i>ben gestraft geworden,</i> gij <i>zijt enz.</i> | Dat ik <i>zijt gestraft geworden,</i> dat gij <i>zijt enz.</i> |
|--|---|

Betrekkelijk verledene tijd.

| | |
|---|---|
| Ik <i>was gestraft geworden,</i> gij <i>waart enz.</i> | Dat ik <i>ware gestraft gewor-</i> dat gij <i>waret enz.</i> [den. |
|---|---|

Toekomende tijd.

| | |
|--|--|
| Ik <i>zal gestraft worden,</i> gij <i>zult enz.</i> | Dat ik <i>zoude gestraft worden,</i> dat gij <i>zoudet enz.</i> |
|--|--|

Betrekkelijk toekomende tijd.

| | |
|---|--|
| Ik <i>zal gestraft geworden zijn,</i> gij <i>zult enz.</i> | Dat ik <i>zoude gestraft gewor-</i> dat gij <i>zoudet enz.</i> [den zijn. |
|---|--|

GEBIEDENDE WIJS.

Enkelv.: *word gestraft.* | Meerv.: *wordt gestraft.*

c. Vervoeging van het *wederkeerend, ongelijkvloeiend* werkwoord: **ZICH BEHELPEN.**

DEELWOORDEN.

Tegenwoordig deelwoord: *zich behelpende.*
Verleden deelwoord: *zich beholpen.*

ONBEPAALED WIJS.

Tegenwoordige tijd: *zich behelpen.*
Verledene tijd: *zich beholpen hebben.*
Toekomende tijd: *zich te zullen behelpen.*

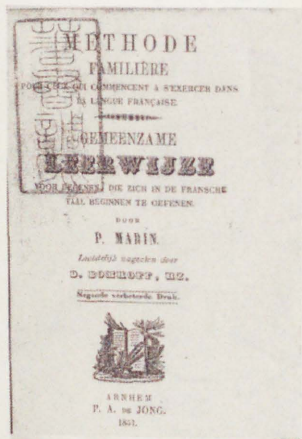
再帰動詞

| | | |
|-----------------|-------------------------|----|
| 66 | V A N D E | 67 |
| CONJUGAISON | CONJUGATIE. | |
| Du Verbe | Van het | |
| Substantif. | Zelfstandig Werkwoord | |
| Etre. | Weezen of Zyn. | |
| L'INDICATIF. | TOONENDER WYS. | |
| Le Présent. | De Tegenwoordige Tyd. | |
| JE suis. | Ik ben. | |
| Tu es. | Gy zyt. | |
| Il est. | Hy is. | |
| Nous sommes. | Wy zyn. | |
| Vous êtes. | Gy-lieden zyt. | |
| Ils font. | Zy zyn. | |
| Le 1. Prétérit. | De eerste voorlede Tyd. | |
| J'étois. | Ik was. | |
| Tu étois. | Gy waart. | |
| Il étoit. | Hy was. | |
| Nous étions. | Wy waaren. | |
| Vous étiez. | Gy-lieden waart. | |
| Ils étoient. | Zy waaren. | |
| Le 2. Prétérit. | De tweede voorlede Tyd. | |
| Je fus. | Ik was. | |
| Tu fus. | Gy waart. | |
| Il fut. | Hy was. | |
| Nous fumes. | Wy waaren. | |
| Vous fûtes. | Gy-lieden waart. | |
| Ils furent. | Zy waaren. | |
| Le Parfait. | De Volmaakte Tyd. | |
| J'ai été. | Ik heb geweest. | |

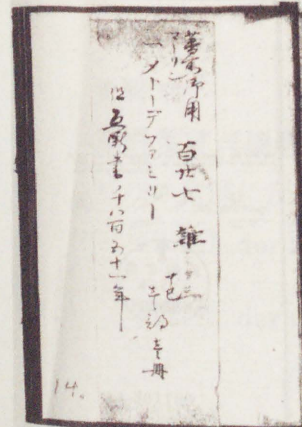


資料 49.

(寛政2) (高永4)
1790年(上)と1851年(下)のP. Marinの仏文典
の仏文典
三つの過去時の名称の変化に注意。
Aorist《不定過去》である Le 2. Prétérit
が、61年後の改訂版では Parfait défini
《定過去》になっている。



| | | |
|------------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 66 | Méthode Familière. | 67 |
| METHODE FAMILIERE | Méthode Familière. | Méthode Familière. |
| P. MARIN | P. MARIN | P. MARIN |
| 1851 | 1851 | 1851 |
| CONJUGAISON | CONJUGAISON | CONJUGAISON |
| Du Verbe | du verbe auxiliaire | du verbe auxiliaire |
| Substantif. | Être. | Être. |
| Etre. | INFINITIF. | INFINITIF. |
| L'INDICATIF. | Présent. | Présent. |
| Le Présent. | Être. | Être. |
| Je suis. | Je suis. | Je suis. |
| Tu es. | Tu es. | Tu es. |
| Il est. | Il est. | Il est. |
| Nous sommes. | Nous sommes. | Nous sommes. |
| Vous êtes. | Vous êtes. | Vous êtes. |
| Ils sont. | Ils sont. | Ils sont. |
| Le 1. Prétérit. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| J'étais. | Que j'eusse eu. | Que j'eusse eu. |
| Tu étais. | Que tu eusses eu. | Que tu eusses eu. |
| Il était. | Qu'il eût eu. | Qu'il eût eu. |
| Nous étions. | Que nous eussions eu. | Que nous eussions eu. |
| Vous étiez. | Que vous eussiez eu. | Que vous eussiez eu. |
| Ils étaient. | Qu'ils eussent eu. | Qu'ils eussent eu. |
| Le 2. Prétérit. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| J'étais. | Que j'eusse eu. | Que j'eusse eu. |
| Tu étais. | Que tu eusses eu. | Que tu eusses eu. |
| Il était. | Qu'il eût eu. | Qu'il eût eu. |
| Nous étions. | Que nous eussions eu. | Que nous eussions eu. |
| Vous étiez. | Que vous eussiez eu. | Que vous eussiez eu. |
| Ils étaient. | Qu'ils eussent eu. | Qu'ils eussent eu. |
| Le Parfait. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| J'ai été. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Tu as été. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Il a été. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Nous avons été. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Vous avez été. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Ils ont été. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Le Parfait défini. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| J'ai été. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| Tu as été. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| Il a été. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| Nous avons été. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| Vous avez été. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| Ils ont été. | Parfait défini. | Parfait défini. |
| Le Parfait composé. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| J'ai été. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| Tu as été. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| Il a été. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| Nous avons été. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| Vous avez été. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| Ils ont été. | Parfait composé. | Parfait composé. |
| Le Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| J'étais. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Tu étais. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Il était. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Nous étions. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Vous étiez. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Ils étaient. | Plus-que-parfait. | Plus-que-parfait. |
| Le Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| J'étais. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| Tu étais. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| Il était. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| Nous étions. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| Vous étiez. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| Ils étaient. | Plus-que-parfait composé. | Plus-que-parfait composé. |
| Le Futur. | Futur. | Futur. |
| Je serai. | Futur. | Futur. |
| Tu seras. | Futur. | Futur. |
| Il sera. | Futur. | Futur. |
| Nous serons. | Futur. | Futur. |
| Vous serez. | Futur. | Futur. |
| Ils seront. | Futur. | Futur. |
| Le Futur composé. | Futur composé. | Futur composé. |
| J'aurai été. | Futur composé. | Futur composé. |
| Tu auras été. | Futur composé. | Futur composé. |
| Il aura été. | Futur composé. | Futur composé. |
| Nous aurons été. | Futur composé. | Futur composé. |
| Vous aurez été. | Futur composé. | Futur composé. |
| Ils auront été. | Futur composé. | Futur composé. |



外事類雜纂老芽四目錄
續卷得師草稿

中世言 中世之複称ハ皆男性ノ複称同ニ故ニ畧ス

以上複称

活言 主格ノ名言ノ單複ニ從ヒ三世ニ由ラ變易スルヲ表ス

未來

單

der man hij zal sterven
der man hij zal sterven
der man hij zal sterven

現在

der man hij sterft
der man hij sterft
der man hij sterft

過去

der man hij is gestorven
der man hij is gestorven
der man hij is gestorven

複

der man hij is gestorven
der man hij is gestorven
der man hij is gestorven

單

der man hij is gestorven
der man hij is gestorven
der man hij is gestorven

複

der man hij is gestorven
der man hij is gestorven
der man hij is gestorven

單

der man hij is gestorven
der man hij is gestorven
der man hij is gestorven

複

der man hij is gestorven
der man hij is gestorven
der man hij is gestorven

資料 50.
高野長英《緋卷得師草稿》(国会図書館本)における時制の説明の部分
当時の常識に反して <is gestorven> が《現在》になっている。

《未來》 der man hij zal sterven.
死す アル 死テ

《現在》 der man hij sterft 又 is gestorven.

A. The active participle is so named because it always denotes some action going on, as—*ruling, trying, &c.*

Q. Why is the other participle called *passive*?

A. The passive participle is so called because it shews an endured or suffered action as—*ruled, tried, &c.* The word *passive* is from the Latin *patior passus, to suffer.*

ON CONJUGATION.

Lesson 33.

Q. What is meant by conjugating a verb?

A. The conjugating, or the conjugation of a verb, is naming and joining together its principal forms—from the Latin *con, together, jungere, to join?*

Q. Conjugate the verb *to advise*?

PRESENT TENSE.

| | | | |
|----------|--------------|----------|--------------|
| | <i>Sing.</i> | | <i>Plur.</i> |
| 1st per. | I advise | 1st per. | We advise. |
| 2nd per. | You advise. | 2nd per. | You advise. |
| 3rd per. | He advises. | 3rd per. | They advise. |

PAST TENSE.

| | | | |
|----------|--------------|----------|---------------|
| | <i>Sing.</i> | | <i>Plur.</i> |
| 1st per. | I advised | 1st per. | We advised. |
| 2nd per. | You advised. | 2nd per. | You advised. |
| 3rd per. | He advised. | 3rd per. | They advised. |

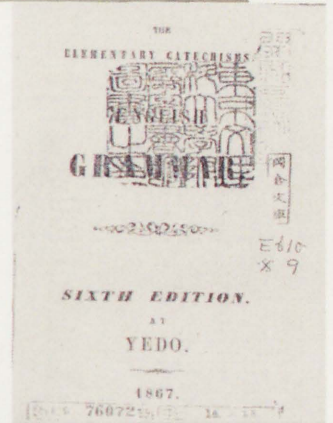
FUTURE TENSE.

| | | | |
|----------|-----------------|----------|-------------------|
| | <i>Sing.</i> | | <i>Plur.</i> |
| 1st per. | I shall advise | 1st per. | We shall advise. |
| 2nd per. | You will advise | 2nd per. | You will advise. |
| 3rd per. | He will advise. | 3rd per. | They will advise. |

PARTICIPLES.

| | |
|---------------------------|-------------------------------|
| <i>Imper.</i> | <i>Perf.</i> |
| Advising. | Advised. |
| <i>Imperative, Advise</i> | <i>Infinitive, To Advise.</i> |

Q. In conjugating the future tense, you used the word *shall* and *will*; cannot the future be conjugated without them?



資料 51.

(1867)

慶応3年翻刻の江戸版『英吉利文典』(The Elementary Catechisms. English Grammar. 6 edition)より、
 <to advise>の基本3時制の活用表。
 最末尾の Infinitive は<to>付である。筑波大学図書館蔵。

CONTENTS

| | | |
|--|-----------|------|
| INTRODUCTION | PART I. | PAGE |
| ORTHOGRAPHY | PART II. | 5 |
| Sounds of Letters: Vowels | | 6 |
| Consonants | | 7 |
| Hyphenation | | 8 |
| Spelling | | 9 |
| ETYMOLOGY. | PART III. | 10 |
| Nouns | | 11 |
| Verb | | 12 |
| Adjective | | 13 |
| Pronoun | | 14 |
| Adverb | | 15 |
| Prepositions, Conjunctions, Interjections, | | 16 |
| Exercises on the parts of speech | | 17 |
| INFLECTION. | PART IV. | 18 |
| Nouns | | 19 |
| Plural | | 20 |
| Gender | | 21 |
| Case | | 22 |
| Analogues: Comparison | | 23 |
| Kinds | | 24 |
| Articles | | 25 |
| Adverbs | | 26 |
| Prepositions: Kinds | | 27 |
| Number and Gender | | 28 |
| Case | | 29 |
| Relative | | 30 |
| Verb: Person and number | | 31 |
| Tense | | 32 |

FUTURE TENSE PERFECT.

- Singular.* — 1st per. I shall have been.
 2nd per. You will have been.
 3rd per. He will have been.
Plural. — 1st per. We shall have been.
 2nd per. You will have been.
 3rd per. They will have been.

PARTICIPLES.

Imperfect.
 Being.

Perfect.
 been.

Infinitive. To be.

Imperative. Be.

ON THE TENSES

Lesson 39.

Q. What does the *present tense imperfect* denote?

A. The *present tense imperfect* shews an action going on at this present time, but not finished, as—I *am advising* you now.

Q. What does the *past imperfect* shew?

A. The *past tense imperfect* shews an action past, but not finished at the time spoken of, as—I *was advising* you yesterday.

Q. What does the *future imperfect* shew?

A. The *future tense imperfect* shews a future action that will not be finished at the time spoken of; as—I *shall be advising* you to-morrow.

Q. What does the *present tense perfect* denote?

A. The *present tense perfect* shews an action finished but still in effect existing; as—I *have advised* you now.

Q. What does the *past perfect* express?

A. The *past tense perfect* expresses an action as finished some time ago; as I *had advised* you before yesterday.

Q. What is the *future tense perfect*?

ENGLISH GRAMMAR

39
69

A. The *future tense perfect* declares that an action will be finished at some future time; as—I *shall have advised* you before this time to-morrow.

資料 52.

(1867)

慶応3年翻刻の江戸開成所版『英吉利文典』より、<to advise>の Imperf. と Perf. 各3時制の活用表。

Imperf. は進行形になり、<I have advised> が the present tense perfect になっている。

第二節 英語と独逸語における訳語の特徴

1. 英・独における訳語の種類

このようにして生まれた《過去》と《半過去》は、明治期に受け継がれた。表 17 (195 頁) は、幕末および明治期の英文典における時制の訳語を一覧表にしたものであるが、これが示すとおり、「Perf. は現在と関係する」という現代文法の知識とは逆に、明治 20 年くらいまでの Perf. (I have had) は、蘭語学と同じく《過去》、Imperf. (I had) は《半過去》と訳されている。これは、従来の説に従うと、Perf. が理解できなかった当時の人々の〈誤解〉と〈混乱〉の結果——しかも江戸期から引き継がれたものということになる。しかし、今やそういうことは考えにくい。前節で見たとおり、蘭語学におけるこの 2 時制の理解は Perf. (ik heb gehad) = 《過去》、Imperf. (ik hadde) = 《半過去》で正しかったからである。

この表には、《過去》であった〈I have had〉が、⁽¹⁸⁶⁷⁾慶応 3 年の江戸版『英吉利文典』——通称「木の葉文典」^{註 49}以降年を追うごとに現在時制の方向に移動し始め、⁽¹⁸⁸⁸⁾明治 21 年頃からほぼ現在時制として定着していく様子がはっきりと現れている。この動向は独逸語においても同様で、明治期の独文典における時制の訳語をまとめた表 19 (208 頁) を見ると、独逸語においては英語より更に 10 年遅く、⁽¹⁸⁹⁷⁾明治 30 年ごろまで Perf. (ich habe gehabt) = 《過去》、Imperf. (ich hatte) = 《半過去》の時代が続く。そして、この対応関係が逆転する節目が⁽¹⁸⁹⁸⁾明治 31 年である。

明治期に使用された英語および独逸語の訳語の種類は以下のようである。

英 語

○ I m p e r f. (I was) (I had)

- | | | | |
|-----------|----------|-----------|------------|
| 1. 半過去 | | | |
| 2. 既往ノ現在 | | | |
| 3. 第一ノ過去 | 4. 第一過去 | 5. 第一ノ過往 | |
| 6. 過去 | | | |
| 7. 過去不充分 | 8. 不完過去 | 9. 不完結過去 | 10. 不成全 |
| 11. 過去不定 | 12. 不定過去 | 13. 不定体過去 | 14. 過去時不定形 |
| 15. 過去不定時 | | | |

○ P e r f. (I have been) (I have had)

- a) 過去系列

- 1.過去
- 2.半過去
- 3.第二過去 4.第二ノ過去 5.第二ノ過往
- 6.充過去 7.充分過去 8.成全
- 9.完結過去

b) 現在系列

- 10.定現在
- 11.既然現在 12.已然現在
- 13.現在充分 14.充分現在 15.十分現在
- 16.完現在
- 17.完結現在
- 18.現在ノ完成 19.現在完成 20.完成現在
- 21.現在完全
- 22.完了体現在 23.完了現在 24.現在時完了形 25.現在完了
- 26.現在過去

独 逸 語

○ I m p e r f . (ich war) (ich hatte)

- 1.半過去 2.在来ノ過去 3.不完了過去
- 4.持続過去 5.継続過去 6.連続過去 7.過去持続
- 8.過去

○ P e r f . (ich bin gewesen) (ich habe gehabt)

a) 過去系列

- 1.過去

b) 現在系列

- 2.現在過去 3.既然現在 4.完成現在 5.現在完成
- 6.完了現在 7.現在完了 8.既終現在
- 9.近過去

英語の Imperf. は、訳語総計 15 種で独逸語 8 種の約 2 倍、Perf. は、過去・現在両系列併せて 26 種もあり、独逸語 9 種のおよそ 3 倍である。

更に表 21 (216 頁) と表 22 (217 頁) は、両語の訳語の使用状況を年代順に整理し、英独対照の形で示したものである。改めて、英語の訳語のあまりの豊富さと、独逸語の訳語のあまりの少なさに目を奪われる。特に、英語における明治 10 年代後半の Imperf. (I had)

と、わけても 15 年以降の Perf. (I have had) の訳語の数の多さは一際目立っている。

2. 明治期の訳語変動の時代的背景

この変動が起こった明治 16～25 年はいったいどういう時代なのか。

明治期には、明治 4～5 年頃に始まる「文明開化」期と、明治 16 年に端を発する「鹿鳴館時代」という二回の洋語ブームが起こる。訳語の変動時代は、このうちのまさに後者に相当する。

この洋語ブームについては、太田雄三の『英語と日本人』第二章（講談社学術文庫、1995）に詳しい。明治の初めはく西洋的学問の必要が痛切に感じられたが、はじめはそれを教えることの出来る日本人がほとんどいなかったの、高等教育はほとんどすべて外国人教師に頼らなければならなかった。勢い、用いる教科書も外国のものをそのまま使用する。内村鑑三、新渡戸稲造らは、<明治八年ごろからほぼ十年弱の期間>に<現在の小学校四年くらい年齢から一日中外国語ばかりやっているような官立の学校>で基礎教育を、続いてやはり外国語で高等教育を受け、結果、欧米人教師も驚くその語学力とひきかえに、日本語のほうが、日々の読書や手紙のやりとりでさえも不自由することになってしまう。太田はこう述べている——<西洋文明に対する熱狂のあまり、自国の伝統の価値を極端に軽んじる風潮のあった明治初年においては、自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育が未来のエリートに対して行なわれた>（71 頁）と。

この明治 4～5 年頃に端を発する時期を外国語学習に狂奔した第一期とすると、その第二期がいわゆる「鹿鳴館時代」である。太田は、植村正久の「過去三十年宗教上の回顧」（『植村正久と其の時代』第五巻所収）を引用しつつ、さらに次のように言う。

欧化主義の象徴ともいふべき上流の内外人のための社交クラブ、鹿鳴館が出来たのは明治十六（一八八三）年である。欧化主義時代がピークに達した明治一八、九（一八八五、六）年頃になると英語熱もまた白熱し、「丁稚小僧は其の唇頭より端唄都々逸の代りに、オール・ライト、グッド・バイ等、生嚼ぢりの洋語を漏らし、英学先生は鞍馬山の天狗の如く……手腕を伸べて、全国中を翰翔し……」（79 頁）

そして、鹿鳴館落成のこの年から、まさに明治の直訳文典の隆盛は始まり、英語界では Swinton が大いにもてはやされるのである。

この状況を直訳文典の出版状況から見てみると、次ページの表 23 のようになる⁵⁰。欧文の原書を翻刻してそのまま使用することの多かった明治初年、すなわち、太田が言うところの第一次洋語ブームの時に用いられた Pinneo と Quackenbos の文法書は、第二期においても引き続き盛んに直訳され⁵¹、これに新たに Brown と Swinton が加わって、第二次洋語ブームの後半は、ほぼ Swinton 文典の独占するところとなる。これが、洋語学習とい

表 17. 明治期の英文典における時制の記述

| 年代 | 書名 | 時制 | Praesens | | | Praeteritum | | | Futurum | |
|--------------|------------------------|---------------|------------------|---------------------------------|--|--------------------------|------------------------------------|------------------------------------|--------------------------------|--|
| | | | Presens (I love) | Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Perfect (I have loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) | |
| 1815(文化12) | 和蘭語法解 (Peyton の英文典?) | tense 活言三世 | 1. 現在 | | a) 未成過去 (未過) b) 全成過去 (全過) c) 過去過去 (過過) | 2. 過 3. 過去 4. 過去過去 | 3. 未來 | 3. 未來 4. 第二未來 | | |
| 1840(天保11) | 英文鑑 | 六時 | 1. 現在 | 2. 過了現在 | 2. 半過去 過去 / 現在 | 3. 過去 3. 過去 | 5. 未來 | 5. 未來 6. 過了未來 | | |
| 1857(安政4) | 和蘭文典字類 (前編) | | 1. 現在 | | 2. 半過去 過去 / 現在 | 3. 過去 3. 過去 | 5. 未來 | 5. 未來 6. 第二未來 | | |
| 1867(慶応3) | 江戸版英吉利文典 第6版 (木の葉文典) | tense | Present tense | | Past tense | | Future tense | | | |
| | 英吉利文典字類 | 時 | 1. 現在 | Present Perfect | Past Imperfect | Past Perfect | Future Imperfect | Future Perfect | | |
| 1868(明治1) | 洋学指針・蘭学部 | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 過去 | 2. 過 3. 全過去 4. 大過去 | 3. 未 5. 第一未來 6. 第二未來 関係未來 | | | |
| 1870(明治3) | 明要附録 (仏) | 時 | 現在 | | 半過去 | 過去 | 未來 | | | |
| | 格賢勃斯英文直譯 [大学南校] | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 5. 第一未來 6. 第二未來 | | | |
| 1871(明治4) | 洋(英)学楷梯 | 三世 | 2. 現世 | | 1. 過 過去 | 去 | 3. 未 來 | | | |
| | 英文典濁学 (格賢勃斯氏) [戸田忠厚] | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 6. 第二未來 | | | |
| | 洋学指針・英学部 (二編) | 時 | 現在不充分 [充分] | 現在充分 | 過去不充分 | | 未來不充分 | | | |
| 1872(明治5) | ピ子ヲ氏通俗英文典 [記者不明] | 時 | 1. 現在 | | 2. 第一過去 | 3. 第二過去 | 4. 第三過去 5. 第一未來 6. 第二未來 | | | |
| | ピ子ヲ氏著神譯英文典 (初編) [榎木寛則] | | | | | | | | | |
| (刊年不明) | 格賢勃斯英文直譯 (初編) [桂潭・島一徳] | | | | | | | | | |
| 1873? (明治6?) | 英学新式(卷一) | | | | | | | | | |
| 1875(明治8) | 語学獨案内 [プリンクリ] | 時 | 1. 現在 尋常 / 現在 | 2. 既然現在 複合現在 [~ing形 (連続)] | 3. 半過去 過去 | (過去?) | 4. 既然過去 複合過去 [~ing形 (連続)] | 5. 平常 / 未來 未來 6. 既然未來 | | |
| | | | 7. 連続現在 | 8. 連続既然現在 | 9. 未成過去 | | ? | 10. 連続未來 11. 連続既然未來 | | |
| 1879(明治12) | 英語変格一覽 [チャムブレ] | 時化 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 充過去 | 4. 大過去 (倍過去) 過去充分 | 5. 第一未來 未來不定 6. 第二未來 未來充分 | | |
| 1883(明治16) | 克屈文典直譯(上下) | 時 | 現在不定 | 現在充分 | 過去不定 | | | | | |
| | | | 現在不充分 [~ing形] | 現在充分引続 | 過去不充分 | 過去充分引続 | 過去充分引続 | 未來充分引続 | | |
| | ピネヲ氏文典獨学字書 [清水房之助] | 時 | 1. 現在 | | 2. 第一過去 | 3. 第二過去 | 4. 第三過去 | 5. 第一未來 未來不充分 6. 第二未來 | | |
| | ピネヲ氏原著英文典獨案内(渡辺五一郎) | 時 | 1. 現在 | | 2. 第一過去 | 3. 第二過去 | 4. 第三過去 | 5. 第一未來 6. 第二未來 | | |
| | 英語獨学便法 | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 6. 第二未來 | | |

| 年代 | 書名 | 時制 tense | Praesens | | | Praeteritum | | | Futurum | |
|-----------------------|--|-------------|-------------------------|-----------------------------------|------------------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------------------|-----------------------------------|--|
| | | | Presens (I love) | Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Perfect (I have loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) | |
| 1884(明治 17) | 英国文典獨案内(クワケンボス氏) [垣上 緑] ブラウン氏英文直 譯 [中西 範] | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | | 時 | 1. 現在 | 現在不 定不 充分 | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | | 時 | 1. 現在 | 現在充分 | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| ① | 文典和解英文指針 | 時 | 1. 現在 | 2. 半過去 (Present Perfect) | 3. 過去 (Past) | 4. 大過去 | 5. 未來 | 6. 第二未來 | | |
| ② | スウェーデン語 学新式直譯 [斎藤秀三郎] | 指時形 | 1. 現在 | 4. 半過去 (他ノ文法ノ過去) | 2. 過去 (他ノ文法ノ半過去) | 3. 過去 | 5. 大過去 | 3. 未來 (他ノ文法ノ第一未來) | 6. 未來過去 (他ノ文法ノ第二未來) | |
| 1885(明治 18) | 英学五書獨案内 | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | クワッケンボス氏英 文典獨案内 [高宮直太] | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | 無類捷徑英字童子解 | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | 英文手引草 [島田奚疑] | | 現在 | 充分現在 | 過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 未來 | 充分未來 | |
| 1886(明治 19) | ピネヲ氏英文獨稽 古 [伊藤一郎] | 時間 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| 5月 | ピネヲ氏英文獨学 (全) [玉井靖三郎] | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | ブラウン氏英文典 法詳解獨案内 [近藤堅三] | | | | | | | | | |
| 5月 | ピネヲ氏英文獨案 内 [萩原孫三郎] | | | | | | | | | |
| 7月 | 文法詳解ブラウン氏 英文典釈義 [澤田重遠] | 時 | 1. 現在 | | 2. 過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| 10月 | | | 不完結現在 不完結現在 不完結現在 | 不完結過去 不完結過去 不完結過去 | 2. 過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 不完結未來 不完結未來 不完結未來 | 6. 第二未來 | |
| | | | 完結現在 | 完結現在 | 2. 過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| ③ | ブラウン氏英文典直 譯(全) [源 綱紀] | 時限 | 1. 現在 | | 2. 過去 | 3. 過去 (旧時制のまま用語 のみ交換) | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| 10月 | | | | | | | | | | |
| | クワッケンボス氏英 文典直譯 [栗野忠雄] | 時 | 1. 現在 | | 2. 半過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| | 文法詳解ピネヲ氏英 文典獨案内 [生駒 蕃] | 時間 | | | | | | | | |
| 1886~87 (明治 19~20) | プロロン氏英文利文 典講義(前後編) [長野一枝] | 時限 | 1. 現在 | | 2. 過去 | 3. 過去 | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 | |
| 1887(明治 20) | スウェーデン語 典直譯 [盧田東雄] | 時 | 1. 現在 | 4. 充分現在 | 2. 過去 | 3. 過去 | 5. 充分過去 | 3. 未來 | 6. 充分未來 | |

| 年代 | 書名 | 時制 tense | Praesens | | | Praeteritum | | | Futurum | |
|------------|--------------------------|----------|------------------|--------------------------------|---------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------------|--------------------------------|--|
| | | | Presens (I love) | Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Perfect (I had loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) | |
| 1887(明治20) | 容易獨修英文直譯 (フアラウン氏) | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| | ソクメーブル氏佛文典直譯 [戸代光大] | 時 | 現在 | | 平過去 | 過去 (j'aimai も過去) | 大過去 | 未來 | 先立チチ未來 | |
| ④ | 容易獨修英文直譯 (大島国千代) | 示時形 | 1.現在 | 4.半過去 (他ノ文法ノ過去) | 2.過去 (他ノ文法ノ半過去) | | 5.大過去 | 3.未來 (他ノ文法ノ第一未來) | 6.未來過去 (他ノ文法ノ第二未來) | |
| | 英語学大全 | | | | | | | | | |
| | ピネヲ氏英文直譯 [栗野忠雄] | 時 | 1.現在 | | 2.過去 | 三ツノ過去 | 4.第三ノ過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| ⑤ | スウキンソン氏英文直譯 [栗野忠雄] | 時 | 1.現在 | 4.半過去 | 2.過去 | | 5.大過去 | 3.未來 | 6.大未來 | |
| | 正則種譯ピラ氏英文直譯 [佐藤雄治] | 時限 | 現在 | 現在ノ完成 | 過去 | | 過去完成 | 未來 | | |
| | ソクメーブル氏佛文典直譯 [中村秀徳] | 時 | 現在 | | 平過去 | 過去 (j'aimai は《定過去》) | 大過去 | 尋常未來 | 先立チチ未來 | |
| | イングリッソ文法主眼 | 時ノ變化 | 1.現在 | | 2.半過去 | 2.過去 (イ)第一過去 | 3.過去 (ロ)第二過去 | (イ)第一未來 | (ロ)第二未來 | |
| | クラツゲンボス氏英文直譯 [水澤 郁] | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| | クラツゲンボス氏英文直譯 (全) [山本栄太郎] | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| ⑥ | スウキンソン氏英文直譯 [高橋桂堂] | 時 | 1.現在 | 4.半過去 | 2.過去 | | 5.大過去 | 3.未來 | 6.大未來 | |
| | 和解纂註英文軌範 (完) | 時 | 1.現在 | 2.充分現在 | 3.過去 | | 4.充分過去 | 5.未來 | 6.充分未來 | |
| 1888(明治21) | スウキンソン氏英文直譯 [太田次郎] | 時 | 1.現在 | 4.完全現在 | 2.過去 | | 5.完全過去 | 3.未來 | 6.完全未來 | |
| | クラツゲンボス氏英文直譯 (全) [外川秀次郎] | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| ⑦ | スウキンソン氏英文直譯 [石川録太郎] | 時 | 1.現在 | 4.半過去 (他ノ文法ノ過去) | 2.過去 | | 5.大過去 | 3.未來 (他ノ文法ノ第一未來) | 6.未來過去 | |
| | 六月卒業英學自在 (全) | 時 | 1.現在 | | 2.過去 | 3.第二過去 | 4.第三過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| | 文法詳解英文講義 (フアラウン氏) | 時 | 1.現在 | 不完結現在 | 2.過去 | 3.不完結過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| | [別所富貴] | | 不完結現在 | 不完結現在 | 不完結過去 | 不完結過去 | 不完結過去 | 不完結未來 | 不完結未來 | |
| ⑧ | スウキンソン氏英文直譯 (全) [伴野乙弥] | 時 | 1.現在 | 4.完全現在 (他ノ文法ノ半過去) | 2.過去 | | 5.完全過去 (他ノ文法ノ大過去) | 3.未來 | 6.完全未來 (他ノ文法ノ第一未來) | |

(表 17-3)

| 年 | 書名 | 時制 tense | Praesens | | | Praeteritum | | | Futurum | |
|-------------|--------------------------------------|------------|------------------|---------------------------------|---------------------|------------------------|--------------------------|-------------------------|--------------------------------|--|
| | | | Presens (I love) | Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Perfect (I have loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) | |
| 1888(明治 21) | クラツケンボス氏小文典 [獨案内 梅木正衛] | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.未來 | 6.第二未來 | |
| 1888(明治 21) | スウ井ントン氏英文典 [獨案内 朝野巖三郎] | 時 示時形 | 1.現在 | 4.現在分詞 | 2.過去 | | 5.過去分詞 | 3.未來 | 6.未來分詞 | |
| | スウ井ントン氏英文典 [直譯 渡辺松茂] | 時 | 1.現在 | 4.充分現在 2.定現在 現在完成 現在完全 | 2.過去 | | 5.充分過去 | 3.未來 | 6.充分未來 | |
| | 須因頓氏英文典 [田中達三郎] | 時 | 1.現在 | 4.充分現在 | 2.過去 | | 5.充分過去 | 3.未來 | 6.充分未來 | |
| 1889(明治 22) | すういんとん小文典 [獨案自在 校田源治] 和譯英文典(完) | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| 1890(明治 23) | 原書全譯スウ井ントン氏英文典 [直譯講義 渡辺松茂] | 時 示時形 | 1.現在 | | 半過去 | | 本原時 | | | |
| | | | 1.現在 | 4.充分現在 | 2.過去 | | 第二時または關係時 | 3.未來 | 3.未來完成 | |
| 1891(明治 24) | 斯因頓氏英文典講義(上下) [山形 閑] | 時 | 1.現在 | | 2.過去 | | 原主ノ時(絶対ノ時) | | | |
| | | | 1.現在 | 4.充分現在 | 2.過去 | | 副時ノ時(相關スル時) | 3.未來 | 3.完成未來 | |
| 1892(明治 25) | 須因頓氏小英文典講義 [湯淺/閑] | 時 | 1.現在 | 4.充分現在 | 2.過去 | 2.第二過去 | 2.完成過去 | 3.第一未來 | 6.第二未來 | |
| | | | 1.現在 | 3.完現在 | 2.過去 | | 4.完過去 | 5.未來 | 6.完未來 | |
| 1893(明治 26) | 簡明英文典 英語教授書 | Tense 時 | 1.present | | 2.imperfect | 3.perfect | 4.pluperfect | 5.first future | 6.second future | |
| | | | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | | 4.未來 | | |
| 1894(明治 27) | 英文典 [チャムブレ] | 時 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.充過去 充分過去 | 4.大過去 | 5.第一未來 | 6.第二未來 | |
| | | | 1.現在 | 2.Present Perfect | 3.過去 Past | 4.Past Perfect | 5.Future Perfect | 6.Future Perfect | | |
| | 教科書獨修用新英語字 | 時 | 1.現在 | | 2.過去 | | 單純時 | 3.未來 | | |
| | | | 1.現在 | 1.現在完成 | Past or Imperfect | 2.過去 | 複合時 | 4.第一假設法 1st Conditional | 3.未來完成 | |
| | 英文法学(上編) | 時 | | | | 2.過去完成 | 4.第二假設法 2nd Conditional | | | |
| | 実験英文典教科書 | 時 | 1.現在 | 4.已然現在 | 2.過去 | | 5.已然過去 | 3.未來 | 6.已然未來 | |

(表 17-4)

| 年代 | 書名 | 時制 tense | Præsens (I love) | Praeteritum Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Futurum Imperfect (I loved) | Perfect (I have loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) |
|------------|-------------------------------------|----------|---|--|---------------------|-----------------------------|------------------------|--------------------------|----------------------------|--|
| 1895(明治28) | 英法詳解(ス井ン トン氏) [酒巻・金子] | 時 | 現在 | 充分現在 | 過去 | 過去 | 充分過去 | 充分過去 | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) |
| 1896(明治29) | 英法教科書 [共益社] | 時 | 現在 | 充分現在 | 半過去 | 不定過去 | 過去 | 充分過去 | 未来 | Future Perfect |
| | 英語初歩教授書(全) | 時 | 現在 | 充分現在 | 半過去 | 不定過去 | 過去 | 充分過去 | 未来 | Future Perfect |
| ⑩ | 英文典問答(全) | 時 | 4.現在 | 3.半過去 Present Perfect | 2.過去 Past | 過去 | 過去 | 1.大過去 Past Perfect | 6.未来 Future | 5.大未来 Future Perfect |
| 1897(明治30) | 英語学捷徑(バツタ 一氏) | 時 | 現在 | 4.半過去 Present Perfect | 2.過去 | 過去 | 過去 | 5.大過去 | 3.未来 | 6.大未来 |
| ⑪ | スーイントン小文典 直譯意解 [元木貞雄] | 時 | 1.現在 | Present Tense(1.Present, 2.Past, 3.Future) ×Secondary Tense(1.Indefinite, 2.Imperfect 《不定過去》) | 過去 | 過去 | 過去 | 5.大過去 | 3.未来 | 6.大未来 |
| | 新式英文法動範 [中村宗次郎] | 時 | 現在 | 不定現在 | 不定過去 | 不定過去 | 不定過去 | 充分過去 | 未来 | 充分未来 |
| 1898(明治31) | 新式実用英文法講義 [井上歌郎] | 時 | 現在 | 1.Present 《現在》, 2.Past 《過去》, 3.Future 《未来》 ×(1.Indefinite 《不定》, 2.Imperfect Continuous 《連続不十分》, 3.Perfect 《十分》, 4.Perfect Continuous 《連続十分》, 5.Inceptive 《創始的》) | 過去 | 過去 | 過去 | 充分過去 | 未来 | 充分未来 |
| | 邦語英字典 [畔柳都太郎(10月)] | 時称 | 現在不定 | 現在完了 | 過去 | 過去 | 過去 | 完了過去 | 未来 | 完了未来 |
| | 英語学大全(前後篇) [松島・星野(10月)] | 時相 | 現在不定 | 現在完了 | 過去 | 過去 | 過去 | 完了過去 | 未来 | 完了未来 |
| ※ | 邦文英字典(全) [鳴・文次郎譯補 (再版11月)] | 時称 | 現在不定 | 現在完了 | 過去 | 過去 | 過去 | 完了過去 | 未来 | 完了未来 |
| | 通俗英語案内 | 時 | 現在 | 完了現在 | 過去 | 過去 | 過去 | 完了過去 | 未来 | 完了未来 其一(will/shall) 其二(would/should) |
| 1899(明治32) | 英文典教科書 [チャムブレン] | 時 | 1.現在 | 4.現在完了 Perfect | 2.過去 Past | 過去 | 過去 | 5.過去完了 (倍過去) | 3.未来 | 6.未来完了 |
| | 教科摘要新式英語学 獨修(一名六ヶ月間 達成) | 時 | 1.現在 | 2.半過去 | 2.過去 Past | 過去 | 過去 | 4.大過去 | 5.未来 | 6.大未来 |
| ⑫ | 邦文渥氏英字典 [内海弘藏] | 時 | 1.現在 | 第一ノ時 (Primary Tense) | 2.半過去 | 過去 | 過去 | 第一ノ時 (Primary Tense) | 3.未来 | 6.大未来 |
| | | 時 | 1.現在 | 第二ノ時 (Secondary Tense) | 2.過去 | 過去 | 過去 | 第二ノ時 (Secondary Tense) | 3.未来 | 6.大未来 |
| | | 時 | 三時十二形: 時 (現在, 過去, 未来) × Form 《体》 (1.Indefinite 《不定体》, 2.Continuous 《連続体》, 3.Perfect 《完了体》, 4.Perfect Continuous 《完了連続体》) | 1.完了現在 (或ハ半過去) | 2.過去 | 過去 | 過去 | 5.完了過去 (或ハ大過去) | 3.未来 | 6.完了未来 (或ハ大未来) |
| 1900(明治33) | 意解挿入ぬすふらい一 ると英文典第二編案 内 [栗野忠雄] | 時 | 三時十二形: 時 (現在, 過去, 未来) × Form 《形》 (1.Indefinite 《不定形》, 2.Continuous 《連続形》, 3.Perfect 《完結形》, 4.Perfect Continuous 《完結連続形》) | 三時十二形: 時 (現在, 過去, 未来) × Form 《形》 (1.Indefinite 《不定形》, 2.Continuous 《連続形》, 3.Perfect 《完結形》, 4.Perfect Continuous 《完結連続形》) | 過去 | 過去 | 過去 | 完了過去 | 未来 | 完了未来 |
| | 子スフイールド氏第 二英文典講義 [鶴田久作] | 時 | 時 (現在, 過去, 未来) × Form 《形》 (1.Indefinite 《不定形》, 2.Continuous 《連続形》, 3.Imperfect 《完了セザル動詞》, 4.Perfect 《完了形》, 5.Perfect Continuous 《完了連続形》) | 時 (現在, 過去, 未来) × Form 《形》 (1.Indefinite 《不定形》, 2.Continuous 《連続形》, 3.Imperfect 《完了セザル動詞》, 4.Perfect 《完了形》, 5.Perfect Continuous 《完了連続形》) | 過去 | 過去 | 過去 | 完了過去 | 未来 | 完了未来 |

(表 17-5) ※本来なら嶋文次郎の初版の方が4月で早いのであるが、ここで調査したのは11月出版の再版なので畔柳の方が1ヶ月早いことになった。

| 年代 | 書名 | 時間 | Praesens | | | Praeteritum | | | Futurum | |
|------------|---------------------------|----|----------------------------|---|--|--|--|--|--|--|
| | | | Presens (I love) | Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Perfect (I have loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) | |
| 1900(明治33) | ねすふいーるど英文第三巻講義 [喜内芳樹] | 時 | 現在時不定形 (現在) | 時 (現在、過去、未来) × 現在時完了形 | Form《形》(不定、連続、完了、完了不定形) (過去) | 過去不定時 (過去) | 過去時完了形 (大過去) | (未来) | 未来時完了形 | |
| | 新泰教科書 英語教授初歩 | 時 | — | — | — | — | — | — | — | |
| | ネスフイールド氏英文卷式直譯註解 [畔田 到] | 時 | 時 (現在、過去、未来) × 不定現在 | 時 (現在、過去、未来) × 完成現在 | Form《形》(《不定形》、《連統形》) × ハ Imperfect 《不定》、Continuous 《不定》、Continuous 《完了》、《完了連統》 | Form《形》(《不定形》、《連統形》) × ハ Imperfect 《不定》、Continuous 《完了》、《完了連統》 | Form《形》(《不定形》、《連統形》) × ハ Imperfect 《不定》、Continuous 《完了》、《完了連統》 | Form《形》(《不定形》、《連統形》) × ハ Imperfect 《不定》、Continuous 《完了》、《完了連統》 | Form《形》(《不定形》、《連統形》) × ハ Imperfect 《不定》、Continuous 《完了》、《完了連統》 | |
| | 子スフイールド氏第三英文典講義録 [奈倉次郎] | 時 | 1.現在 | 3.十分過去 | 2.不十分過去 | 4.大過去 | 5.第一未来 | 6.第二未来 | 6.第二未来 | |
| | 英語全課卒業書 | 時 | 現在 | 三ツノ重ナル時 | 過去 Past | 三ツノ重ナル時 | 三ツノ重ナル時 | Future | Future | |
| 1901(明治34) | 英文法初歩 [斎藤秀三郎] | 時 | 現在 | 働作完了ノ時 Perfect Tense 現在完了 | 働作完了ノ時 Perfect Tense 過去完了 | 働作完了ノ時 Perfect Tense 過去完了 | 働作完了ノ時 Perfect Tense 過去完了 | 働作完了ノ時 Perfect Tense 過去完了 | 働作完了ノ時 Perfect Tense 過去完了 | |
| | 文法大意(全) | 時相 | 1.現在 | 4.完了現在 | 2.過去 Past | 3.過去 Past | 3.過去 Past | 3.未来 | 3.未来 | |
| | 新編英文典問答 | 時 | 1.現在 | 4.半過去 | 2.過去 Past | 5.大過去 | 5.大過去 | 3.未来 | 6.大未来 | |
| 1902(明治35) | 子スフイールド氏第二英文典直譯註解 [葛西又次郎] | 時 | — | — | — | — | — | — | — | |
| | 英文典術語集 | 時 | 現在 | 充分現在 | 過去 | — | — | — | — | |
| | 英語提要 | 時 | 現在 | 現在過去 | 過去 | — | — | — | — | |
| 1904(明治37) | 文法会話作文 英語新編 | 時 | 1.現在 | 2.十分現在 | 半過去(?) | 4.十分過去 | 4.十分過去 | 5.未来 | 6.十分未来 | |
| 1906(明治39) | 英語獨案内 | 時 | 1.現在 | 2.十分現在 | 2.過去 | — | — | 3.未来 | — | |
| | 英文典ダイヤグラム | 時 | 1. Present 《現在》 | 1. Present 《現在》 | 2. Past | 2. Past | 2. Past | 3. Future | 3. Future | |
| | 英語文法語詞論 | 時 | a) Present b) Perfect 《完了》 | 1 2 様：(現在、過去、未来) × (1. Imperfect: a) Indefinite = Momentary, b) Progressive = Continuous 《進行形》) | a) Past b) Perfect | a) Past b) Perfect | a) Past b) Perfect | a) Future b) Perfect | a) Future b) Perfect | |
| 1907(明治40) | 表説 英文典(全) | 時 | (Indef.) Present | 完成現在 (Indef.) Pres. Perf. | (Indef.) Past | 完成過去 (Indef.) Past Perf. | 完成過去 (Indef.) Past Perf. | (Indef.) Future | 完成未来 (Indef.) Future Perf. | |
| | 英語学捷徑 | 時 | 1.現在 | 2.現在完了 | 3.過去 | 4.過去完了 | 4.過去完了 | 5.未来 | 6.未来完了 | |
| | 新式英語熟達法 | 時 | Pres. Indef. | (現在 過去、未来) × (indefinite, progressive, perfect) Pres. Perf. | Past Indef. | Past Perf. | Past Perf. | Future Indef. | Future Perf. | |

| 年代 | 書名 | 時制 | tense | Praesens | | | Praeteritum | | | Futurum | |
|-------------|-----------------|----|-------|---|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------|-----------------------------|----------------------------|-----------------------------------|------------------------------------|
| | | | | Presens (I love) | Present perfect (I have loved) | Imperfect (I loved) | Perfect (I have loved) | Pluperfect (I had loved) | Future I (I shall love) | Future II (I shall have loved) | |
| 1908(明治 41) | 中学英文法講義 | | 時 | 1. 現在 | 第一時(Primary Tense) | 2. 過去 | 第一時(Primary Tense) | 3. 未來 | | | |
| | | | | 第二時(Secondary or Perfect Tense) | 1. 現在完了 | 第二時(Secondary or Perfect Tense) | 2. 過去完了 | 3. 未來 | | | |
| | | | | 時 (現在 過去、未來) × Form《形》(不定形、連続形、完了形、完了連続形) | | | | | | | |
| | | | | 現在不定形 Pres. Indef. | 現在時完了形 Pres. Perf. | 過去時不定形 Past Indef. | 過去時完了形 Past Perf. | | | | |
| 1908(明治 41) | 教科書田參考 英文法通解 | | 時 | 1. 現在 (現在不定) | 4. 現在完了 | 2. 過去 (過去不定) | 5. 過去完了 | 3. 未來 (未來不定) | | | 未來完了時 Future Perfect 6. 未來完了 |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |

(表 17-7)

表 18. 英語原典における時制の構成

| 年号 | 著者 | Praesens | | Praeteritum (past) | | | Futurum | Optativus:Conditionalis | | | |
|------------|-----------------------|-------------------|---------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---|--|-------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| | | 1. I love | I have loved | 2. I loved | 3. I have loved | 4. I had loved | | 5. I shall love | 6. I shall have loved | 7. I should love | 8. I should have loved |
| 4c. 5c. | Donatus Priscianus | praesens | | imperfectum | praeteritum perfectum | plusquamperfectum | futurum | | | | |
| 1325? | 思弁文典 | | | | | | | | | | |
| 1549 | Lily-Colet | Present | | Preterimperfecte | Preterperfecte | Preterpluperfecte | Future | | | | |
| 1586 | Bullokar | present | | | | | future | (future exactum) | | | |
| 1594 | P.Gr. | praesens | | primum | praeteritum secundum | tertium | futurum secundum | | | | ※ (futurum primum は命令法のこと) |
| 1617 | Hume | Time present | | Time passing before | Time past else | Time past before | Time to come | | | | |
| 1621 | Gill | 1. Praesens | | 3. Imperfectum | 4. Perfectum | 5. Indefinitum | 2. Futurum | | | | |
| 1640 | B.Jonson | 1. present | Imperfect | 2. past | 1. perfect present (I can/could love) | 3. perfect-perfect (I have/had loved; I might have loved) | 2. perfect future (I shall love; I shall have loved) | | | | |
| 1653 | Wallis | 1. Praesens | | 2. Praeteritum Imperfectum | Preterperfecte | Preterpluperfecte | Future | | | | |
| 1654 | Wharton | Present | | Imperfect | Perfect | Pluperfect | Future (shall & will) | | | | |
| 1668 | Wirkins | Present | | Preter imperfecte | Preter Perfecte | Preter Pluperfecte | Future first (= Absolute) | Future second (= Conditional) | | | |
| 1688 | Miege | present | | imperfect past | perfect past | more than perfect past | the time to come | | | | |
| 1690 | Clare | Present | | Imperfect | Preter | — | Future | | | | |
| 1693 | Aickin | 1. Present | | 2. Imperfect | 3. Perfect | 4. Pluperfect | 5. Future | 6. Preter-Future | | | |
| 1700 | Browne | | | | | | | | | | |
| 1708 | Sewel (蘭語英文典) | Tegenwoordige Tyd | | Onvolkomen verleden Tyd | Volkomen verleden Tyd | Meer als volkomen verleden Tyd | Toekomstige Tyd | 2° toekomstige Tyd | Onderstellende toekomstige Tyd | 2° onderstellende toekomstige Tyd | |
| 1710 | Turner | 1. Present | | 2. Imperfect | 3. Perfect | 4. Pluperfect | 5. Future | 6. Preter-Future | | | |
| 1711 | Gildon and Brightland | 1. Present | | 2. The Time Passing or imperfect past | 3. The Time perfectly past | 4. The Time more than past | 5. The Future or Time to come | 6. The past future time | | | |
| | Greenwood | imperfect | Pres. imperf. | Preter imperf. | Preter imperf. | Preter perf. | Future imperf. | Future perf. (Fut.exaktum) | | | |

| 年号 | 著者 | Præsens | | Praeteritum (past) | | | Futurum | Optativus:Conditionalis | | |
|-----------------|-----------------|---|--------------|---|-------------------------------------|---|---|--|-------------------------------|----------------------------------|
| | | 1. I love | I have loved | 2. I loved | 3. I have loved | 4. I had loved | | 5. I shall love | 6. I shall have loved | 7. I should love |
| 1712 | Maittaire | 1. Present | | a) Imperfekt (did love. was ~ing) b) Indefinite (I loved) | 2. Preterit Perfekt | d) Pluperfekt | 3. 1st Future (shall or will) | 2nd Future (Potential mood のみ) | | |
| 1726 | Shirly | 1. Present (I do love) | | 2. Imperfekt (I did love) | 3. Perfekt | 4. Pluperfekt | 5. Future (I shall or will love) | | | |
| 1731 | Duncan | 1. The Time pres. Compound Tense | | 1. Preterimperfekt | 2. The Time past or preterit | 2. Preterpluperf. | 3. The Time to come or future | 3. all the tenses of Subj. | | |
| 1735 | Collyer | 3. the present time | | a) I was | 2. the past time b) I have loved | 1. the time more than perfectly past 4. Preterpluperf. | 4. the future time | | | |
| 1740 | Dilworth | 1. Present | | 3. Preterimperfekt | 2. Preterperfekt | | 5. 1st Future (I will read presently.) 6. 2nd Future (I shall read hereafter.) | | | |
| 1745 | Kirkby | Present | | 1st Past (Imperfekt) | 2nd Past (Perfekt) | 3rd Past (Pluperfekt) | 1st Future | 2nd Future | | |
| 1746 | Sewel (蘭語英文典) | Tegenwoordige Tyd | | Onvolkomen verleden Tyd | Volkomen verleden Tyd | Meer als volkomen verleden Tyd | Toekomende Tyd | 2e toekomende Tyd | Onderstellende toekomende Tyd | 2e onderstellende toekomende Tyd |
| 1751 | J. Harris | Aorist of Pres. (I write) Inseptive Pres. (be going to) Middle or extended Pres. (I am writing) | | Aorist of the Past (I wrote) Inseptive Past Middle or extended Past | | | Aorist of the Future (I shall write) Inseptive Fut. Middle or extended Fut. Compleitive Fut. | | | |
| 1735 (原典: 1660) | ポール・ロウ イヤル文法 | 1. present Compound tense | | b) indefinite or aoristus | 2. preterit or past a) definite | | 3. future | | | |
| 1754 | Gough | Present | | I. preterimperfekt 1st Past 2nd Past (I did love) | 3rd Past | Compound Past | 1st Future | 2nd Future | 4th Past | Future Past |
| 1761 | White | Present | | 1st Past | 2nd Past | 3rd Past | 1st Future 2nd Future (I will) | 3rd Future 4th Future (I will+p.p.) | | |

| 年号 | 著者 | Praesens | | Praeteritum (past) | | | Futurum | | Optativus/Conditionalis | |
|------|---------------------|---|--------------|---|---------------------------------------|--|---|--------------------------------|-------------------------|------------------------|
| | | 1. I love | I have loved | 2. I loved | 3. I have loved | 4. I had loved | 5. I shall love | 6. I shall have loved | 7. I should love | 8. I should have loved |
| 1762 | Lowth | Indefinite, or Undetermined Indef. Pres. Definite, or Determined Pres. Imperfekt (be+~ing) Pres. Perfekt | | Indef. Past Past Imperfekt | | | Indef. Future Future Imperfekt | | | |
| | Buckanan | 1. Present | | 2. Preter-imperf. | 3. Preter-perfekt | 4. Preter-pluperf. | 5. Future | Future Perfekt | | |
| | Priestly | Present | | Imperfekt | Preterperfekt | Preterpluperfekt | Future a) indefinitely b) as past with relation to some other event | | | |
| 1763 | Ash | Present | | Imperfekt (past indeterminately) | Perfekt (past determinately) | Pluperfekt | Future | | | |
| 1766 | Sewel (蘭語英文典) | Tegenwoordige Tyd | | Onvolkomen verleden Tyd | Volkomen verleden Tyd | Meer als volkomen verleden Tyd | Toekomende Tyd | 2 ^e toekomstige Tyd | | |
| 1769 | Lowth | Present tense | | Preter tense | | | (Absolute Form) | | | |
| 1771 | Fennig | present | | preter-imperfekt | preter-perfekt | preter-pluperfekt | future imperfekt | | | |
| | | Simple Present tense (I love) Compound Present tense (I do love) | | Simple Preterimperfekt (I loved) *仏の《半過去》 Compound Preterimperfekt (I did love) | Compound Preterperfekt (I have loved) | Preter-Pluperfekt (I had loved) | Future (I shall or will love) | | | |
| 1776 | Peyton (英仏対訳英文典) | Tems Present Simple (j' aime) Tems Present Composé (j' aime) | | Simple Preterimparfait (j' aimois) Prétérit-imparfait (j' aimois) | Prétérit-parfait Composé (j' ai aimé) | Prétérit-Plusque parfait (j' avais aimé) | Futur (j' aimerai) | | | |
| | | Present | | Preterite | Preterimperfekt | Preterperfekt | Preterpluperfekt | Absolute Form | | |
| 1777 | Harrison | Present | | | | | Future | | | |
| 1784 | Fell | Present | | | | | The compound Tense of Past and Future Time (Compound Tense) | | | |
| 1784 | Webster | Present | | Imperfekt | Perfekt | Pluperfekt | Future *各時制を Indefinite と Definite (be+~ing) に二分 | | | |

| 年号 | 著者 | Praesens | | Praeteritum (past) | | | Futurum | | Optativus:Conditionalis | |
|--------------|--------------------|------------------------------------|--|-----------------------------|-------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------|-------------------------|------------------------|
| | | 1. I love Present | I have loved | 2. I loved Imperfekt | 3. I have loved Perfekt | 4. I had loved Preterpluperfekt | 5. I shall love Future | 6. I shall have loved | 7. I should love | 8. I should have loved |
| 1785 | Ussher | Present | I have loved | Imperfekt | Perfekt | Preterpluperfekt | Future | 6. I shall have loved | 7. I should love | 8. I should have loved |
| 1788 | Beattie | Present | Definite in time | Preterperfekt | Indefinite in time | Indefinite in time, or Aorist | Future | Future Perfect | | |
| 1788 | Coote | Present | Indefinite in time, or Aorist | Preterperfekt | Indefinite in time, or Aorist | Indefinite in time, or Aorist | Future | Future Perfect | | |
| 1789 | Pickbourn | Present | Complete in respect of action | Plusquamperfekt | Complete in respect of action | Complete in respect of action | Future Perfect | Future Perfect | | |
| 1790 | Marin (蘭語対訳文典) | 1. Present (I write, I am writing) | | 1st preterite | 2nd preterite | 3rd preterite | 1st future | 3. Future 2nd future | | |
| 1790 | Marin (蘭語対訳文典) | Pres. indefinite | Pres. indef. | Past definite or indefinite | Parfait | Plusque parfait | Fut. simple def. or Indef. | Fut. complex | | |
| 1790 | Marin (蘭語対訳文典) | Présent | | 1er Prétérit | Parfait | Plusque parfait | Futur | | | |
| 1792 | Fogg | Pres. Indef. | (Pres./Past/Fut.)×(Indefinite/Imperf. [= ~ing/Perf./Continued]=have been ~ing)=12 時制 | Past Indef. | Past Perf. | Past Perf. | Fut. Indef. | Fut. Perf. | | |
| 1795 | Murray | Present | | Preterimperfekt | Preterperfekt | Preterpluperfekt | 1st future | 2nd future | | |
| 1797 | モルレイ氏 (英吉利文典) | 1. Present | | 2. Imperfect | 3. Perfect | 4. Pluperfect | 5. 1st future | 6. 2nd future | ※日本での翻刻は約60年後 (慶応年間) | |
| 1798 (寛政 10) | Sedger | 1. Present | 3. Pres. perf. | 4. Past | 6. Past perfekt | | 7. Future (shall) 2nd Fut. (will) | 9. Fut. perfekt | | |
| 1801 (享和 1) | Locke (蘭語英文典) | 2. Present imperfekt (~ing 形) | | 5. Past imperfekt | | | 8. future imperf. | | | |
| 1801 (享和 1) | Locke (蘭語英文典) | 3. tegenw. volmaakt. | | voorleden | 6. voorleden volmaakt | | toekomst | 9. toekomst volmaakt | | |
| 1811 (文化 8) | 和蘭語法解 (Pytonの英文典?) | 現在 | 過去 (未過) | 過去 (未過) | 過去 (未過) | 過去 (未過) | 未来 | | | |
| 1811 (文化 8) | 和蘭語法解 (Pytonの英文典?) | テージェンウオー ルティゲ。タイ | 過去 (未過) | 過去 (未過) | 過去 (未過) | 過去 (未過) | 未来 | | | |
| 1834 (天保 5) | Perley | 1. Present | 4. Present Perfect | 2. Past | 5. Past Perfect | 3. Future | 6. Future Perfect | | | |
| 1840 (天保 11) | Hiley | 1. present | 3. present-perfect | 2. past | 4. past-perfect | 5. future | 6. future-perfect | | | |
| 1842 (天保 13) | Farnum | 現在 present | | 過去 imperfekt | 過去 perfect | 過去 pluperfekt | 未来 1st future | 過了未来 2nd future | | |
| 1845 (弘化 2) | Butler | 1. Present (Present) | 2. Present Perfect (Perfect) | 3. Past (Imperfect) | 4. Past Perfect (Pluperfect) | 5. Future (Future) | 6. Future Perfect (Second Future) | | | |

(表 18-4)

| 年号 | 著者 | 時制 | Praesens | | Praeteritum (past) | | | Futurum | | Optativus:Conditionalis | |
|---------------|---------------------------|---------------------------|--|--------------------------------------|-----------------------------------|--|--|--|---|--------------------------------|---|
| | | | 1. I love | I have loved | 2. I loved | 3. I have loved | 4. I had loved | 5. I shall love | 6. I shall have loved | 7. I should love | 8. I should have loved |
| 1845 (弘化2) | Hamelberg | Present tegenwoordig | Present tegenwoordig | I have loved | Imperfekt onvolmaakt verleden | Perfekt volmaakt verleden | Pluperfekt meer dan volmaakt verleden | 1 st future 1 ^e toekomstend | 2 nd future 2 ^e toekomstend | | |
| 1846 (弘化3) | Well | 1. present | 2. present perfect | 3. past | 3. past | 4. past perfect | 5. future perfect | 5. future | 6. future perfect | | |
| 1849 (嘉永2) | Bullion | 1. Present | 2. Present-perfect | 3. Past | 3. Past | 4. Past-perfect | 5. Future | 6. Future-perfect | 6. Future-perfect | | |
| 1851 (嘉永4) | Marin (蘭語対訳伝文典) | 1. Pr sent tegenwoordig | 2. Imperfect onvolmaakt verleden | 3. Parfait d fini bepaalde verl. | 4. Parfait compos  volmaakt verl. | 5. Plus-que-parfait dan volmaakt verleden | 6. 2 ^e Plus-que-parfait 2 ^e meer dan vollm. verleden | 7. Futur toekomstend | 8. Futur compos  Zamengestelde toekomstend | 9. Conditional voorwaarde-lijk | 10. Conditional compos  Zamengestelde voorwaarde-lijk |
| 1852 (嘉永5) | Brown | 1. Present | (present- perfect) | 2. Imperfect | 3. Perfect | 4. Pluperfect | 5. First-Future | 6. Second-Future | | | |
| 1853 (嘉永6) | Murray (蘭訳英文典) | tegenwoordig | | onvolmaakt verleden | volmaakt verl. | meer dan volmaakt verleden | 1 ^e toekomstend | 2 ^e toekomstend | | | |
| | Spencer | 1. Present | 2. Perfect-Present | 3. Past | | 4. Perfect-Past | 5. Future | 6. Perfect-Future | | | |
| 1854 (安政1) | S.S.Green | 1. present | 2. present perfect | 3. past | | 4. past perfect | 5. future | 6. future perfect | | | |
| | Pinneo | 1. Present | | 2. First Past | 3. Second Past | 4. Third Past | 5. First Future | | | | |
| | Covell | 1. present | 4. present-perfect | 2. past | | 5. past-perfect | 3. future | 6. future-perfect | | | |
| | Beek (蘭語英文典) | Present | | Imperfect | Perfect | Pluperfect | first or simple future | second or compound future | first or simple conditional | second or compound conditional | second or compound conditional |
| | van der Pijl (蘭語対訳英文典) | Tegenwoordig | | Onvolmaakt verleden | Volmaakt verl. | Meer dan volmaakt verleden | 1 ^e toekomstend | 2 ^e toekomstend | 1 ^e voorwaarde-lijk | 2 ^e voorwaarde-lijk | 2 ^e voorwaarde-lijk |
| 1855 (安政2) | Gerdes (蘭語英文典) | Present | | Imperfect | Perfect | Pluperfect | 1 st future | 2 nd future | 1 st conditional | 2 nd conditional | 2 nd conditional |
| | Lloyd (蘭語英文典) | Tegenwoordig | | Onvolmaakt verleden | Volmaakt verl. | Meer dan volmaakt verleden | 1 ^e toekomstend | 2 ^e toekomstend | 1 ^e voorwaarde-lijk | 2 ^e voorwaarde-lijk | 2 ^e voorwaarde-lijk |
| | | 1. Pr sent (Tegenwoordig) | 7. Perfect (de zamengestelde tegenw. tijd) | 2. Imperfect or Preterite (Verleden) | 8. Pluperfect | 9. 1 st future (shall) 4. 2 nd future (will) (Toekomstend) | 9. 1 st future past 10. 2 nd fut. past | 5. 1 st cond. (should) 6. 2 nd cond. (would) | 11. 1 st cond. past or perf. 12. 2 nd cond. past or perf. | | |

(表 18-5)

| 年号 | 著者 | 時制 | Praesens | | Praeteritum (past) | | Futurum | Optativus:Conditionalis | | |
|-----------------|--------------------|--------------------------|---|--------------|--|-----------------|---|-------------------------|---|-----------------------|
| | | | 1. I love | I have loved | 2. I loved | 3. I have loved | | 4. I had loved | 5. I shall love | 6. I shall have loved |
| 1857 (安政 4) | 英吉利文典 (Vergani) | de eenvoudige tijd (單一時) | 1. Tegenwoordig | | 2. onvolmaakt Onvolmaakt verleden | | de eenvoudige tijd(單一時) | | 3.aankomend a) shall b) will | |
| | | | Present | | Imperfect | | Past | | 1 st future | |
| 1861 (文久 1) | Murray | de eenvoudige tijd (單一時) | Present | | Imperfect (was 及び was+~ing) | | Pluperfect | | 2 nd future | |
| | | | Present tense | | Past tense | | Pluperfect | | 2 nd future | |
| 1862 (文久 2) | Noel(ノエル) | de eenvoudige tijd (單一時) | 1.présent | | 2.imparfait 3.passé défini | | de zamengestelde tijd(複合時) a) I have had b) I had had | | 7.futur antérieur | |
| | | | 1.Present | | 3.Perfect | | 4.Pluperfect | | 6.2 nd future | |
| 1867 (慶応 3) | Quackenbos | de eenvoudige tijd (單一時) | Present tense | | present tense perfect | | Past tense | | future tense | |
| | | | present tense imperfect (~ing 形のこと) | | past tense imperfect | | past tense perfect | | future tense perfect | |
| 1869 (明治 2) | 英文典 (Pinneo) | de eenvoudige tijd (單一時) | present | | 1 st past 2 nd past 3 rd past | | future | | future tense perfect | |
| | | | Primary Tense | | 2 Past | | 3 Future | | | |
| 1874 (明治 7) | Hart | de eenvoudige tijd (單一時) | Secondary Tense | | 1.Present Perfect | | 2.Past-Perfect | | 3.Future- Perfect | |
| | | | 1.Present | | 2.Imperfect | | 3.Perfect | | 4.Pluperfect | |
| 1875 (明治 8) | Brown | de eenvoudige tijd (單一時) | simple tense | | 2.past | | 5.First-Future | | 6.Second-Future | |
| | | | compound tense | | 4.present- perfect | | 5.past-perfect | | 6.future-perfect | |
| 1876 (明治 9) | Swinton | de eenvoudige tijd (單一時) | die Zeitformen der Gegenwart | | 1.Präsens 2.Perfekt | | 3.1 ^{es} Futur | | 4.2 ^{es} Futur | |
| | | | die Zeitformen der Vergangenheit | | 1.Präteritum | | 2.Plusquamperfekt | | 3.1 ^{es} Konditional Imperfekt des Futures | |
| 1880 (明治 13) | Mätzner (獨語英文典) | de eenvoudige tijd (單一時) | | | | | | | 4.2 ^{es} Konditional Plusquamperf. des Futures | |
| | | | | | | | | | | |

表 19. 明治期の獨文典における時制の譯語

(★印は《主時》)

| 年号 | 制書名 | 時 | Zeit | Präsens (ich liebe) | Perfekt (ich habe geliebt) | Imperfekt (ich liebte) | Perfekt (ich habe geliebt) | Plusquamperfekt (ich hatte geliebt) | Futur (ich werde lieben) | Futur exaktum (ich werde geliebt haben) |
|--------------|------------------------------|---|------|---|-----------------------------|---|-------------------------------|---|---|--|
| 1846(弘化 3) | Bohnhoff/Zoon の獨語辭書 | | .. | 現在 | | 半過去 | | | | |
| 明治初年? | 獨逸初学必携 (全) | | | | | | | | | |
| 1871(明治 4) | 獨逸学入門 | | | | | | | | | |
| | 普語彙 (上・下) | | | | | | | | | |
| 1872(明治 5) | カドリー氏原著獨逸文典直譯 (上・二) | | | | | | | | | |
| | 獨逸語学初歩 (初編) [カドリー氏文典直譯] | | | | | | | | | |
| | 獨逸作文階梯 (卷一) | | | | | | | | | |
| 1880 (明治 13) | セーフエル氏文典直譯 [多賀貫一郎] | | .. | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.未來 | 6.大未來 |
| | セーフエル氏原著獨逸文典直譯 (文章論) [小山篤叙] | | 時ノ形作 | 1.現在★ (引続ノ現在) | (充分ノ現在) | 2.半過去 (引続ノ過去) | 3.過去★ | 4.大過去 (充分ノ過去) | 5.未來★ (第一未來) (引続ノ未來) | 6.充分未來 (第二未來) (綿密未來) (過去未來) |
| 1883 (明治 16) | 獨逸文法階梯 (前篇) [平塚定二郎] | | 時ノ形 | 1.現在★ (現在統キ) | (現在完全) | 2.半過去 (過去統キ) | 3.過去★ | 4.大過去 (過去完全) | 5.未來★ (第一未來★ (未來統キ)) | 6.第二未來 (未來完全) |
| 1884 (明治 17) | 獨逸文法獨階古 | | | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.大過去 (マツ) | 4.Vorvorangehenheit Plusquamperf. | 5.Zukunft Futur I | 6.Vorzukunft Futur II Futurum exaktum |
| 1885 (明治 18) | シェーフエル氏獨逸文法獨学 [平塚定二郎] | | 時ノ形 | 1.現在★ (保続ノ現在) | (結了ノ現在) | 2.半過去 (保続ノ過去) | 3.過去★ | 4.大過去 (結了ノ過去) | 5.未來; 第一未來★ (保続ノ未來) | 6.未來過去 (第二未來) (結了ノ未來) |
| | 獨逸文法階梯說明 [平塚定二郎] | | | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.未來 | 6.過去未來 |
| 1886 (明治 19) | 挿譯注釈シェーフエル氏獨逸文典 (前・後) [馬島 珪] | | 時ノ形 | 1.現在 (保続現在) Gegenwart Praesens dauernde Gegenwart | (成就現在) vollendete Gegenwart | 2.半過去 (保続過去) Mitvorangehenheit Imperfectum dauernde Vergangenheit | 3.過去★ Vergangenheit Perfectum | 4.大過去 (成就過去) Vorvorangehenheit Plusquamperf. vollendete Vergangenheit | 5.第一未來★ (保続未來) Zukunft Futurum I dauernde Zukunft | 6.第二未來 (成就未來) Vorzukunft Futurum II od. exactum vollendete Zukunft |
| 1887 (明治 20) | 獨逸学方針 (完) | | 時 | 1.現在★ Gegenwart Präsens | | 2.半過去 Mitvorangehenheit Imperfectum | 3.過去★ Vergangenheit Perfectum | 4.大過去 Vorvorangehenheit Plusquamperf. | 5.未來; 第一未來★ Zukunft Futurum | 6.第二未來 (第二未來) Vorzukunft Futurum exaktum |
| | 獨文組立法 | | 時期 | 1.現在 | | 2.半過去 | 3.過去 | 4.大過去 | 5.未來 (第一未來) | 6.過去未來 (第二未來) |
| 1888 (明治 21) | 英獨両語雙学自在 (全) | | 時 | 1.現在 Present | 3.Perfect. (?) | Imperfect | 3.Perfect (?) | 4.Pluperfect | 5.1st Future | 6.2nd Future |
| 1891 (明治 24) | 獨逸学捷徑 (全) | | 時 | 1.現在 Präsens | | 2.半過去 Imperfect | 3.過去 Perfect | 4.大過去 Plusquamperf. | 5.第一未來; 常ノ未來 Futur I | 6.第二未來; 過去未來 Futur II |
| | 獨逸文法教科書 (全) | | 時 | 1.現在★ (特続) Präsens | 2.現在過去 (結了) Perfect | 3.過去 (特続) Imperf. | 4.大過去 (結了) Plusquamperf. | 5.大過去 (結了) Plusquamperf. | 5.未來 (第一未來)★ (特続) Futurum I | 6.過去未來 (第二未來) Futurum exaktum Futurum II |
| 1894 (明治 27) | シェーフエル氏文典解説 (上下) [嶋約 翰] | | 時ノ形 | 1.現在★ Gegenwart Präsens | | 4.半過去 Mitvorangehenheit Imperfect | 2.過去★ Vergangenheit Perfect | 5.大過去 Vorvorangehenheit Plusquamperf. | 3.未來 (第一未來)★ | 6.第二未來 (第二未來) Vorzukunft Futurum exaktum |
| | 獨逸文典 (詞論) | | 時 | 1.現在 Gegenwart Präsens | | 2.半過去 | 3.過去 Vergangenheit Perfect | 4.大過去 Vorvorangehenheit Plusquamperf. | 5.未來 Zukunft Futurum | 6.第二未來 (第二未來) Vorzukunft Futurum exaktum |

(表 19-1)

| 年号 | 書名 | 時制 | Zeit | Präsens (ich liebe) | Perfekt (ich habe geliebt) | Imperfekt (ich liebte) | Perfekt (ich habe geliebt) | Plusquamperfekt (ich hatte geliebt) | Futur (ich werde lieben) | Futur exaktum (ich werde geliebt haben) |
|------------|-------------|----|------|---|---|--|---|--|---|---|
| 1897(明治30) | 新撰獨逸文法指針 | | 時 | 1. 現在★ | 2. 現在過去 vollendete Gegenwart Perfektum | 2. 半過去 3. 半過去 dauernde Vergangenheit Imperfekt | 3. 過去★ | 4. 大過去 | 5. 未來(第一未來)★ 5. 未來(第一未來) dauernde Zukunft Futurum | (第二未來)6. 過去未來 (第二未來)6. 過去未來 vollendete Zukunft Futurum exaktum |
| | 三谷獨逸文典 | | 時 | 1. 現在 dauernde Gegenwart Präsens | 2. 現在過去 vollendete Gegenwart Perfektum | 2. 半過去 dauernde Vergangenheit Imperfekt | 3. 過去★ | 4. 大過去 vollendete Vergangenheit Plusquamperf. | 5. 未來(第一未來) dauernde Zukunft Futurum | (第二未來)6. 過去未來 vollendete Zukunft Futurum exaktum |
| | 獨逸作文錦囊(完) | | 時 | 1. Präsens | | 2. Imperfekt | 3. Perfect | 4. Plusquamperf. | 5. Futur I | 6. Futur II |
| 1898(明治31) | 新編獨逸語獨修 | | | 1. 現在 | 3. 既成現在 (他の過去) | 2. 過去 (他の半過去) | 3. 過去★ | 4. 既成過去 (他の大過去) | 5. 未來 | 6. 既成未來 (他の第二未來) |
| | 新式獨逸文法詳解 | | 時 | 1. 現在 Präsens Gegenwart | | 2. 半過去 Imperfekt Halbvergangenheit | 3. 過去 Perfekt Ganzvergangen- heit(全過去) | 4. 大過去 Plusquamperf. Vorvergangenheit | 5. 未來 Futurum Zukunft | 6. 第二未來 Futurum exaktum Vorzeitpunkt |
| 1900(明治33) | 和文獨譯獨逸作文獨修 | | | 現在 | 現在過去 | 過去 | | 大過去 | 未來 | 未來過去 |
| 1901(明治34) | 獨逸文法詳解 | | 時 | 1. 持續現在 (現在) währende Gegenwart Präsens | 2. 既終現在 vollendete Gegenwart | 3. 持續過去 währende Vergangenheit Imperfekt | | 4. 既終過去 (大過去) vollendete Vergangenheit Plusquamperf. | 5. 未來 währende Zukunft Futurum absolutum Futurum I | (第二未來)6. 既成未來 vollendete Zukunft Futurum exaktum Futurum II |
| | 實用獨逸語学 | | | 現在 | 完了現在 | 過去 | | 大過去 | 未來 | 未來過去 |
| | 簡明獨逸文典 | | 時 | 1. 現在 Präsens | 2. 現在過去 Perfekt | 3. 過去 Imperf. | | 4. 大過去 Plusquamperf. | 5. 未來 Futurum | 6. 未來過去 Futurum exaktum |
| 1903(明治36) | 邦語獨逸文典 | | 時称 | 1. 現在・継続 Präsens Gegenwart | ▲ 3. 現在過去 Perfekt | 2. 過去 Imperfekt | 2. 過去 去 | c) 過去・完了 Plusquamperf. | a) 第一未來 (未來・継続) Futurum | b) 第二未來 (未來・完了) Futurum exaktum |
| | 和文獨譯練習 | | | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 Perfekt | Imperfekt | | 4. 大過去 Plusquamperf. | 5. 未來 Futurum | 6. 未來過去 Futurum exaktum |
| | 獨逸語獨修書 | | 時 | 1. 現在 | 3. 現在過去 現在過去 | 2. 過去 過去 | | 4. 大過去 | 5. 第一未來 | 6. 第二未來 |
| | 受験応用獨逸作文詳解 | | | | | | | | | |
| | 獨逸文法屈曲變化一覽表 | | | 1. Gegenwart Praesens | | 2. Mitvergangenheit Imperfektum | 3. Vergangenheit Perfectum | 4. Vorvergangen- heit Plusquamperf. | 5. Zukunft Futurum I | 6. Vorzeitpunkt Futurum II |
| | 初学自修獨逸語速成 | | 時 | 1. 現在 | | 2. 過去 (旧:半過去) | 3. 近過去 (旧:過去) | 4. 大過去 | 5. 未來 未來不定 | (第二未來)6. 未來既成 |

| 年号 | 書名 | 時期 | Zeit | Präsens (ich liebe) | Perfekt (ich habe geliebt) | Imperfekt (ich liebte) | Perfekt (ich habe geliebt) | Plusquamperfekt (ich hatte geliebt) | Futur (ich werde lieben) | Futur exaktum (ich werde geliebt haben) |
|--------------|---------------|----|------|------------------------------------|------------------------------|--|--|--|---|---|
| 1904 (明治 37) | 獨逸文法詞学詳論 | 時 | 時 | 1. 現在 Gegenwart dauernde Gegenwart | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 半過去 (過去) Mitvergangenheit unvollendete od. dauernde Vergangenheit Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Vorvergangenheit vollendete Vergangenheit | 5. 第一未來 (又) 未來 dauernde Zukunft Futur I | 6. 第二未來 (又) 未來過去 vollendete Zukunft Vorzukunft Futur II Futurum exaktum |
| 1904 (明治 37) | 日本学生用 实用獨逸文法書 | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens dauernde Gegenwart | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt dauernde Vergangenheit | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 4. 大過去 Plusquamperfekt vollendete Vergangenheit | 5. 第一未來 Futur I dauernde Zukunft | 6. 第二未來 Futur II vollendete Zukunft |
| 1904 (明治 37) | 新撰獨逸文法問答 | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens dauernde Gegenwart | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt dauernde Vergangenheit | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 4. 大過去 Plusquamperfekt vollendete Vergangenheit | 5. 第一未來 Futur I dauernde Zukunft | 6. 第二未來 Futur II vollendete Zukunft |
| 1905 (明治 38) | 和文獨譯之基礎 | 時 | 時 | 1. 現在 Gegenwart | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt Mitvergangenheit | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Vollvergangenheit | 不定法 / 未來將來 / 時 | 6. 過去未來 |
| 1907 (明治 40) | 獨逸文法講義 | 時 | 時 | 1. 現在 Gegenwart | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt Mitvergangenheit | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1907 (明治 40) | 实用獨逸文法(上下) | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1909 (明治 42) | 獨逸語獨案内 | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1909 (明治 42) | 系統的獨逸語学 (第一卷) | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1909 (明治 42) | 獨逸文法要綱 (前編) | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1909 (明治 42) | 獨逸文法要綱 (前編) | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1910 (明治 43) | 獨逸新文典 (上中下) | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1910 (明治 43) | 獨逸文法原理 | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1913 (大正 2) | 獨逸文法原理 | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |
| 1916 (大正 5) | 獨逸文法辭典 | 時 | 時 | 1. 現在 Präsens | 3. 現在過去 vollendete Gegenwart | 2. 過去 Imperfekt | 3. 過去 (過去) (特稱) (又) 現在過去 (過去) Vergangenheit vollendete Gegenwart Perfekt | 4. 大過去 Plusquamperfekt | 5. 第一未來 Futur I | 6. 第二未來 Futur II |

(表 19-3)

表 20. 独逸語原典における時制の構成

| 年号 | 著者 | Präsens | | Präteritum | | Futurum | | | |
|-------------|-----------|--|---|--|--|---|---|--|------------------------------|
| | | Ich liebe | Ich habe geliebt | Ich habe geliebt | Ich hatte geliebt | Ich werde lieben | Ich werde geliebt haben | Ich würde lieben | Ich würde geliebt haben |
| 1574 | Oelinger | 1. Praesens | | 3. Perfektum praeteritum | 4. Praeteritum plusquamperf. | 5. Futurum primum | 6. Paulo post futurum | | |
| 1618 | Kromayer | 1. Praesens | | 3. Praet. perfectum | 4. Praet. plusquamperf. | 5. das 1ste Futurum | 6. das ander(e) Futurum | | |
| 1641 | Gueintz | 1. die gegenwertige Zeit | 2. die fast vergangene Zeit 【過ぎ去ったばかりの時】 die unvollkommene Zeit 【未完成時】 | 3. die vergangene Zeit 【過ぎ去った時】 | 4. die längst vergangene Zeit 【とくに過ぎ去った時】 | 5. die zukünftige Zeit | | | |
| 1672 | Pudor | 1. Praesens | | 3. Perf. | 4. Plusquamperf. | 5. Futurum | | | |
| 1754 | Aichinger | 1. praesens | 2. imperfektum (Unvollkommene vergangene Zeit) 【未完成過去】 | 3. perfektum (Vollkommene vergangene Zeit) 【完全過去】 | 4. plusquamperf. (Mehr als vollkommene vergangene Zeit) 【超完成過去】 | 5. futurum simplex | 6. fut. imperf. mixtum | | 8. fut. plusquamperf. mixtum |
| 1762 | Gottsched | 1. die gegenwertige Zeit | 2. die kaum vergangene Zeit 【過ぎ去ったか去らぬかの時】 | 3. die völlig vergangene Zeit 【完全に過ぎ去った時】 | 4. die längst vergangene Zeit 【とくに過ぎ去った時】 | 6. die gewiß zukünftige Zeit (fut. certum) 5. l.ich will die ungewiß zukünftige Zeit (fut. incertum) | 7. die bedingt zukünftige Zeit (futurum conditionalis) | | 【仮定未来】 【蘭学の用語では《不定時》】 |
| 1782 | Adelung | 1. die gegenw. Zeit (Präsens) | 2. die vergangene Zeit od. Präteritum | Perfektum | Plusquamperf. | Futurum absolutum | Fut. exactum | Fut. imperf. mixtum | Fut. plusquamperf. |
| | | I. Zeitformen der Gleichzeitigkeit (同時時) | | | | | | | |
| | | 1. Gegenwart 《現在》 | 2. Vorgegenwart 【前現在】 | | | | | | |
| | | II. Zeitformen der Vollendung (完成時) | | | | | | | |
| | | | | 1. Vergangenheit 《過去》 | 2. Vorvergangenheit 【前過去】 | | | | |
| | | III. Zeitformen der Bevorstehung (目前時) | | | | | | | |
| | | | | | | 1. l.ich will Zukunft 《未来》 | 3. Nachvergangenheit 【後過去】 | | |
| 1810 (文化 7) | Bernhardt | | | | | 1. l.ich will Zukunft 《未来》 | 2. l.ich wollte Vorzukunft 【前未来】 | 3. l.ich werde wollen) Nachzukunft 【後未来】 | |

| 年号 | 著者 | 時制 | Präsens | | Präteritum | | | Futurum | | | |
|-----------------|--------------------|----|--|--|---|---|--|---|--|------------------|-------------------------|
| | | | Ich liebe 《現在》 | Ich habe geliebt | Ich hatte 【前現在】 | Ich habe geliebt 《過去》 | Ich hatte geliebt 【前過去】 | Ich werde lieben haben | Ich würde geliebt haben | Ich würde lieben | Ich würde geliebt haben |
| 1828 (文政 11) | Schmitt- henner | | 1. Gegenwart 《現在》 | | 2. Vorgegenwart 【前現在】 | 4. <i>Vergangenheit</i> 《過去》 | 5. <i>Vorvergangenheit</i> 【前過去】 | 3. Nachgegenwart 【後現在】 7. <i>Zukunft</i> 《未來》 【 <i>ich will</i> 】 8. <i>Vorzukunft</i> 【 <i>ich wollte</i> 】 【前未來】 9. <i>Nachzukunft</i> 【 <i>ich werde</i> 】 【後未來】 wollen】 | 6. <i>Nachvergangenheit</i> 【後過去】 | | |
| 1830 (天保 1) | H. Bauer | | 1. Präsens der Gegenwart 【現在の現在】 | 2. Präteritum der Gegenwart 【現在の過去】 | 4. Präsens der <i>Vergangenheit</i> 【過去の現在】 | | 5. Präteritum der <i>Vergangenheit</i> 【過去の過去】 | 3. Futurum der Gegenwart 【現在の未來】 6. <i>Fut. der Vergangenheit</i> 【過去の未來】 【 <i>ich wollte</i> 】 7. Präsens der <i>Zukunft</i> 【未來の現在】 9. <i>Fut. der Zukunft</i> 【 <i>ich werde wollen</i> 】 【未來の未來】 | 8. Zweites Fut. 《第二未來》 Prät. der <i>Zukunft</i> 【未來の過去】 <i>Fut. secundum Fut. exactum</i> 《精密未來》 | | |
| 1838 (天保 9) | Heyse (第 5 版) | | 1. die <i>während</i> Gegenwart 【繼續現在】 Präsens imperfectum Präsens | 2. die vollendete Gegenwart 【完成現在】 Praesens perfectum Perfectum | 3. die <i>während</i> <i>Vergangenheit</i> 【繼續過去】 Praeteritum imperfectum Imperfectum | | 4. die vollendete <i>Vergangenheit</i> 【完成過去】 Praeteritum perfectum Plusquamperfectum | 5. die <i>während</i> <i>Zukunft</i> 【繼續未來】 Futurum simplex od. absolutum Futurum | 6. die vollendete <i>Zukunft</i> 【完成未來】 Futurum perfectum Fut. exactum | | |
| 1864 (元治 1) | T. Becker | | 1. Gegenwart (Präsens) 《現在》 die fortdauernde oder unvollendete Tätigkeit 1. Präsens die unvollendete Gegenwart 【未完成現在】 | | b) <i>Mitvergangenheit</i> (Imperf.) 【共時過去】 2. Imperfectum die unvollendete <i>Vergangenheit</i> 【未完成過去】 | a) <i>Vergangenheit</i> (Perf.) 《過去》 2. <i>Vergangenheit</i> | c) <i>Vorvergangenheit</i> (Plusquamperf.) 【前過去】 3. Futurum die unvollendete <i>Zukunft</i> 【未完成未來】 | a) <i>Zukunft</i> (Futur) 《未來》 3. Futurum die unvollendete <i>Zukunft</i> 【未完成未來】 | b) <i>Vorzukunft</i> (Fut. exactum) 【前未來】 | | |
| 1870 (明治 3) | Gurke | | | 4. Perfectum die vollendete Gegenwart 【完成現在】 | | die vollendete Tätigkeit (完成した行為) 5. Plusquamperf. die vollendete <i>Vergangenheit</i> 【完成過去】 | | 6. <i>Fut. exactum</i> die vollendete <i>Zukunft</i> 【完成未來】 | | | |

(表 20-2)

| 年号 | 著者 | 時制 | Präsens | | | Präteritum | | | Futurum | | |
|--------------------------|------------------|----|--|---|--|--|--|--|--|--|-------------------------|
| | | | Ich liebe | Ich habe geliebt | Ich hatte | Ich habe geliebt | Ich hatte geliebt | Ich werde lieben | Ich werde geliebt haben | Ich würde lieben | Ich würde geliebt haben |
| 1871 (明治4) | Adler (英語獨文典) | | 1. Present | 3. Perfect | 2. Imperfect | 4. Pluperfect | 5. Simple Future | 6. Future Perf. | | | |
| 1878 (明治11) | Kaderly | | 1. Gegenwart 《現在》★ Präsens | 4. Vergangenheit 【過ぎ去った時】 Perfectum | 2. die jüngst- verflossene Zeit 【過ぎ去ったばかりの時】 Imperfectum | 5. die völlig vergangene Zeit 【完全に過ぎ去った 時】 Plusquamperf. | 3. Zukunft★ 《未来》 das 1ste Futurum | 6. die zukünftig verflossene Zeit 【過ぎ去った未来】 das 2te Futurum | die unvollendete 1ste Bedingungs- form 【未完成第一条件 法】 | die voll. 2te Bedingungs- form 【完成第一条件 法】 Conditionale Perf. | |
| 1882 (明治15) | Schäfer | | 1. Gegenwart★ (Präsens) die unvollendete Gegenwart | 2. Vergangenheit★ 【過去】 (Perfectum) | 4. Mitvergangen- heit 【共時過去】 (Imperfectum) die dauernde Vergangenheit | 5. Vorvergangenheit (Plusquamperf.) 【前過去】 die vollendete Vergangenheit | 3. Zukunft★ (Futurum) 《未来》 die unvollendete Zukunft (Futurum I) | 6. Vorzukunft 【前未来】 die vollendete Zukunft (Futurum II) | 〔★印は《主時》 Hauptzeit 無印は《副時》 Nebenzeit〕 | | |
| 1883 (明治16) | Lehmann | | 1. Gegenwart★ (Präsens) (die unvollendete Gegenwart 【未完成現在】) | 3. Vergangenheit★ (Perfectum) Nebenzeit《副時》； Bezügliche od. abhängige Zeit《非関係時》 | 2. Mitvergangen- heit 【共時過去】 (Imperfectum) die unvollendete Vergangenheit 【未完成過去】 | 4. Vorvergangenheit (Plusquamperf.) 【前過去】 die vollendete Vergangenheit 【完成過去】 | 5. Zukunft★ (Futurum) (die unvollendete Zukunft 【未完成未来】) | 6. Vorzukunft 【前未来】 die vollendete Zukunft 【完成未来】 | | | |
| 1884~86 (明治17~ 19) | Engelien | | 1. die dauernde Gegenwart 【継続現在】 die unbegrenzte Gegenwart 【不定現在】 | 2. die vollendete Gegenwart 【完成現在】 | 3. die dauernde Vergangenheit 【継続過去】 die unbegrenzte Vergangenheit 【不定過去】 die 2te Vergangenheit | 4. die vollendete Vergangenheit 【完成過去】 die 3te Vergangenheit | 5. die dauernde Zukunft 【継続未来】 Futurum | 6. die vollendete Zukunft 【完成未来】 | | 6. das 2te Fut. | |

| 年号 | 著者 | 時制 | Präsens | | Präteritum | | | Futurum | | | | |
|-----------------|-----------------|----|--------------------------------------|------------------|--|------------------|-------------------|--|-------------------------|------------------|--|--|
| | | | Ich liebe | Ich habe geliebt | Ich hatte geliebt | Ich habe geliebt | Ich hatte geliebt | Ich werde lieben | Ich werde geliebt haben | Ich würde lieben | Ich würde geliebt haben | |
| 1885 (明治 18) | Wilmanns | | einfache Tempora 《單一時》 I. Präsens | | 2. Präteritum (absolutes Tempus) | | | Zusammengesetzte Tempora 《複合時》 3. Futurum I (relatives Tempus) | | | 6. Futurum II Fut. exactum | |
| 1903 (明治 36) | Lyon und Polack | | I. Gegenwart 《現在》 ★ | | 2. Vergangenheit od. Präteritum Vergangenheit 《過去》 Mitvergangenheit ★ 【共時過去】 Iste Vergangenheit Imperfectum | | | Vorvergangenheit 【前過去】 3te Vergangenheit Plusquamperf. | | | 3. Zukunft od. Futurum Zukunft ★ 【未來】 Futurum Fut. exactum | |
| | | | Präsens | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |

(表 20-4)

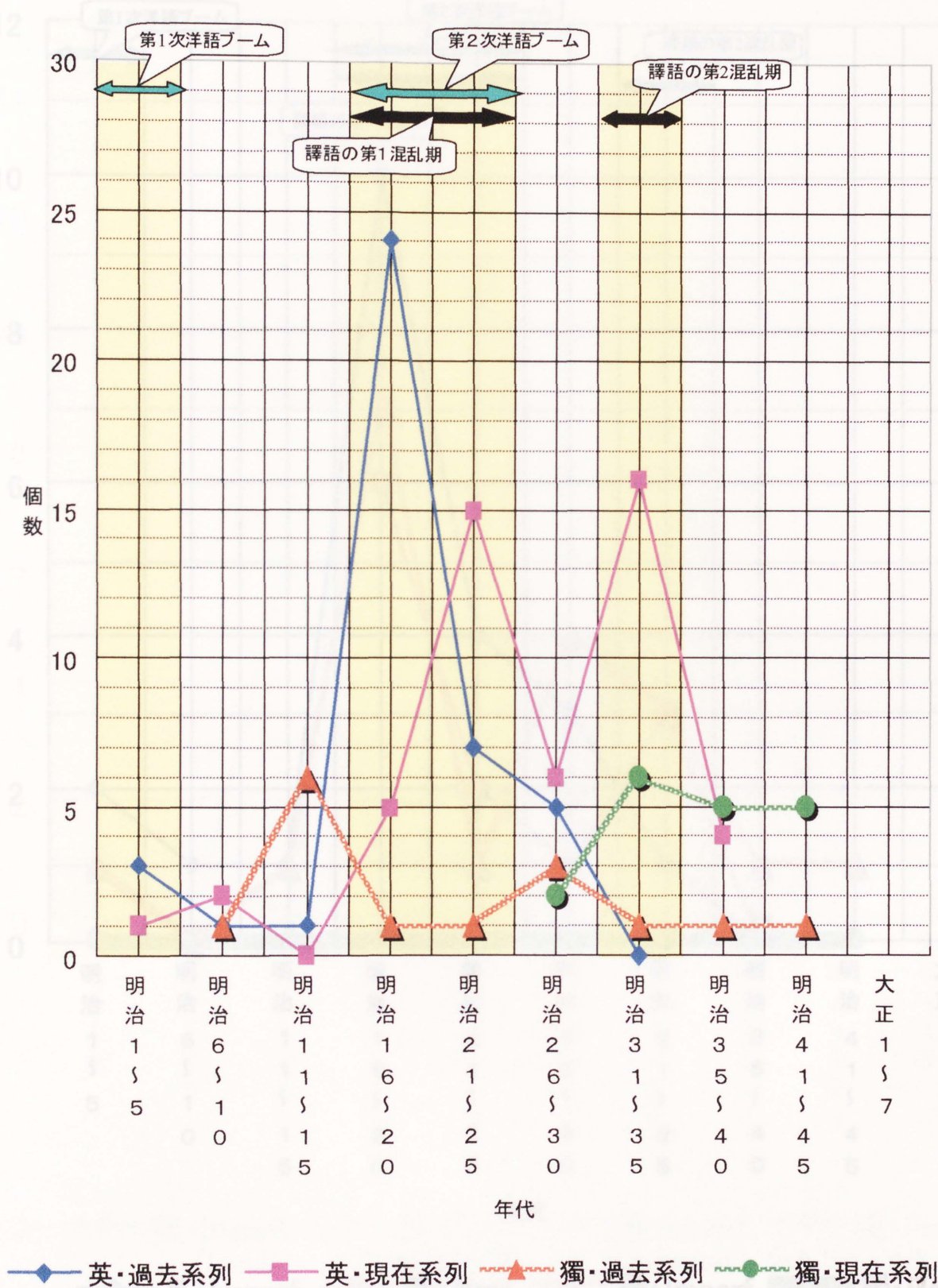
表 21. 明治期の英・独文典における Imperf. の訳語分類

| | 蘭 | 英 | | 独 | |
|---------------------------------|--------------|--|---|-----------------------------|-------------------------------|
| (1857) 安政4 (1887) ～慶応3 | 過去ノ現在 半過去 | | | | |
| 明治1～5 | 半過去 関係過去 | 半過去(4) 第一過去(1) | | | |
| 明治6～10 | | 半過去(1) 過去(1) | | 半過去(1) | |
| 明治11～15 | | 半過去(1) | | 半過去(1) | |
| 明治16～20 | | 半過去(10) 過去(11) 第一過去(4) 第一ノ過去(1) 第一ノ過往(1) | 過去不充分(1) 不完過去(1) 不完結過去(1) 不全成(1) 不定過去(1) 過去不定(2) | 半過去(7) | |
| 明治21～25 | | 半過去(4) 過去(13) 第一過去(2) | 不完過去(1) 不完結過去(1) 不定過去(1) | 半過去(1) 過去(1) | |
| 明治26～30 | | 半過去(3) 過去(9) 既往ノ現在(1) | 不定過去(1) | 半過去(4) 過去(1) | |
| 明治31～35 | | 過去(9) ?半過去(1) | 不定過去(1) 不定体過去(1) 過去時不定形(1) 過去不定時(1) | 半過去(3) 過去(5) 在来ノ過去(1) | 持続過去(1) 完了現在(1) |
| 明治36～40 | | 過去(3) | | 半過去(1) 過去(7) | 不完了過去(1) |
| 明治41～45 | | 過去(2) | 過去時不定形(1) | 半過去(1) | 継続過去(1) 連続過去(1) 過去持続(1) |

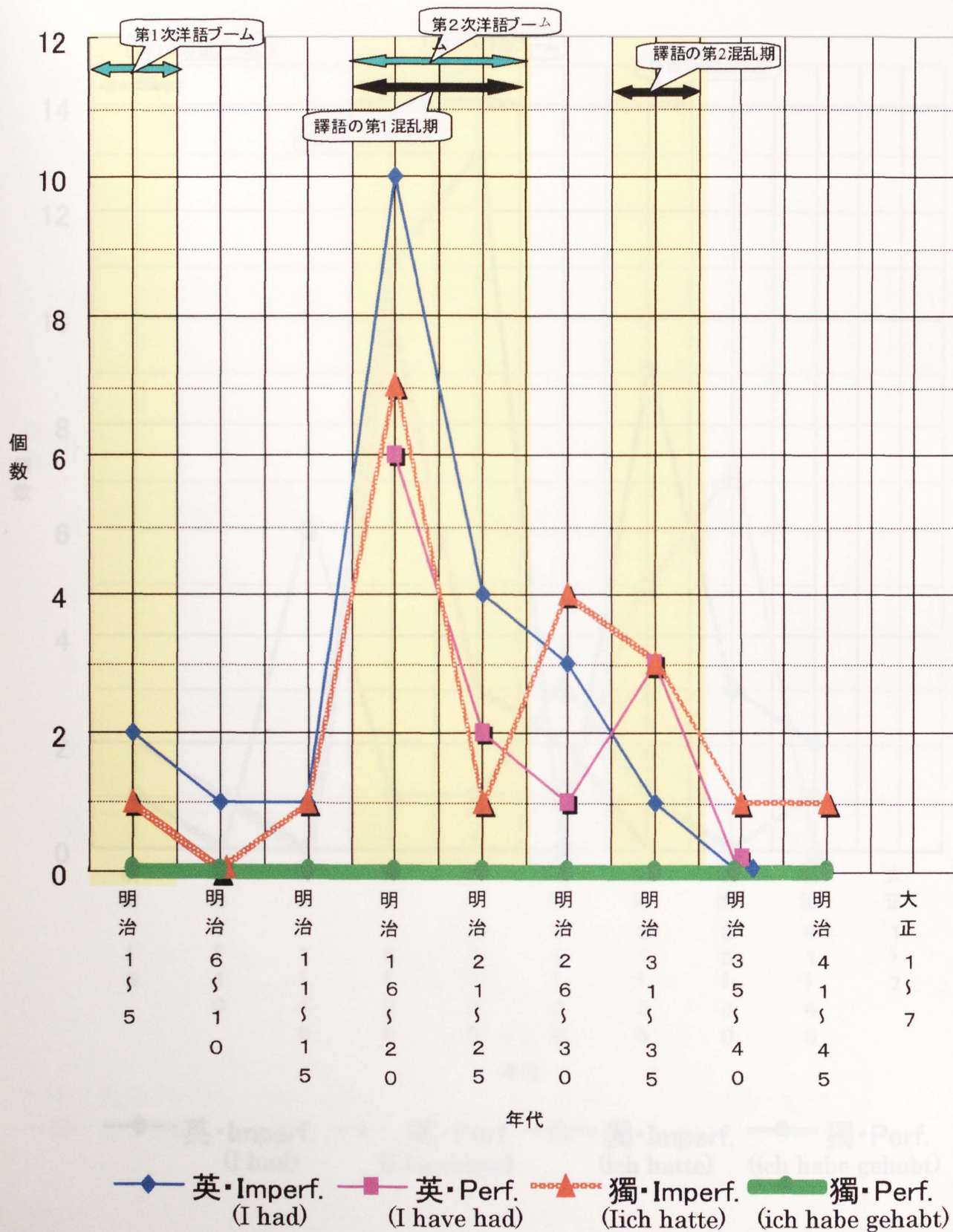
表 22. 明治期の英・独文典における Perf. の訳語分類

| | 蘭 | 英 | | 独 | |
|---------------------------------|-------------|---|--|-------|---|
| (1857) 安政4 (1857) ～慶応3 | 過去 全過去 | | | | |
| 明治1～5 | 全成過去 成過去 | 過去(2) 第二過去(1) | 過去充分(1) | | |
| 明治6～10 | | ?過去(1) | 複合現在(1) 既然現在(1) | 過去(1) | |
| 明治11～15 | | 充過去(1) | | 過去(6) | |
| 明治16～20 | | 半過去(6) 過去(10) 第二過去(4) 第二ノ過去(1) 第二ノ過往(1) 全成(1) 完結過去(1) | 現在充分(2) 充分現在(1) 完結現在(1) 現在ノ完成(1) | 過去(1) | |
| 明治21～25 | | 半過去(2) 過去(3) 第二過去(2) 完結過去(1) | 完全現在(2) 現在完全(1) 完結現在(1) 充分現在(4) 完成現在(1) 現在完成(2) 完現在(1) 定現在(1) | 過去(1) | |
| 明治26～30 | | 半過去(1) 過去(2) 充過去(1) 充分過去(1) | 充分現在(2) 現在完成(1) 已然現在(1) | 過去(3) | 現在過去(2) |
| 明治31～35 | | 半過去(3) | 充分現在(2) 完了体現在(1) 完了現在(5) 現在完了(2) 現在時完了形(1) 完成現在(1) 現在過去(1) | 過去(1) | 現在過去(3) 既然現在(1) 既終現在(1) 完了現在(1) |
| 明治36～40 | | 完成現在(2) 十分現在(1) 現在完了(1) | | | 現在過去(5) 近過去(1) |
| 明治41～45 | | | | 過去(1) | 現在過去(1) 現在完成(1) 完成現在(1) 完了現在(1) 現在完了(1) |

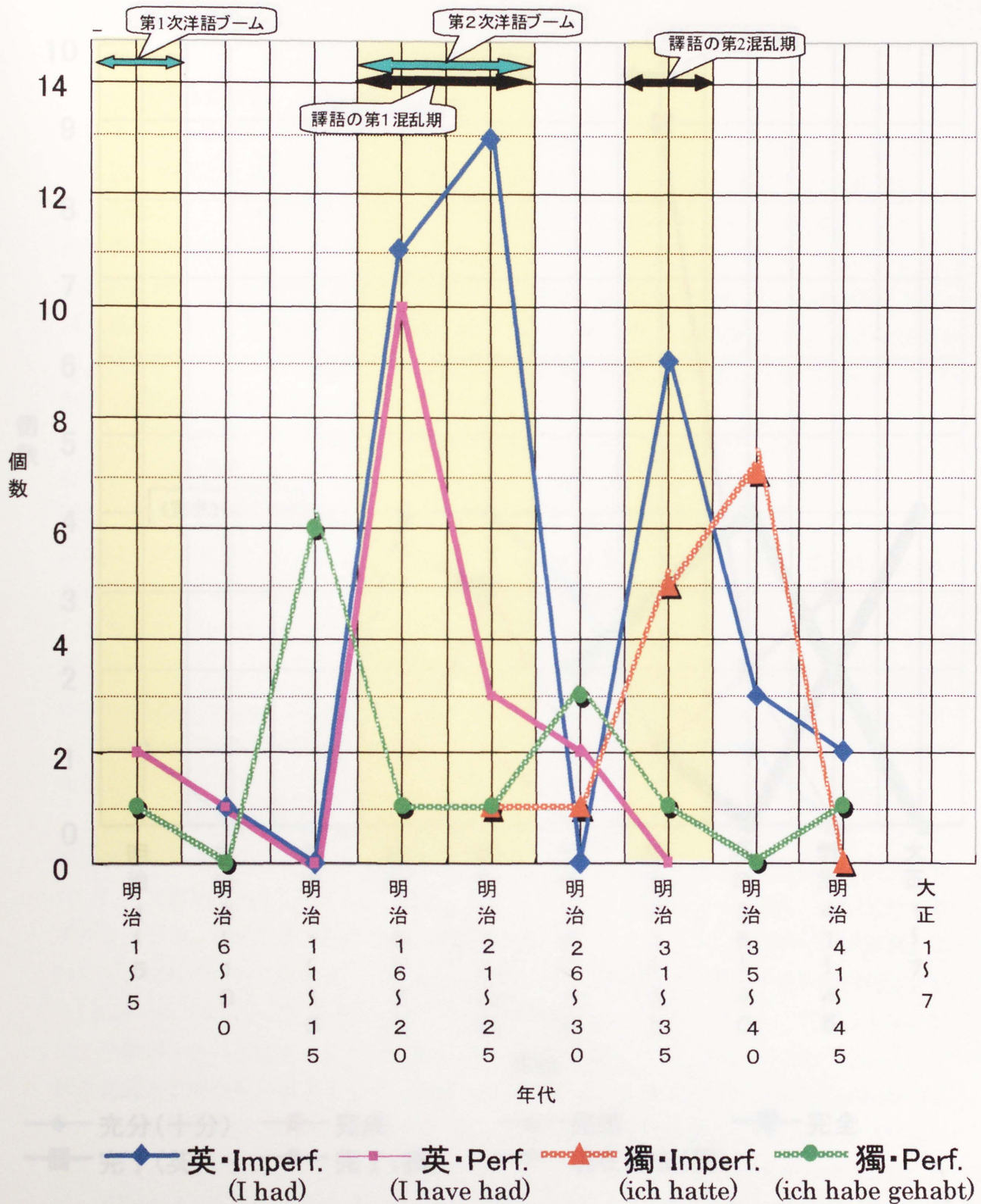
グラフ2: Perf. に対する訳語の時制的動向



グラフ3: 訳語《半過去》の動向



グラフ4: 訳語《過去》の動向 とその動向



グラフ5: "perfect"に対する訳語の種類とその動向



う側面から見た明治^(1883~1892)16~25年の時代状況である。

3. 訳語の特徴

3.1. 英文典の場合

さて、上に挙げた英・独文典中の訳語で最も特徴的なのは、Perf.(I have had)が過去系列と現在系列とに二分されることである。それは英語において特に甚だしい。表 22 (217 頁)を見ると、この明治^(1883~1892)16~25年の10年間で訳語の紛糾の最も著しい時期であるが、この時期、独逸語の Perf. (ich habe gehabt) の訳語は《過去》ただひとつしかない。ところが英語においては、明治16~20年の前半5年間は、《過去》を中心とする過去系列7種、現在系列4種という合計11種の訳語が現れている。続く後半の5年間では、現在系列が8種と大きい伸びを示す一方で、逆に過去系列が4種に減少、しかも、主要な訳語がどれか決めかねるほどの乱立状態に陥ってしまっている。

これをグラフ化してその動向を数量的に把握してみると、219~222頁のようになる。ただし、これらのグラフには版数が考慮されていないという欠点があるため、調査できた版数の多い明治16~25年はグラフの山が高くなり、版数の少ない明治26~30年と36年以降は、逆に谷間になってしまっている。また、出版数の多い英語に比べてその少ない独逸語の数値が必然的に低くなっているが、大体の推移の傾向はわかるかと思う。

グラフ2 (219頁)において、英語の Perf.に対する過去系列の訳語は、明治16~20年間でピークである。表 17 (195頁)を見ると、明治初年以來この時期までの主要英文典は Pinneo, Quackenbos, Brown であるが(表 23[218頁])、いずれも3過去時制を採り、Perf. (I have had)を過去時制としている。過去系列の用語が主流を占めているのはこのためであろう。

ところが、明治^(1888~1892)21~25年になると、現在系列の数値が過去系列を追い抜いてグラフの山が逆転している。その原因は、Swinton 文典の登場である。その最初の影響は、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17年10月、『文典和解英文指針』に、《過去》と《半過去》の逆転となって現れ、続いてそのわずか2ヵ月後、かの著名な英語学者・斎藤秀三郎が、『スウキントン氏英語学新式直譯』において、当時の通例に反して<I have had>の形式を《半過去》、単独の過去形に相当する<I had>の方を《過去》と逆に訳し、しかも前者にく他ノ文法ノ過去>、後者にく他ノ文法ノ半過去>という注釈を付した(第五十四 働詞ノ変化(二) 示時形: 232頁)。この注釈は斎藤秀三郎以前には見られず、以後、この《過去》と《半過去》の用法的逆転が始まる。この逆転現象は Nesfield 文典が現れるまで明治20年代を通じて行われ、表 17 (195頁)では12例を数えることができる(このうち、斎藤と同じ注釈を持つものは2例)。更に、<have+p.p.>に《半過去》ではなく《充分現在》《完全現在》等を充てているものを加えると、この時期、<have+p.p.>に関して現在系列の訳語を持つのは、そのほとんどが

Swinton の翻訳文典である。

明治^(1898~1902)31~35年の期間に入ると、現在系列が再び大きくポイントを伸ばしたのに対し、過去系列は遂にゼロとなり、明暗を分けた。表 17 (195 頁) によると、明治⁽¹⁸⁹⁹⁾32年『教科摘要新式英語学獨修』が Perf. (I heve loved) = 《過去》の最後である。

表 21 (216 頁) と表 22 (217 頁) ではあまり目立たないが、この明治 31~35 年も一種の混乱期である。この時期には Imperf. (I loved) を《過去時不定形》、Perf. (I heve loved) を《現在時完了形》と呼ぶ従来にはない全く新しいタイプの訳語が登場していて注目されるが、これは Nesfield 文典に起因している。表 17 (195 頁) で明治⁽¹⁸⁹⁷⁾30年『英文法規範』(中村宗次郎) 以下明治⁽¹⁹⁰⁰⁾33年頃までの Nesfield 関係の文典を見ると、その時制構成は従来の 6 時制と全く異なり、<三時>に<四形>を掛け合わせたものから成っており、この掛け合わせが《現在時完了形》のような形の用語を生み出していることがわかる。現代の洋語文法で使用されている《現在完了》はここから生じたもので、その初出は明治⁽¹⁸⁸⁸⁾31年 10 月の、畔柳都太郎『邦語英文典』である。畔柳は

| | | | | |
|-------|------------|------------|---------|------------------|
| tense | Present | Past | Future | |
| 三時称 | ： 現在、 | 過去、 | 未来 | |
| form | Indefinite | Continuous | Perfect | Perf. Continuous |
| 四 体 | ： 不定、 | 連続、 | 完了、 | 完了連続 |

を組み合わせて<三時ト十二形>を設定している (§ 287~302) 註 52。

3.2. 独逸語の場合

一方、独逸語においては、過去系列が明治期を通じて存続し、現在系列の登場が遅かったことがはっきりとわかる。

表 19 (208 頁) によると、独逸語の場合も、Perf. (ich habe gehabt) は明治初年以來《過去》、Imperf. (ich hatte) は《半過去》であり、Perf. に対する現在系列の訳語はその陰に隠れていた。グラフ 2 (219 頁) において現在系列の用語の使用が始まるのは明治 26~30 年であるが、その用語は《現在過去》であり、それをを用いたのは明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年の、「三太郎の教科書」として有名な『獨逸文法教科書 (全)』である。以後、明治⁽¹⁹¹⁰⁾43年の《完了現在》にその座を譲り渡すまで、《現在過去》は Perf. の主要な訳語となるが、Perf. を《過去》とするものも依然として存続したため、独逸語は英語より約 10 年遅れて、明治 30 年代に過去系列と現在系列の混乱期を経験することとなる。表 19 (208 頁) の、明治⁽¹⁹⁰⁴⁾37年『獨逸文法詞学詳論』における抹消線は、この教本を使用した誰かが鉛筆で書き込んだもので、新傾向に従って旧来の用語が消されている。

ところが独逸語の場合、英語と違って、《半過去》は Perf. (ich habe gehabt) の訳語とはならなかったのである。《過去》は Imperf. (ich hatte) に転用されたにもかかわらず、である。独逸語の《過去》は、(ich habe gehabt) を指すか (ich hatte) を指すかという動揺を経験したのに、《半過去》はそれを経験しなかった。即ち、《過去》と《半過去》の逆

転現象は半分しか起こらなかったということになる。

3.3. 《半過去》と《過去》の全体的動向

グラフ3 (220 頁)において、《半過去》＝＜独 Perf. : ich habe gehabt＞に対するグラフがゼロであることが、このことを裏付けている。《半過去》＝＜独 Imperf. : ich hatte＞のグラフは明治末年まで存続し、その一方、**グラフ4** (221 頁)では、明治 21～25 年から《過去》＝＜独 Imperf. : ich hatte＞のグラフが始まっている。ここにおいて独逸語の Imperf. に関する訳語の転換が始まったのである。表 19 (208 頁)を見ると、明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年『英獨両語雙学自在(全)』からである。逆に、従来の対応である《過去》＝＜独 Perf. : ich habe gehabt＞は、ここから減少の一途をたどっている。

グラフ3 (220 頁)においては、英語の《半過去》が、従来の Imperf.(I had)に対する訳語としても、Perf.(I have loved)に対する訳語としても、明治 36～40 年にともにゼロになっているのが、殊に印象的である。《半過去》＝＜英 Imperf. : I had＞の最後は明治⁽¹⁹⁰²⁾35年『英語提要』、《半過去》＝＜英 Perf. : I have had＞の最後は明治⁽¹⁹⁰¹⁾34年『新編英文典問答』である。

《半過去》＝＜英 Imperf. : I loved＞のポイントが大きく落ち込んだ明治 21～25 年に、**グラフ4** (221 頁)の《過去》＝＜英 Imperf. : I had＞が最高値を示し、《過去》＝＜英 Perf. : I have had＞は、逆にその数値を大幅に下げている。ここが《過去》と《半過去》の用法的逆転の生じた時点である。以後、《過去》＝＜英 Perf. : I have had＞のグラフは下がり続け、明治 31～35 年を以て数値ゼロとなる。《過去》＝＜英 Imperf. : I had＞も下降線を辿っているが、これは、前述のとおり調査数が少ないためで(明治 11～15 年も同様)、それが増えれば、恐らく上昇線を描くものと推測される。

結局《過去》は、その内容を Perf.(ich habe gehabt)(I have had)から Imperf.(ich hatte)(I had)に変え、更に現代にまで残ったが、《半過去》は英語・独逸語ともに明治 30 年代前半を以て消滅した。《半過去》は、安政年間に和蘭語学習より生まれた訳語である。ここに、江戸期——より正確に言えば安政～幕末期に始まった洋語学の終焉の時点を置くことができるように思う^{注53}。

4. 英語と独逸語における訳語の問題点

英・独間の Perf.(I have had)(ich habe gehabt)と Imperf.(I had)(ich hatte)に対する訳語を比較して気が付くのは、両語間における訳語の共通性の低さである。英・独ともに Imperf.=《半過去》、Perf.=《過去》から出発したものが、英語が明治 16～25 年の混乱期に入るとともに、両語間の隔たりは大きくなっていく。殊に Perf.においてそれは著しく、英・独の現代文法が《現在完了》で統一されているのが不思議なほどである。

グラフ5 (222 頁)は“Perfect”の部分に対する主な訳語の使用状況をグラフ化したもの

のであるが、意外なことに、明治 16～25 年の英語における“Perfect”の訳語は《完了》ではまだなく、《充分》を主にして、他に《完全》《完成》《完結》等が使用されている。《完了》が現れるのは、もうひとつの訳語の混乱期である明治⁽¹⁸⁹⁸⁾31年10月の畔柳都太郎『邦語英文典』であり、ここに至って漸く英語の Perf.は「《完了》した現在」の時代に入る。

他方、独逸語で《完了》系の用語が使用されるのは、明治⁽¹⁹⁰¹⁾34年に《完了現在》が1例ある他は、専ら40年代に入ってからであり、それ以前は《現在過去》が主流である。英・独間共通の訳語は、

| | |
|------------------|-------------|
| 《現在過去》(英1例：独11例) | 《既然現在》(1：1) |
| 《現在完成》(2：1) | 《完成現在》(2：1) |
| 《完了現在》(5：2) | 《現在完了》(3：1) |

の6種のみ、その使用数はごく限られており、使用年代も両語間で隔っている場合が少なくない。例えば《現在完成》の初出は、英語では明治⁽¹⁸⁸⁸⁾21年、独逸語では明治⁽¹⁹⁰⁹⁾42年で、その間21年の開きがあり、同年代の共通使用は明治30年代前半の《完了現在》くらいである。Perf.の訳語における英・独間の共通性は極めて低いと言わざるを得ない。同様に、これは Imperf.についても言えることである。

以上のことから、Imperf.(I had)(ich hatte)と Perf.(I have had)(ich habe gehabt)に関する訳語については、次のことが問われねばならないであろう。

- ① 英語において、明治初年から訳語の第一混乱期である明治20年代にかけて Imperf.(I had)：Perf.(I have had)=《半過去》：《過去》とされたのは誤りか。
- ② 英語が Imperf.(I had)：Perf.(I have had)=《過去》：《半過去》《充分現在》等になった時期に、独逸語においてはなお Imperf.(ich hatte)：Perf.(ich habe gehabt)=《半過去》：《過去》である。これは、独逸文典著・訳者の誤りか。
- ③ なぜ独逸語においては、《半過去》が Perf.(ich habe gehabt)の訳語にならなかったか。

①②を糾すためには、前章で行ったように、当時の英・独文典におけるこの両時制の定義を考察しなければならない。それによって、③の理由もまた明らかになるであろう。

ただしその場合、「Perf.は『現在』と関係する」という現代文法の先入観から自由になることが必要である。特に英語に関してはそうである。さもないと、これらの問いに対する答えを当時の人々の<誤解><錯誤>に帰する安易さから逃れられないように思われるからである。

第三節 蘭・英における Perf.と Imperf.の用法的逆転

——問題点①の考察——

1. 訳語の逆転

Imperf.(I had)を《半過去》、Perf.(I have had)を《過去》と訳した明治期の日本人は、本当にこの両時制の理解を誤ったのか。

確かに現代人の文法観からすると、Perf.が《過去》なのは明らかに間違いであると人は判断するであろう。しかし表 15 (154 頁) と表 18 (202 頁) に拠ると、当時は、英語に限らず蘭・仏・独の原典自体がいずれも三過去時制を採用し、Perf.(I have had)を、Imperf.(I had)・Plusquamperf.(I had had)とともに過去としていることがわかる。幕末から明治期前半にかけての主要な英文典である Murray (1795; 1797; 1840; 1852; 1861)、Pinneo、Quackenbos、Brown も例外ではなく、Perf.は過去時制である。

ところが、英語に和蘭語の訳語を当てはめた時、ひとつの問題が生ずる。即ち、和蘭語のために考え出された時制名称と英語原典が説いている定義内容が合致しないのである。その原因は、和蘭語の<ik hadde>と英語の<I had>、和蘭語の<ik heb gehad>と英語の<I have had>の用法が逆転していたことである。

この「ねじれ現象」は、かつては英文法にも存在していた。表 18 (202 頁) を見れば判るように、英文法に携わった学者は、その発生の最初期から羅典語の用語を踏襲し、<I had>を Imperfect【不完全過去】、<I have had>を Perfect【完全過去】と呼んできた。最初の英文典の著者 Bullokar (1586) では、前者は、Imperfect の語こそ使われていないが、単なる<preter tense>【過去時制】であり、後者は<preter - perfect - tense>【過去完全時制】と呼ばれ、Perfect の呼び名が使われている。その 35 年後の Alexander Gill の英文典 (1621) は、用語のみならず、定義さえも羅典文典に倣って、前者が<Imperfectum>、後者が<Perfectum>である。ところが、『英文鑑』(天保 11) が翻訳された当時の英語では、<I had>の実際の用法は【完全過去】であって、「現在」に関わる【不完全過去】ではなく、逆に<I have had>は「現在」との関係性を有しているので、【完全過去】ではない。つまり、羅典語譲りの名称と実際の英語の用法が逆転的にねじれているのに、その「ねじれ」が修正されずにそのままになっているのである。従って、『英文鑑』の原典である Murray の時代の英文典では、<I had>は、【不完全過去】なのに「動作が完全に終了」し、<I have had>は、【完全過去】なのに「動作が<現在>にまで関係している」ことになっているのである。何故当時の文法家たちが、英語の実情に合わせて名称を変えなかったのか

不思議な気がするが、それだけ 1000 年続いた羅典語文法の呪縛から逃れることは至難の技だったのだろうと思うしかない。

英語原典の時制が、完了・非完了の 6 時制方式に向かって変動し始めるのは、G. Brown が言うように、漸く 1830 年代(天保1)に入ってから——即ち、歴史比較言語学の興隆により Perf. の現在性が認められるようになってからである。この時以降、Imperfect【不完全過去】であった <I had> の名称は、その内容に相応しく Past となり、Preterperfect【完全過去】であると理解されてきた <I have had> は Present Perfect に変わる。この新時制は英語にとっては福音で、旧時制システムの崩壊により、英語の <I had> と <I have had> はやっとなり、その名称と定義内容を一致させることができたのであった。

サンسكريット語や希臘語等の文法研究に立脚するこの新しい時制が、日本の洋語研究に明確な形を取って現われるのは、明治 17 (1884) 年以降である。特に明治 20 年代において、完了・非完了の二分法を取る Swinton の英文典が盛んに翻訳されたことが、その直接のきっかけであった。ところが、当時の日本人の洋語の基礎は和蘭語である。しかもそれは、又角的五分法を採る旧文法であるため、<ik hadde> の理解は【不完全過去】、<ik heb gehad> のそれは【完全過去】である。この 2 時制は、幕末期になると、前者が《半過去》、後者が《過去》へと呼称を変えるが、そうすると、英語原典の <I had> と <I have had> の用法はこの逆なのであるから、和蘭語を学んだ日本人の理解では、その形式だけを見て和蘭語の《半過去》と《過去》という用語を当てはめようとした場合、《過去》である <I had> が <ik hadde> に対応する《半過去》で、現在時と関係する《半過去》の <I have had> が <ik heb gehad> に対応する《過去》、ということにならざるを得ない。事実、『英文鑑』かがみから明治期 20 年代までの英文典では、この 2 時制に関する日本語の訳語名は定義内容と一致していなかったのである。要するに、和蘭語起原の名称と英語の定義内容がねじれていたのであって、この「ねじれ」を正すには、《半過去》と《過去》の使い方を逆転させるしかなかったのだ。

幕末から明治期前半にかけての英語学の上には、まず原典の時制が旧システムから新システムに交替し、それを受けて、日本語の《半過去》と《過去》が入れ替わるという二重の変化が起こっているのである。日本語の文典しか見ない場合、<I have had> を《過去》とも《半過去》とも呼ぶ現象は、確かに明治人の理解の混乱としか映らないかもしれない。これを「おもての変化」とすれば、原典に起こった変化は、言わば「裏の変化」である。しかし、表面に出てこないこの「裏の変化」を考慮して初めて、明治期に《半過去》と《過去》の用法が逆転したその根本の理由を、我々は理解することができるのである。

たとえば Swinton 文典が入ってこず、英語原典が旧時制のままであり続けたとしても、『英文鑑』かがみの訳者がそうであったように、わが日本の英語学者たちは、必ずや伝統のくびきを断ち切り、和蘭語の Perf. (ik heb gehad) の用法がしばしば英語の Imperf. (I had) の方に対応するということに気が付いて、英語における Imperf. と Perf. の日本語名を、蘭文典のそれと逆転させたであろう。それが確信されるほど、江戸～明治初年の洋語研究の質は

高い。ただ、この日本語の訳語の逆転劇が、原典においても新旧文法が並存・交代した時期に起こったが故に、その変化の様相は、なお一層複雑なものとなったのである。

2. 原書蘭文典に現れた逆転の指摘

英語の Imperf. (I had) と Perf. (I have had) の用法が、和蘭語のそれと逆転的にねじられている現象を具体的に指摘した文法書が、2冊ある。江戸幕府旧蔵洋書に含まれる Sewel と Hamelberg で、いずれも和蘭語で書かれた英文典である。

W.Sewel<泄物爾>——彼の文典は、P. Marin<麻林>と並んで、Weiland<勿以郎度>と Maatschappij<文社先生>以前の日本において好んで使用された——は、*Beknopt[e] vertoog wegens de Engelsche Spraakkunst* (1708 ;1746 ;1766)で次のように指摘している。

Niettemin zal 't niet ondienstig zyn aan te merken, dat de Engelschen veelytyds de Onvolkomen verledene tyd gebruyken, in plaats dat wy ons van de Volkomen verlédene tyd bedienen, als

I never saw that man before.

Ik heb dien man nooit te vooren gezien. (1708, 34 頁)

しかし、我々が【完成過去】(Perf.=ik heb gehad)を用いる場合、英国人がしばしば【未完成過去】(Imperf.=I had)を用いるということを注意するのは、決して無益なことではあるまい。(筆者訳)

わずか3ページしかない *Woordschikking* [=Syntax]の項に書かれたのであるから、よほど目立つ相違だったに違いない。

Hamelberg の *Beknopte Engelsche Spraakkunst* <エゲレス文法書>(1845)の指摘は、更に詳しい。

低地ドイツ語 [=オランダ語]では、ある過去の行為がもうひとつ別の過去の行為との関係において「現在」であると見做される場合には、普通の【未完成過去】(Imperf.=ik hadde)が用いられ、別の過去の行為と関係を持たない行為は【完成過去】(Perf.=ik heb gehad)によって表わされる。

ところが英語では、過去の行為は、それが起こった時が「現在」の瞬間に関係のない場合、あるいはまたその行為が他の過去の行為と関わりのない場合が、常に【未完成過去】(Imperf.=I had)によって表わされるのである。一方【完成過去】(Perf.=I have had)は、行為の行なわれた時が今だに継続している場合、その一部がそれが語られている時から続いている場合に用いられる。また、ある過去の行為が、行為

had)の定義であって、後者の〈既ニ過去トナリタル事業ノ嘗テ現在ナリシ時〉というのが、Imperf. (I had) 本来の、いわゆる《過去ノ現在》である。

他方、Perf. (I have had) である《過去》の方はどうか。〈其中多少ニ現在ニ関係スル意ヲ含蓄ス〉・〈時限ノ未ダ過ザル〉となっているが、これは、和蘭語を学んだ当時の日本人の理解では Imperf. (I had) の定義である。しかも、これでは《過去》という言葉の意味と矛盾してしまう。何故なら、完全に過ぎ去ったからこそ《過去》であるはずなのに、この『英文鑑』の《過去》は、未だ過ぎ去らないで「現在」に関係するというのである。

最後の〈^(I p p e r f i)過了現在ハ時限ノ全ク過タルヲ言ヒ ^(Perf)過去ハ時限ノ未ダ過ザルヲ言ノ別アルノミ〉というのは、一体いかなる意味であろう。この意味内容からすると、《過了現在》こそが Perf. (I have had) の訳語のように思われ、我々は、このふたつの訳語の用法がまるで逆転しているかのような印象を受けざるを得ない。

ところが、下編「成句論」には、〈後例ノ如キハ和蘭ニテハ多ク現在ヲ用イ英国ニテハ過了現在或ハ過去ヲ用フ〉として、次のような蘭英間における時制の用法的「ねじれ」が言及されているのである^{註56}。

| | |
|--|---|
| I <i>have been</i> sick this year past, [過 去] 我レ今年來病メリ | ik <i>ben</i> sedert een jaar zick. [現在] |
| We <i>have been</i> here ten weeks, [過 去] 我等爰二十週居リシ | wij <i>zijn</i> hier sedert tien weken. [現在] |
| He <i>was</i> born at london, [過了現在] 彼レハ龍動ニテ生レタリ | hij <i>is</i> te london <i>geboren</i> . └──[過 去]──┘ |

([] は筆者)

繰り返すが、この“I have been”は《過去》である。そして“was”は《過了現在》であって《過去》ではない。第三の例文が、和蘭語の Perf. (hij is geboren) が英語の Imperf. (he was) に相当する場合のあることを示している。

しかし、この「ねじれ」現象はこれまで注意されてこなかった。恐らく《過了現在》は Perf. (I have had) に対する訳語であると無意識のうちに思い込んで、何の疑問も抱かれなかったためであろう。このような二言語間の相違を的確に把握する江戸期の語学レベルの高さは、改めて評価されて然るべきであろうと思う。この点、ほとんど英語しか学習しない現代人よりも、当時の人の方が外国語に対する感覚が鋭かったかも知れない。

では、このような「ねじれ」を認識していたにもかかわらず、なぜ『英文鑑』の訳者は Imperf. (I had) を《半過去》、Perf. (I have had) を《過去》と訳したのか。それは、当時の蘭語学がそうだったからに違いない。彼は時の蘭語学の趨勢に倣ったのである。しか

しそれゆえに、英文典である『英文鑑』においては、Imperf. (I had) と Perf. (I have had) の訳語がその定義内容と逆転し、現代人の目には間違っているかのように映じてしまうことになったのである。ここで改めて、^{マートシカッペイ}Maatschappijの *Grammatica* (文政¹5)の<Perf.は我々が話をしている時には完全に終了した事柄を表わし、他のいかなる時・行為にも関係しない>という【孤立過去】の説明を読むと、英語と和蘭語の Perf.の相違がよく理解されるであろう⁵⁷。

江戸幕府旧蔵洋書は、その中にペリー来航2年後にして井伊大老害死の5年前である^(安政²)1855年に出版された、Lloyd の和蘭語による英語の文法書^(安政²) (1855)を持つ。その中の

...zoo beteekent *I have written* eene handeling, die op een tijd voleindigd werd, dien men als nog tegenwoordig aanneemt, of eene handeling, welker gevolgen zich tot op het tegenwoordige oogenblik uitstrekken. (212 頁)

“I have written” は、まだ人が現在だと考えている時点において終了した行為、あるいはその結果が現在の瞬間にまで及ぶ行為を意味する。

は、英語の Perf. (I have had) についての解説である。これを和蘭語の

De onvolmaakt verleden tijd stelt eene werking voor, die voorbij is, maar tegenwoordig was in den tijd, waarvan men spreekt... (Sandwijk, 1855. 22 頁)

【未完成過去】(Imperf.)は、すでに過ぎ去ってはいるけれども、しかし、人によって語られるその時点においては現在であった行為を表わす。

と比較すると、《過去ノ現在》としての和蘭語の Imperf. (ik hadde) とつい錯覚を起しそうな気さえする。このことのために、和蘭語の Perf.である “Ik heb gezien” の英訳は “I saw” になるという「ねじれ」が、どうしても生じざるを得ないのである。

上述のように、この「ねじれ」の初出は、徳川五代将軍綱吉治世の最晩年の刊年^(宝永⁵) (1708)を持つ Sewel である。よって、この年号を起点とすると、蘭英間には 1700 年代にすでに Perf.と Imperf.の用法に関してこのような「ねじれ」が存在したのであり、これが、ドーバ一海峡を隔てて英国とは眼と鼻の先にある和蘭国の文法書に、目を惹く特徴として記載され、そしてわが国の江戸時代人もまた、このことを見逃しはしなかったのであった。

このように、《過去》と《半過去》の用法が混乱した原因は、まず第一に、原典における蘭英間の「ねじれ」にあった。第二に、これに更に英語における新・旧文法間の「ねじれ」が加わり、これが結局、明治期の英文典界を、ひいては国文典界をも悩ませた、この2用語の用法的混乱の直接原因になる⁵⁸。決して、明治という時代的限界ないしは学習者の無理解によるものではないのである。逆に、十分にその相違を理解し得たからこそ、あの混乱は起こったと言わねばならない。何故なら、《過去》と《半過去》の用法的逆転は、この

新・旧文法間の「ねじれ」に対する解決方法として採られた手段であったからである。

4. <十分過ぎ去リタル>《半過去》と<マダ十分過ぎ去ラヌ>《過去》

幕末～明治前半期に用いられた主な英文典は、Pinneo, Quackenbos, Brown であるが、これらの翻訳文典も同様に、和蘭語の Imperf.(ik hadde)と Perf.(ik heb gehad)のために訳出された《半過去》と《過去》が、英語の定義内容に対して不適應を起こしている。

○大学南校助教訳『格賢勃斯英文典直譯』(明治⁸3年庚午初夏)

直説法^(Imperf)半過去ハアル過ギタル時ニ於テ働キガ出来シ或ハ有様ガ成立シコトヲ極メル

直説法^(Perf)過去ハ現在ノ時ニ於テ充分サルルトシテ過ギタル働キ或ハ有様ヲ極メル
(第四十三ノ課)

○中西範訳『ブラウン氏英文典直譯』(明治⁸17)

^(Imperf)半過去ハ十分過ギタル時ニ於テ起リシ、或ハ在リシ {処ノモノ} ヲ言ヒ表ハス

^(Perf)過去ハマダ十分過ぎ去ラヌ時ノアル時ノ中起ツタ {処ノモノ} ヲ言ヒ表ハス

(第十、107頁)

○佐藤雄治先生訳述『正則挿譯ピ子ヲ氏英文典獨案内』(明治⁸20)

Art.173. The First Past Tense denotes time past without reference to any
第一 過去 時限ハ 顯入 時ヲ 過ギシ 無ニ 関ハリ 迄 或ル
一 二 三 十四 十三 十二 十一 十 九 六
particular portion of it ; ...or it represents an action or event as
格段ナル 部分ニ ノ 其レ ; 或ハ 其レガ 顯入 動作 或ハ 出来事ヲ 如キ
七 八 五 四 一 二 十二 九 十 十一 八
going ---- on at a certain time past...
(行ヒシ) 於テ 定リタル 時ニ 過ギシ
七 六 三 五 四

意譯(^(Imperf)第一過去)トハ何ヲ云フヤ 曰ク確定シタル時ニ関ラズ即チ換語セバ兎ニ角過ぎ去リシ時ヲ表ス 譬へバ He studied ナル句ニ於テ其ノ動作ハ昨日ナルヤ昨週ナルヤ数年前ナルヤ或イハ兎ニ角過ぎ去リシ何時ノ動作或ハ出来事ナルヤヲ表ス譬へバ He was studying when the bell rang.ノ如シ)

Art.175. The Second Past Tense denotes a past time completed at
第二 過去 時限ハ 顯入 過ギタル 時ヲ 充分シタル 於テ
一 二 三 十 八 九 七 六
the present time...
現在ノ 時ニ
四 五

意譯(^(Perf)第二過去)トハ何ヲ云フヤ 曰ク元來過去ニ於テ動作セシ其ノ現在ニ其ノ動作ガ完全セシ過ギシ時ヲ表ス 譬へバ (I have studied) 及 (I have written) ナル文章ニ於テ其ノ動作ハ其ノ動作セシ時ニ成就セシ等ノ如シ)

繰り返すが、この《第一過去》《半過去》は Imperf.(I had)、《第二過去》《過去》は Perf.(I have had)である。《第一過去》《第二過去》という番号方式の名称である『ピ子ヲ氏』はともかく、『格賢勃斯』と『ブラウン氏』の日本語の時制の名称は、その定義内容と一致していない。何故《半過去》が<過ギ去リタル時ニ於テ>で、《過去》が<現在ノ時ニ於テ>なのか。何故、

半過去 → 十分過ギ去リタル時ニ於テ…
過 去 → マダ十分過ギ去ラヌ時ノ…

となるのか。これは漢字の意味からすれば逆で、<十分過ギ去リタル時>は《過去》の方にこそ相応しいはずである。

翻訳ではない、著述文典においても、この混乱状況は同じである。賀島尚太郎訳述『和譯英小文典(完)』(明治²²)の《半過去》と《過去》の定義は、

^(Imperf) 半過去 ハ今已ニ終リタル動作或ハ形状ヲ表ハス

I saw him yesterday.

^(Perf) 過 去 ハ其事前ニアリト雖モ未ダ全ク過ギ去ラザルモノヲ表ハス

I have seen him to-day.

(84 頁)

である。この長崎版英文典の訳述者である長崎県士族は、<文典用語中未ダ適當ノ譯字ヲ有セザルモノハ私ニ假譯ヲ施ス>（「凡例」）という理由から、卷末に「文法用語和英対譯分類一覽」を付して、種々の訳語が乱立して百家争鳴状態にある明治 20 年前後の語学界の状況に配慮を示している。その訳文も、確かに漢文読み下し調ではあるが、しかし、当時のあの難解極まる「直訳」ではなく、更には<動辭ノ[コンジュゲーション]>に独自の工夫を凝らすなど、全く、この文法書は、長崎の輝かしい伝統を背負い、<浅学寡聞且僻地良師友ニ乏シ>という「凡例」の言葉が謙虚としか言いようのない内容を持っている。

ところが、従来の《現在分辞》《過去分辞》に新たに加えられた<having+p.p.>に対して《複過去》という訳名を考えるほどの創意性を見せながら、Perf.(I have had)と Imperf.(I had)というふたつの過去時制に関しては、旧来の和蘭文典の訳語を、最早内容の逆転した英語のそれにそのまま転用するという保守性を、この文法書は発揮したのであった^{註59}。

このような《半過去》と《過去》の用法的混乱の典型が、源綱紀訳述『ブラウン氏英文典直譯』(明治¹⁹)であろう。この文典の時制の説明は、英語式に Imperf.(I loved)=《過去》、Perf.(I have loved)=《半過去》を採用している。ところが、Conjugation<働詞ノ接続法>——この「接続法」は假定法のことではない——に次頁のような箇所がある。特

に四角で囲まれた部分に注意して見ていただきたい [ルビの英語と四角の囲みは筆者による]。

愛ス ナル働詞ノ接続法

| | | | | | |
|---------------------|---------|---------------------|---|---------------|-------|
| 須要ナル部分： | love | loved | ① | loving | loved |
| | 現在、 | 過去、 | | 半過去分詞、 | 過去分詞 |
| 不定法： | to love | | | to have loved | |
| | 現在時限 | | | 半過去時限 | |
| 直接法 ^(ママ) | 現在 | <i>I love</i> | | | |
| | ② 過去 | <i>I loved</i> | | | |
| | 半過去 | <i>I have loved</i> | | | |
| | 大過去 | <i>I had loved</i> | | | |

[以下省略]

英語の《過去》と《半過去》の用い方は、勿論②が正しいので、<~ing 形>を《半過去分詞》としたのは、次の③の例と併せてあるいは単なる誤植かとも思うのだが、しかし、それよりも、この<見ル ナル働詞ノ結合>——以下 Conjugation は「結合」と訳されている——では、今度は和蘭語式に Perf.(I have seen)が《過去》で Imperf.(I saw)が《半過去》なのである。

| | | | | | |
|---------------------|--------|--------------------|---|--------------|------|
| 須要ナル部分： | see | saw | ③ | seeing | seen |
| | 現在、 | 過去、 | | 過去分詞、 | 過去分詞 |
| 不定法： | to see | | | to have seen | |
| | 現在時限 | | | 半過去時限 | |
| 直接法 ^(ママ) | 現在 | <i>I see</i> | | | |
| | ④ 半過去 | <i>I saw</i> | | | |
| | 過去 | <i>I have seen</i> | | | |
| | 大過去 | <i>I had seen</i> | | | |

[以下省略]

更に、この後の《接続法》(Subj.)の部分でもまた、Imperf.(I saw)が和蘭語式に《半過去》になっている。

| | | |
|-----|---------|-----------------|
| 接続法 | 現在時限 | <i>If I see</i> |
| | ⑤ 半過去時限 | <i>If I saw</i> |

ところが、次の<アル ナル働詞ノ結合>では、先ほど《半過去》と呼ばれた<If I were>が《過去》になり、《直接法》では<I have been>が、《接続法》では<If I were>が同時に《過去》になる、という入れ替え振りなのである。

| | | |
|---------------------|--------|--------------------|
| 直接法 ^(ママ) | ⑥ 半過去 | <i>I was</i> |
| | ⑦ 過去 | <i>I have been</i> |
| 接続法 | 現在時限 | <i>If I be</i> |
| | ⑧ 過去時限 | <i>If I were</i> |

加えて、分詞の箇所では、先の①と③では誤植かとも思ったのであるが、この〈アル ナル働詞ノ結合〉表の冒頭にある〈須要ナル部分〉〔現代文法の「三要形」〕でも、現在分詞はやはり、

須要ナル部分：現在、 ^{am} 過去、 ^{was} 半過去分詞、 ^{being} 過去分詞、 ^{been}

のように《半過去分詞》となっている。ところが、この〈結合〉表が《可成法》(Potential)・《接続法》(Subjunctive)・《命令法》(Imperative)と進んで、最後に再び《分詞》が出てきた時には、

分詞： ^{being} 現在、 ^{been} 過去、 ① having been
大過去分詞

と名前を変えており、同じ〈being〉が《半過去分詞》《現在分詞》というふたつの名前で呼ばれている。特に①は、〈having+p.p.〉という形態からすれば、これがむしろ《半過去分詞》となって然るべきである。また別の箇所では〈～ing形〉を《不充分分詞》とも呼んでおり、とにかく、一体いかなる理由があるのかは不明だが、かくもクルクル用語が入れ替わっては、利用者にとっては全く理解の妨げにしかなるまいと思う。

このような訳語の混乱は、^(1883~1882)明治16~25年の10年間にとりわけ著しい。特に Perf.(I have had)に関しては二十数種類の訳語が並び立ち、いずれが主要な訳語とも言いかねるほどである。この混乱に拍車をかけたのが、新文法の時制を採用し、正式に〈Past〉と〈Present Perfect〉という術語を持った Swinton 文典の導入と、その翻訳文典における《過去》と《半過去》の用法的逆転であった。

5. 斎藤秀三郎による《過去》と《半過去》の逆転

表17(195頁)を見ると、Swinton 文典による逆転は、⁽¹⁸⁸⁴⁾明治17年『^{わけ}文典和解 英文指針』以下12例を数えることができる。Swinton は、Pinneo, Quackenbos, Brown のような旧時制、即ち、ひとつの現在・三つの過去・ひとつの未来(Pinneo)またはふたつの未来(Brown と Quackenbos)——ひとつの未来しか持たない Pinneo の方がより古い形である——を、もはや採らない。6時制を〈Simple tense〉と〈Compound tense〉とに二分し、前者に Present, Past, Future を、後者に Present Perfect, Past Perfect, Future Perfect を所属させている [APPENDIX No.34, 35, 38, 39 (451~435頁)]。

表18(202頁)に拠ると、「木の葉文典」ともまた違う、この二分法による6時制を採用した最初は、^(天保5)1834年の Perley 文典である。新文法の時制が旧文法のそれとぶつかり合う

| | Pinneo, Quackenbos, Brown | Swinton <Simple tense> <Compound tense> |
|----|---|--|
| 現在 | <i>I love</i> | <i>I love</i> <i>I have loved</i> |
| 過去 | <i>I loved</i> <i>I have loved</i> <i>I had loved</i> | <i>I loved</i> <i>I had loved</i> |
| 未来 | <i>I shall love</i> <i>I shall have loved</i> | <i>I shall love</i> <i>I shall have loved</i> |

混乱期だったこの時代、独逸語のあの Reformatör [改革者] たちが自分の時制論の出典を明かさなかったように、英語の新6時制派の各文法家たちも、彼らが突然時制システムを改変した理由を全く述べてくれていない。が、これについては、G. Brown が *Grammar for the English grammar* で面白いことを言っている。これによると、Pinneo は最初新6時制の採用を「シンメトリカルな美を求めためだ」と批判していたと言うのである。確かに 1 : 3 : 2 より 2 : 2 : 2 の方がバランスが取れているのは確かだが、しかし本当であろうか。ところが Pinneo 自身も^(註永³)1850年から突然三過去方式を捨ててしまう。理由もなく <usual> な名称を変更した Pinneo のこの行為を、Brown は <most unwarrantably> だと断じている^(註永⁴)(1851) [APPENDIX No.19 (445 頁)]。

原典がこのように旧文法から新文法に改まり、<Imperfect> (I had) が <Past> に、<Preterperfect> (I have had) が <Present Perfect> に取って代わられた今、前者を《半過去》、後者を《過去》のままにしておいては、訳語名称と実際の定義用法との「ねじれ」が、英語においてはますますひどくなってしまう。ここにおいて、英語関係者たちは、蘭語学以来の訳語《半過去》と《過去》の使い方を逆転させるのである。

Swinton 文典の翻訳において注目すべきは、Imperf. (I had) を《過去》、Perf. (I have had) を《半過去》とするについて、<他ノ文法ノ半過去> <他ノ文法ノ過去> という断わり書きを持っているものが幾つもあることである。その嚆矢であるところの、かの著名な斎藤秀三郎の訳にかかる『スウキントン氏英語学新式直譯』では、次のようである。

現 在 ----- Present
 過 去 (他ノ文法ノ半過去) ----- Past
 未 来 (他ノ文法ノ第一未来) ----- Future
 半 過 去 (他ノ文法ノ過去) ----- Present Perfect
 大 過 去 ----- Past Perfect
 未来過去 (他ノ文法ノ第二未来) ----- Future Perfect

[第五十四 (二)、232 頁]

本書ではこのように、添書されている原語が<Imperfect>と<Perfect>では最早なく、Swinton 風に<Past>と<Present Perfect>になっている。しかし、表 17 (195 頁) を見て気が付くのは、Swinton 以外の文典では依然として Imperf. (I had) は《半過去》、Perf. (I have had) は《過去》であり続けていることである。また同じ Swinton の翻訳であっても、蘆田東雄訳『スウキントン氏英文典直譯』(明治⁸20) のように、<Present Perfect>用に《充分現在》等の新たな訳語が考え出された場合もある。その結果、明治¹⁸20年代を通じて、英文法は、《半過去》と《過去》という文法用語が、Imperf (I had) を指すのか、それとも Perf. (I have had) のことなのか、文法書ごとに異なるという混乱を経験しなければならなくなるのである。

逆に<Perfect>という原語の方から見ると、この時期は、《過去》と《半過去》及び《充分現在》の類の3種類の名称で同時に呼ばれていたことになる。

6. チャムブレンの3つの英文典

この過去時制に関する変化を最も色濃く受けたもののひとつが、日本語文典で有名な王堂チャムブレンの著した3つの英文典ではないかと思う。チャムブレンは明治12、26、32年に英文典を記しているが、明治²⁶26年の『英文典』を書くにあたり、彼は、新説のために動揺著しい時期であるにも拘らず、従

チャムブレンの英文典

『英語変格一覧』(明治¹²12)

『英文典』(明治²⁶26)

『英文典教科書』(明治³²32)

来の三過去時制を採用した。その結果、本書における訳語と定義内容の関係は、<三過去ノ名称ハ和英共ニ穩当ナラズ>と自ら言っている様に、<今己ニ終リタル>《半過去》、<未ダ過ギ去ラザル>《過去》という、全く以て和蘭語の幹(=訳語)に英語の枝(=内容)を接木したようになってしまっている。

佐藤良雄も指摘しているとおり、チャムブレンの各英文典における時制用語は、確かに甚だしい相違を示している。明治¹²12年『英語変格一覧』及び明治²⁶26年『英文典』は三過去時制を採り、

1. 現在、
2. 半過去、3. 充過去(充分過去)、4. 大過去(倍過去)、
5. 第一未来(未来)、6. 第二未来

であったものが、明治³²32年の『英文典教科書』では、

1. 現在、 2. 過去、 3. 未来、
4. 現在完了、5. 過去完了(倍過去)、6. 未来完了

になっている。確かに一変したと言ってよい変化である。要するに、チャンブレンはここで、明らかに新文法に転換しているのである。彼は、“I had”を<Imperfect>から<Past>に、“I have had”を<Perfect>から<Present Perfect>に替えることによって、前者を《過去ノ現在》《半過去》、後者を【完成過去】とする旧文法に別れを告げたのである。

それぞれに副えられた原語は、

⁽¹⁸⁹³⁾
26年版：1.Pres.

2.Past (I had) 3.Perf. (I have had) 4.Pluperf.
5.1st Fut.(Fut.) 6.2nd Fut.(Fut.Past)

⁽¹⁸⁹⁹⁾
32年版：1.Pres.

2.Past (I had) 3.Fut.
4.Pres.Pref. (I have had) 5.Past Perf. 6.Fut.Perf.

であり、6時制の配列順序と術語そのものの変化は明白である。明治⁽¹⁸⁹³⁾26年という紛糾・混乱期に、チャンブレンはまず、Swintonの新説を退けて、彼の英文典を伝統文法に則って書いた。彼自身、伝統文法の教育を受けた世代のはずである。よって、<Past>は「半分」の過去でよく、Perf.も「充分」の過去で正しい。ところが、その後わずか数年のうちに、チャンブレンは⁽¹⁸⁹⁹⁾32年版の用語を新文法のものに変更せざるを得なかったのである。そしてこの時、日本語の訳語名もまた、嶋文次郎によって為されたNesfieldの翻訳に従って選ばれている（佐藤良雄「動詞過去の用語に関する研究」46-47頁；「文典用語の相互影響」42頁）。SwintonからNesfieldへ——新文法の潮流はもはや決定的であった。

明治⁽¹⁸⁹³⁾26年版における《半過去》(Past=I had)と《充過去》(Perf.=I have had)の定義は、前者が<全ク過キ去リタル有様又ハ働キ等ヲ云フトキハ半過去ヲ用フ>、後者が<其過去ニ起リテ尚ホ現在ニ連続スル有様又ハ働キ等ヲ云フトキハ充過去ヲ用フ>となっており、まさしく蘭語学の術語に英語の内容が接ぎ木されて、両者の関係がねじれてしまっている。しかし本来、これらの訳語名を生じせしめた蘭文典が伝統文法の三過去を持ち、<ik hadde><I had>の用法が《過去ノ現在》、<ik heb gehad><I have had>のそれが【完成過去】【孤立過去】なのであるから、このチグハグな対応で正しいのである。名称が逆ではないかという佐藤良雄の<不審>（「動詞過去の用語に関する研究」46頁）は当たらないことになる^{注61}。

このように、チャンブレンの3種の文典には、英語原典に起こった新旧時制の交代と、日本の英文典における時制用語の逆転というふたつの劇的な文法的変動を、同時に認めることができるのである。

Beknopt vertoog wegens

God must fear him, Zy die (of welke) Gode willen behaagen moeten hem vreezen. *The woman that goes yonder*, De vrouw die (welke) ginder gaat. *Birds that seldom fly*, Vogelen die zelden vliegen. Ook wordt het wel uytgelaaten, als *The horse he rid upon*, Het paerd waarop hy reed. Desgelyks wordt *which* (welk) in 't Engelsch veeltyds heel gevoeglyk uytgelaaten, als *I never receiv'd the letter he spoke of*, Ik heb den brief, van welken hy sprak, nooit ontvangen.

What wordt somtyds gebruykt als by ons *het gene*, als *If what he has told me be true*, zo 't gene hy my gezegd heeft waar is. Ook zegt men, *What's the clock*, Hoe laat is 't?

Mine, thine, ours, yours, hers, worden zonder byvoeginge van een *Zelfstandig Naamwoord* gebruykt, als *It is mine*, Het is myn. Ook bedient men zich daarvan op eene by ons ongewoone wyze, als, *I went to a friend of mine*, Ik ging by éenen van myne vrienden: *It is a cousin of ours*, Het is éen van onze neeven (of nichten,) waarvoor men echter op 't Duytsch ook wel zegt, 't Is éen neef van ons.

All wordt onder anderen ook aldus gebruykt, *All the day long*, Den ganschen dag door. *All over the country*, 't Gansche land over. *Nothing at all*, gansch niets.

Any heeft ook een byzonder gebruyk, als *Any paper will serve for that*, Allerley papier is daar goed toe.

Self, als *I my self will go*, Ik zal zelf gaan, *Thou thy self* Gy zelf, *he him self* hy zelf, *we our selves* wy zelve, *you your selves* gylieden zelve, *they them selves* told it, zy zelve zeyden 't; *I be her self* zy zelve, *my own self* myn eygen zelf, *the self same* of *the very same*, het zelfste, het eygenste.

Van de WERKWOORDEN.

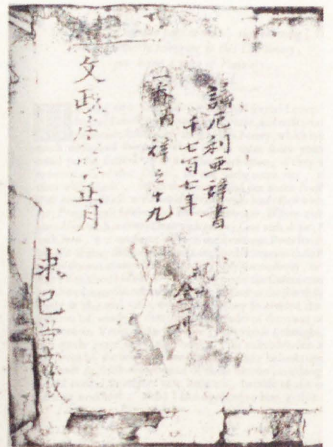
Veel van de *Werkwoorden* te zeggen, zou t'eenemaal noodeloos zyn; want als de *Leerling* de *Conjugatie* eens wel zal begreepen hebben, en zich dan naerftig in 't Engelsch leezen oefent, zal hy bevinden, dat hem geen zonderlinge verandering, behalve die van 't verschil der taalen, zal voorkomen; en hy zal door 't gebruyk en oefening alles beter kunnen bevatten, dan of hy zyn hoofd door 't leeren van *Régelen* ging breeken.

Niettemin zal 't niet ondienstig zyn aan te merken, dat de Engelschen veeltyds de *Onvolkomen verledene tyd* gebruyken, in plaats dat wy ons van de *Volkomen verledene tyd* bedienen, als *I never saw that man before*, Ik heb dien man nooit te vooren gezien.

't Is ook al een zonderlinge manier van spreken, en die van 't *Nederduytsch* afwykt, als de Engelschen zeggen, *I would have you to mind what I say*, Ik wou, of ik wenschte dat gy lette op 't gene ik zeg. *He would have me to go along with him*, Hy wou dat ik met hem gaan zou. *He will have me do it*, Hy wil hebben dat ik het doen zal.

Aanmerkelyk is 't mede, dat men in het Engelsch 't woord *Make* veeltyds in plaats van ons woord *Doen* gebruykt, als *I will make him do it*, Ik zal 't hem doen doen. *He will never be able to make him work*, Hy zal him nooit kunnen doen werken.

Wat de plaatsing der *Werkwoorden* aangaat, dezelve verscheit veeltyds van 't *Nederduytsch*, wordende het *Naamwoord* doorgaans achter 't *Werkwoord* gesleid, 't welk in 't *Duytsch* niet altydt wel luydt; want hoewel het goed *Duytsch* is te zeggen, *Hy bemindt zynen broeder*, zo is 't echter wanschikkelyk, als men zou zeggen, *De kinderen behoorden te beminnen hunne ouders*, alhoewel het Engelsch vereyscht, dat men zegt, *Children ought to love their parents*. Zo ook *To serve his master*, Zynen meester dienen, enz.



資料 53. Sewel 文典 (1708) の Woordschikking (Syntax) の部分

動詞の部分の上から 6~8 行目に、英語で *Onvolk.verl.tyd* (単独の過去形) を用いるとき和蘭語では *Volk.verl.tyd* (p.p.+ hebben / zijn) を用いることが多いとの短い記述がある。下は、その部分の拡大。2 時制の用法逆転の例文には、たとえば次のようなものが見られる。

I never *saw* that man before.

Ik *heb* dien man nooit te vooren *gezien*.

(拡大)

KONNEN BEVATTEN, dan of hy zyn hoofd door 't leeren van *Régelen* ging breeken. Niettemin zal 't niet ondienstig zyn aan te merken, dat de Engelschen veeltyds de *Onvolkomen verledene tyd* gebruyken, in plaats dat wy ons van de *Volkomen verledene tyd* bedienen, als *I never saw that man before*, Ik heb dien man nooit te vooren gezien.

Subjunctive.

227

Hij kwam dezen morgen aan = he arrived this morning.
Hij is van morgen aangekomen = he has arrived this morning.

Hoe lang was je al van huis, toen de brand uitbrak how long had you been from home when the fire broke out?

Hoe lang was uw vader al dood toen uwe moeder stierf how long had your father been dead when your mother died?

Note. *Ik wenschte* = I wish: *ik wenschte, dat het altijd zomer was* I wish it were always summer.

§ 491. The Dutch Perfect Tense is sometimes used for the English Past.

De Franschen hebben vele oorlogen gevoerd the French waged many wars.

Ben je gisteren naar de komedie geweest were you at the play last night?

Hij is geboren op het einde der vorige eeuw he was born at the end of the last century.

§ 492. The Pluperfect Tense is employed as in English; the conjunction *after*, which in Dutch is usually followed by this tense or a Past Infinitive, may in English precede a Past Tense or the Gerund.

Nadat ik alle brieven gelezen had,
Na alle brieven gelezen te hebben, } *ging ik uit.*
 After reading all the letters, I went out.

Use of the Subjunctive Mood.

§ 493. The Subjunctive Mood is but seldom used in the spoken language. In general it is limited to dignified style and has almost died out in ordinary conversational language. It must still be used:

In principal sentences expressing a wish or a grant.

Lang leve de Koningin long live the queen!

Uw wensch zij ingewilligd may your wish be granted!

In dependent sentences, not preceded by a conjunction, an interrogative pronoun or an interrogative adverb.

Men geloove het of niet, waar is het toch people may believe it or not, yet it is true.

Hoe koud het ook zijn moge, zij gaan uit however cold it may be, they go out.

§ 494. In dignified style the Subjunctive Mood is also used:

15•

METHOD GASPEY-OTTO-SAUER.

DUTCH
 CONVERSATION-GRAMMAR

BY

T. G. G. VALETTE,

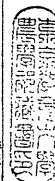
TEACHER AT THE GYMNASIUM (WILHELM III., BATAVIA JAVA)

THIRD EDITION.



LONDON.

DAVID NUTT (A. G. Bell), 212 Shaftesbury Avenue, W. C.
 DUNN & CO., 47 Soho Square, W.
 SIMPSON LOW, HARRISON & CO., 100 Southwick Street, S. E.
 NEW YORK: BRENTANO'S, Fifth Avenue and 27th Street.
 DYKSEN & PFEIFFER (GRUNSTEIN'S), 18 West 23rd Street.
 THE INTERNATIONAL NEWS COMPANY, 25 and 26 Nassau Street.
 G. E. STECHERT & CO., 151-161 West 23rd Street.
 BOSTON: RUTTER & FLEMING, formerly C. A. KOEHLER & CO.,
 115a Tremont Street.
 THE SCHONBERG BOOK CO., 125 Treason Street.
 HEIDELBERG.
 J. L. B. OROG.
 1913.



(大正2)
 資料 54. 1913年の、英語で書かれた Valette の蘭文典

§ 491 の点線による囲みの部分で、和蘭語の Perf.が英語の Past に相当する場合のあることに言及している。



資料 55.

(1886) 明治 19 年に出された Brown 英文
典の直訳

訳者自身が、この章の翻訳は十分で
ないので後日を期すようにと、読者
に言っている。



下の頁では、[第四]で《完結現在》
が《完結過去》とクロスしている
点が注目される。点線による囲み
の部分は、Perf.が旧文法の「完全
過去」から新文法の「完成した現
在」へ移行する途上で衝突した、
その現場である。



(103)

皮男ヲ見る云々ハ一層ノ未來ナリノ如シ
此一章ハ到底翻譯十分ナラズ學者原文ヲ解スルノ日ニ
アラズンバ興味ヲ知ルベカラズ學者其レ之ヲ諒セヨ
時ノ區別ハ左ノ二個ノ事情ニ基ク
〔第一〕時ガ現在カ過去カ若シクハ未來カ
○第二編 ○第二款 詞ノ品種ノ特別ノ變化 ○第十章 動詞ノ「モディフィケーション」

(105)

動詞ニ二個ノ數ト三個ノ人稱トアレハ其文主ト一致セシ
ニハ必スヤ六個ノ詞尾變化ナカルベカラズ然レトモ既ニ
述ヘシ如ク英語ニ於テ用ケル所ノ詞尾變化ハ甚タ僅少ナ
リ例ヘハ顯示法現在ニ於ケル See 及ヒ Go ナル動詞ヲ變化セ
シムルトキハ唯タ次ノ形ヲ有スルノミ

| | | |
|------|--------------|------------|
| 第一人稱 | love (愛する) | love (愛する) |
| 第二人稱 | lovest (愛する) | love (愛する) |

○第二編 ○第二款 詞ノ品種ノ特別ノ變化 ○第十章 動詞ノ「モディフィケーション」

(104)

故ニ此二倍ノ區別ヲ顯ハサンニハ六個ノ時無カルベカ
ラス

〔第一〕不完結或ハ不定現在
即チ現在

〔第二〕不完結或ハ不定過去
即チ不完結過去

〔第三〕不完結或ハ不定未來
即チ第一未來

〔第四〕完結現在
即チ完結過去

〔第五〕完結過去
即チ大過去

〔第六〕完結未來
即チ第二未來

詞尾變化

資料 56. 明治 5 年、記者不肖の Pinneo の直訳文典

三つの過去のうち《第一過去》について

氏子
通俗英文時
 戸部 明治 壬申 初夏
 文泉堂 藏 梓

文典
通以英
 同 録

How many (一) Past Tenses (二) are (三) there? (四)
 イクツノ 過去ル アレハ イコニ

ART. 172. There (一) are (二) three (三) Past (四)
 章百四十二 ヲコニ アル ミツノ 過

Tenses: (一) the First (二) Past, (三) the Second (四)
 去ル 第一 過去 第二

Past, (一) and (二) the Third (三) Past. (四)
 過去 第三 第三 過去

FIRST PAST TENSE
 第一過去

What (一) does (二) the First (三) Past Tense (四)
 何ヲ ナスカ 第一 過去ハ

denotes (一)
 表ハシ

ART. 173. The First (一) Past Tense (二)
 章百四十三 第一 過去ハ

denotes (一) time (二), past (三) without (四) reference (五)
 表ハス 時ヲ 過タル ナシニ 関係

to (一) any (二) particular (三) portion (四) of (五) it (六) as (七)
 ニモ 何ナリ 一箇ノ 部分ノ 大レ 譬ハ

He (一) studied (二), (三) yesterday (四), (五) or (六) last (七)
 彼ガ 勉強セシ 昨日 或ハ 此節

week (一), (二) or (三) many (四) years (五) since (六), (七) or (八)
 一周 或ハ 數年 前 或ハ

it (一) represents (二) an action (三) or (四) event (五)
 人ハ 概ハシ 働カ 或ハ 事情ヲ

as (一) going on (二) at (三) a certain (四) time (五)
 時ニ 進行ト 於テ 或ル 時ニ

Past: (一) 'He (二) was (三) studying (四)
 過シト 學ビ 彼ハ アリシ 勉強シタ

when (一) the bell (二) rang (三)
 何ニ 鐘ガ 鳴リシ

ART. 174
 章百四十四

Sing.
 單稱

1st (一) Per. (二) I (三) loved (四)
 一 人称 余ハ 愛セシ

2d (一) " (二) You (三) loved (四), (五) or (六) thou (七)
 二 人称 汝ハ 愛セシ 第八 語ハ

lovedst (一)
 愛セシ

3d (一) " (二) He (三), (四) she (五), (六) or (七) it (八) loved (九)
 三 人称 彼ハ 彼女ハ 或ハ 夫ハ 愛セシ

Phi.
 復稱

1. (一) We (二) loved (三)
 一 衆稱 愛セシ

2. (一) You (二) loved (三)
 二 汝等ハ 愛セシ

3. (一) They (二) loved (三)
 三 彼等ハ 愛セシ

SECOND PAST TENSE
 第二過去

What (一) does (二) the Second (三) Past Tense (四)
 何ヲ ナスカ 第二 過去ハ

デノート
denote? (四)
表ハシ

ART 175. The Second (一) Past Tense (二)
章 百七十五 第二 過去

デノート エパスト タイム コムプラーテド エット
denotes (九) a past (七) time (八) completed (六) at (五)
表ハス 過 去ヲ 十カシタル 於テ

ゼ、プレセント タイム エズ アイ ハヴ
the present (三) time, (四) as, (十) I (土) have (土)
現ニ 在ニ 譬ハ 余ハ タ

スタヂヤット ヴァット イズ エット イズ モメント
studied, (三) (that is, (四) at (七) this (五) moment, (六)
勉学シ 事シク エハバ 於テ 此ノ 瞬間ニ

ゼ、スタヂヤング イズ ダン アイ ハヴ リッテン
the studying (六) is (七) done, (八) I (九) have (十) written, (十一)
勉学ガ アル 成サレテ 余ハ タ 書イ

エット イズ タイム ゼ、ライテング イズ コムプラーテド
(at (三) this (四) time (五) the writing (六) is (七) completed) (八)
於 此ノ 時ニ 書記ガ アル 成就サレテ

ギヴ ゼ、セコンド、パスト テンス ヲ ヴァ ヴーラヴ
Give (五) the 2d (三) Past Tense (四) of (二) 'to love.' (一)
タヘヨ 第二 過去ヲ ノ ロロ

ART. 176.
章 百七十六

Sing.
單称

1st (一) Per. (二) I (三) have (五) loved. (四)
一人称 余ハ タ 愛シ

2d (一) " (二) You (三) have (五) loved, (四) or (六)
二人称 汝ハ タ 愛シ 或ハ

thou (七) hast (九) lo ved. (八)
汝ハ タ 愛シ

3d (一) " (二) He, (三) she, (四) or (五) it (六) has (八)
三人称 彼ハ 復々ハ 或ハ 夫ハ タ

loved. (七)
愛シ

Plu.
複称

1. (一) we (二) have (四) loved. (三)
一人 余輩 タ 愛シ

2. (一) You (二) have (四) lovd. (三)
二人 汝等ハ タ 愛シ

3. (一) They (二) have (四) loved. (三)
三人 彼等ハ タ 愛シ

ソルド パスト テンス
THIRD (一) PAST (二) TENSE (三)
第三 過 去

ワット ダズ ゼ、ソルド パスト テンス
What (三) does (五) the Third (一) Past Tense (二)
何ヲ ナスカ 第三 過去ハ

デノート
denote? (四)
表ハシ

ART. 177. The Third (一) Past Tense (二)
章 百七十七 第三 過去

デノート エパスト タイム プリウヰアス リー
denotes (三) a past (十) time, (十一) previous (九) to (八)
表ハス 過 去ヲ 先立タル ニ

ソム アザル パスト タイム レファレド ツー
some (四) other (五) past (六) time (七) referred to; (三)
或ル 他ノ 過 去ニ 物ハラサレタル

エズ アイ ヘド スタヂヤット ビフォー アイ
as (三) 'I (四) had (六) studied, (五) (before (七) I (八)
譬ハ 余ハ タリキ 勉学シ 前ニ 余ハ

ワズ コムトラン アイ ヘド リッテン
was (六) called on, (七) 'I (八) had (九) written, (十)
レシ 促サ 余ハ タリキ 書イ

ビフォー アイ ソウ エー
(before (三) I (四) saw (五) you). (六)
前ニ 余ハ 見シ 汝ヲ

ギヴ ゼ、ソルド パスト テンス ヲ ヴァ ヴーラヴ
Give (五) the 3d (三) Past Tense (四) of (二) 'to love.' (一)
タヘヨ 第三 過去ヲ ノ 〓〓

ART. 178.
章 百七十八

Sing.
單称

1st (一) Per. (二) I (三) had (五) loved. (四)
一人称 余ハ タリキ 愛シ

(1872)
資料 57. 明治5年、訳者不肖の Pinneo の直訳文典 (続)
三つの過去のうち《第二過去》《第三過去》について

| | |
|--|---|
| <p>2d ① " ② You ③ had ④ loved, ⑤ or ⑥ 二 人称 汝ハ タリ 愛シ 或ハ</p> | <p>2d-er-ten-ces Future Tenses. 示 来</p> |
| <p>thou ⑦ hadst ⑧ loved. ⑨ 汝ハ タリ 愛シ</p> | <p>ワット ホルニシ ヲツ タリム ヲ What ⑩ portion ⑪ of ⑫ time ⑬ do ⑭ 如何ニ 部ヲ ノ 時 有</p> |
| <p>3d ① " ② He, ③ she, ④ or ⑤ it ⑥ had ⑦ 三 人称 彼ハ 彼女ハ 或ハ 夫ハ タリ</p> | <p>3d-er-ten-ces the Future Tense ⑧ included ⑨ 来 来ハ 有</p> |
| <p>loved. ⑩ 愛シ</p> | <p>They ① include ② all ③ that ④ 章 百九 我等 包ムル 其ノ</p> |
| <p>Plu. 複数</p> | <p>How many ⑤ Future Tense ⑥ may ⑦ there ⑧ 如何ニ 来來ハ 得ルカ ソレ</p> |
| <p>1. ① We ② had ③ loved. ④ 一 我等ハ タリ 愛シ</p> | <p>but ⑨ 然レ</p> |
| <p>2. ① You ② had ③ loved. ④ 二 汝等ハ タリ 愛シ</p> | <p>Art. 180. The ① may ② be ③ one ④ 章 百八十 ソレニ 得ル 一ツガ</p> |
| <p>3. ① They ② had ③ loved. ④ 三 彼等ハ タリ 愛シ</p> | |

(1872)
 資料 58. 明治 5 年、記者不肖の Pinneo の直訳文典 (続き)
 三つの過去のうち《第三過去》について

強變化動詞表

| 現在 | 過去 | 第一分辭 | 第二分辭 |
|----------|---------------------|-------------|-----------------------------|
| Abide, | abode, | abiding, | abode. |
| Arise, | arose, | arising, | arisen. |
| Awake, | awoke or awaked, | awaking, | awake or awaked. |
| Be, | was, | being, | been. |
| Bear, | bore or bare, | bearing, | borne or born. [□] |
| Beat, | beat, | beating, | beaten or beat. |
| Begin, | began, | beginning, | begun. |
| Behold, | beheld, | beholding, | beheld. |
| Belay, | belaid or belayed, | belaying, | belaid or belayed. |
| Bend, | bent or bended, | bending, | bent or bended. |
| Bereave, | bereft or bereaved, | bereaving, | bereft or bereaved. |
| Beseech, | besought, | beseeching, | besought. |
| Beset, | beset, | besetting, | beset. |
| Bid, | bid or bade, | bidding, | bidden or bid. |
| Bide, | bode, | biding, | bode. |
| Bind, | bound, | binding, | bound. |
| Bite, | bit, | biting, | bitten or bit. |
| Bleed, | bled, | bleeding, | bled. |
| Blend, | blend or blent, | blending, | blended or blent. |

[□] Borne \rightarrow carried \rightarrow 糺 born \rightarrow brought forth \rightarrow 糺 \rightarrow

文法主眼

五一一 文法主眼

relinquish their claim.

(百第九則動詞ノ一定法動詞(動詞ノ各法中不定法ヲ除キ其)即示定音動詞ハ之ニ對スル主格即命題トシテ名詞代名詞若クハ之ニ代ルベキ句若クハ讀ヲ有ス此命題ト動詞トハ人稱并ニ單複數ニ於テ相一致スルヤ I know; Thou knowest; 又 he knowest; he knows; 又 he knoweth. The bird flies; The birds fly. ノ如ク)

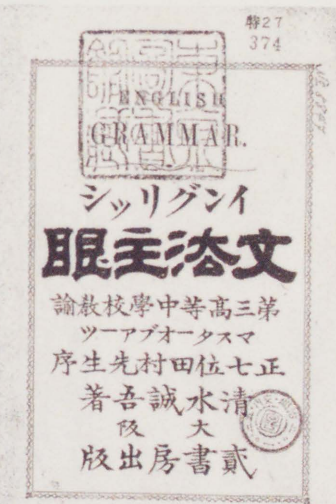
注意一動詞ノ位置ハ命題言及的言ノ位置ニ從テ一定セズ委細ハ第二則中ノ注意ト第二十則トニ於テ之ヲ論セリ

二主格ノ同伴音ニ何等ノ意義アリト雖モ之ニ關係スルコトナク一意ニ其主格ニ立タル語ノ人稱ト數ヲ其動詞ニ一致セシム

三不定法動詞名詞讀若クハ名詞句ノ命題トナルヲ其命題若シ只全然タル一辭ノ事ヲ意味スルニ於テハ勿論三人稱單數ト

凡例

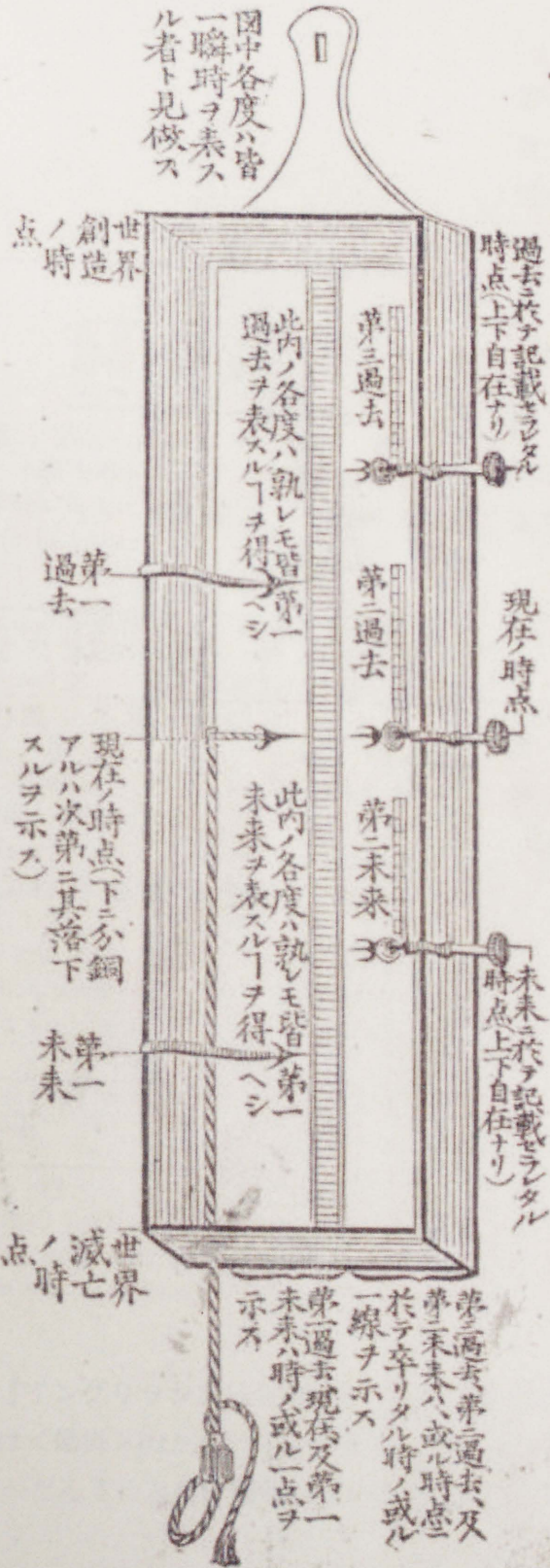
一本書ハブラオン大文典ヲ本トシス井ントン、カツケ
ノボス、モーレー、カクス、ピチオ等ノ諸文典ヲ參考シ
著者生平ノ觀察ヲモ加ヘテ英文法ノ要領ヲ簡明ニ
説述シタルモノナリ



資料 59. (1887) 明治 20 年『イングリッシ文法主眼』から、動詞の四要形

「現在」を筆頭に現在分詞を加えた四要形は、凡例にあるとおりの「ブラオン文典」のスタイルである。《定法動詞》は、Brown<ブラオン>、Swinton<ス井ントン>、Quackenbos<カッケンボス>、Cox<カクス>の各文典に見える。

主 法 文 ○Ti



資料 60. 『イングリッシ文法主眼』の時制図

この書の時制は、三つの過去を持つ旧時制である。《第一過去》《第二過去》《第三過去》という名称は Pinneo 式である。

(1887) 明治 20 年は、時制の混乱の最も甚だしい時であるにもかかわらず、ここには Swinton の新時制は影響力を及ぼしていない。

三五

眼 主 法 文

現 在

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 其 | ナ | ノ | 詞 | ノ | リ |
| 單 | ル | ハ | 本 | 姿 | |
| 純 | モ | 動 | 來 | ナ | |

| | | |
|------|-----------|-----------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I am, | We are, |
| 第二人稱 | Thou art, | You are, |
| 第三人稱 | He is; | They are. |

第一過去

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 此 | 動 | 形 | 去 | 化 | 表 | 書 | 看 | ナ |
| 時 | 詞 | ハ | 動 | ノ | 參 | リ | | |
| ノ | ハ | 過 | 強 | 變 | 詞 | 頭 | | |

| | | |
|------|------------|------------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I was, | We were, |
| 第二人稱 | Thou wast, | You were, |
| 第三人稱 | He was; | They were. |

第二過去

| | | | | | | | |
|---|---|------|---|---|---|---|---|
| 此 | 動 | have | 助 | ニ | レ | 第 | 辭 |
| 時 | 詞 | ナ | 動 | 伴 | タ | 二 | ナ |
| ノ | ハ | ル | 詞 | ハ | ル | 分 | リ |

| | | |
|------|-----------------|-----------------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I have been, | We have been, |
| 第二人稱 | Thou hast been, | You have been, |
| 第三人稱 | He has been; | They have been. |

(1) 直説法 強變化動詞 Be の 働掛
 形單スニ事ヲ得六ケスノ時法ヲ又用ラセテ成

四五

眼 主 法 文

第三過去

| | | | | | | | |
|---|---|-----|---|---|---|---|---|
| 此 | 動 | had | 助 | ニ | レ | 第 | 辭 |
| 時 | 詞 | ナ | 動 | 伴 | タ | 二 | ナ |
| ノ | ハ | ル | 詞 | ハ | ル | 分 | リ |

| | | |
|------|------------------|----------------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I had been, | We had been, |
| 第二人稱 | Thou hadst been, | You had been, |
| 第三人稱 | He had been; | They had been. |

第一未來

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 此 | 動 | shall | ナ | 動 | 伴 | タ | 在 | ナ | シ | 兩 | 詞 | 法 | リ | 異 | 注 | ベ |
| 時 | 詞 | 又 | ル | 詞 | ハ | ス | 動 | リ | テ | 助 | ノ | = | 意 | ナ | 意 | レ |
| ノ | ハ | will | 助 | = | レ | 現 | 詞 | 而 | 前 | 動 | 用 | ヨ | 味 | リ | ス | |

(甲) 單 = 未來ヲ表明ス

| | | |
|------|---------------|---------------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I shall be, | We shall be, |
| 第二人稱 | Thou wilt be, | You will be, |
| 第三人稱 | He will be; | They will be. |

(乙) 約束・執意・命令等ヲ表明ス

| | | |
|------|----------------|----------------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I will be, | We will be, |
| 第二人稱 | Thou shalt be, | You shall be, |
| 第三人稱 | He shall be; | They shall be. |

第二未來

| | | | | | | | | | |
|---|---|-------|------|------|------|---|---|---|---|
| 此 | 動 | shall | have | will | have | ハ | ル | 分 | リ |
| 時 | 詞 | 又 | = | レ | 第 | 辭 | | | |
| ノ | ハ | ハ | 伴 | タ | 二 | ナ | | | |

| | | |
|------|----------------------|----------------------|
| | 單 數 | 複 數 |
| 第一人稱 | I shall have been, | We shall have been, |
| 第二人稱 | Thou wilt have been, | you will have been, |
| 第三人稱 | He will have been; | They will have been. |

資料 61. 『イングリッシュ文法主眼』の“be”動詞の活用表

「活用」は<働掛>[はたらきかけ]である。《第一未来》の<働掛>に注意。“will”と“shall”を単に「~だろう」とだけ理解していると、この用法はわからない。

第四節 英・独における Perf. と Imperf. の用法的逆転

—問題点②③の考察—

1. 問題の所在

独逸語に関して問われねばならないのは、第二節で提示した問題点のうちの②と③である。

- ②英語が Imperf. (I have) : Perf. (I have had) = 《過去》: 《半過去》《充分現在》等になった時期に、独逸語がなお Imperf. (ich hatte) : Perf. (ich habe gehabt) = 《半過去》: 《過去》なのは、独逸文典著・訳者の誤りか、
- ③独逸語の《半過去》が英語のように Perf. の訳語にならなかったのはなぜか。

佐藤良雄は、寄山元吉の著した『獨逸学捷徑』(明治²⁴) —この人には英文典もある— に関連して、<いつも思うことであるが、そのころの英文典では助動詞を用いたものは「現在完了」であって、半過去に当り、助動詞なきものが過去に当るというのが、普通の考えであるのに、この頁では、助動詞なきものに半過去とある>ことに戸惑っているように見える(「文典用語の相互影響—特に動詞過去の用語について—」55頁)。更にく上来挙げ来つた独逸文典の多くが、古風な用語を用いただけでなく、時には用語とその内容を反対に考えたり、容易なため誤解をしていた>(同、59頁)とまで言っているが、このような見解に接した際、これを当時の人の誤りだと単純に結論付けてしまうことが、我々に許されるであろうか。

表 19 (208頁)によると、独文法の転機は、まず明治²⁷年である。この年出版された『獨逸文法教科書 全』を境に、突然 Perf. (ich habe gehabt) が《過去》から《現在過去》に切り替わっているからである。そして次なる転機は、Imperf. (ich hatte) の訳語として《持続》《連続》《継続》《不完了》等が現れた明治³⁰年代に訪れる。しかし、これ以前の、英語において Imperf. (I loved) : Perf. (I have loved) = 《過去》: 《半過去》への移行が始まった時期である明治¹⁶~²⁵年の独逸文法は、相変わらず Imperf. (ich liebte) : Perf. (ich habe geliebt) = 《半過去》: 《過去》のままなのである。この食い違いが、我々現代人の英文法の知識を前提として見ると、当時の独逸語関係者が《過去》だと言いながら「現在完了」の説明をしているため、英語と逆になっているように見え、<用語とその内容を反対に考えたり、容易なため誤解をしていた>ように映るのである。これは、はたして本当に

<誤解>なのであろうか（問題点②）。

また、独逸語の Perf. (ich habe geliebt) は、《現在過去》以前は《過去》ひとつしか訳語を持っていない。英語の変動が激しいだけに、これはかなり意外な感を抱かせる点である。そして、明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年以降、この《現在過去》の時代が明治30年代の間続き、《完成》《完了》系の用語の出現するのは明治⁽¹⁹⁰⁹⁾42年である。この時 Perf. でなくなった《過去》は、英語同様、今度は Imperf. の訳語として使用されるが、ところが、ここが英語との相違なのであるが、もともと Imperf. に対するものだった《半過去》が Perf. に対して用いられることは、独逸語では起こらなかったのである。なぜ起こらなかったのであろうか（問題点③）。

2. 平塚定二郎の《過去》と「ハイゼ氏」の文法

これらの考察を、我々は、明治⁽¹⁸⁸⁰⁾13年の(1)多賀貫一郎訳『セーフエル氏文典直譯』と明治⁽¹⁸⁸³⁾16年の(2)平塚定二郎編『獨逸文法楷梯 前篇』の時制論から始める。この2著は、表19(208頁)において日本の独文典の出発点に位置しており、しかも、全編独逸語で記された(2)の場合は、著者が参照した原典が判明しているため、著者が影響を受けた当時の独逸語原典の時制をも考慮することが可能だからである^{註62}。

平塚が「例言」にて名を挙げた独逸文法家4氏のうち、国会図書館未所蔵なので見る機会を得なかった「ハイデルベルク」を除く3氏において Imperf. の定義を見てみると、実際、明治期の独逸語の Imperf. と Perf. は、その定義において英語と大きな相違を見せている。独逸語の Imperf. はそのいずれもが、英語の Imperf. のような、単にく全ク経過シタル時ニ起リタル動作>ではない。

それは、例えば次のようなものである [原文は APPENDIX、No.40(1) (453頁)]。

(1)多賀貫一郎訳『セーフエル氏文典直譯』(明治13)

^(Imperf)半過去 ハ 講話人ガ若シモ過ギ去ツタル働キト共ニ他ノ同シ過ギ去リシ(働)ト同時ニカ彼ヨリ前或ハ後チニ過ギ去リテアリシガ □ ヲ頭ワサフト思フトキニ要スル
^(Perf)過去 ハ 講話人ガ若シモ働キガ彼ノ話スノ時ニ已ニ出来テアルコトヲ頭ワサフト思フトキニ要スル (第二十九章)

(2)平塚定二郎編『獨逸文法楷梯 前篇』(明治16)

Die *Mitvergangenheit* oder das Imperfect drückt die Dauer in der Vergangenheit aus.

【共過去】または【未完成】は過去における継続を表わす。

Die *Vergangenheit* oder das Perfect drückt aus, daß die Thätigkeit des Sprechens schon vollendet ist (§ 11)

《過去》または《完成》は説話の行為がすでに完成していることを表わす。

[和訳は筆者]

ここに平塚によって用いられ、また彼によって2年後に直訳されることになる「セーフエル氏」原典も用いている独逸語<Vergangenheit> (=Perf. : ich habe gehabt) と<Mitvergangenheit> (=Imperf. : ich hatte) は、当時の原書および明治期の独文典で使用された最も重要な動詞過去の用語である。この<Mitvergangenheit>は、表 20 (212 頁) では Theodor Becker に発するが、これこそまさに独逸語の《半過去》の原語である。

<mit->は「…と共に」という意味のドイツ語で、文字通りに直訳すれば【共過去】となる。

「セーフエル氏」と、特に「ベッケル」氏の<Mitvergangenheit>の定義がこれであり [APPENDIX、No.33 (451 頁) 及び 40(1) (453 頁)]、先行した過去事象が未だ終了せずに続いている間に後続の過去事象が発生し、その開始時点が先行事象と重なって「関係」し合い、両事象が時を「同時に共有」する【共過去】(あるいは【同時過去】と言った方がよいかも知れない)の意味を極めて明確に示している。これは明らかに、^{パウアー}Bauer と ^{ハイゼ}K. Heyse が疑問を投げかけたところの旧時制 (本章序節参照)、即ち、主要三時制の下位区分の基準を<前><同時><後>に置いて構成される<関係時>である。

このような「セーフエル氏」の【共過去】に対し、「ハイゼ氏」は、Imperf. (ich hatte) を<eine vergangene Handlung in ihrer Dauer> [過去の行為が継続している] のように定義している。「グルケ」氏もほぼ同様で、両者の Imperf. は行為の継続・持続の側面を強調する《継続過去》であり、平塚の随分シンプルな、<時>というより<相>が前面に押し出されているような定義は、自ら<首トシテ獨逸博士「ハイゼ氏」ノ文法ニ拠ル>と言っているとおり、後者を採用しているようである [APPENDIX、No.14(1) (441 頁) 及び 36 (452 頁)]。独逸語の Imperf. は、第一節で考察した和蘭語のそれと、むしろ著しい類似を示している。

一方、平塚は Perf. (ich habe gehabt) を<Vergangenheit> [過去] としている (表 19 [208 頁])。ところがその時制的所属を見ると、表 20 (212 頁) に示したように、平塚が主として参照したはずの「ハイゼ氏」の Perf. は<Die vollendete Gegenwart,... zeigt an, daß eine Handlung gegenwärtig vollendet ist> [Perf. は行為が現在において完了したことを表わす] という内容を持つ現在時制である。「グルケ氏」も同様に現在時制であるが、他方、「ベッケル」と「セーフエル氏」のそれは過去時制になっている^{註63}。つまり、平塚が用いた独逸語原典4氏において、Perf. を過去とするか現在とするかの選択は、2:2の同数なのである。

平塚が全編を独逸語で書いたこの『獨逸文法楷梯 前篇』の内容は、彼が自ら<講堂ニ臨ミ初学生ノ為メニ口演>^{註64}したところのものだと言う。では、その<口演>の時平塚によって主要参考文献とされた「ハイゼ氏」の Imperf. (ich hatte) と Perf. (ich habe gehabt) とは、どのようなものであったのか。

国会図書館が所蔵する、息子 Karl の改定により面目を一新した Heyse の第5版 (1838^{天保〇}) は、その序文に言うごとく、動詞の章において時制・話法・不定法・分詞などを特に詳しく分析している。繰り返すが、当書では Imperf. (ich hatte) と Perf. (ich habe gehabt)

の時制を、

Imperf.=die währende Vergangenheit (das Praeteritum imperfectum)、

Perf.=die vollendete Gegenwart (das Praesens perfectum)

と独訳し、<Fälschlich hält man diese Zeitform gemeiniglich für ein Tempus der Vergangenheit.>[後者を過去時制とするのは誤りである]と明言して、次のように言う。

Perf. (ich habe gehabt) を過去とするこの誤りが生じたのは、行為の完了という状態が時間的な過去と取り違えられたからである。これまでの時制論では、行為の「開始」「継続」「完了」という副次的3時点を、主時である「現在」「過去」「未来」と区別しないのが普通である。この行為の3時点は、行為それ自体の中に存在して行為の時間を拡張する本質的なものであるが、それを、従来の理論は、発話時の前か後かということによって説明しようと考えた。それ故【更なる過去】(Plusquamperf.) だとか、【つい最近過ぎ去ったばかりの過去】(jüngst vergangene Zeit=Imperf.)だとか、【ずっと前に過ぎ去った過去】(längst vergangene Zeit=Plusquamperf.) だとか言う、何の説明にもならない誤った名称が生まれたのである。そして、これらの名称を使うと、次のような場合にはいつも決まって困難に陥ってしまうのである。即ち【ずっと前に過ぎ去った過去】が、ほんのつい最近起こったばかりのことに用いられたり、逆に【つい最近過ぎ去ったばかりの過去】のはずが、古代の出来事を述べたりする。例を挙げれば、*Vor einer Stunde, als mein Bruder zu mir kam, hatte ich eben einen Brief geschrieben.* [兄がここに来る一時間前、私はちょうど手紙を書いていた]の<hatte...geschrieben>[書いていた]は、一時間前でも【ずっと前に過ぎ去った過去】(Plusquamperf.)であるし、*Cäsar schrieb vor beinahe 1900 Jahren die Geschichte seiner Feldzüge.* [シーザーは約1900年前に自らの遠征記を書いた]の<schrieb>[書いた]は、1900年前なのに【つい最近過ぎ去ったばかりの過去】(Imperf.)である。

(和訳は筆者)

(1. Band. 683 頁) [APPENDIX, No.14(4) (442 頁)]

更に続けて Karl Heyse は、このように時制観念がもつれてしまったのは羅典語文法のせいであると言う。

この時制概念の混乱は、すでに羅典文法の中に存在している。旧来の羅典文法家が過ちを犯したのは、いわゆる Perf.の持つ二重の性質故である。Perf. (*ich habe geliebt, gelesen*)は、つまり完了した「現在」のための時制形式であるが、同時に羅典語に欠けている「過去のアオリスト」をも表現しなければならないからである。我が独逸語では、この「過去のアオリスト」に対しては Imperf.、即ち【過去未完成】(*ich liebte, las*)。

が用いられる。(和訳は筆者) (同、684頁) [APPENDIX、No.14(5) (443頁)]

この、J.Grimm [APPENDIX、No.13 (441頁)] と主旨を同じくする主張——これが、平塚が<首トシテ獨逸博士「ハイゼ氏」ノ文法ニ抛ル>と言ったその Heyse の Perfect 論である。歴史比較言語学の“gewaltig” [暴力的] な潮流の中で、息子 Karl をして父 Heyse の文法書を<実際的な規則の寄せ集め>から<内容的には旧版と全く違うもの>へと変貌させしめたのが、長い間唯一の文法的規範であったラテン語の時制論に加えられた、このような詳細な考察であり注釈であったのだろう。ここで Karl Heyse は、Perf.は完了した現在のための時制形式であると言い切っている^{註65}。

しかるに、⁽¹⁸⁸⁵⁾ 翌18年の『シェーフェル氏獨逸文法獨学』を経て、続く⁽¹⁸⁸⁶⁾ 明治19年、<本編説明スル所ハ編者ガ講堂ニ臨ミ初学生ノ為メニ口演スル所ト異ナラサルヲ以テ初学生ト雖モ本編ニ依ルトキハ師ヲ求メシテ獨逸文法楷梯前編ヲ容易ニ理会スルコトヲ得ヘシ> (「例言」) として、平塚が和文で『獨逸文法楷梯説明』を著した時、彼は相変わらず Perf. (ich habe gehabt) を《過去》とし、《半過去》である Imperf. (ich hatte) の方にわざわざ、

半過去ハーツノ過去ノ時アリ其時ニ他ノーツ尚連続シ居タルコトヲ言ヒ顯スモノナリ故ニ半過去ヲ用ユルハ通例ニ箇ノ過キ去リタル働キヲ比シ其ノーツノ働アリタル時ニ他ノーツハ尚ホ続キ居レル (第十一章)

という、まさに和蘭語の^{マートシカッペイ}Maatschappijや^{ウエイランド}Weilandの Imperf. (ich hadde) を髣髴とさせる解説を加えているのである。

なぜ平塚は「ハイゼ」氏と「グルケ」氏に従って Perf.を現在時制としなかったのか。それは、彼が恐らく Imperf. (ich hadde) = 《半過去》・Perf. (ich heb gehad) = 《過去》とする和蘭文法を学び続けてきたからであろう。しかも当時の日本では、獨逸語のみならず英語においてさえも、Perf. (ich have had) はいまだ過去時制とされるのが一般であった。平塚はごく自然に Imperf. = 《半過去》・Perf. = 《過去》という対応を、獨逸語を<講堂ニ臨ミ初学生ノ為メニ口演スル>時にも援用していたに違いない。そして獨逸語では、Imperf. (ich hatte) の方こそが、単なる<全ク経過シタル時>では済まない性質のものであった。

3. 三太郎の『獨逸文法教科書 全』(明治27)

表 20 (212頁) を見ると、^{ハイゼ}Heyse以降、Perf.を過去時制とする旧説とそれを現在時制とする新説とが拮抗し、互いにその歩みを競っているがごとき観を呈している。しかも、20世紀に入ってなお、Imperf. (ich hatte) : Perf. (ich habe gehabt) = Mitvergangenheit : Vergangenheit を保持した文典が存在している。19世紀前半にあれほどの論争と混乱を経

験しながら、学校文法は現代語を理解させるためのものであって歴史的発展に関する知識はあくまで補助であるべき（本章序節）とする考え方の故か、独逸語原典——なかならず学校文典における新説への移行は、決して順調とは言えない状況である。

一方、日本の独文典の変化は極めて潔い。表 19（208 頁）に拠ると、平塚以降しばらく Imperf. (ich hatte) : Perf. (ich habe gehabt) = 《継続過去》:【終了過去】が続いた後、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾27年の『獨逸文法教科書 全』をきっかけに Imperf. : Perf. = 《過去》:《現在過去》となり、明治⁽¹⁸⁸⁷⁾30年『三谷獨逸文典』以後ほとんど一斉に、これに切り替わっている。英語と同じ《完了》系の用語が現れるのは更にその10余年後の明治⁽¹⁸⁸⁸⁾42年であるが、この時も一斉に足並みを揃えて新用語に対応している。

ところが、その定義内容を見てみると、奇妙なひとつの事実に気付く。即ち、定義内容には変化が見られず、用語の方だけが交替したのである。

(3)糟谷鍵二郎編『獨文組立法』(明治⁽¹⁸⁸⁷⁾20)

半過去[Imperf.=ich hatte]ハ其行為ノ時期ニ当テ連続シ居タルコトヲ示ス者ナリ

過去[Perf.=ich habe gehabt]ハ其行為既ニ談話ノ時ニ完了シ居タルコトヲ示ス者ナリ

(4)寄山元吉著『獨逸学捷径』(明治⁽¹⁸⁸⁹⁾24)

半過去[Imperf.=ich hatte]ハ素ヨリ過去ナルモ 既往ノ事ヲ其当時ノ現在トシテ思考スルノ語ナリ 例ヘハ「君ガ御出デニナツタ。私ガ手紙ヲ書イテ居リマシタ」ノ如シ 然レドモ単ニ過去トシテ用ユルコト亦多シ 我俗語ニテ半過去ヲ顯スニハ通常(何々シテ居リマシタ)ト云フ…

(見タ。失フタ。拾フタ)等ノ辞ハ 過去[Perf.=ich habe gehabt]ヲ示スモノニシテ haben ナル助動詞ト連用ス。此場合ニ在テ haben ナル辞ハ単ニ(タ)ノ意ヲ顯スニ過ギズ

(5)大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著『獨逸文法教科書(全)』(明治⁽¹⁸⁸⁹⁾27)

過去[Imperf.=ich hatte]トハ過去ニ於テ動作ノ持続セシヲ云フ……尚ホ単ニ過去ノ事蹟ヲ物語ルトキニ用ヒラルモノニシテ之ヲ物語ノ過去トイフ(Historisches Imperfect)

現在過去[Perf.=ich habe gehabt]ハ説話ノ際動作ノ結了シタルヲ云フ

(6)三谷金女三著『三谷獨逸文典』卷一 (明治⁽¹⁸⁸⁹⁾30)

半過去 (die dauernde Vergangenheit oder das Imperfektum)

過去において動作が継続したるを謂ふなり

過去 (die vollendete Gegenwart oder das Perfektum)

●●
現在において動作が完了したるを謂ふなり

(7) 宍戸深蔵・栗原保次郎著『新撰獨修獨逸文法指針』(明治 30)

半過去 Die Mitvergangenheit oder das Imperfectum (unvollendete oder währende Vergangenheit) 或ル所為ガ他ノ所為ト同時ニ終リタル時ヲ云フ 故ニ半過去ハ繼續セル過去ナリ

過去 Die Vergangenheit oder das Perfectum (die vollendete Gegenwart) 説話スル前ニ働ガ已ニ終ハリタル場合ヲ云フ

(8) 藤井信吉・進藤巖著『獨逸語獨修書』(明治 35)

過去[Imperf.=ich hatte] の用法

1. 過去に於て一つの動作若くは状態の持続せし時之れと同時に持続せし動作及び状態を表わす、故に過去は此の場合にありては他の過去に生じたる動作及び状態と関係せずば用ゆるを得ざるなり
2. 歴史的事実を述ぶる場合
3. 過去における習慣
4. 大過去の代りに用ゆることあり

現在過去[Perf.=ich habe gehabt] の使用法

1. 説話の時既に終了したる事柄を述ぶる時他の過ぎ去りたる事柄に関係なく獨立の事柄として述ぶる時
2. 第二未来の代りに用ゆ

(9) 渡辺修二郎著『初学自修獨逸語速成』(明治 36)

過去[Imperf.=ich hatte] は過ぎ去りたる時に於て事の充分為され終わりたるものに適用し、近過去[Perf.=ich habe gehabt] は今僅に為されたるものに適用す

日本の独語学に《現在過去》を導入せしめた(5)大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著『獨逸文法教科書 全』(明治 27)——俗称「三太郎の独文典」は、従来の文法書の〈欽點〉を改正するにあたって、近來の文法の新説が高尙過ぎて難解なので旧説をも斟酌し、妥当でない文法上の訳語は著者が改めた、と「凡例」で語っている^{註 66}。Karl Heyseの言うごとく、歴史比較言語学に多くを負う新説の煩雜さ、高尙難解さは、自らが改訂した上述の文典を一読すれば容易に理解されるであろう。しかし、(5)の著者は、最も新旧の変動著しい動詞の時制に関しては、旧説を斟酌することなく、Präs., *Imperf.* (ich hatte), Fut. を《主時》とし、旧來の《半過去》を《過去》に、《過去》を《現在過去》に改めたのである。

英文典界では、明治⁽¹⁸⁹⁴⁾27年になると Pres.Perf. でない方がすでに珍しくなっている。その前年刊行の例のチャムブレンの『英文典』を最後に、英文典はほぼ完全に新時制に移行する。名称的には確かに、Heyse が^(天保9)1838年に唱えて以来 58 年、明治期においては、明治⁽¹⁸⁸⁰⁾13年に多賀貫一郎が《過去》を《充分ノ現在》と呼び替えて以来 42 年にして、Perf. の現在化の波が漸く日本の独文典界に及んだと言える^{注67}。

しかし、内容的に見た場合、(5)の両時制の定義は他の文典と同じく、Imperf. (ich hatte) は動作の持続を、Perf. (ich habe gehabt) は動作の終了を表わすものとなっている。ただ、その名称だけが入れ替えられたに過ぎない。(3)から(8)において、(3)『獨文組立法』の《半過去》(Imperf. : ich hatte) <行為ノ時期ニ当テ連続シ居タルコト>と(5)『獨逸文法教科書(全)』の《過去》(Imperf. : ich hatte) <動作の持続せし>とでは何が違うのか。(3)の《過去》(Perf. : ich habe gehabt) <談話ノ時ニ完了シ居タルコト>と(6)『三谷獨逸文典』の《現在過去》(Perf. : ich habe gehabt) <動作が完了したる>とでは何が違うのか。名称が違うだけである。

しかし、(5)がやはり新しいと思うのは、《過去》(Imperf. : ich hatte) に<単ニ過去ノ事蹟ヲ物語ル>用法が加えられている事である。本来獨逸語の Imperf. は、【未完成過去】だからこそ歴史時制になり得ていたのである [APPENDIX, No.3 (437 頁)]。しかるにこれは、Heyse が第 5 版で分析しているように、希臘語の Aorist の機能を果たす《不定過去》としての Imperf. である [APPENDIX, No.14(3) (442 頁)]。このような Imperf. は、その 3 年前の(4) 寄山元吉著『獨逸学捷徑』の《半過去》(Imperf. : ich hatte) にも<単ニ過去トシテ用ユルコト亦多シ>として言及されており、Imperf. の訳語名称こそ前者が新説、後者が旧説のちがいこそあれ、内容的には新しい流れへの傾斜が明らかに現れている。

新旧二説が交錯する明治⁽¹⁸⁸⁷⁾30年前後——(7)は旧説に従い《過去》(Perf. : ich habe gehabt) を《主タル時》、《半過去》(Imperf. : ich hatte) を《副時》としている——を経て、名称だけでなく定義内容までが英語風に改まるのは、やっと(9) 渡辺修二郎著『初学自修獨逸語速成』になってからである。即ち、まず定義内容が旧文法のそれと齟齬を来し、名称の変化が後に続いた英語とは逆に、英語にほぼ 10 年遅れて、まず名称の入れ替えが先行し、次に定義内容の変更が行われたのが獨逸語なのである。

4. 寄山元吉の『獨逸学捷徑』(明治⁽¹⁸⁹¹⁾24)と『英語教授書』(明治⁽¹⁸⁹³⁾26)

この点、(4)の寄山元吉の著書は、英語との対比において二重の意味で注目される文法書である。まず第一に、その Imperf. (ich hatte) の内容がふたつに分かれていることである。<既往ノ事ヲ当時ノ現在トシテ思考スル>とは、和蘭語の時代に日本人に親しかった、あの臨場感溢れる《過去ノ現在》である。《既往》の用語といい、その説明といい、この寄山の解釈は、いかにも幕末に和蘭語を学んだ人のものである。そして、この《過去ノ現在》の和訳を、この時制の持つ継続性のよく表われた<何々シテ居リマシタ>のようにしてい

る^{註68}。

続く<然レドモ単ニ過去トシテ用ユルコト多シ>というのが、これが英語の<Past>と重なる部分なのであるが、このような《半過去》と《過去》の説明の仕方が、上述の<そのころの英文典では助動詞を用いたものは「現在完了」であって半過去に当り、助動詞なきものが過去に当る>云々という佐藤良雄の疑惑を呼んだのである（「文典用語の相互影響」55頁）。しかし、明治⁽¹⁸⁸⁷⁾24年当時の独逸語の Imperf. (ich hatte) は《継続過去》であって、単なる《過去》は Perf. (ich habe gehabt) の方であったのだから、今やこの批判は当たらないことになる。

更に、佐藤は、この書に見られる鉛筆の書き込みについて触れている。見出し語の《半過去》を《過去》に直し、<大過去ハ過去完成ニ同ジ>という書き込みは、これが英語系の知識に従って為されたことを物語っている。動詞の形態からすれば独逸語の《半過去》(ich hatte) は確かに英語の《過去》(I had) になるし、何より《過去完成》は英語系の用語である。この《過去完成》は表 17 (195頁) の『デイクソン英文典直譯』(明治⁽¹⁸⁸⁷⁾20) に始まり、明治 21~23 年にかけての Swinton の直訳文典 4 種に現れている。<術語未ださだまらざる時代の空気> (同、56頁) とは、専ら新旧の訳語が並立・混在する英文典界の実情であって、この当時の独文典の文法用語は極めて統一的である。この書き込みをした人物は、定義上の相違を認識してか知らずか、用語を英語にあわせたのであった。

この寄山に関して注目すべき第二の点は、彼がこの 2 年後に『英語教授書』という英文典を書いていることである。この英文典で、寄山は確かに《半過去》=Past (I had)、《過去》=Perf. (I have had) という旧説に従ってはいる、あるいは独逸語と用語を揃えてはいる。しかし、だからといって、英語の Past と Perf. の用法を寄山が決して<誤解>していないことは、その説明を読めば疑いの余地がない。

^(Imperf)半過去ハ過去ノ時期中一定ノ時ヲ云フニ用フ例ヘバ My father returned from China yesterday. I wrote three letters this morning. ノ句中 (昨日) 及ビ (今朝) ノ語アルガ如シ 又タ既往ノ現在特ニ二物ノ働キ同時ナルヲ表スルニ用フ例ヘバ He was playing when I came in.

^(Perf)過去ハ固ヨリ成遂シタルヲ示スモノナルモ漠然トシテ一定ノ時ヲ示スニ非ズ故ニ (何時) ナル意ナシ例ヘバ My father has returned from America. ノ如シ 然レドモ既ニ経過セル一定ノ時日ヲ表示スルトキハ半過去ヲ用フ例ヘバ My father returned from America last night. ノ如シ 尚ホ次ノ例文ニテ過去ト半過去ヲ能ク識別ス可シ Have you been to Nikko? Yes, I was there last year. --How long have you been in Corea? (今尚ホ其地ニ居ル人ニ問フニ用ヒ日本語ニ「君ハ既ニ幾久シク朝鮮ニ御滞在デスカ」ニ相当ス) —When I wrote my last letter, I did not mention (述ベル) this fact in it. —When were you in China? —I have travelled much this year. 今日, 本日, 今

週、今月、今年、本年等ノ語ヲ用フルトキ過去ヲ用フ是レ其時期未ダ経過アラザルガ故ナリ〔太字と下線は筆者〕
(第二巻、162-163 頁)

下線部の説明は、現代人の目にはさぞや不可思議な、矛盾したものに映るであろう。中野柳圃をはじめとする江戸期の蘭語学者は、《過去^(i a p e f)ノ現在》の理解のために多大な労力を費したが、この寄山の英文典では、逆に Perf.の説明が Past の三倍近くになっている。日本人には「現在」と関係する時制の理解が難しく、それが和蘭語では Imperf. (ik hadde)、英語では Perf. (I have had) であることが、ここからも改めて知られるように思う。

しかし、こうなると、内容が異なっても用語が共通の方がいいのか、あるいは内容に合わせて用語の転換ないしは新用語の創出を行なった方がいいのか、考え込まざるを得ない。明治期の、国文典界をも巻き込んだ《半過去》と《過去》の用法的混乱の原因の一端を、この同一人物の筆になるふたつの文法書は明らかにしてくれる^{註69}。しかし、国文典はともかく、洋語文典において動詞時制の用語が混乱したのは、洋語関係者の<無理解>でも<誤解>でもなく、逆に、英・独文典の時制が正確に理解されたが故に、皮肉にもその「ねじれ」がかえって浮き彫りになってしまったのである。

明治⁽¹⁹⁰²⁾35年の(8)『獨逸語獨修書』では、術語は新文法に従って改められている。ところが、その Imperf. (ich hatte) は、名称こそ英語の Past と同じく《過去》となったものの、内容は従来通りの《持続過去》であり、むしろ《現在過去》と呼ばれる Perf. (ich habe gehabt)の方が、あたかも和蘭語の【孤立過去】(ich heb gehad)に逆戻りしたかのような用法を維持している。英文典界はすでに Past = 《過去》・Pres. Perf. = 《完了現在》《現在完了》の時代に入っているのに、この独文典の Perf.の内容は「過去」である。ここにおいて、《現在過去》という術語とその定義は、『英文鑑^{かみ}』から明治前半期の英語に起こったと同様の「ねじれ」現象を見せている。

表 19 (208 頁) を見ればわかる通り、この『獨逸語獨修書』自身の各時制の名称は、1. 現在、2. 過去 [Imperf.= ich hatte]、3. 現在過去 [Perf.= ich habe gehabt]、4. 大過去、5. 第一未来、6. 第二未来 であって、Perf.は現在時制である。ところが、巻末の訳語と原語の対照表では、

《過去》: Die Mitvergangenheit, Das Imperfect(um), Das Präterit(um)
《現在過去》: Die Vergangenheit, Das Perfect(um)

が挙げられており、両者の獨逸語、特に<Vergangenheit>は、Perf.がまだ「過去」であった時代のものである。

この時代のこのような訳語の紛糾を憂えて、この独文典の著者は<本書修了後更に他の獨逸語にて書きたる文法書を繙かんと欲する人の便宜を図り 本書中に用ゐたる語の原名一覧表を掲ぐ 但原名は普通最もよく用ゐらるるもののみに限れり>(247 頁)として、訳語

と原語の対照表を載せて配慮を示している。

(9)はもはや《半過去》《継続過去》の Imperf. (ich hatte) と【完成過去】の Perf. (ich habe gehabt) ではない。英語との共通性が高くなっている。渡辺修二郎は

過去^(Imperf) を半過去とし、近過去を 過去^(Perf) とするは旧来文法語の譯なれども直譯に過ぎて不
 穩当なるを覚ゆ。因て本文の如く改む。未来^(Future exactum) 既成 は又第二未来とも云ふ。彼我言語
 の構成互いに異なり、動詞の時に關する語句の如きは微細の區別を示すべき適切な精
 密譯語を得ざるに苦しむ。講習者宜く实例に就て其異同の点を了解すべし [此は筆者]
 (「脚注」、143 頁)

といて、〈旧来〉の訳を改めた。

当文典のこの時制について佐藤良雄は再び疑念を抱き、〈右においては、近過去は助動詞を用いるもので、普通いう「現在完了」に当り、過去は助動詞を使わない。これまで挙げた独逸文典の用語では、「過去」とは助動詞を使うもの、半過去とは助動詞を使わないものということがあった。このあたりに、術語の混乱を生じているのではないか。深く追求すべき問題である〉と考へた(「文典用語の相互影響」58 頁)。しかし、これが〈術語の混乱〉でないことを繰り返すのは、もはや不要以外の何物でもないであろう⁷⁰。

当時の独逸語では〈助動詞なきものに半過去とあ〉っても間違いではなかったのである。〈助動詞を用いたもの〉は《過去》でよかつたのである。従つて、時制に見られる英・独間のこの「ねじれ」を、〈上来挙げ來つた独逸文典の多くが、古風な用語を用いただけでなく、時には用語とその内容を反対に考へたり、容易なため誤解をしていた〉(同上、59 頁)からだと考へることに、もはや賛同することはできないのである。

すでに^(天保11)1840年頃において、蘭語学の Imperf. (ich hadde) と英語の Perf. (I have had) の内容は逆転していた。“nog duurde” [今だ継続] とか、あるいは “nog niet geheel voorbij” [まだ完全に過ぎ去っていない] 等の和蘭語の Imperf. に関する説明語句は、英語では Perf. のそれであり、逆に “zonder betrekking op eene andere” [他の(時・行為)とは無關係] や、“geheel geëindigd” [完全に終了した] 等の和蘭語の Perf. (ich heb gehad) の言い方は、英語では Imperf. (I had) で用いられるべきものであつた。故に、『英文鑑^{かみ}』の〈過了現在ハ時限ノ全ク過タルヲ言ヒ過去ハ時限ノ未ダ過ザルヲ言〉うというチグハグなことにもなつたのである。

独逸語の Imperf. (ich hatte) と Perf. (ich habe gehabt) の定義は和蘭語のそれと極めて近い。よつて、明治期の英・独文典間で起こつた「ねじれ」も、蘭・英間のそれと同じく、Imperf. と Perf. に関する定義内容が異なるという原因から生じたものであつた。

5. 解答

ここから英・独間のすれ違いが顕在化する。

まず、問題点②に対する解答である。英語の Imperf. (I had) が<Past>に、過去時の<Perfect> (I have had) が現在時の<Present Perfect>に変わった時、日本の独語学のこの2時制は、今だに Perf. (ich habe gehabt) は【孤立時】の過去、Imperf. (ich hatte) は《関係時》の過去という旧文法の殻をまとっていた。故に、英語の Imperf. (I had) : Perf. (I have had) が《過去》:《半過去》になったにも拘らず、独逸語における対応関係は Imperf. (ich hatte) : Perf. (ich habe gehabt) = 《半過去》:《過去》であった。これは、表 19 (208 頁) を見る限りでは Schäfer 文典の影響と考えられる⁷¹。

しかも、独文典の Imperf. と Perf. の定義は、英語ではなく、むしろ和蘭語のそれとの類似を見せて、前者は行為の終了しない《継続過去》、後者は行為の終了した《過去》で、まさしく過去時の中心である。これは、同時期に行われていた、英語の

半過去[Imperf.=I had] ハ十分過ぎ去リタル時ニ於テ起リシ、或イハアリシ {処ノモノ} ヲ言ヒ表ハス

過去[Perf.=I have had] ハマダ十分過ぎ去ラヌ時ノアル時ノ中起コツタ {処ノモノ} ヲ言ヒ表ハス (中西 範訳『ブラウン氏英文典直譯』明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17、107-108 頁)

とは明らかに違う。この Imperf. (I had) の内容はすでに新文法のものであるが、その名称は旧文法のままである。現代文法と同じになった新しい内容の Imperf.、即ち<Past>を基準に考えれば、同じ英語においてさえも、この中西のような旧文法系の《半過去》という術語は、確かに蘭語学譲りの<古風な用語>であり、内容的にも齟齬をきたしているように見えるであろう。そもそもこの《半過去》という術語は、定義の異なる旧文法時代の和蘭語の Imperf. (ik hadde) のために考え出されたものなのであるから、それを、この時代の英語の<Past>に当てはめれば、<Present Perfect>の間違いではないかと思うのも当然なのである。

チャムブレンの『英文典』(明治⁽¹⁸⁹³⁾26) と同時期に『日本英学新誌』に「高等英文典講義」を連載したイーストレーキは、<Past>を《第一過去》、<Present Perfect>を《第二過去》とし、<Past>のために《半過去》を採用することをしなかったが、それは、<此の「パスト」を呼ぶに日本にて往々半過去なる名称を以てすれども、半過去といへばそは眞の過去を表わす能はざるにやとの誤想を生ぜしむるの恐れあるが故に之を第一過去と呼ぶの穩当なるに如かざるなり>という理由からであった⁷²。

しかし、その定義内容を考えたとき、独逸語の Imperf. (ich hatte) にとって《半過去》は<古風>ではない。ましてや Imperf. : Perf. = 《半過去》:《過去》の対応は<用語とその内容を反対に考えたり、容易なため誤解をし>たのではないことがわかる。即ち、問題点②の答えは<誤解>ではなく、その定義内容が英語とは異なっていたためだと考えられる。

【継続】が<半>に相当したのである。Imperf. (I had) (ich hatte) と Perf. (I have had) (ich habe gehabt) の訳語に関する限り、英語と独逸語の共通度が決して高くないのも、

内容的な相違からしてむしろ当然と言える。

そして問題点③に関しては、その<半>の要素を持たない【孤立過去】的な定義のために、独逸語の Imperf. (ich hatte) が《半過去》から《過去》になって後も、Perf. (ich habe gehabt) が《過去》から《半過去》に変わることはなかった、ということが言えるであろう。

第五節 ま と め

以上の考察から、序節にて言及した蘭・英・独文法の時制に関する「訝しさ」に答えることができるであろう。

まず、江戸期の蘭文典において Imperf. (ik hadde) が《過去ノ現在》と和訳されたり、Perf. (ik heb gehad) が <Volmaakt verleden tijd> 【完成過去】と呼ばれたわけは、当時の時制構造が伝統的な旧文法に従っており、その旧文法は三過去時制を採っていたからである。そこにおける Imperf. と Perf. の用法は現代文法とは異なっており、その異なった部分が正しく訳出されたただけであって、決して中野柳圃以降代々の蘭語学者が「完了」の概念を理解できなかったせいではない。むしろ《過去ノ現在》は、原語の直訳ではなく、その用法の核心を捉えて意訳した見事な創出術語として評価されるべきである。

第二に、英文典において《半過去》と《過去》の内容が逆転・混乱している理由は、⁽¹⁸⁸⁴⁾明治17年の Swinton 文典の直訳によって新説が導入されたからである。これにより、旧文法の三過去システムにおいて《過去ノ現在》であった Imperf. (I had) と、現在とつながりを持たない【孤立過去】【完成過去】であった Perf. (I have had) は、新説において前者が「単なる過去」、後者が「完成した現在」に変化した。よって、幕末から明治期にかけての英文典は、旧文法に依拠したものは Imperf. = 《半過去》・Perf. = 《過去》になり、新文法に従ったものは、逆に Imperf. = 《過去》・Perf. = 《半過去》となる。このため、旧時制の術語の上に新時制による用語が積み重なり、英語の時制用語は諸説紛々となってしまったのであった。

第三に、英・独間で《半過去》の内容が逆転している理由は、年代的な概念の変遷という縦軸と、両語間の用法的「ねじれ」という横軸の交点に位置するものである。Imperf. (ich hatte) が《半過去》から《過去》に、Perf. (ich habe gehabt) が《過去》から現在時制に変わったのは英語と同じで、これが縦軸である。しかし、新たな言語学的潮流揺籃の地であった独文典の時制は、逆に比較的遅くまで三過去時制を保持していた。英文典界が一足も二足も早く Imperf. (I had) = 《過去》・Perf. (I have had) = 《半過去》になったとき、独文典界では、明治30年代になっても今だに Imperf. (ich hatte) = 《半過去》・Perf. (ich habe gehabt) = 《過去》であることが希ではなかった。これが横軸である。これが、寄山元吉や高橋金一郎の独文典に対して、用語が逆ではないかという佐藤良雄の疑惑を呼んだのである。

以上のような逆転現象の原因を、当事者の誤解・不理解、あるいは時代的限界に求めさ

せたのは、現代英文法の「現在完了」の知識である。いつの時代にもどの言語においても過去形と完了形の意味用法は変わらないという眼で見ると、Imperf. (ik hadde) (I had) (ich hatte) が《過去ノ現在》、Perf. (ik heb gehad) (I have had) (ich habe gehabt) が《完全過去》という考え方は、到底理解することができないものとなる。

我々は、《過去ノ現在》という術語を生み出した江戸期の蘭語学者に多大な敬意を払うべきである。明治期の用語的混乱を、むしろ誇りとすべきである。《半過去》と《過去》の用法的逆転に始まる混乱は、語学教育的には明らかにマイナスであった。ひとつの文法用語が Imperf.にも Perf.にもなり、しかも、それが各文法書ごとに、各言語ごとに異なるとあっては、学習者にとって迷惑以外の何ものでもないからである。しかし、語学教育から離れて見た場合、この混乱は、時制の時代的変化と言語間の用法的相違に直面した日本人が、それに的確に反応し得た結果なのだと、プラスに評価してもよいのではなかろうか。

注

1) H.Jellinek, *Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik*. II. § 550 : — 伝統的な羅典語文法では <Die gewöhnliche Definition des Imperfekts lehrte, daß es eine angefangene, aber noch nicht vollendete Handlung bedeute. Man scheint dies auch so aufgefaßt zu haben, daß die Handlung in die Gegenwart hereinreiche, und dadurch zu der Meinung gekommen zu sein, daß die durch das Imperfekt ausgedrückte Vergangenheit der Gegenwart noch näher liege die Zeit des Perfekts.> (Imperfekt は普通、開始されたがまだ完成されていない行為を表わすものである。その行為は「現在」の領域にまで到達していると考えられていたので、Imperfekt で以って表現される過去の方が Perfekt の時よりももっと「現在」に近い、ということのようである)

2) B.Delbrück, *Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*. 2.Theil. 1897, 3・4 頁。

この二分法の反映は当時の蘭語研究に見ることができる。表 15 (154 頁) を見ればわかるように、同じ ^{マートシカッペイ}Maatschappij <文社先生> 社版の蘭文典であるのに、^(文政5)1822 年の *Grammatica* と ^(弘化3)1846 年の *Rudimenta* <留地棉多> 以降とでは、時制の構成と名称が、次頁の表のように大きく違っている。

<関係時>というのは、ふたつの事象を必要とし、それらの時間的前後関係ないしは同時性を問題とするもので、2・4・6. がそれに当たる。旧文法に典型的な又角的五分法を採る *Grammatica* に対し、24 年後の *Rudimenta* は <孤立時> と <関係時> とで時制を構成している。明治期の独文典では、これらは《主時》《副時》と翻訳された。16 世紀に始まったはずのこの <関係時> が、文法の変動期に入った 19 世紀前半に、<非完了時> <完了時> になる前の、又角的五分法に対する時制の分類方法として、和蘭語のみならず独逸語においても採用されている (表 20 [212 頁])。)

| 英語の 《本源時》 | 時制 | 文典名 | <i>Grammatica</i> (1822; 天保13年翻刻) | <i>Rudimenta</i> (1846) |
|--------------|-----------------------|--------|---|---|
| | 1 | I love | | Tegenwoordige tijd [現在] |
| 2 | I loved | | Onvolmaakt verleden tijd [=Imperf.; 未完成過去] | Eerste betrekkelijke verledene tijd [=Imperf.; 第一関係過去] |
| 3 | I have loved | | Volmaakt verleden tijd [=Perf.; 完成過去] | Verledene tijd [=Perf.; 過去] |
| 4 | I had loved | | Meer dan volmaakt verleden tijd [超過去] | Tweede betrekkelijke verledene tijd [第二関係過去] |
| 5 | I shall love | | Toekomende tijd [未来] | Toekomende tijd |
| 6 | I shall have loved | | ----- | Betrekkelijke toekomstige tijd 《関係未来》 |

この分類の場合気を付けなければならないのは、過去の〈関係時〉が Imperf. であって、Perf. ではないことである。〈孤立時〉には Präs.・Perf.(ich habe geliebt)・Fut.が、〈関係時〉には Imperf.(ich liebte)・Plusquamperf.・Fut.exactum が所属する。当時の和蘭語と独逸語にあつては、Imperf.を〈関係時〉の過去、Perf.を〈孤立時〉の過去とするのが一般であつて、決して理解を誤っているわけではない。

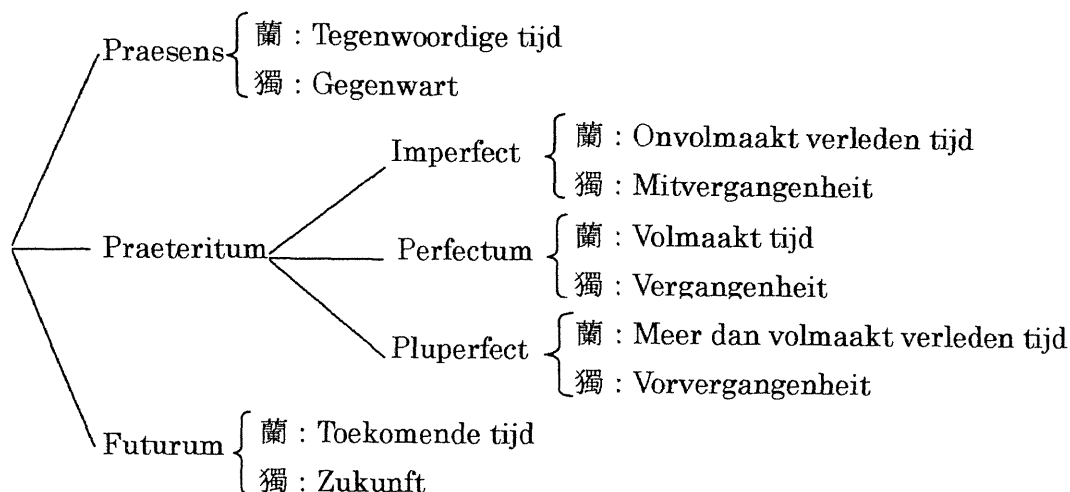
これを、英語の二分法、例えば Swinton の非完了の【単一時】(Simple tense)または《本源時》(Primary tense)、完了の【複合時】(Compound tense)または《第二時(関係時)》(Secondary tense)と比較すると、《本源時》のなかに複合時制が紛れ込んでいて、混乱があるように見える。Swinton の《本源時》は Pres.・Past(I loved)・Fut.、《第二時(関係時)》は Pres.Perf.(I have loved)・Past Perf.・Fut.Perf.であり、Past と Pres.Perf.の位置が入れ替わっているからである。しかし、他との関連を必要とする《関係時》が、英語の場合は旧文法下にあつても元々 Pres.Perf.であつて Past ではないということから、新時制と英語本来の実情にあうように、Swinton は【孤立時】と《関係時》の内容を、いわば編成し直したことになる。

Swinton の〈Simple tense〉〈Compound tense〉の出典は *Language lessons: An introductory Grammar and Composition*. 81-82 頁 (New York, 1876) [APPENDIX, No. 39 (453 頁)], 《本源時》《第二時(関係時)》のそれは、平井廣五郎訳述『須因頓氏大文典講義』第百十六・百十七節(明治22)より。

3) 又角的五分法〈begabelte Fünfzahl〉の原意は「フォークの形をした五分法」で、その名のとおり、ひとつの現在・三つの過去・ひとつの未来で構成され、Perf.は三つの過去時制のひとつである。詳しくは渡部昇一『英語学史』71 頁、及び『英文法史』159 頁参照。この時制構成を私的に図示すると次頁のようになる。

4) スタンダード英語講座3『英語の歴史』大修館 1984、p.248。渡部昇一は、「キクロの時代に帰れ」という人文主義者たちの極端に時代錯誤な主張に押されて、中世羅典語は殺されたのだと述べている。

5) G. Brown, *The grammar of English Grammar*. New York, 1851. 341 頁脚注。ただし6時制にこだわりさえしなければ、^(寛政10)1798年の Sedger (表18[202頁])が、40年近くも



前にすでに Present Perfect と Past を使用し、^(享和1)1801年の Locke の蘭語英文典にも、<I have loved> が、Present Perfect という意味の和蘭語名 de tegenwoordige volmaakte tijd を与えられている例を孤立的に見出すことができるが、完了・非完了による六時制で、<I have loved> = Present Perfect、<I loved> = Past とする動きが連続するようになるのは、表 15 (154 頁) では飽くまでも^(天保5)1834年の Perley 以降である。

6) Heyse, K. W. L., *Dr. L. C. A. Heyse's ausführliches Lehrbuch der deutschen Sprache*. Fünfte, völlig umgearbeitete und sehr vermehrte Ausgabe. Erster Band. Hannover, ^(天保9)1838. 683 頁。(以後 Heyse 第 5 版と略記す)

7) R. Kühner, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*. 1. Band. 3. Aufl. Berlin, 1898. III~V 頁 [1834 年の第 1 版への序文]。

8) W. Vesper, *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert. Zur Begründung einer historisch-kritischen Sprachdidaktik*. Tübingen. 1980. 141-142 頁。

9) Heyse の文典の内容が第 1 版からどのように変わっていったかについては、上記注 8 と同じく Vesper の *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert*. 141-146 頁参照。

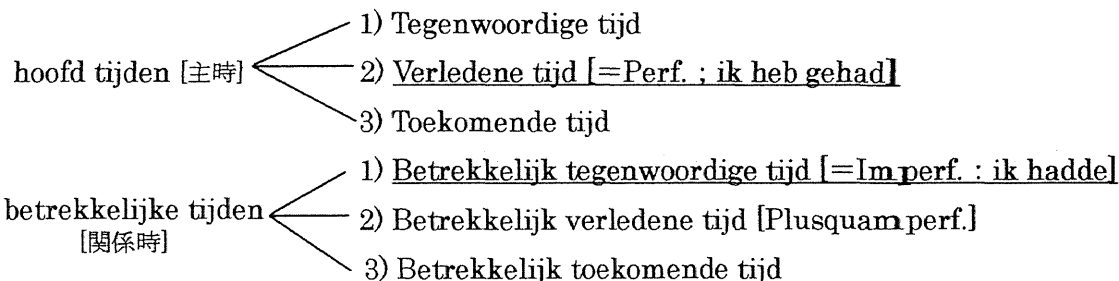
10) Schmitthenner の文法については、Vesper, *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert. Zur Begründung einer historisch-kritischen Sprachdidaktik*. Tübingen. 1980. 136-138 頁。

K. Bernhardt の詳しい来歴は不詳である。彼の文法書も今回は残念ながら未調査である [使用文法書 C-2(22)]。紛らわしい名前であるが、哲学文法の代表者 August Ferdinand Bernhardt (1769~1820) とは別人で、この人については、B. Delbrück, *Einleitung und das Studium der indogermanischen Sprachen*. Leipzig, 1919. 31-38 頁参照。

11) Vesper, *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert. Zur Begründung einer historisch-kritischen Sprachdidaktik*. Tübingen. 1980. 136 頁。なお、哲学文法の時制システムについては、例えば H. Arens, *Sprachwissenschaft. Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart*. Freiburg/München, 1969. 117-119 頁参照。

12) H. Bauer, *Vollständige Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*. 3. Band. Berlin, 1830から、^(天保1) Schmitthennerへの非難は序文 (Vorrede) III～IX頁、<Hauptirrtum>については73頁。後者で、Imperf. (ich hatte) を、常にもうひとつ別の文と結び付いてしか現れないかのように考えて<関係時>とした所が、旧文法家の第一の誤りだというのが、Bauerの見解である。

旧文法で<関係時>に属する Imperf. (ik hadde) (I had) (ich hatte) は、上記注1 (264頁) の Jellinek の言葉通り、現代文法とはその解釈が異なり、過去世界の中でその時の「現在」を表わすものとして、「現在」にまで及ぶと考えられた時制である。19世紀の前半期、蘭・独文法における Imperf. は一時、<Betrekkelijk tegenwoordige tijd> [関係現在]・<Vorgegenwart> [前現在] として現在時制化する。表15 (154頁) では Mulder^(天保3) (1856) と Wees^(天保4) (1857)、表20 (212頁) では Bernhardt^(文化7) (1810) と Schmitthenner^(文政11) (1828) がそうである。例えば Imperf. (ik hadde) を現在時とした Wees の時制は、



ということになり、その結果、同じ Imperf. が、人により過去時にも現在時にもなってしまうのである (資料47～48 [186-187頁])。

そして、その間一貫して過去時であった和蘭語の Perf. (ik heb gehad) の時制的所屬も、この頃から動揺を示し始め、Wees と同時期の Mulder^(天保3) (1856) の Perf. は、その名称こそ未だに <de verledene tijd> [過去時] であるが、その定義はすでに <De verledene tijd stelt de werking of den toestand voor, als voorbij of geschied zijnde met betrekking tot het tegenwoordige.> [完了はその行為及び状態を、過ぎ去ったもの、あるいは「現在」と関係を持って生じたものとして表わす] (§235) のように変化している。

13) V. Thomsen, *Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19. Jahrhunderts*. Halle(Salle), 1927. 43-44頁。

14) K. W. L. Heyse, *System der Sprachwissenschaft*. Nach dessen Tode herausgegeben von DR. H. Steinthal. Berlin, 1856. X頁。事実、第5版出版のわずか2年後の^(天保11)1840年——清ではアヘン戦争が勃発し、日本では『英文鑑』が訳出された年である——に出された第12版の序文で、Karl は、Schulgrammatik [学校文法] は現代語を理解させるためのものであって、歴史的発展に関する知識は現在不明瞭な箇所を明らかにするための補いであるべきだとする立場を表明している (K. W. L. Heyse, *Dr. Joh. Christ. Aug. Heyse's deutsche Schulgrammatik oder kurzgefasstes Lehrbuch*, mit Beispielen und Übungsaufgaben. 23ste verbesserte Aufl. Hannover, 1878. IX頁)。表20 (212頁) における独逸語原典の時

制がなかなか新時制に切り替わらないのは、Schulgrammatik [学校文法] に対するこのような考え方が影響していることもあるのであろう。しかし、印欧歴史比較言語学の興隆と重要性を十分に認識していたことは勿論で、この点は Humboldt も同様であった（ロウビンズ著 / 中村完・後藤齊訳『言語学史』198頁）。

15) H. Bauer, 1.Band の序文 (Vorrede)、V～VIII頁。

16) H. Bauer, 3.Band の序文 (Vorrede)、III～IX頁。

17) H. Bauer, 3.Band. § 512。

18) H. Bauer, 3.Band. 43 頁脚注、及び 68 頁脚注。

19) これについては本章第三節 5. (236 - 237 頁) にて言及した。出典は G. Brown, *The grammar of English Grammar*. New York, 1851. 341 頁脚注。原文は APPENDIX No. 19 (445 頁) 参照。

なお、18 世紀末から 19 世紀始めにかけて、英国がなかなか新しい言語学に感染しなかった理由と思われることについて、R. H. Robins が『言語学史』（中村完・後藤齊訳、研究社 1992）の 177 頁で触れている。

20) 下位区分の〈Moment〉を現在・過去・未来とする旧文法の実例を、草創期の蘭語学に見ることができる。右の、中野柳圃『蘭学生前父』の〈三世図〉がそれである（『蘭語学』I、290 頁より）。

この表で、過去×現世 (= Imperf.) は〈waaren〉、過去×過去は〈hadden+p.p.〉になる。ところが、真の過去時制としての《過去》 (= Perf.) の占める場所がこの表にはない。本表では、〈hebben+p.p.〉は「現世×過去」になってしまうからである。Imperf. である《過去ノ現在》と逆転したこの《現世ノ過去》と、その略表記である《現過》という用語は、『九品詞略』以前の著作に現れる。この表の「現世×過去」=

〈hebben+p.p.〉は、和蘭語ではなく、本章第一節で後述するように、柳圃が好んで用いたと言われる仏文典の Perf. のことではないかと考えられる。

21) Heyse 第 5 版、1.Band. 683-684 頁。 *System der Sprachwissenschaft*. (1856)^{手致³}でも、Präsens Perfectum は普通「過去」Vergangenheit だと見なされるが、それは完了した行為を過去と混同するからだと、同じ主張を繰り返している (428 頁)。

22) <Das griechische Perfekt unterscheidet sich aber von dem anderer Sprachen dadurch, dass es nicht bloss eine gegenwärtig vollendete Handlung, sondern die vollendete Handlung zugleich auch als in ihren Wirkungen und Folgen noch

| | 現 世 | | 過去 又 仮令 | | |
|--------|---------------------------------|-------------|---------|---|------------------|
| 未 来 | zullen. zal. zult. | 将 | 未 来 | zoüden. zou. zoüde. | 応 |
| 現 世 | zijn. ben. zijt. is. | 在 | 現 世 | waaren. was. waart. | 會 |
| 過 去 | hebben. heb. hebt. heeft. | 既 又 有 | 過 去 | ^(ママ) habben.* had. hadt. | 會 又 會 有 |

※正しくは hadden

fortbestehend bezeichnet.> (R.Kühner, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*. 1.Band. § 384.2.). これは第3版(1898)からの引用であるが、この初版は1834年である。

23) K. W. L. Heyse, *System der Sprachwissenschaft*. Nach dessen Tode herausgegeben von DR. H. Steinthal. Berlin, 1856. 427頁。<ストア学派の…ギリシア語動詞の分析に対する最大の功績は、時制形に内在する時と相の意味を抽出したことである> (ロウビンス著 / 中村完・後藤齊訳『言語学史』34頁)。

F. Boppも、一方では古代希臘の Dionysios Thrax の教説に拠っていたと言われるように (B. Delbrück, *Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen*. 1919. 146頁)、新言語学にとって希臘語の考察は重要な役割を担っていた。同時代人の R. Kühner は<学問的に洞察鋭い希臘文法の多くの著作が近年羅典文法と争っている>と述べている (*Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*. 1.Band. 1898. III 頁 [1834年の初版への序文])。

24) H. Bauer, 3. Band. §526.

25) Bauer, Bd.3. §529. 97-98頁。

26) J. Grimm, *Deutsche Grammatik*. 4. 1. Teil ; rpr. : Jacob Grimm und Wilhelm Grimm Werke. Band 13. Olms-Weidmann Hildesheim · Zürich · New York, 1989. 184-5頁。原文は APPENDIX No. 13 (441頁) 参照。

27) ⇒ 注1。

28) Delbrück の *Vergleichende Syntax der Indogermanischen Sprachen* によると、行為の持続・完了を表す<Aktionsart>という表現は「従来の文法には知られていない表現であり、Curtius が<Zeitart>と呼んだものを、ここで<Aktionsart>と命名する」と言っている (2.Theil. 8頁)。

29) 斎藤信『日本におけるオランダ語研究の歴史』(大学書林、昭和60) 103、112、138頁。<中野柳圃が訳した文法用語、とくに…onvolmaakte voorleeden tijd を「過去ノ現在」、tijd volmaakte voorleedje または volmaakte voorleeden tijd を「過去」と訳したのはいささか気にかかる。…volmaakte voorleeden tijd または volmaakte verleeden tijd は正しく訳せば、「完了過去」または「過去完了」でなければならないのに、文例はみな「現在完了」すなわち voltooid tegenwoordige tijd である。そういうことから「過去完了」には meer dan volmaakte verleeden tijd というような、やや不可解ともいえる用語が用いられたのである> (112頁)。

杉本つとむも、『^{オランダごほうげ}和蘭語法解』の例文について、<文法的には<全成過去>は現在の<現在完了>で、<過去過去>が<過去完了>となる。いずれにせよ訳文ではやや対応を明確にすることが困難である> (『蘭語学』IV、1013頁979+5) のように考えている。

30) 佐藤良雄「文典用語の相互影響——特に動詞過去の用語について」日本大学人文科学研究所研究紀要第4号、昭和37、55-56頁。このテーマに関して、佐藤には更に「動詞

過去の用語に関する研究」(日本大学創立七十周年記念論集第1巻・人文科学編、1960)、「英文典と国文典」(『日本の英学百年』明治編 所収、研究社、1968)、「明治百年の国文典における西洋文典の影響」(『国語学講座』第1巻所収、白帝社、昭和44)がある。

31) 佐藤良雄「文典用語の相互影響——特に動詞過去の用語について」56-57頁。

32) 佐藤良雄「動詞過去の用語に関する研究」にも、<安政三年(1856)から今日(1960)まで百年続いている>とある(2頁)。

33) Weiland には他に^(文化3)1806年版と^(安政1)1854年版とがある。^(弘化3)1846年版と比べると、この2書の、ほとんど全く同文の定義はひどく簡略で、^(文化3)1806年版ではこのようになっている。

De onvolmaakt verledene tijd duidt eene niet geëindigde handeling aan.

【未完成過去】は未だ終わっていない行為を表わす。

De volmaakt verledene tijd stelt eene zaak als geheel geëindigd voor.

【完成過去】はある事柄を完全に終わったものとして表わす。 (63頁)

34) Bilderdijk, *Nederlandsche Spraakleer*. 159-160頁。本書における三過去の名称は Onvolmaakt Voorleden tijd (=Imperf.) 【未完成過去】、Volmaakt Voorleden tijd (=Perf.)

【完成過去】、Meer dan volmaakt Voorleden tijd 【更なる過去】である。これらをそれぞれ algemeen Voorleden 「一般過去」、afgedaan Voorleden 「終了過去」、voor-Voorleden 「前過去」としたほうがより適切であろうと、彼はここで提案している。

35) 現代オランダ語においても、<現在完了と過去の使い方は特殊なので注意をすることがある。現在完了は、客観的、静的に過去のことを説明するのに使う。いわば辞引のなかの説明のような時制といえる。過去は、多少とも主観を含めて、動的に過去のことを描写するのに使う。いわば映画の中でのように動きのある時制といえる>。前者は事実だけを述べ、後者は心にありありとその情景が浮かんでいるのである。この一節は R. H. Hesselink, *Beknopte grammatica van het Nederlands* からのものである(斎藤 信『日本におけるオランダ語研究の歴史』113頁所収)。

独逸語においても、表 20 (212頁) の第I期の文法家は、この和蘭語の《関係過去》と【孤立過去】に相当する Imperf. (ich hatte) と Perf. (ich habe gehabt) の用法的解釈を行っている。Imperf.に対する Gueintz(1641) の<die fast vergangene Zeit> [過ぎ去ったばかりの時]、及び Gottsched(^{享和13}1762) の<die kaumvergangene Zeit> [過ぎ去ったか過ぎ去らないかの時] は、このような解釈を短い名称の中に凝縮したものに他ならない。Adelung (^{天明2}1782) は、<Imperf. (ich hatte) は事象が因果関係を持つ「歴史」において最もよく用いられ、これが故に Imperf. は独逸語における真の「歴史時制」でもある>と述べている (*Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache*. 1. Band. § 677) [原文は APPENDIX No. 3(1) (437頁)]。この Imperf. は現場証人としての用法で、Bauer も第3巻の § 517 全体をその説明に充てている。しかし、それも Aichinger や Adelung によってすでに否定されたところのものであった [APPENDIX No. 2 (437頁) 及び No. 3(2) (438頁)]。また、本章注 57 も参照。

36) ところが『三種諸格』では、<voorgaat>という Imperf. の下の書き込みが<現在ノ過去ナリ>となっており、その解説文では《過去ノ現在》である（『蘭語学』I、440頁）。当時の Imperf. は《過去ノ現在》とは呼ばれても、逆の《現在ノ過去》というものは現れてこない。柳圃の蘭語研究の最初期に《過去ノ現在》とも《現在ノ過去》とも呼ばれていたとすれば、《現在ノ過去》の方は仏文法の Perf. の可能性がある。注 20 も参照のこと。

37) 『蘭語学』I、471頁。続く<ik leerde>の訳例は456頁。

38) シーボルトの助手を務めた Hoffmann の『日本語文典』*Japanische Sprachlehre* (Leiden、1877^{明治10})では、「ki」も「tsu」もともに語りの時制で孤立過去であるが、「ki」は単純孤立過去で、継続・繰り返し状態は表わさず (ohne Dauer und Wiederholung, § 81)、希臘語の Aorist と同じように使われ、「nu」のヴァリエーションである「tsu」は、事が終わった (die zu Ende gehende Handlung, § 84 ; das Hingehen einer Handlung oder eines Zustandes, § 85) ことを表わすものである。西洋人の眼で以って見ると、「ki」が Aorist になるところが興味深い。柳圃は「tsu」を“ik heb gehad”に対比させ、その一方でこの「ki」を、和蘭語の Imperf. は孤立過去ではないけれども、語りの時制として“ik hadde”の対訳和語に選んだということになる。

39) 『蘭語学』I、355頁。

40) 『蘭語学』I、291頁。このような《過去ノ現在》としての Imperf. が決して特殊なものではなかったことを示すために、江戸幕府旧蔵洋書における Imperf. と Perf. の定義を APPENDIX に列挙する。これにより、当時のこのふたつの過去時制が現代とは異なる定義と用法を持っていたことが更に理解されるであろう。

41) 『蘭語学』1、644頁。

42) Heyse 第5版、Erster Band. Hannover, 1838. 685頁。

43) 『蘭語学』1、439-442頁。

44) これらの訳語は、井上好治「文化年間における長崎の西洋（蘭・仏・英）文法論」116頁から。ところが、^(嘉永4)1851年の Bomhoff による改訂版の P. Marin では、この三時制はそれぞれ<Imparfait><Parfait défini><Parfait Composé>と名を変え、《第一の過去》は【未完成過去】(=現代の「半過去」)、《第二の過去》は、中村秀穂『ソンメル氏佛文典直譯』(明治⁸20)に現れた《定過去》(=現代の「単純過去」)、《現世の過去》は《複合過去》(現代も同じ)になっている。ここで注意するのは《定過去》の内容である。なぜなら *Port Poyal Grammar* (1660)では、《定過去》なのは<Parfait>の方であって、<2.Prétérit>は《不定過去》になっているからである。つまり、仏蘭西語の《定過去》は最初<Parfait>であったが、やがて定・不定の解釈が変わって、<2.Prétérit> (=Passé simple) が《定過去》になったということになる。この変化については次頁の表参照。

45) 『蘭語学』I、290頁。また本章注 20 参照。

46) 『蘭語学』I、420頁

| 年号 | 文典または著者名 | be+~ing | 1.Prétérít Imparfait | 2.Prétérít Parfait défini Passé simple | Parfait Passé Composé |
|-----------------|---|---------|-------------------------|--|--------------------------|
| (9代家重) 1753 | Port Royal Grammar (1660年初版、その英訳) | | | 不定過去 | 定過去 |
| (10代家治) 1765 | Ward (英) | | 不定過去 | | |
| (田沼時代) 1784 | Webster (英) | 定過去 | 不定過去 | | |
| (寛政7) 1795 | Murray (英) | | 定過去 不定過去 | | 不定過去 |
| (嘉永4) 1851 | P. Marin (Bomhoff 改訂) | | | 定過去 | |
| (安政2) 1855 | Lloyd (英) | 定過去 | 不定過去 | | 定過去 不定現在 |
| (文久2) 1862 | Noel et Chapsel | | | 定過去 | 不定過去 |
| (明治20) 1877 | ソンメール氏佛文典直 訳 (平山直道訳) | | 《半過去》 | 《過去》 | 《過去》 |
| 1887 | ソンメル氏佛文典直訳 (中村秀穂訳) | | 《半過去》 | 《定過去》 | 《過去》 |

47) *A general and rational Grammar*. 1753. Note (Scolar Press 版 No.73.)。以下のふたつの引用も同書からのものである。

48) この時期、和蘭本国の文典では Mulder^{天政3}(1856)と Wees^{天政4}(1857)の二人が、Imperf. (ik hadde) を<Debetrekkelijke tegenwoordige tijd>【関係現在】と呼んで、現在時制に分類している。現在時制としての Imperf.は独逸語の哲学文法に現われ、その時期は1810～20年代で、和蘭語より50年近くも早い、それは、新たな言語学的動きによって否定される運命にあった(本章第三節 表20[212頁])。一方、英語の分野では、表15(154頁)にも表18(202頁)にも現在時制となった Imperf.(I had)は見出されない。幕末から明治維新の時期は、英・独の原典ではむしろ、【孤立時】の過去であった Perf. (I have had) (ich habe gehabt)が、1830年代から《現在》の完了時へと移動を開始している。

49) 蕃書調書の後身にして東京帝国大学の前身である開成所で使われたテキストである。表17(195頁)において、三過去時制を取らない最も初期の文典である。その時制は、基本3時制の外に、<Imperfect>と<Perfect>の時制が各3種ずつあり、結果的に9時制になっている。

当代きっての英才達がこれによって学んだため、日本語文典への影響が大きかった。故に、明治初期の洋風国文典では、《半過去》

を「現在」とするものと「過去」とするものが混在することとなる。『月刊文法』に連載

「木の葉文典」の時制

1. Present (advise)
2. Past (advised)
3. Future (shall advise)
4. Present Tense Imperfect (am advising)
5. Past Tense Imperfect (was advising)
6. Future Tense Imperfect
(shall be advising)
7. Present Tense Perfect (have advised)
8. Past Tense Perfect (had advised)
9. Future Tense Perfect
(shall have advised)

された古田東朔の「大槻文彦伝」(九)(十三)に、「木の葉文典」、Pinneo、Quackenbos、Swintonの時制に関するごく短い記述がある。

この原本が、中浜万次郎が米国より持ち帰った文法書 *The Elementary Catechisms, English Grammar* (1850) であることは周知のことであるが、この現在時制の Perf.を持つ英文典は、まず手塚律蔵と西 周助により『伊吉利文典』(安政6?) となり、以後開成所『英吉利文典』として版を重ねて洋語学習者に広く愛用され、大槻文彦の国文典の淵源にもなったことは有名な話である。

しかし、この原本の著者については、従来いずれの研究も記していない(勝俣銚吉郎「英文典事始」『英語青年』Vol.XLXI.-No.4; 竹村 覚「徳川時代の英語研究」168頁; 豊田 実『日本英学史の研究』161-162頁; 桜井 役『日本英語教育史考』52、4頁; 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』104-110頁; 『日本の英学100年』265-266頁; 高梨健吉『日本英学史考』134-135頁等)。しかるに、惣郷正明のみはこれを Murray のものとして、<当時の刊行にもうひとつ『伊吉利文典』がある。…英人 L.マレーの英文典 *The Elementary Catechisms, English Grammar* 1850年版をそのまま筆記体の木版で刊行した>と述べている(『日本英学のあけぼの』創拓社、1990、137頁)。

50) 「直訳文典」というのは、洋文を解さない初心者が独力で原書の文法書を学習できるよう考え出されたもので、<できる限り逐語訳をして、原文との距離をなくして訳出する方法>(『蘭語学』II、1150頁)である。具体的には、日本語と語順の異なる欧文に、漢文を訓み下す時の句読法を用いて読み順を附すという、漢文訓読方式に基づく徹底した逐語訳である。蘭語学習が全国的に普及した安政年間頃に広まって明治期に引き継がれ、明治20年頃にそのピークを迎えている。明治文化全集別巻『明治事物起源』(昭和44、539頁)には次のようにある。

直譯本の流行

英文を義得せんとする初学者用として、リーダーの直譯本の発行、一時に流行せり。明治16年4月4日の〔絵入自由〕に『ウヰルソン氏第一読本直譯、右はウヰルソン第一リードリの譯文(錦織精之譯)に英音のかなを冠し、一二三を以て返り點を付したる書にして云々』などの広告を見るは、其一斑なり。

51) Pinneo は慶応義塾、Quackenbos は大学南校(東京大学の前身)で専ら用いられた。前者には明治2年に尚古堂より出された翻刻版があり、後者は明治3年に早々と直訳されている。

52) 本来なら嶋文次郎の初版の方が4月で早いのであるが、ここで調査したのは11月出版の再版なので畔柳の方が1ヶ月早いことになった。嶋文次郎の《現在完了》とそこに到る経緯については佐藤良雄の論文「動詞過去の用語に関する研究」に詳しい。序章注8(24頁)も併せて参照されたい。

Nesfieldの時制は、序章注8で触れたとおり、主要三時制に組み合わされる下位区分が、<前・同時・後>という時間的關係から<開始・継続・完了>という行為の状態に変わっ

たところの新時制である。すでに明治⁽¹⁸⁸³⁾16年に出された『克屈文典直譯』が、この Nesfield と全く同じ時制システムを持ち、三種の時（現在・過去・未来）に四種の仕方（不定・不十分・充分・充分引続）を組み合わせている。しかし、時代の傾向とでもいうのであろうか、Cox が直訳された時期には Swinton が流行の兆しを見せ始め、この時制システムが受け入れられるのは明治 30 年代を待たなければならなかった。

一方、国文典関係では、岡澤鉦次郎の「文典の時の論」が、〈時間式の時〉と〈動作式の時〉という言葉でこの新時制を縷々説明し、〈ストロング・ローゲマン・ホキーレル三氏の言語学史より…表を〉訳出して 9 時制を提示している。前者は〈実界の時間〉、即ち Present time, Past time, Future time を、後者は〈実界の時限と符号するか否かに関せず、一に其の動作の既に過ぎ去りたるか現に行はるゝか将来に來たらむとするか〉、即ち Present action, Past action, Future action を表わすものである（『國學院雑誌』第七卷第八、明治⁽¹⁹⁰¹⁾34 年 8 月。307-312 頁）。

53) ただしフランス語、スペイン語等においては、《半過去》は今日でも健在である。この明治 30 年代初頭に江戸期以来の洋語学の区切りを置くもうひとつの理由は、創出および意識術語の使用頻度の変化である。江戸～明治初期は文法用語を創出あるいは意識する傾向が強く、それらが廃されて直訳の術語に切り替わるのが、同じ明治 30 年代なのである（第三章参照）。

更に外山敏男は、教育史の立場から、中等英語教育の時代区分の第 1 期を「訓読時代」と命名し、同じ明治 30 年代前半を以て一線を画している（「英語教育の時代区分——日本英語教育史序説」；『文化と言語』札幌大学外国語学部紀要 Vol.9-No.2,1976）。

54) 勿論、英語のすべての Imperf. (I had) が和蘭語の Perf. (ik heb gehad) に対応するわけではない。省略した他の例の中には、英語の Perf. が和蘭語の Perf. に対応する例 (I have travelled much this year : ik heb dit jaar veel gereisd. 等) も含まれている。即ち英語の過去時制はオランダ語の過去形と完了形の両方に相当し、英語の完了形はオランダ語の完了形に相当するるのである (B.C. ドナルドソン著/石川光備・川崎靖訳『オランダ語誌』現代書館、1999。112 頁)。

55) 上編卷之六 二員三位五様六時 (杉本つとむ『英文鑑^{かがみ}——資料と研究』ひつじ書房 1993、136-137 頁所収)。

56) 下編卷ノ四第五章 (同上書 511 頁所収)。

57) このような二言語間における Perf. と Imperf. の用法的相違に関する言及は、J.G. Adler, *Ollendorf's New Method of learning to Read, Write, and Speak the German Language* (明治⁴1871) にも見ることができる。これは英語で書かれた独文典であるので、当然ながら英・独間の比較が随所に出てくる。該書で彼は、独逸語の Perf. と英語の Imperf. について、次のように述べている。

...the Germans sometimes employ the perfect, when the English idiom requires the imperfect ; e.g.... *er ist letzte Woche gestorben.* *he died last week.* (§ 163)

これは、＜我々オランダ人が【完成過去】(Perf.=ik heb gehad) を用いる場合、英国人はしばしば【未完成過去】(Imperf.=I had) を用いるということに注意するのは決して無益なことではあるまい＞という、あの Sewel(1708) の言を思い出させずにはおかない。Sewel は、英文典は和蘭語で書き、和蘭語文典は英語でものした人である。Sewel も Adler も、英語を外国語として見る視点が、このような「ねじれ」を際立った特徴としてとらえさせたのであろう。

Adler は、英語の Imperf.三態は独逸語ではすべて Imperf.ただひとつになると言う (I praised ; did praise ; and was praising. These three are expressed in German by one imperfect. 162 頁)。この指摘は、これが英語で書かれているからこそ得られる情報である。

ここで Adler が説明する独逸語の Imperf. (ich hatte) は、構成的には旧文法の三過去時制で、用法的には、**本章注 35** で触れたような、現場証人としての臨場感を持つ《過去ノ現在》である。[APPENDIX, No.37(1) (452 頁)]

58) 山田孝雄『国語学史要』(昭和 12)は、＜鶴峯の失敗してから後暫くは西洋文典の模倣に出た国語学の書は出なかったが、明治維新の後、世の中がやや静かになると、ここに新に西洋文典を模倣したものが、続々と出て来た。それらの書は語学新書と必ずしも同一にいふことが出来ない。その第一は、この明治以後のものは主として英文典の模倣に出たことである＞(283 頁) と言うが、このような英文典界の逆転現象を知ると、勢い、これらを受け入れた国文典の側では、《過去》と《半過去》という用語がどのように使われたのか興味をひかれずにはいられない。

大槻文彦「和蘭字典文典の譯述起源」(明治 31)における《過去》の誤解については、すでに序章にて述べた。大槻が和蘭語の＜Volmaakte voorleden tijd＞を＜past＞だと誤解したのは、この時の彼の洋語学の知識が専ら新文法の英文典に拠っていることを物語っている。ところが、大槻の国文典における過去時の名称は、『語法指南』(明治 23)の《第一過去》《第二過去》《第三過去》、『広日本文典』(明治 30)の《半過去》《過去》《大過去》のように、伝統文法の三過去をそのまま踏襲したものである。しかるに前二者の定義内容は、

《第一過去》《半過去》(つ・ぬ・たり) …動作ノ方ニ終ワリタルタイプ

《第二過去》《過去》(けり・き) ……動作ノ過ギテ程歴シタイプ

となっている。動作がたった今終わった《半過去》、動作が終わって一定の時間が経過した《過去》というのは、前者を＜Pres.Perf.＞、後者を＜Past＞(かつての Imperf.)とする英語の新文法に従っている。この番号式時制の出典である Pinneo は、伝統文法の三過去形式の文典で、《第一過去》が Past、《第二過去》が過去時制としての Perf.になるので、名称的には『語法指南』と逆転する。対する『広日本文典』の《過去》と《半過去》は、既述のとおり斎藤秀三郎の Swinton 文典直訳により逆転した新文法の用法に従っている。本来、大槻が学んだ「木の葉文典」——即ち 江戸版『英吉利文典』は、未だ旧時制が一般であった幕末当時において、現在時制としての＜Present tense Perfect＞を持っていたので(本章注 49 および表 17 [195 頁])、彼は最初から Perf.を現在時制とし、《第一過去》と《第二過

去》の呼称を入れ替えたのだろうと推論される。従って、大槻文法の過去時は、術語的・構成的には洋語の旧文法 (Pinneo、Quackenbos 等) を保持しながら、内容的には英語の新文法 (木の葉文典、Swinton 等) に依拠しているように見える。一方、明治⁵年²の古川正雄『絵入智慧の環』に見られる《第一の過去》(き・にき・けり・にたり)・《第二の過去》(り・ぬ・つ・たり) は Pinneo の時制の順位に忠実である。

明治³⁰年⁷という時期は、英文典界において《半過去》という訳語が消滅する直前である (グラフ 3 [220 頁])。『語法指南』の時制も、表 23 (218 頁) を見ると、英文典界はすでに Swinton のものに取り替わられている。大槻文彦は英文典界の動向に、ひとつ遅れて追随したことになる。

ところが、明治初年の洋風国文典は極めて進歩的なのである。Perf.の現在化という当時の最先端の動きに敏感に応じて——「木の葉文典」の影響であろうか——Perf.を現在時制と考えているものがあるからである。

<師範学校などにて大に用ひられし><西洋式日本文典>として、福井久蔵『日本文法史』(明治⁴⁰、143-155 頁) は、田中義廉と中根 漱のふたりを挙げる。この二人については、山田孝雄も『日本文法論』の「国語の単語分類法の沿革及び批評」にて一緒に取り上げており、近年の研究では、鈴木一彦が<西洋文典に範を仰ぎながらも、伝統的なものを無視することを反省している著書>であるという理由から、特にこのふたりを取り上げて論じている(「明治初期の国文法」『日本文学』第 21 号、立教大学、昭和 43 所収。25-34 頁)。

田中の『日本小学文典』(明治⁷)の時制は、《第一現在》・《第二現在即半過去》(シ・ヌ)・《過去》(列)・《第一未来》・《第二未来》である。《第二現在即半過去》というからには、この《半過去》は現在時制であり、<Present Perfect>に基づいていると考えられる。田中のこの時制の背後には、明らかに Pres.、Pres.Perf.、Past、Future、Future Perf.という英語の新時制の存在が考えられる。古田東朔によると、本書は<天保十三年箕作阮甫が翻刻した『和蘭文典前編』に範を採ったもの>(「田中義廉『日本小学文典』の拠ったもの」『解釈』第 5 卷第 3 号、昭和 34)だとのことであるが、しかし、『和蘭文典前編』を含めた当時の蘭文典は三過去時制の時代であり (表 15 [154 頁])、『和蘭文典字類 前編』(安政⁴) の《半過去》は Imperf. (ik hadde) のことであるから、田中の《第二現在即半過去》は英語に由来すると考えるしかない。

中根 漱『日本文典』(明治⁹)の時制である《充分過去》(カ・キ)・《不充分過去》(リ・ヌ・ツ)・《充分現在》(列・判)・《現在》・《充分未来》・《不充分未来》は、一見して Pluperf.、Past、Pres.Perf.、Pres.、Future、Fut.Perf.という英語系の時制に準拠していることが知れる用語と構成である。確かにこれらの時制名称は、その依拠文典とされる開成所版『英吉利文典』9 時制中の 6 時制に——配列順序は異なるが——きれいに対応する(古田東朔「中根 漱『日本文典』の拠ったもの」『解釈』第 5 卷第 1 号、昭和 34)。表 15 (154 頁) においても、明治⁴年『洋学指針 英学部』を始め《充分〇〇》系の用語を見出すのは難しくない。この

《充分》が、《完了》が出現する以前の、和蘭語でもない、独逸語でもない、英語における〈Perfect〉の第一の訳語であったことは、**グラフ5** (222頁)にて図示したとおりである。

ところが、同時期に London にて書かれた馬場辰猪の *Elementary Grammar of the Japanese Language* (明治¹⁸⁷³) は三時制しか認めていない。即ち、

1. Present…… yomimasu : I read, or I am reading
2. Past ……… yomimashita : I have read, or I read this book.
3. Future…… yomimasho : I shall read.

であり、Perf.が過去時制に含まれていることから旧文法的、というよりも日本語的であると言える。加えて Pluperf.が省かれ、日本語の時制を洋語文法に合わせる傾向が他に比して少ない。山田孝雄『国語学史要』は馬場のこの文典を高く評価し (296-300頁)、古田東朔は他の洋風文典と同列に扱われるべきと主張する(「日本文典に及ぼした洋文典の影響」『文芸と思想』第16号所収、昭和33)。が、少なくとも、この動詞時制の部分に関しては前者の意見に与したい気がする。

物集高見の『詞のはやし』(明治¹⁶⁸³)はどうか。《半過去》がなく、《現在》・《第一過去》(けり・き)・《第二過去》(つ・ぬ・たり)・《第一未来》(む・まし)・《第二未来》(めり・らむ・らし)・《第三未来》(けむ)になっている。名称が Pinneo 風の番号式時制で、Perf.と思われるものが《第二過去》である。すると、この Perf.は過去時制であり、旧時制を採っているということになる。

ところが、『日本文語』(明治²⁰⁸⁷年以前?)になると、《全現在》と《半過去》という時制が設けられている。当書の時制は《現在》(これは、《全現在》に対する場合は《不全現在》になる)・《過去》・《半過去》《未来》の4種であるが、〈説話する事の、説話する時には、既に終りてありと雖も、その餘波として観るべき者の、尚ほ存在してあるいふ〉(「物集高見全集」第三巻、72頁)という《半過去》の定義を一読すると、現代の感覚では、この《半過去》は英語の Pres.Perf.のように思われる。しかし、旧時制ならば、この定義は Imperf.

(単独の過去形)に適應されてもおかしくない。物集の年代(1847—1928)を考えると、蘭語学の最盛期である安政期(1850年代後半)に就学適齢期を迎え、慶応年間に長崎に留学した物集が学習した時制は、和蘭語系の旧時制が主であったはずである。すると、古田東朔の言うように、物集の時制は全体的には大庭雪斎『譯和蘭文語』に依拠しており(「日本文典に及ぼした洋文典の影響」『文芸と思想』第16号所収、昭和33)、彼の《半過去》は、旧時制の Imperf. (単独の過去形)から来ていると考えるほうが、確かに自然ではあるかもしれない。

しかし、旧文法起源の《半過去》に対して、《不全現在》と《全現在》はいかにも英語系の新用語という感を与えるのである。「全き現在」——即ち《全現在》とは、「現在進行形」であろう。物集は「国文叢話」で、〈洋文の直譯に、つつという辞を、動詞にそへて、(読みつつあり)(書きつつあり)(みつつあり)(いひつつあり)などいふ事あり。…こハ、彼方の動詞のいひかたに、全現在をいふ為に一種の尾詞をそへていふ事ありて…〉(『国学院

雑誌』第一卷第四号、明治28年2月)と言っており、事実、明治20年前後の「直訳」では、現在分詞<loving>が<愛シツツ>のように定訳されていたからである(たとえば、戸代光代『容易獨修英文典直譯』明治20)。対する《不全現在》は、単純な「現在」の他に、<時に関らぬ習慣、性質等をも示す>とも説明され、これは多分、格言や科学的事実を扱う<Universal tense>・<Neutral tense>などと呼ばれるものを根底に持つと考えられる。従って、《不全現在》と《全現在》は英語のPres.とPres. Imperf.の関係にある。

このように、過去時ではなく現在時を問題にし、しかも和蘭語にはない「現在進行形」を扱っている点が、他の諸文典と違うところであり、このことが『日本文語』の時制の背後に新文法の英文典の存在を感じさせるのである。が、それならば、本書の《半過去》も、和蘭文典のImperf.ではなく、英語のPres.Perf.の反映である可能性があり得よう。添えられた例文である、《現在》(我は読む)・全現在(雨は降り) (風は激しくあり)・《半過去》(花は散れり 散りはた
るまにいろ)を見ると、この《半過去》は過去時制とされてはいるものの、そのニュアンスは、和蘭語のImperf.(単独の過去形)ではなく、むしろ英語のPres.Perf.のものである。ここでは「現在」・「現在進行形」・「現在完了」という現在時3時制が羅列されているような観がある。

| 年号 | 書名 | I have loved | I'm loving | 雅言の助動詞 | I loved | 雅言の助動詞 |
|---------------------------|-------------------------------|------------------------------|--------------|-----------------|-----------------------|-----------------|
| ⁽¹⁸⁶⁷⁾ 慶応3 | 江戸版英吉利文 典(木の葉文典) | Pres.Perf. | Pres.Imperf. | | Past Imperf. | |
| ⁽¹⁸⁶⁹⁾ 明治2 | Pinneo | 2. Past | | | 1. Past | |
| ⁽¹⁸⁷²⁾ 明治5 | ピ子ヲ氏通俗英 文典 | 《第二過去》 | | | 《第一過去》 | |
| 明治5 | 絵入智慧の輪 (古川) | 第二の過去 | | り、つ、ぬ、たり、 | 第一の過 去 | き、にき、かり、 にたり |
| 明治7 | 日本小学文典 (田中) | 第二現在 即半過去 | | シ、ヌ | 過去 | たり |
| 明治9 | 日本文典(中根) | 不充分過去 充分現在 | | リ、ツ、ヌ、タリ、 ナリ | 充分過去 | キ、ケリ |
| ⁽¹⁸⁷⁷⁾ 明治10 | 日本文典 (Hoffmann) | 孤立過去 (Ich habe gehabt) | | tsu, nu | Aorist (Ich hatte) | ki |
| ⁽¹⁸⁸³⁾ 明治16 | 詞のはやし (物集) | 第二過去 | | つ、ぬ、たり | 第一過去 | き、けり |
| ⁽¹⁸⁸⁴⁾ 明治17 | スウキントン氏 英語学新式直訳 (斎藤秀三郎) | Pres.Perf. 《半過去》 | | | Past 《過去》 | |
| (明治20 以前?) | 日本文語(物集) | | 全現在 | (り)つ、ぬ、たり けり | 過去 | き、けり |
| ⁽¹⁸⁹⁰⁾ 明治23 | 語法指南(大概) | 第一過去 | | つ、ぬ、たり | 第二過去 | き、けり |
| ⁽¹⁸⁹⁷⁾ 明治30 | 広日本文典 (大概) | 半過去 | | つ、ぬ、たり | 過去 | き、けり |
| ⁽¹⁹⁰¹⁾ 明治34 | 佐々政一 | 全現在 (半過去・小過 去・第一過去) | | | | |

以上を、洋語文典における Perf.の時制という観点から整理すると、古川・馬場・物集（明治 5～16）が過去系列、田中・中根・物集・大槻（明治 6～30）が現在系列に従っていることがわかる（表 22 [217 頁]）。しかし、国文典へは現在系列の内容が導入されている。大槻の《半過去》は過去時制とされてはいるが、その内容は現在系列の<Pres.Perf.>であり、一方、田中の《半過去》は時制的にも内容的にも<Pres.Perf.>である。しかも田中においては、斎藤秀三郎の英文典より 10 年早く、《半過去》という術語の Imperf.から<Pres.Perf.>への転用が起こっている。

大槻と物集の修学時代および田中の頃の英語界は、Imperf. (I had) : Perf (I have had) = 《半過去》: 《過去》の時代であった。しかし、大槻の『語法指南』出版時は、この 2 用語の逆転・混用が最も甚だしい時期にあたっている。このような英語界の状況を国文典の側から眺めたらどうなるか。依拠すべき英文典の側の《過去》と《半過去》の意味する時制が文法書ごとに違うのである。《第一》《第二》でも使う以外仕方がないではないかとすら思われる。

59) この文典の著者が挙げる「文法用語和英対訳一覧」の用語は、種々の訳語の乱立する当時であって、かなり現代のものに近くなっている。動詞に関する用語は次の通りである。

——Transitive verb 他動辞 ; Intransitive verb 自動辞 ; Active voice 与動辞 ; Passive voice 受動辞 ; Mood 法 ; Indicative mood 直説法 ; Potential mood 化成法 ; Subjunctive mood 接続法 ; Imperative mood 命令法 ; Infinitive mood 不定法 ; Tense 時 ; Present 現在 ; Imperfect 半過去 ; Perfect 過去 ; Pluperfect 大過去 ; First future 第一未来 ; Second future 第二未来 ; Auxiliary 助動辞 ; Finite verb 有限動辞 ; Participle 分辞 ; Present participle 現在分辞 ; Perfect participle 過去分辞 ; Compound perfect participle 複過去分辞 ; The root of a verb 動辞ノ根源 ; Regular verb 正動辞 ; Irregular verb 不正動辞 ; Defective verb 不足動辞 ; Progressive form 進行組成 等

60) 佐藤良雄「動詞過去の用語に関する研究」(35-38 頁)に、Swinton 文典の翻訳に関する言及がある。斎藤のこの訳書が出た明治 17 年は、注目すべき年である。この一年の間に Quackenbos・Brown・『文典和解英文指針』・Swinton の 4 文典が世に出ており、前二者から後の二者へと訳語が逆転する様が如実に示されているからである。よって、文法用語的には、この明治 17 年を以て新旧文法の転換点と位置づけることができよう。

61) 『日本の英学 100 年』(明治編) 所収「英文典と国文典」においても、チャムブレンの英文典(明治 26)の《半過去》について、佐藤良雄は「英語は彼の母国語だから、分からぬための勘違いは起こるはずがない」と言いつつも、「彼の半過去観はほかの人とはちがうようであるがここでは咎めないこととする」(329 頁)という不信の念を表明している。このように、現代風の Perf.に固執すると、旧文法の Imperf.の用法はまるで誤っているかのように映じてしまうのである。

この時期、Perf.と Imperf.の時代的・用法的逆転に言及しているのは、むしろ国文典関

係者のほうであろう。佐々政一は、「動詞の<とき>に就て」(『帝国文学』第七卷第四、明治³⁴)において、<かく「とき」の区別に変遷あるが故に、従つて同一の「とき」にして、時代によりて、意味を異にするものあるべきこと勿論なり。かの to have,又は to be,の助動詞を以て表はされたる英語の「とき」の形式は、中古は勿論、近代の初期においてすら、屢、過去 (Preterit) と混合し、今日の慣用より見れば、彼と此と全く轉倒して用ゐられたるものさへあり>(944 頁)として、「近代の初期の轉倒」という現象に言及している。

<かの to have,又は to be,の助動詞を以て表はされたる英語の「とき」の形式>、即ち <Present Perfect> に対し、佐々は、《全現在》(又は《半過去》《小過去》《第一過去》)の呼称を挙げている。この4種の術語のうち《全現在》と《小過去》は、今回調査した洋語文典には見られない(《完現在》ならば英語にある)。特に《小過去》は、《中過去》《大過去》とセットになって関根正直『国語学』(明治²⁴)等で用いられた、国文典界の用語である。

62) (1)は、この書を皮切りに明治10年代に何冊もの直訳本が出版され、日本の独語学の草創期に大いに与って力のあった文法書であり、また、《半過去》と《過去》の用法を劇的に逆転させ、英文法に一時代を画した斎藤秀三郎の『スウキントン氏英語学新式直譯』より1年早く出版された(2)は、<首トシテ獨逸博士「ハイゼ氏」ノ文法ニ拠ルト雖モ間又「ベッケル」「ハイデルベルク」「グルケ」諸氏ノ文法ヲ引用シ且ツ參>照して(「例言」)、全編獨逸語で著した著述文典である。また平塚は、この2年後に『シェーフェル氏獨逸文法獨学』を自ら直訳している。

63) しかし、多賀貫一郎が《過去》と訳した「セーフエル氏」の Perf.は、その訳語通り、正式な定義は飽くまで <Vergangenheit> なのであるが、その実 <die vollendete Gegenwart> (完了現在)とする説にも別の箇所而言及しており、二説併用的な側面がある。

64) 平塚定二郎『獨逸文法楷梯説明』前編之部「例言」(明治¹⁹)より。「ハイゼ氏」一即ち Jph. Chr. Aug. Heyse の文典は、すでに幕末の日本に輸入されたことがはっきりしている。文⁽¹⁸⁶¹⁾久元年の「蕃書調書御用本可二相成一文書銘帳」(古賀謹一郎・勝麟太郎連署)に、<ヘイセ 獨乙文法書 五部>と書かれてある(倉沢 剛『幕末教育史の研究』吉川弘文館、昭和58。178頁)。

65) 更に Heyse は、以下のようにも言っている。

Im Deutschen giebt schon das Präsens des Hilfs=Verbuns(ich habe) in ich *habe gelesen* deutlich genug zu erkennen, daß diese Zeitform der Gegenwart angehört. Zum Überfluß kann man noch ein Adverbium, wie *jetzt, gegenwärtig* e.c. hinzufügen (ich habe *jetzt* gelesen) , um sich ganz davon zu überzeugen.

獨逸語では“ich habe gelesen”[私は読んでしまった]の中にある<haben>という助動詞の現在形が、もうすでに、Perf.が現在時制であるということを認識させるに充分である。その上<ich habe jetzt gelesen>のように“^{イェッツト}jetzt”[今]とか“^{ゲーゲンベルティッヒ}gegenwärtig”[現在]とかの副詞を用いることができるので、このことからこの時制が「現在」であるのが納得されるのである。[筆者訳]

(1.Band. 684 頁)

66) 2. 従来我邦ニ行ハルル獨逸語ノ文法書ハ大率獨逸国学生ノ為ニ著述シタルモノナレバ編纂ノ次第説明ノ方法等本邦ノ学生ニ適セザルコト固ヨリ明ナリ本書ハ此缺點ヲ補ハシカ為ニ獨逸文法中最モ必須ナル教科ヲ撰擇シ専ラ教授法上ノ原則ニ基キ易ヨリ難ニ入り簡ヨリ煩ニ及ボシ邦語ヲ以テ簡明ニ説明シタリ故ニ其系統ノ如キモ従来ノ文法書ト異ナル所頗ル多シ

6. 文法ノ規則ニハ近来ノ唱道ニ係カル新説勸カラス本書ハ概ネ之ニ拠リタレトモ往々高尚ナル学理ニ基キ初学者ノ了解シ難キモノアレバ旧説ヲ斟酌シタル所ナキニアラス

7. 文法上ノ訳語ハ多クハ従来慣用セルモノヲ使用シタレドモ妥当ナラザルモノハ之を改撰シタルモ勸カラズ

67) 《説話法》に関する新説を述べる際に、〈引続…、及ビ充分ノ現在及ビ未来（夫れ故ニ現在 過去 第一及ビ第二未来ナリ）…〉として、Perf.《過去》のことを《充分ノ現在》と言い替えている（第二十八章、注意第二）。正式な時制として採用されているわけではないものの、「完了した現在」の初出である。明治⁽¹⁸⁸⁵⁾18年の馬島珪訳では《成就現在》、同じく18年の平塚定二郎では《結了ノ現在》である。

馬島の訳書では、独逸語の原文の左肩に読み順を示す洋数字が、各単語の下に訳語が書かれ（この部分では〈成就〉ではなく〈結了〉を使用）、問題の部分は〈…, indem der
依テ

Conjunctiv der dauernden und vollendeten Gegenwart...(also : Praesens, Perfectum...)>
説話法ガ 保続ノ 及ビ 結了ノ 現在 故ニ 現在 過去
のようになっている [APPENDIX, No.40(2) (453 頁)]。

これまで和蘭語で過去時だと考えていたものを現在時だと言う、この

“Perf.(Vergangenheit)=die vollendete Gegenwart” という方程式を、当時の学習者（特に自学者）はどのように理解したのであろう。さぞや困惑したのではなかろうか。

68) 寄山のこのような和訳法は、序章 2. (3 頁) の観点から注目に値するので一言しておきたい。寄山は、当時には珍しく〈何々シテ居リマシタ〉のように〈平常用フル〉口語で訳している。当時一般の風であった「直訳」は、時として文意不通に陥る“言文不一致”がその特徴であるが、Imperf.の対訳として従来からの〈…シ〉という「直訳」法の定型訳をとらない理由を、彼は明治⁽¹⁸⁹³⁾26年の『英語教授書』において、

従来 ^(Imperf.)半過去 ノ語ヲ (何々セシ、何々シ) ト譯スレトモ 我等日本人ノ平常用フル語ハ (何々シタ。何々シテ居タ) ト云フヲ以テ其語ニ準ヒ (何々シタ。何々シテ居タ) ト譯ス可シ 若シ否ラザルトキハ日本語ヲ英語ニ譯スル能ハザルニ至ルノ恐レアリ 是レ生徒ノ最モ注意ス可キ所ナリ (第一巻 110 頁)

と述べており、〈平常用フル〉日本語ではどのような表現が適切かということに注意を払っている。

69) 岡田正美^{まさよし}『解説批評日本文典』(明治⁽¹⁹⁰²⁾35)には、《過去》を小さくしたり軽くしたり重くしたり、いろいろと面白い時制用語が見られるが、明治の文法家は、結局、時制とい

うアポリアに直面し、理解に苦しんだ挙げ句、自ら混乱の中に落ち込んでしまったかのように見える。しかも国文典の場合は、その背後に変動著しい洋語文法から生じた、英文典間同士の、あるいは英・独文法間の「ねじれ」を背負っていたのであるから、その混乱も、国語を知らずに語などはいかやうにてもあれ、その意にだに聞ゆれば、よしと思へば済んだく洋文よみ> (物集高見「国文叢話」; 『国学院雑誌』第一卷所収。明治²⁸) に倍するものとならざるを得なかったように思う。

《半過去》という術語が終焉を迎える直前の明治³⁰年に、その《半過去》と《過去》《大過去》とを採用した『広日本文典』の4年後、<今日の国語の文法に於て頗る困難なる問題>であるとして、佐々政一が「動詞の<とき>に就いて」という稿を『帝国文学』誌上に起こす。その一月後、岡澤鉦次郎が佐々に続いて「文典の<時>の論」を書き始め、これに対し山田^{孝雄}が「文法上の時の論」(『日本文法論』所収、明治⁴⁰)にて反駁して、一種の論争となった(特に、中性時と歴史的現在を巡る山田の思弁は、時制論争というより哲学論争の観を呈している)。

岡澤は、<近時教科書として用ゐらるゝ英文典などに……かぶれ>て実界の時と文典の時とが混同されていると言う。<古き英文典の術語の悪しき譯名より来れりし大過去中過去小過去半過去様の名目によりて、一種かゝる実界の時ありやと考ふる者もありげにて、之に對して時は過去現在未来の三つより無しと唱ふる人もあり他の一方には我が国語には時無しと唱ふる洋学先生も出でゝ其の主義を持して後進を感化せむとし、すべて我が国文の時の説明は日に繁くして其の序ますます紊れ月に多くして其の真いよいよ蒙はるゝを見る。……かゝる説を唱ふる人、果たして実界の時と文典の時との内容の意義上の區別を究めたりや。恐らくはたゞ單純にスウキントン氏流の英文典なぞの Present, Present Perfect, Past, Past Perfect, Future, Future Perfect 的分類を以つて文典の好き範疇と思ひ取りて、直譯的に之を我が国語に配置せむとするなるべく…>と憤慨している(『国学院雑誌』第八卷第四、明治³⁵、430-431頁)。ところが、この時の論争相手である佐々政一の時制が、まさにこの<スウキントン氏流>に従った、基本三時制×《完了》《未完了》より成る6時制で、《現在》(present)・《過去》(preterit)・《未来》(future)・《全現在》(perfect)・《全過去》(pluperfect)・《全未来》(future perfect)であった。

70) これに続いて、佐藤は、水野繁太郎『獨逸語自習書』(明治⁴¹)の用語についても、<この書物は重大な誤りを犯しているのではあるまいか>と疑う。即ち、Imperf. (ich hatte) = 《過去》、Perf. (ich habe gehabt) = 《完了過去》、Plusquamperf. (ich hatte gehabt) = 《大過去》のうち Perf.が《完了過去》になっていることを指しているのであるが、あるいは、これも誤りではないのではないか。伝統的な三過去時制に従えば、Perf.はまさしく《完了過去》である。この五年前の Lyon und Polack (明治³⁶) でさえ、20世紀に入つてなお Perf. (ich habe gehabt) は<Vergangenheit>および<2te Vergangenheit>なのである(ただし過去の《主時》は Imperf. = Mitvergangenheit (ich hatte) に変わり、Perf.ではなくなっているが)。

つまり、この水野の過去時制は、誤りでなければ、(恐らくは著者が長年親しんだ) 旧文法の考えに立っている可能性があるのではなかろうか。なぜなら、この人は明治⁽¹⁹⁰³⁾36年に『羅甸文法階梯』(南光堂)を書いているが、そこでは Perf.に、独逸語と同じ《現在過去》の語を充てているからである。これは、「凡例(2)」に言うとおりに、<元と獨逸語を学びたる> 学生の学習の便を配慮して、当時の独文典の用語に揃えたのであろう (Imperf.は《過去》、Plusquamperf.は《大過去》で、独文典と同じである)。独逸語の《現在過去》を知っている水野が Perf.を誤解して《完了過去》とするというようなことが、果たしてあり得るであろうか。

71) Schäfer (§ 29)の時制は、《主時》即ち【孤立時】と、《副時》即ち《関係時》とに分かれ、前者の過去が Perf. (ich habe gehabt)、後者のそれが Imperf. (ich hatte) である。

○明治⁽¹⁸⁸⁰⁾13年 多賀貫一郎

主時：現在・過去[Perf.]・未来

副時または関係ノ時ノ形：半過去[Imperf.]・大過去・充分未来または綿密未来

○明治⁽¹⁸⁸³⁾16年 平塚定二郎

主タル時：現在・過去[Perf.]・未来

副へノ時：半過去[Imperf.]・大過去・過去未来または第二未来

○明治⁽¹⁸⁸⁵⁾18年 平塚定二郎

主時＝無関係ノ時ノ形：現在・過去[Perf.]・未来または第一未来

副時＝関係ノ時ノ形：半過去[Imperf.]・大過去・過去未来または第二未来

○明治⁽¹⁸⁸⁶⁾19年 馬島 珪

主時：現在・過去[Perf.]・未来または第一未来

副時：半過去[Imperf.]・大過去・過去未来または第二未来

72) 『日本英学新誌』第三卷四拾号、明治⁽¹⁸⁹³⁾26年 11月。452頁。

資料 62. 明治 12 年、チャムブレンの英文典に寄せられた勝海舟の序文

勝の和蘭語学習から英語への劇的な展開については、つとに知られるところである。長崎海軍伝習所出身の勝が、海軍兵学寮のお雇い教師であるチャムブレンの友人として英文典に関与していることが知られて興味深い。

英語変格一覽序

海軍語学教師 我友英吉利の国人王堂ちやむふれん氏教のいとま 斯くに一と葉のふしぶし はたらきのけ

ちめあるを わがくにの詞もて いとあきらけく
まほにときいでたるぞ 其道におり入らむともが
らの為には 二なきたからとも見ばやすらめ は
た高嶺にのぼらふ麓のミち まどハしからて こ
よなきふみの志ほりになむありける
明治十一年仲夏 友人 海舟勝安芳 誌

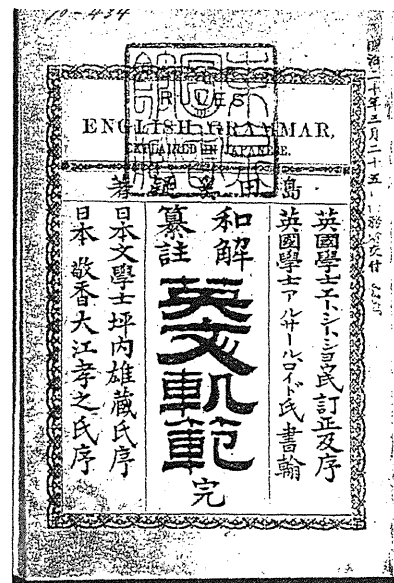
| | | | |
|-----------------------------------|-----------------------|-------------------------------------|--|
| <p>明治十二年四月 版權免許 一貫堂發兌</p> | <p>英語變格一覽 全二冊</p> | <p>日本海軍兵學校教師 英國人王堂チャムブレン氏編述</p> | |
|-----------------------------------|-----------------------|-------------------------------------|--|

資料 63. (1887) 明治 20 年出版の『和解纂註 英文規範』の序文と凡例

時制用語の変動の最も激しい時期に編まれた英文典である。「凡例」に、数種の原典の説を勘案し、適時用いたとあるが、Quackenbos は旧文法、Swinton は新文法の代表なので呉越同舟の観がある。が、主に依拠したと思われるのは Swinton で、事実、時制に関しては、この書は新時制を選択した。本書の「はしがき」は坪内逍遙が書いている。

凡 例

一 英文典ノ世ニ行ハル、者少シトセズ然レモ皆發行ノ文字ナルヲ以テ之レテ師友ニ教クニ非ザレバ又文法ノ大意ヲ領スル能ズ偶々英文指針ノ著作アルモ惜ムテハ簡略ニシテ儘カニ文法ノ一斑ヲ窺フニ過キズ故ニ今モリス氏クアケンゴス氏スウギントン氏コツクス氏等ノ諸文典ヲ参考シテ其説ノ簡要ニシテ解シ易キ者ヲ取り臆説ヲ加ヘテ此編ヲ筆シテ而シテ英國ノ學士エー、シー、シヨウ氏ニ就テ發音及ヒ解説ノ體裁ヲ訂正シタル書ナレハ又一部ノ和文ノ英文典ト云フモ敢テ過稱ニ非ザルベシ一文典ハ其要旨、詞性學ニ在レモ又文字ノ發音ノ變化等ヲ知ルハ初學者ノ要務ナルヲ以テ正字學中毎字ノ發音ヲ



著述なるかを、又讀む二三葉曰く至良の手引草なるかを、又讀む二三葉發音精確譯訓妥當、又讀む一二葉此書一たび讀み出テ他の獨修書は顔色無からん、又讀む六七葉せらしくは空前又讀む八九葉絶類なるかを、予豈序せざるを得んや以て序之、

明治二十年二月上院 坪内雄蔵 識

最も眼を引く特徴は、発音の表記である。Perfect は<パ> フエクト>、turned は<ター>ンド>のように“r”を意識してカナが振られている。Are は<アー>ル>である。同様に“f”に対しては Future<フヒューチュー>ル>である。発音と同じく、和訳もまたすべての英文に付けられている。動詞の《配合》Conjugation も和訳付きなので、当時の「直訳」によって、各時制がどのように定形訳されたかを知ることができる。

皆本章ノ末節ニ表ヲ掲テ之レヲ詳解スベシ

| | | |
|----------|-------------|---------------|
| 原動詞 | 過去 | 過去分詞 |
| come (来) | came (来リ) | come (来リタル) |
| fall (落) | fell (落ナシ) | fallen (落ナタル) |
| lead (導) | led (導キ) | led (導キタル) |
| leap (跳) | leaped (跳リ) | leaped (跳リタル) |
| read (讀) | read (讀マ) | read (讀ミタル) |
| set (置) | set (置キ) | set (置キタル) |

複狀動詞ノ時ハ單ニ動詞ニ質ニ因テ之レヲ表ス即チ左ノ如シ

| | | |
|------------------|-------------------|---------------------|
| 原動詞 | 過去 | 過去分詞 |
| under-stand (下解) | under-stood (下解シ) | under-stood (下解シタル) |
| over-take (追) | over-took (追フ) | over-taken (追フタル) |

助動詞トハ配合ヲ行フ他ノ動詞ヲ補助スル者ヲ云フ即チ shall, will, have, do, may, can, must, ought, durst, need, beware, methinks, 及ヒ messem. ノ類是ナリ

後段之レ
be, do, have, will, 及ヒ need ノ五詞ヲ除クノ外又之レヲ不具動詞ト云フ何トナレバ餘ノ動詞ハ動詞ノ三要部 現在過去分詞ヲ全備セザルヲ以テナリ

(注意) 助動詞ト不具動詞トノ區別ハ文法家ニ因リテ一トシテハ暫クノウキントシ氏ノ説ニ一ニ二ノ不具動詞ヲ増加シテ本文ノ如ク區別ス

以上ノ動詞其變化一ナラス或ハ變シ或ハ變セス或ハ譯名

資料 64. (1887) 明治 20 年出版の『和解纂註 英文規範』から、助動詞の説明箇所
左上の記述から、主として Swinton に依拠したことが知られる。下の“shall”に関する説明は、この助動詞が単なる<アラフ>でないことが述べられていて、現代的にも意義深い。

チ一ニシテ意義ヲ異ニスル等ノ差別アレバ逐次之レヲ詳解スベシ

左ノ如ク變シ人稱ニ應シテ之レヲ配合ス

| | | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|------|----|-----|----|-----|----|
| 現在 | 現在 | 現在 | 現在 | 現在 | 現在 | 現在 | 現在 | 現在 | 現在 |
| am | are | is | was | were | is | was | is | was | is |
| am | are | is | was | were | is | was | is | was | is |

現在分詞 being (居キタル) 過去分詞 been (居キタル)

(注意) 受動詞ノ動詞ヲ表スルホハ皆此 Be ノ補助ヲ以テ之レヲ作ル然レハ Be (有ル) 又ハ (在ル) ト譯スルハ本動詞トナル O were ハ複數ナレハ疑義法ニ配合スルハ本單數ノ代名詞ニ冠スルコアリ即チ I were ノ如シ

shall 在 should 去過 及ヒ will 在 would 去過 ハ共ニアジフト譯シテ未來ヲ

表スル助動詞ナレハ shall ハ將サニ云々セントス又ハ宜シク云々スベシノ意ヲ有シテ多クハ第一人稱ニ用フ然レハ時アリテ蓋シ然ラン又ニ添ヘテ云々スルコ勿レノ意ヲ含ミテ第二人稱及第三人稱ニ用フ左ノ例ヲ見ヨ

I shall go. (余ハ將行カント) Thou shalt not steal. (汝ハ勿ク盗ム)

should ハ三人稱 第一第二ニ通シテ多クハ疑義法ニ用フ然レハ時アリテ當サニ云々スベシノ意ヲ含ミテ現在ニ用フルコアリ其例左ノ如シ

I should do it if he permits me. (余ハ彼ノ許スルニ依リテ之ヲ爲スベシ)

We should prefer duty to pleasure. (余等ハ義務ヲ快楽ニシテ好ムベシ)

shall, should, will, would, can, could, may, might, must, ought, durst, need, beware, methinks, 及ヒ messem. ノ類是ナリ

以上ノ動詞其變化一ナラス或ハ變シ或ハ變セス或ハ譯名

| | | | | | | | | | | | |
|----|--|---|---|------|---|---|---|------|---|---|---|
| 現在 | 第一人称 I may be, {Thou mayst be, You may be, He may be;} | 第二人称 {I may have been, {Thou mayst have been, You may have been, He may have been;} | 第三人称 I might be, {Thou mightest be, You might be, He might be;} | 充分現在 | 第一人称 I might have been, {Thou mightest have been, You might have been, He might have been;} | 第二人称 I might have been, {Thou mightest have been, You might have been, He might have been;} | 第三人称 I might have been, {Thou mightest have been, You might have been, He might have been;} | 充分過去 | 第一人称 I might have been, {Thou mightest have been, You might have been, He might have been;} | 第二人称 I might have been, {Thou mightest have been, You might have been, He might have been;} | 第三人称 I might have been, {Thou mightest have been, You might have been, He might have been;} |
| | | | 單數 | | | | 複數 | | | | |

百四十六

(注意) 乙、丙、丁、ノ三式ハ唯 may can, (c) must, (d) need (子)ニ代フルノ外餘ハ甲式ト異ナルコトナク之レヲ察ス

疑義法 現在及過去ノ二時ノ配合スルコトヲ得

| | | | | | | | | | | | |
|----|--|--|--|------|--|--|--|------|--|--|--|
| 現在 | 第一人称 If I be, {If thou be, If you be, If he be;} | 第二人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} | 第三人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} | 充分現在 | 第一人称 If I be, {If thou be, If you be, If he be;} | 第二人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} | 第三人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} | 充分過去 | 第一人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} | 第二人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} | 第三人称 If I were, {If thou were, If you were, If he were;} |
| | | | 單數 | | | | 複數 | | | | |

命令法 唯第二人称現在ノニ配合スルヲ得

現在 第二人称 Be, (thou, ye, you), (Gメン有)

複數 Be, (you).

百四十五

不定法人稱ニ拘ハラズ唯現在及ヒ充分現在

現在 「To be, (有)

充分現在 「To have been, (有)

分詞

現在 (Being, 有)

過去 (Been, 有)

充分現在 (Having been, 有)

(注意) 若シ助動詞トナルモ配合式ハ同一ナリ

第五節 發動及ヒ受動調動詞共ニ他ノ配合式

第一則 發動調

Love ナル規則動詞ノ配合式左ノ如シ

| | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|--|------|---|---|--|------|--|--|--|
| 現在 | 第一人称 I love, {Thou lovest, You love, He loves;} | 第二人称 I have loved, {Thou hast loved, You have loved, He has loved;} | 第三人称 I loved, {Thou lovedst, You loved, He loved;} | 充分現在 | 第一人称 I love, {Thou lovest, You love, He loves;} | 第二人称 I have loved, {Thou hast loved, You have loved, He has loved;} | 第三人称 I loved, {Thou lovedst, You loved, He loved;} | 充分過去 | 第一人称 I had loved, {Thou hadst loved, You had loved, He had loved;} | 第二人称 I had loved, {Thou hadst loved, You had loved, He had loved;} | 第三人称 I had loved, {Thou hadst loved, You had loved, He had loved;} |
| | | | 單數 | | | | 複數 | | | | |

百四十七

| | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|--|------|---|---|--|------|--|--|--|
| 現在 | 第一人称 I love, {Thou lovest, You love, He loves;} | 第二人称 I have loved, {Thou hast loved, You have loved, He has loved;} | 第三人称 I loved, {Thou lovedst, You loved, He loved;} | 充分現在 | 第一人称 I love, {Thou lovest, You love, He loves;} | 第二人称 I have loved, {Thou hast loved, You have loved, He has loved;} | 第三人称 I loved, {Thou lovedst, You loved, He loved;} | 充分過去 | 第一人称 I had loved, {Thou hadst loved, You had loved, He had loved;} | 第二人称 I had loved, {Thou hadst loved, You had loved, He had loved;} | 第三人称 I had loved, {Thou hadst loved, You had loved, He had loved;} |
| | | | 單數 | | | | 複數 | | | | |

百四十八

明治十八年六月八日 版權免許
 同 二十年二月十四日 改題
 同 二十年三月 出版
 定價金五圓十錢

著者 島田 象疑
 出版人 篠崎 才助
 全 神戶 甲子 二 郎

京都府上原
 日本橋區下町七番地
 京都府平兵衛
 東京市明區西町二丁目二番地
 福岡縣土庫

資料 67. 明治 20 年出版の『和解纂註
 英文規範』から、進行形の「直訳」
 の部分 (右)

(下) 不規則動詞の三要件
 主に Swinton 文典を用いる中で、
 “born” の箇所が Cox 文典に従った
 由、注釈がしてある。

| | | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 現在 | 過去 | 過去分詞 | 現在 | 過去 | 過去分詞 |
| 現在不定法 | 過去不定法 | 過去分詞 | 現在不定法 | 過去不定法 | 過去分詞 |
| 第一人稱 | 第一人稱 | 第一人稱 | 第一人稱 | 第一人稱 | 第一人稱 |
| 第二人稱 | 第二人稱 | 第二人稱 | 第二人稱 | 第二人稱 | 第二人稱 |
| 第三人稱 | 第三人稱 | 第三人稱 | 第三人稱 | 第三人稱 | 第三人稱 |
| I, I'm | I, I'm | I, I'm | I, I'm | I, I'm | I, I'm |
| You | You | You | You | You | You |
| He, He's | He, He's | He, He's | He, He's | He, He's | He, He's |
| She, She's | She, She's | She, She's | She, She's | She, She's | She, She's |
| It, It's | It, It's | It, It's | It, It's | It, It's | It, It's |
| We, We're | We, We're | We, We're | We, We're | We, We're | We, We're |
| You | You | You | You | You | You |
| They, They're | They, They're | They, They're | They, They're | They, They're | They, They're |
| Reading | Reading | Reading | Reading | Reading | Reading |
| Have been reading | Have been reading | Have been reading | Have been reading | Have been reading | Have been reading |

四五十

| 現在原動詞 | 過去 | 過去分詞 | 現在原動詞 | 過去 | 過去分詞 |
|------------|----------------|--|-------------|-----------------|-----------------|
| abide (住) | abode (住) | abode (住) | arise (興) | arose (興) | arisen (興) |
| awake (言) | awoke / awaked | awoken / awaked | be & am (有) | was | been |
| bear (産) | bore | born (産) <small>唯一の be 後 用 死 産</small> | bear (産) | bore | borne |
| beat (打) | beat | beaten / beat | behold (見) | beheld | beheld |
| bend (曲) | bent / bended | bent / bended | bid (命) | bade / bid | bidden / bid |
| bind (結) | bound | bound | bite (咬) | bit | bitten / bit |
| bleed (出血) | bled | bled | blow (吹) | blew | blown |
| break (破) | broke | broken | breed (飼) | bred | bred |
| bring (持) | brought | brought | build (築) | built / builded | built / builded |

四五十